
LINE

時演

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LINE

【Nコード】

N4073L

【作者名】

時演

【あらすじ】

警視庁捜査一課一係に配属された、プロフィールの浜野愁。彼と事件とその仲間達。

(Episode 1 , 2 , 3 完結しました)

Episode 1

- 1 - (前書き)

*この作品に出てくるプロフィール、科学捜査、警視庁、法律はリサーチ不足が否めません。

その辺をふまえた上で、ご覧頂ける方は宜しくお願いします。

月曜日

愁が現場に着いた時には、アパートの周囲は黄色のテープが張りめぐらされていた。アパートの敷地の奥では、スーツ姿の若い男が真っ青な顔で吐いていた。彼は肩で息をしながら、悪態を付いている。

『新入りが入ったわ。余裕があるなら相手してやって』出る間際、藤沢冷子に言われた言葉をぼんやりと思い出す。

余裕なし、独りごちて、愁は階段を軽やかに上がり始めた。錆ついた階段は上がる毎、崩れ落ちていきそうな音を立てる。

2階から周囲を見渡せば、遠くに知った顔が2人程見えた。

黄色のテープの周りには、携帯電話のカメラのフラッシュをたく即席のマスクミと、二組程の本物のマスクミの姿が見える。何処の国でも黄色のテープ、ブルーシート、パトカーのサイレンは人を惹きつけてやまない。それを証拠付ける様に、路地から出て来た若いカップルが吸い寄せられる様に野次馬の後ろに加わった。

カップルが制服警官に話しかけるのを見届けてから、愁は再び歩き出した。2階に部屋は五つ。一番奥、ブルーシートが屋根から吊るされ、ドアや窓を全て覆い隠している。

彼はスーツのポケットから、個別密封されたラテックス製の手袋を取り出した。袋を破り、ポケットの中に押し込み、愁は歩きながら手袋をはめた。

ブルーシートの前には、何度か顔を合わせた事のある制服警官が立っていた。彼は綺麗とも言える敬礼をすると、さっとブルーシートを開けた。「どうぞ」

「ありがとうございます」愁は咳くように言うと、少し腰を屈めブルーシートの中に入った。途端、むっとする程の匂いが、鼻を付く。

「よお」開け放った玄関ドアの前の何かにカメラを向けていた加藤が、顔だけを向けた。「連中ならもう行っちまったよ」

「彼らに用はありませんので大丈夫です」穏やかな声で答え、加藤が見ていた物に視線を落とす。「血痕ですか？」

「ああ、だが古いやつだな」持っていたカメラを下げ、紺色のジャンプスーツの尻ポケットから5と書かれた札を、染みと化した血痕の横に置く。加藤は「よいこらしよ」と呟き立ち上がると、まじまじと愁を見つめた。「あー、何だ、オタク何か変わったなあ。ああ、メガネ、どうしたんだ？」

「ここが日本である事に昨日、気が付いたんです」さも当然の様に愁は言う。

「はあ？」怪訝そうな顔を隠す事もなく、加藤が言った。その顔には、はつきりとこう書かれている。「オタク、アホか」「そりゃ、どういう意味だ？」

加藤 信介、58歳。この定年間近の鑑識の男は、今や目を爛々と輝かせていた。興味を持ったら地獄の果てまで、喰らい付いたら死んでも離さない男、一番腕が立つのに出世を悉く断る変人。彼を揶揄する言葉を上げたらきりがない程だ。鑑識の名物男。

自分より10センチは低い加藤を見つめながら、愁はこの小柄な男の底知れぬ魅力に惹きつけられていた。友人から聞く彼の武勇伝も、時折藤沢が口にする賞賛の言葉も、それを後押しする。

「元々、視力は良い方なんです、日本人と言うと眼鏡と言うイメージがあるらしく、ダテでかける様になっただけですよ」

「へえー、そりゃ、災難だなあ。老眼でいずれ嫌でもかけなきゃならんってのになあ」加藤は自分の胸ポケットに差し込んである老眼鏡をポンポンと叩きながらも、まだじつと愁の顔を見つめている。

鑑識で一番優秀な男。

「あー、なんだ、オタク、カラーコンタクト一つ入れたのか？外したのか？前は両方黒かったよな？」

「これが生まれつきですよ」愁はにこやかな笑みを浮かべる。この

質問を最後にされたのは、何年も前だ。生まれつき左目が茶色の為、右目と同じ色のカラーコンタクトをしている。幼い頃はコンプレックス以外の何物でもなかった、目。只、友人の様に青、緑という色ではない為か、なかなか気付く者はいない。丸2年、気が付かなかった友人もいるくらいだった。今日、眼鏡を外したのに気が付いた人間は大勢居る。だが、カラーコンタクトを外したのに気が付いたのは三人目。藤沢冷子と田中護、加藤。只、加藤以外の2人は毎日の様に顔を合わせている。だが、加藤と会うのは今日で二度目。一度目は簡単な挨拶をして、それから数時間現場に居ただけ。

「因みに髪の毛染めていますよ。元は赤毛なので」

加藤はその言葉にニツと笑う。「イメージねえ」足元に置いてある自分の捜査キットから、靴カバーを取り出して、愁に差し出した。「話の糸口にさえなればそれで良いんです」渡された靴カバーを嵌めながら、愁は答えた。

“ 食えない野郎だな ” 加藤は心の中で呟き、彼を通す為一步後ろに下がった。

「ありがとうございます」愁はにっこりと笑い、血痕を踏まない様に玄関へと入った。

玄関は狭く、靴が散乱していた。加藤がシャッターを切る音が後ろから聞こえる。僅か80センチ四方の玄関を跨ぎ、愁はキッチンとダイニングに足を踏み入れた。

愁はざつと目を走らせた。右側に4畳程のキッチンがある。カッブラーメンの器、皿、コーヒーカーップが流しに溢れ返っていた。何十年も貼り変えていないであろうフローリングには、空き缶や半分だけ入った焼酎の瓶、スーパールのロゴの入ったビニール袋に入ったままの6缶パックのビール、ジュースのペットボトルが転がっていた。

左側には開け放れたままのドアから、ユニットバスが見えた。

玄関から正面、桜の描かれた曇りガラスの入った引き戸が半分だけ開いていた。愁は引き戸に触れない様に、部屋へと入った。

8 畳程の部屋。加藤と同じジャンプスーツを着た20代後半くらいの男が、ベランダへと続く窓の指紋を取っていた。彼は愛想良く笑った。「お疲れ様です。遺体、御覧になりますか？」

「ええ」愁はそう言うと、部屋を一瞥する。入って左奥にオーデイ才類、中央にコタツ、右側にはシートで覆われたベット。黄ばんだ壁紙には血痕。それは下から上へ、放射状に広がっていた。

「かなりひどいですよ。大丈夫ですか？」若い鑑識が再び口を開く。「ええ、大丈夫です」血痕を見ながら、愁は上の空で答える。

「愚問だな」同時に後ろから加藤が答えた。「さっきのヒヨっこじやあるめーし」くくつと意地悪く笑う。

その言葉に彼は気まずそうに微笑んだ。「そうですね、すみませんでした」

「いいえ」愁はにっこりと微笑んで見せた。

若い鑑識がシートを捲りあげた。20代前半くらいの、若い男性の上半身がその姿を表す。

茶髪、ベビーフェイス、華奢な体躯。彼の周りは自らの血で真っ赤に染め上げられている。薄い布団が彼の血を吸収し、そこから溢れ出した血がベットの下に血溜まりを作っていた。むっとする、血の匂い。

彼の細く長い指には、シルバーの指輪が二つ嵌められていた。身体にびったりとしたグレーのカットソーは、胸の下まで捲りあげられている。白い肌の腹は真一文字に切り裂かれていた。他に切り裂かれただけの様な傷が二つ。素人目にも判る致命傷となった深い傷からは、ヌラヌラと光る白く長い臓器が引っ張り出されていた。臓器に切り取られた様な形跡はない。只、外へ引っ張り出されただけの様だった。

「腸・・・」愁が呟く様に言った。

「ええ、小腸です」若い鑑識が答えた。

愁は下半身を覆っていたシートを捲った。ジーンズを履いていたが、血でどす黒く変色している。「ジーンズは脱がせましたか？」

「そいつは俺達の仕事じゃねえよ」何時の間にか愁の横に立っていた加藤が答える。「そんな事したらスケコマシに怒られちまう。だるう?」

その問いには答えず、愁はもう一度じつくりと、頭からつま先まで見つめた。

カメラを肩からぶら下げたまま、加藤は腕を組み、愁の言葉を待っていた。だが、彼は口には出さなかった。その代わりに声に出さず、唇だけを動かした。『似てる・・・』と。加藤の目が光る。「そう思うよな」

「ええ、思います」今度は口に出す。「半年前、世田谷、20歳、ベビーフェイス、華奢な体躯、小腸が引つ張り出され、部屋は血の海」感情を込めずに、つらつらと並べる。

「後はレイプ痕だけだ」

「連続つて事ですか?」若い鑑識が驚いた様に言った。

「断言は出来ねえが、こいつは三件目かもしれん」

愁の眉がぐつと上がった。

「お?知らなかったのか?」加藤はぶつきらぼうに言う。「連続とは位置付けちゃいねえが、1年くらい前に大阪で同じ様な容姿の被害者と同じ様な手口の事件が一件ある。警察は“関連は調べている”としてるが、実際のところ証拠付ける様なもんが見つかってねえんだ」

「そうですか」

「オタク、日本中のお蔵入り事件をひっくり返してるんじゃないのか?」

「いいえ」シートを被害者にかけて直しながら、愁は穏やかな口調で言った。「今の所は東京、神奈川、埼玉、千葉だけです」

「広げた方が良さそうだな」

「ええ、そうかもしれません」そんな事が可能であるのなら、と愁は思う。日本の検挙率の良さは知っているが、それでも未解決事件は多い。1都3県でもかなりの量があった。

加藤はまだ腕を組んだまま、シートで覆われている被害者を見つめていた。ふと、沈黙を破るように再び口を開く。「大阪の事件は小腸が引っ張り出されてはいない。凶器はサバイバルナイフだったが、突き刺した傷だ。世田谷と今回とは違う」

「模倣犯ですか？」加藤と愁を交互に見ながら問う。

「それも有り得ない話ではないですね」愁はこの場には不釣合いな程の、穏やかな笑みを浮かべた。「犯行をより残忍に、と変化させているとも考えられます。連続殺人事件の犯人は犯行を繰り返すうちに手口を変化させる、これはよく知られている事でもあります。どちらの可能性も現段階では否定出来ませんね」

若い鑑識が頷く。加藤は視線だけを愁に向け、口を開かなかつた。

「三つの事件の証拠を洗いなおす必要があるかもしれません。私は大阪の事件の資料を取り寄せてみます」

「そうですね・・・」ちらりと被害者を見た。

「こいつあ、マッドと俺がやる」加藤が怒気を含んだ声で言った。その目も声と同じ様に、怒りに燃えている。「おめえは今すぐマッドと現場を変えろ」

加藤のその目に、若い鑑識は小さく頷いた。文句一つ言わない。二人にくるつと背を向けると、指紋採取用のキットをてきぱきと片付け始めた。

その後姿を見て、きつとこの手の事は今までに何度もあったのだろう、と愁は思った。先輩からの命令であろうと、上司からの命令であろうと、現場を変えられるのを望む奴は見た事がない。今まで一緒にやってきた連中なら、確実に食ってかかるはずだ。きちんとした理由があったとしても、揉める事は多い。尤も、今の加藤に反論しようものなら、返り討ちに合いそうな程、彼は恐ろしい目をしていた。

「オタクのプロファイルってやつは何時出来る？」

愁は加藤をじっと見つめた。「信じるんですか？」

「どーいう意味だ？」加藤の眉間に皺がぎゅっと寄る。

「マツドは証拠が全て、それ以上でもそれ以下でもないと言っていないか？鑑識の方とプロフィールチームは水と油、そう言い切る人は多いですよ」無論、マツドがプロフィールを軽視している言葉ではない事を、彼の友人である愁は良く知っている。冗談めかして言うこれらの事は誰かがマツドに言っているのだ、という事は容易に想像が付く。プロフィールはまだまだ確たる地位を築いてはいない。それでも周りがどう感じ様が、どう思おうが、己の仕事をするだけ、何時もならそう思う愁だが、加藤がどう思っているのか興味があつた。

「ふん」怒りに燃えた目のまま、彼は鼻で笑う。「証拠は見えるけど、プロフィールは見えねえからか。随分と性質の悪い戯言だな」戯言、愁は思わず微笑を浮かべた。「世田谷のプロファイルは出ています。今日の事件が同一犯とされれば少し足すことも出てくるとは思いますが。後は大阪の資料待ちになると思っています」

加藤が頷く。

「信さん」若い鑑識が自分の捜査道具一式の入ったケースを持ち、二人の目の前に立った。「では、マツドさんと交代してきます。マツドさんに伝える事はありますか？」

「すつ飛んで来いと言え」

「了解」彼はそう言うと、二人に頭を下げた。「失礼します」

「悪いな」すれ違いざま、加藤が呟く様に言った。「主任には俺から言っておく。おめえは何も心配するな」

「ええ、分つています」穏やかな声でそう言うと、彼は部屋を出て行った。

加藤は深く溜め息を付くと、愁を見上げた。「オタクはこれからどうする？一応、一課なんだろう？連中と合流するのか？」

「いいえ」愁はにつこりと笑った。「私はもう少しここに居させて頂きます」

「帰る時には声をかけてくれ。バスルームに居る」言いながら、加藤は部屋を出て行く。

「ええ、分りました」愁は加藤の背中を見送りながら、頷く。バスルームなら時間を取るだろう、と考えた。世田谷の事件と同一犯であるのなら、犯人はバスルームで血を洗い流しているはずだ。そして、その後ご丁寧に掃除をしている。塩素系の漂白剤をたっぷり使った。世田谷の事件ではバスルームから目ぼしい証拠は見つかっていなかった。加藤なら何かを見つけにくれるだろうか。

愁は狭い部屋をぐるりと見回した。とても殺風景な部屋だ。テレビ、テレビ台、カラーボックス、コタツ、ベット、後は封をしたダンボールが五つ。コタツの上には半分程コーヒーターが入っているコーヒーター、雑誌が二冊、テレビのリモコン。

ベランダへと続く窓から見える風景は木々と、前の家の壁だけ。女性ならばまず借りない部屋だろう、と愁は思った。2階の角部屋、窓から見えるのは木々と壁。北側には月極の駐車場があった。プライバシーは確保出来るが、犯罪者には好まれる。大通りからは離れ、街灯も少ない。おまけにこのアパートには空室が目立った。一階は101、103、2階は201とこの部屋205しか入居者がいない様だった。ドアのポストに水色のテープが貼ってあった。

「浜野さん」

玄関から聞こえた声に、愁は振り返った。ガラス戸の隙間から知った顔が見えて、玄関へと向かう。

愁の姿が見えると、田中護はその端正な顔立ちを緩めた。29歳、独身。長身で、モデルの様にすらっとしているが、けして華奢な訳ではない。刑事を生業としている以上、武術にも長けていた。おまけに東大卒だ。頭が切れ、仕事も出来るが、他はからっきし駄目な男。ファッションセンス、コミュニケーション能力、皆無。

「聞き込みは終わりですか？」愁は穏やかな口調で言う。

「いえ、他の連中がまだやっています。浜野さんが入って行くのが見えたので被害者の情報を、と思って」田中はそう言いながら、スーツの胸ポケットのから手帳を引っ張り出す。ペラペラと捲り、目当てのところで指を止めると、愁の答えも聞かずに話し始める。「

被害者は渡辺裕士、23歳、フリーターで9時から5時までファーストフードで働いています。昨日と今日出勤しないのを不審に思ったバイト仲間がアパートを訪ね、実家に連絡。実家から通報となった様です。バイト仲間によればとても良い奴だったそうです。恨みを買う様な奴じゃないと」

愁は小さく頷いた。

「世田谷のと似てますね」

「ええ、そう思います」

「何かアドヴァイスは？」

「世田谷のプロファイルは覚えていますか？」

田中は頷くと言った。「ええ、大体は」手帳をぱたんと閉じ、胸のポケットに押し込める。

「もしもこの事件が同一犯であるのなら、犯人は被害者を1〜2ヶ月、調べていると思われれます。容姿は勿論ですが、住居周辺や生活の事まで。その上で被害者を選んでいると思われれます。もしも目撃者がいるのであれば、この調べている期間が一番可能性が高いと思います」

「了解」

「現場の責任者は誰ですか？」

「俺です。鑑識は信さんです」

「明日か明後日、もう一度、今度は独りでここを訪れたいのですが、構わないでしょうか？」

「ええ、大丈夫かと思えます。信さんにも確」

田中が言い終わらないうちに、バスルームから加藤が叫ぶ。「俺はかまわねえよ」

「だ、そうですよ」

「ありがとうございます」につこりと微笑んで、時計をちらっと見る。PM2:05。「私はもう戻りますね。今なら大阪の事件を調べられそうですし」

田中は何の感情も表さずに頷いた。「了解」

少しだけ開いていたバスルームのドアが大きく開く。片手に証拠の何かが入った袋を持った、加藤が顔を出す。「オタク等、明日の6時にラボに来い」

「ラボ？」大きな目を更に大きくして、田中が驚いた様に言う。

愁は小さく笑った。

「おう、格好良いだろう？」何処か自慢げに加藤は言った。「マッドがあのごちゃごちゃとした部屋の事をそう呼ぶんだ」

「何か見つかりましたか？」

愁に視線を移し、小さく頷いた。「トイレの便器の裏に少量の血痕。後、このユニットバスには排水溝が二つあってな、一つは掃除された形跡がなかった。だが、場所が場所だけに何かが出てくるとは考えにくい。バスタブの中で血を洗い流した、と考える方が極自然だと思う」

「そうですね」田中が頷く。

「では、その続きは明日6時にラボで」

「ああ、じゃあ、俺も聞き込みに戻ります。信さん、又戻ってきますから」

「おう」

2人は加藤に一礼をし、部屋を出て行った。

愁と田中の後姿を見送りながら、加藤は軽い溜め息を落とした。

田中と浜野愁ならば、この犯人を見つけ出せるかもしれない。自分が知っている刑事達の中でも、田中はダントツに良い刑事だった。生きている中で言えば、藤沢冷子に次ぐ。現役の刑事ならば日本では一番かもしれない。田中ももう少し人望に厚けりや出世くらい訳ないのに、と思う。尊敬して止まない、冷子の足元に転がり込めるだろう。

一方、三ヶ月前から捜査一課に仲間入りした浜野は加藤にとって、“食えない野郎”以上でも以下でもなかった。至極冷静な癖に、人と接する時には常に穏やかな笑みを浮かべ、やけに丁寧な言葉で話す、それは誰に対してもだ。最初見た時は何処ぞのサラリーマンが

現場に紛れ込んできやがった、と思った。

真っ黒な髪の毛、銀のフレームの眼鏡、ノーブランドのスーツ、磨かれた革靴。中肉中背のこれと言った特徴のない顔立ち。

もしその隣に冷子が歩いていなかったら、何人かの警察官が彼を追い出していたはずだ、と加藤は今でも思っている。

なるほど、日本人のイメージを崩さない形をしていた訳か、先刻の会話を思い出して独りごちる。

冷子がアメリカと捜査官、鑑識の交換研修をやる、と唐突に言い出した時、加藤は憤激した。珍しく彼女が鎮座している部屋まで怒鳴り込んだくらいだ。捜査官達の方は知らないが、鑑識に限って言えば万年人手不足だった。アメリカに研修に行く三人は誰も彼も優秀な若手。只でさえ、シフトは58歳の加藤にとって体にムチ打つ過酷さだった。アメリカの鑑識に研修に行く事がこの三人にとって否、日本の警察にとって大きくプラスになる事は十二分に解っている。それでも我慢出来なかったのは、日本から捜査官2名と鑑識3名が行くのに、アメリカから来るのが捜査官 実際、蓋を開けたらプロファイラーだった 1名、鑑識1名だったからだ。舐められている、と激昂してしまった。どういうこつたあ、と息巻く加藤に、土地の広さが違うんだから仕方ないじゃない、と玲子は淡々と言い放った。それでもまだ怒りをぶちまけ続ける男に、鑑識に新しく人材を入れると冷子が約束した。

だが、今思えばあの人数の交換で仕方なかったのだと納得せざる得ない。マッド・カーペーターは当初聞いていたよりもずっと優秀で、あの三人が働いていた以上の働きをする。マッドから学ぶ事は正直加藤でさえ多かった。鑑識の誰もが今やマッドから常に何かを学ぼうとしている。裁判制度を追いかけた今、日本の鑑識がアメリカの鑑識に追いつかなければなくなる日も近い。その猶予は一体どれくらいだろう？加藤は口にごそ出さないが、常々そう考えていた。その事を見越した上での冷子の判断なのかは分らないが、今回の交換研修は成功だと思える。そう思った加藤は冷子にぎこちな

く詫びた後、一か月分の小遣いをはたいて酒を奢った。

捜査一課の方に配属された浜野の動きは良く解らないが、それでも加藤の耳にはよくその噂が流れてきたし、友人であるマッドも時折彼の話の口にした。プロファイラーである浜野は未解決事件のプロファイルが詰まった部屋と、プロファイルのデーターを取る為に拘置所と刑務所の面会室とを往復しているらしい。現場にあわられるのは一課の課長と冷子がこの事件は長引く、と判断した時。

正直なところ、プロファイルに関する知識がそれ程ある訳ではないが、浜野が田中や冷子に劣らず腕の立つ刑事である事は加藤にも良く解った。彼等はどんなに凄惨な現場を見ても眉一つ動かさず、犯人の痕跡を探す。そしてその糸を必ず手繰り寄せる。それがどんなに細く、頼りない糸でも、あの三人なら……。

バスルームの中へ戻りながら、加藤は眉を上げた。否、俺とマッドを含めた5人だ。

月曜日

一都三県の未解決ファイルがぎっしりと詰まった本棚が並ぶ部屋に、愁は足を踏み入れた。日本でのオフィス。捜査一課一係から五係まで同じフロアーにあるが、その喧騒を感じられない程度に離れていた。

スチール製のデスクと椅子、その周りを取り囲むように本棚が置かれている。エアコンとコーヒーメーカー、デスクの上にはノートパソコンと電話が一台。壁は黄ばんでいて、小さな窓が付いていた。それだけの部屋。それでも愁には十分だった。個室を与えられた事が有難い。

ノートパソコンの上にポストイットが貼ってあった。『戻ったら私のオフィスに』達筆な文字。

口に出して溜め息を付き、踵を返す。長い廊下の果てを指した。一係の部屋の前を通りかかると、捜査員達が慌しく動いていた。

「浜野」部屋の奥から野太い声がする。声の主は一係の係長である、吉沢勇。

愁は少しだけ部屋の中へと足を進めた。この部屋に足を踏み入れる事は朝以外、殆どない。こちらが出向く事より、吉沢や田中達があの部屋を訪ねてくる事の方が格段に多いからだ。愁は穏やかに微笑んで見せる。「何でしょう?」

「新宿の事件の容疑者が見付かった。これから逮捕に向かう。一緒に来るか?」興奮しているのか、何時もの倍早口で吉沢が言った。

2人の横を何人もの捜査員達が飛び出して行く。

「いいえ、今回は無理の様です。これから藤沢さんのオフィスに行かなければならないので」笑みを崩さぬまま、少し早口で答えた。

「そうか、なら、また」愁の肩をポンツと叩いて、吉沢は一係の部

屋を飛び出して行く。

吉沢の倍遅いスピードで、愁も部屋を後にする。吉沢はエレベーターではなく、階段へと続くドアの中へと消えて行った。愁は係長の事を殆ど何も知らない。直接コンタクトを取ってくるのは、未だ藤沢や田中の方が多かったし、彼は何時も慌しかった。吉沢は捜査一課の一係と二係の長を兼任していた。当初はもちろん一係だけだったのだが、二係の係長が急死してしまい、後任に適任者がいなかった為、当座の間だけ吉沢がやる事になったのだ。彼は気配りの出来る男で、常に愁の事も頭に置いてくれている様だった。今回誘ってくれたのも、そうした吉沢の配慮からだだったと思われた。愁は日本に来てから、逮捕現場に立ち合った事がなかった。

吉沢には魅力がある。加藤とはまた少し違う魅力だ。熊の様な体軀をした、40過ぎの男。

愁はエレベーターで上へと向かった。上がる途中で、パトカーのサイレンの音がけたたましく鳴り出した。サイレンは直ぐに何処かへと消えて行った。

ポンツと音がして、エレベーターのドアがゆっくりと開く。何時来ても、このフロアーだけは水打った様に静かだった。毛足の長い絨毯を踏締めながら、歩き出す。

警視総監、藤沢冷子。このフロアーの一番大きなオフィスを陣取っている、事実上は警視庁のトップ。

日本は総理を女性にする前に、警視総監を女性にした、と当時はマスコミが大騒ぎだった。47歳、独身。警視総監にしては年も若く、何よりマスコミが殊更騒いだのは冷子の学歴とその容姿だ。彼女は美しかった。青みのかかった黒髪を肩まで伸ばし、長身で細身。そして凛とした女性だった。年齢と共に、その端正な顔立ちには皺が刻まれていたが、彼女自身はそれを気にしてはいない。

冷子はハーバード大卒のエリート中のエリートで、若い頃から将来を有望視されていた。英語は勿論の事、中国語も堪能。刑事時代は検挙率も良く、部下からも信頼されていた。“女だてらに”や“

女のくせに”は彼女への賛辞の様に、年上の男達から呟かれた。だが、それでも冷子が総監にまで昇り詰めるとは、誰一人として思っ
てはいなかった。それは冷子自身とて同じだった。

彼女が総監になったのは、全ての事が同じ時期に次々と起こったからだ、と冷子は思っていた。前総監の汚職による辞任、警視庁及び警察署の汚職事件や、警官、刑事による様々な事件、連日連夜マスコミは挙って報道していた。そのタイミングで冷子が手柄を立てた。テレビ局が何社も生中継している中、立てこもり事件の犯人を誰一人怪我させる事なく投降させたのだ。交渉人はいたが、犯人が望んだのは女性であり、その当時は男性の交渉人しかいなかった。冷子は犯人と交渉し、事件を解決へと導いた。その様子は一部のマスコミにはつきりと顔が分るくらいに、撮られてしまったのだ。不祥事続きだった警察の信頼を取り戻すチャンスが、冷子だったのだ。そしてそれは今の所、上手くいっている様に思える。

愁の足が重たいドアの前で止まる。少し強めにドアを叩く。

「入って」中から冷子の声が聞こえた。

ドアを開け、体を滑り込ませるようにして中へと入った。愁はドアを閉め、一礼する。「戻りました」

冷子は書類から顔を上げず、穏やかな声で言った。「お疲れ様。そこに座って、少し待っていて頂戴」

3ヶ月前から置きっ放しになっているパイプ椅子に、愁は腰を下ろした。椅子がぎしりと鳴いた。斜め前、未だ顔を上げず、冷子が書類に何かを書き込んでいる。

冷子が動かすペンの音だけが部屋に響いていた。彼女はふっと顔を上げると、引き出しの中から灰皿を取り出し、何も言わずに愁の前に差し出した。そしてまた書類に視線を落とし、ペンを走らせ始めた。

愁は何も言わなかった。冷子が誰かを待たせても何かと格闘している時は、何を言っても殆ど聞こえていない様だった。それはこの3か月に学んだ事の一つだ。

スーツの内側のポケットから煙草と取り出し、口に啜える。悪癖だ、と思っただけでも止められない。酒もマリファナもやらないが、煙草だけは未だに口にする。安物のライターで火を点け、煙を吸い込んだ。喫煙者に敵しいのは、日本もアメリカも同じ事。最近はおフィス等でも、ガラスケースが設けられている事が多い。だが、冷子と愁のおフィスは喫煙だった。

愁はゆっくりと煙草を吸っていた。彼女に後ろに見える景色を堪能しながら。警視庁最上階、大きな窓から見える眺めは良かった。

煙草を揉み消すと、愁は穏やかな笑みを浮かべた。「謀りましたね？」

ペンを転がし、その手を引き出しの中の煙草に伸ばしながら、冷子は淡々とした口調で言った。「人聞きの悪い事言わないでくれるかしら」煙草を一本取り出し、ブランドのロゴの入ったジッポで火を点ける。彼女の顔が一瞬だけ赤くなつた。「先入観のないまま見てもらいたかったです。それで、どう思う？」

「同一犯の可能性は高いと思います」

冷子は引き出しの中から薄いブルーのファイルを取り出し、愁に差し出した。「そう」

ファイルを受け取り、愁は笑みを崩さぬまま、試されているのかと胸中で考えずにはいられなかった。案の定、ファイルを捲ると、加藤が言っていた大阪の事件の資料が入っていた。現場写真にじっくりと見入る。写真が多いのが有難い。部屋の全景、遺体、重要と思われる証拠の数々。

形の良い唇から白い煙を押し出しながら、冷子は愁が顔を上げるのを待っていた。デスクの上にあるコーヒーカップに手を伸ばしかけ、冷え切ってしまった事を思い出して、手を引っ込めた。このだっ広いだけのオフィスにコーヒーメーカーの一つくらいあって何が悪いのだろう、と思う。何かと言えば、歴代の総監はと言い出す秘書が恨めしい。私はただ温かいコーヒーを好きな時に好きなだけ飲みたいだけなのに、冷子は秘書が2時間前に入れたコーヒー

をじつと睨み付けた。

冷子は煙草を消し、一番下の引き出しの奥から缶コーヒーを2本取り出した。1本を愁の前に置き、1本を開ける。温かくもなく冷たくもないが、秘書が入れた不味いコーヒーよりは何十倍もマシだ。「そのデスクには他にどんなものが入っているんですか？」資料に全神経を集中させていたはずの男が、にこやかに微笑む。

冷子も負けじと微笑んで見せる。彼女を崇拜している者なら、眩暈すらしそうな笑み。「ビールだけよ」

愁は小さく笑った。「では、遠慮なく頂きます」彼は目の前に置かれた缶を取り開けた。ブラックコーヒーを口にしながら、もしもこの場に田中がいたら加糖入りのコーヒーが出てくるのだろうか、と考えた。面白い人だ、再び煙草に火を点けた冷子を見ながら、気付かれない様に笑う。

愁が再び資料に視線を落とさないのを視界の隅で確認して、冷子はグルリと椅子を回す。彼の正面になる様に。「で、どう思う?」「もう少し時間を頂きたいですね」穏やかな、ゆったりとした口調で愁は答えた。

「そうね、吉沢にはそう言って」
愁は軽く溜め息を付く。はいはい、例の如くオフレコってやつですね、と心中で呟いた。「100%断言は出来ません」

「しなくて良いわ」すっぱりと言い捨てる様に言う。この3ヶ月間、幾度となく繰り返されてきた台詞。いい加減、このやり取りは省けないのかしら、と冷子は思う。

「大阪は違います」愁は淡々とした口調で言った。
「何故?」

「大阪の事件は怨恨によるものだと思われまます。被害者の容姿も違いますし」

「似ていると思つわ」愁の言葉を遮る様にして、冷子が口を挟む。

「大阪の被害者は黒髪、長身。こちらの被害者は茶髪、小柄、また指輪等の装飾品も身に着けていますし」被害者の遺体が写った写真

の所を開き、デスクの上に広げる。「一番の違いは年齢ですね。大阪は32歳、世田谷は20歳、今日の事件の被害者は23歳です」
「もう一つあるわ。大阪は同性愛者だった。でも2人は違う」

ああ、そうですか、と心中でごちる。その顔に張り付いたままの笑みは崩さぬまま。目を通したファイルには何処にも書かれていなかった。もしも書いてあれば、冷子ではなく愁が口にしただろう。大体、そんな重要な事が書かれていない事自体、ひどくおかしい。
「後は？」

「大阪の事件には抵抗した痕が見られます。部屋も荒れ、防御創もあります。一方、二つの事件ではそういったものが一切見受けられません」

「以上？」淡々とした口調で冷子が問う。

「ええ、今日のところは」

「オーケー、じゃあ、大阪の事件は大阪に返しませう。で、二つの事件はどう？」

試している割に至極あっさり信じるんですね、と思ったが口にはしない。どうせある程度の事は冷子だって判っているはずだ。「二つの事件が同一であれば基本的なプロフィールリングに変わりはありません。明日か明後日、もう一度被害者宅へと行く予定でいます」
「そう、鑑識は誰が担当か知ってる？」

「加藤さんとマッドです」

冷子はニツと笑った。「あの2人が組む訳？」

「ええ、加藤さんがマッドを呼び寄せていました」

「信さん、久々に火点いちゃったみたいね」彼女はぼそつと呟いた。随分と短くなつた煙草を揉み消し、デスクの上に広げられたファイルを閉じ、愁に差し出す。「プロフィール、頼んでも良いかしら？大阪の署長、同期なの」

ファイルを受け取り、愁はにこやかに微笑む。「ええ、もちろんです。では、私からも一つお願いしても宜しいですか？」

「ええ、もちろんよ」冷子は不思議そうに笑った。

「この事件の新聞及び雑誌記事が欲しいのですが」ファイルを少し持ち上げて言った。

「信さんに聞くと良いわ。でも、どうして？」

「あ、なるほど」愁はそんな事は思いつかなかった、言った風に頷いた。「大阪の事件はこちらの事件の“きっかけ”かもしれないからですよ」

冷子が一瞬だけ、目を大きく開いた。

「では、私は仕事に戻ります」立ち上がり、愁は冷子に向かって一礼した。「失礼します」ファイルを左脇に挟み、コーヒーの缶を持って、彼女に背を向ける。歩きたびに、缶の中で水が揺れる音がした。

部屋を出て行く時、「ご馳走様」と笑った愁に、冷子もにっこりと笑みを返した。

愁は長い廊下に出ると、ふっと力を抜いた。冷子には“きっかけ”と言ったものの、愁には大阪の事件と二つの事件は偶然ときっかけ以上の何かがあると考えていた。目頭を揉み、頭の中に三つの犯罪現場を思い描く。

ベットの上、足も手も身体も真っ直ぐに伸びていた。否、伸ばされていた。大阪の現場写真からは“情”を感じた。閉じられていた瞼、きちんと着せられていた服、掛けられていた布団。一方二つは何も感じ取れなかった。被害者の瞼は、世田谷は開かれたまま、今日は閉じられていた。衣服は着ているが乱れていた。布団はどちらも掛けられていなかった。壁に着いた飛沫血痕も違う。

あの若い鑑識が言っていた“模倣犯”とも違う気がした。真似をすると言うよりは、どちらかと言えば手本にしたという様子。

自分が思い描いていた計画が大阪で起きた。ずっと頭の中で考え、捉えられていた思い。その時の衝撃。驚き、焦り、嫉妬、悔しさ。

だが、どれもあの現場とは符号しない。ともすれば羨望。

ポンツ、ふいに鳴った音に、愁は我に返った。自分が居る場所を思い出して、自虐めいた笑みを浮かべる。

『ほどほどに』 ロバートが何時も自分に言っていた言葉を、声に出さずに呟いた。

*

PM7:00。立て続けに吸った煙草の煙で、部屋の中が真っ白だった。灰皿に置いてある火の点いた煙草の煙が、ゆらゆらと揺れながら、天井に溜まった煙に吸い込まれていく。愁はぼんやりと、その煙を見つめていた。

ほんの少し前、未解決事件のプロファイルを終え、今は小休止。ノックの音がし、声を掛ける前にドアが開いた。日本で一番見慣れた顔がそこにあった。

「はい、シュウ」ドアをバタンと閉め、マッドは愁の隣の椅子に腰を下ろした。褐色の髪に、真夏の空の様な青い目。けしてハンサムではないが、人好きのする笑みを浮かべるその顔は何処か愛嬌があった。長身で細身、真っ白な肌は室内にいる事が多いせいかな年々白さが増しているかの様に思える。マッドは鑑識の制服ではなく、ジーンズに長袖のワイシャツとラフな格好をしている。

愁はマッドが手を伸ばす前に、煙草を手を取った。灰を落とし、口に啜える。

「臭いよ、シュウ」ぎしりつと椅子を鳴らして、立ち上がる。マッドは大した効果はないと解つていても、小さな窓を開けた。逃げ場を失ったかの様に漂っていた煙が、少しだけ外へと逃れて行く。

目頭を押さえながら、愁はうーんつと唸っただけだった。

コーヒーマーカーからコーヒーを注ぎながら、マッドが穏やかな

口調で言う。「現場に戻るんだよね？」

「ああ」

「信さんが明後日の3時くらいで良いかって」マグカップを二つ手に持ち、デスクの側まで戻った。

「構わない」煙を吐き出し、カップを受け取る。「明日も調べるのか？」

「ううん、正確に言えば後一時間半だよ」マッドは椅子に腰を下ろすと、ニツと笑った。「機材を取りに来たついでに夕ご飯タイムなんだよ。シユウも行かない？」

「行く」コーヒーを啜りながら、愁は即答した。

日本に来て、一番困った事、それは食事だった。アメリカ人であるマッドも日本人である愁も、ほとほと困っていたのだ。2人はベジタリアンであり、どちらの同僚の中にもベジタリアンはいない。それだけならともかく、店には言ってもベジタリアンメニューがない。最近警視庁の近くにベジタリアンのレストランを見つけ、後は家族から送られてくるインスタント品や自炊で何とか凌いでいる状態だった。だからと言う訳ではないが、どちらかが食事に誘えば迷わずYESと答えた。

「明後日は4時に電話すれば良い？」

愁はコーヒーの湯気越しに、マッドを見つめた。「ああ、頼む」

「うん」猫舌のマッドはまだ一口もコーヒーに口を付けていない。

只、ひたすらに息を吹き掛けている。

「何かあったか？」

「それを見つけないもう一度行くんだよ。あのアパート、後一カ月くらいで取り壊すんだって。で、バスルームにある排水溝の二つのうち、手の届かない便器の奥の方をさ、どうして調べてみたいって言ったら、大家さん“どうせ取り壊すから別に解体しても良い”って言うから」

その場所なら証拠が出るのは運次第だ、多分誰もがそう考えているはずだった。愁は無論、マッドもそう考えている事は分ったが、

どちらも口には出さなかった。

マッドはコーヒートを少し啜り、「あつう」と呻き、また更に息を吹き掛けていた。

愁は灰と吸殻で溢れ返った灰皿の中に、ねじ込むようにして煙草を突っ込んで揉み消した。愁は深い溜め息と共に白い煙を吐き出した。「遺体は何時解剖される？」

「明日の午前中だつて」

「じゃあ、やっぱり明日6時にならないと情報はくれないのか？」

ずずつと音を立てて、マッドはコーヒートを啜る。「うーん、ここが一番無難なんじゃないの？今のところ、これと言った証拠も見付かってないんだよね」

「そうか・・・」愁は呟く様に言った。ネクタイを少し緩め、コーヒートを喉に流し込む。

しばらくの間、沈黙が続いていた。マッドがコーヒートを啜る音と、愁がライターを点火する音だけがしていた。

「ねえ、シユウ」

愁は視線だけをマッドに向けた。

「このマグカップ、誰が洗ってくれるのか知ってるの？」ヘラヘラと笑いながら、マッドが嬉しそうに言う。

「知らない」と言うよりは興味もない。そもそも愁はプラスチック製のものしか使用しない。誰かが来て、その誰かがマグカップを使ってコーヒを入れてくれる時でしか、カップでは飲まないのだ。

「一係のパソコンの前に座っている留美ちゃんだよ。彼女はシユウに気があるって噂だよ」

マッドのキラキラと輝く青い目を見て、愁は深い溜め息を落とす。マッドは科学馬鹿とあだ名が付く程、科学にのめり込んでいる男だが、その次にのめり込んでいるのがこの手の話だ。そして愁はこの手の話が苦手だった。大体留美って誰だ？何でマッドは一係の事を知ってる？

「彼女はまさに大和撫子だよね」

顔を両手で押さえながら、愁が呟く。「100分の1の女だな」
マッドがニツと笑った。長い足を組み、マグカップを持つ両手を上に置いた。「懐かしいね、それ。ロジャーの口癖」

「100人の女と擦れ違っても1の女しか振り返らない」

「僕は25人だったかな。ロジャーは“俺は98人の女が振り返る”って言い張ってたよね」クスクスと笑いながら、マッドは楽しそうに言った。ハイスクール時代の共通の友人であるロジャーは自信過剰な子で、“俺の事好きだろ？”と女の子に向かって言うのが口癖だった。からかう様にマッドが続ける。「でも何でシュウなんだろう？僕の方が良い男だと思うんだけどな」その言葉とは裏腹、マッドの口調は柔らかく嫌味がない。

「そうだな」愁は心底同意する。きつとマッドみたいな男と付き合う方が女性は幸せなのだろう、と思う。今まで付き合ってきたマッドの彼女の皆、幸せそうで、楽しそうだった。愁はパソコンの電源を落とし、デスクの上に散乱しているファイルを片付け始めた。「俺もそう思うよ」

最後の一口を飲み干して、マッドはにこりと笑う。2人にとっては何時ものやり取りで、そこには悪意も他意も何もないのだ。「でも、良いなあ。僕も大和撫子と付き合いたい」

愁は思いつきり眉を吊り上げて、マッドを見たが、彼はそれに気が付いていなかった。愁はふうつと小さく息を付き、ファイルをデスクの端にまとめてから、立ち上がった。「そろそろ行くか」

「あ、そうだね」マッドは慌てて立ち上がり、二つのマグカップを持ち、コーヒーマーカーの側に置いた。コーヒーマーカーの電源を落とし、フツと留美の顔を思い出した。目のくりつとした、長い髪の毛を巻いている可愛い子、とマッドの印象には残っていた。少し大人しそうな、24、5歳の女性。きつと明日は喜んでカップとコーヒーマーカーを洗うのだろう。シュウも少しは気が付いてあげれば良いのに、マッドは友人を好きになる女の子がいる度に何時もそう思う。

「なあ、マツド」ドアノブに手を掛けたまま、愁が穏やかな口調で言った。

マツドは振り返り、にこやかに微笑む。「何？」

「俺も一つ、噂知ってるよ」

「どんな？」

愁の口の端がニイッと上がった。「俺とお前が出来てるって噂」

「はあ？」きよとんとした表情で、マツドは力なく呟いた。そんな噂が流れているなんて、全く知らなかった。鑑識の仲間の誰もそんな事は教えてくれなかった。否、こんな噂なら誰も教えてはくれな
いだろう。「そんなの知らないよ。シユウは誰から聞いたの？」

「田中さん」

「ああ」マツドは一瞬のうちに納得する。こんな話、直接本人に聞くのは彼くらいかもしれない。他の人なら誰も聞かないだろう。否、信さんなら聞いてきそうだ。マツドは軽い溜め息を付いた。「彼はKYだからね」

「KYって何だ？」愁が不思議そうな顔で問う。

「空気読めないって言うんだって」マツドが手をひらひらと振りながら言った。

「ふーん、空気なんて読めるやついるんだ」

「場の空気って事だと思っけど？」

「ふーん」納得出来ない顔で愁は言った。

火曜日

翌日の朝出勤すると、デスクの上にファイルとメモが置いてあった。『大阪の事件の記事。残りはメールに』

愁はファイルをパラパラと捲った。ファイルだけでもかなりの量がある。だが、事件の記事だけをコピーしまとめていてくれているのが、有難かった。

出掛けにダンボールの中から引っ張り出してきた薄手のコートを脱ぎ、無造作にコートハンガーに引っ掛ける。緩んでいるネクタイをきちんと締め、愁はドアを開け廊下に出た。

一係の部屋へ向かうと、中から田中が飛び出してきた。彼は愁を見ると、照れた様に笑った。「ああ、残念。今行こうと思ったのに」ぽんつと胸ポケットを叩く。

「おはようございます」愁は田中の様子に、にっこりと笑った。

「おはようございます」

愁は踵を返した田中のネクタイを視線の端に捉え、ほんの少し眉をひそめた。黄色の洋ナシが沢山描いてある黒いネクタイ。今まで見た中で一番ひどい。

朝のミーティングはいない捜査員の方が多い。そもそも捜査会議ではないから、直ぐに終わる。吉沢が今日、自分の部下がどんな動きをするのか、大まかに把握する為、と顔を見る為に始めたもの。

一通り、部下達の予定を問う。愁も一係の一員の為、毎日問われている。が、予定は悪魔でも予定だった。大半の確立で予定は崩れる。

吉沢が野太い声で終わりを告げる。「解散」

捜査員達は蜘蛛の子を散らす様に部屋を出て行った。愁も彼等の後を追う様に、部屋を出て行く。

「浜野さん」

肩越しに振り返ると、田中が走って来ていた。愁は穏やかな笑みを浮かべた。「何でしょう?」

「不審人物の目撃者が見付かりましたよ」田中は彼を見下ろすと、淡々とした口調で言った。歩みを止める事なく、愁のオフィスへと向かう。「ここ1〜2ヶ月の間、あのアパート付近でウロウロしている若い男が目撃されています」

田中の後姿を追いながら、愁は目頭を揉んだ。「そうですか・・・」

「20代後半から30代前半、体格の良い男だったそうですよ」ドアを開ける、田中の口には煙草が啜えられ、手にはライターが握られていた。部屋の中に入ると、田中は煙草に火を付け、深々と吸い込んだ。形の良い唇から白い煙が吐き出され、彼は満足げな笑みを浮かべる。

愁が部屋の中へ入ると、田中の煙草の匂いとコーヒーの香りがした。コーヒーマーカーが音を立てている。瞬間、昨日のマッドとの会話が思い出されたが、直ぐに別の思考に支配される。「職場の方はどうでしたか?」

椅子に腰を下ろした田中が首を小さく振る。「余りにも不特定多数の人間が来る場所なので。バイトの子達に聞く限り、不審人物なら30から40人は居るとの事だった様ですよ」

「目撃者にモニタージユは?」

「今日行つて予定です」

「職場の方の防犯カメラとモニタージユの比較を試みたらどうでしょう?職場のカメラの映像はありますか?」正直なところ、愁には今ひとつ捜査員達の動きが判らない。常に一緒に動いている訳ではないし、国でのやり方の違いも未だに見えてこなかった。だからなるべく口を出さず、静観を決め込んでいるのだが、遺体をこの目で見てしまうと、それも揺らぐ。特に己から常に何かを見出そうとする田中の前では。きつと田中はアメリカへの研修へ行きかけた

一人ではないか、と愁は思う。煙草を吸う事を口実に用もなく、この部屋を訪ねてくる事は少なくない。その時間かれるのは大概捜査のやり方だ。どちらの国でのやり方が正しい、正しくないとは2人共思っていないものの、良いと思えるところがあれば真似でも何でもしたいのだ。それが例え誰かの反発を買っても、犯人を一刻でも早く捕らえる事が出来るのなら。

長い足を組み、田中は首を振った。「いいえ、まだその報告は受けていません。まだの様なら今日行かせます」

椅子に腰を下ろし、愁は煙草とライターをデスクの上に転がした。箱の中から飛び出た煙草を1本抜き、口の端に啜える。「田中さんは行けないんですか？」

「え？」

「きつと田中さんが聞いた方がより多くの情報が出ると思いますよ」ライターを点火すると、愁の顔がほんのりと赤くなつた。白く細い立ち上る煙が、絡む二人の視線の間をゆらゆらと揺れていた。

「そうですか・・・？」彼は不思議そうに笑った。そもそも田中は自分の容姿に無自覚な男だった。本来であれば、その容姿を活かした仕事でも生きて行く事も出来るだろうに。

「ファーストフードなら若い女性の従業員も多いでしょうから、田中さんが行けばより思い出してくれると思いますよ」

「はぁ・・・、じゃあ、俺が行ってみます」

田中の表情に、愁は思わず苦笑した。あなたは警察内部に自分のファンクラブがある事に気付いていないんですか、と愁は問いたくなっていた。尤も警視庁職員の女性は田中と付き合いたいとは思っておらず、さしずめアイドルを追い掛けている心境に似ている気持ちらしい。色恋に疎い自分よりも、更に疎い田中。だが、その情報としてマッドからのものなのだから、愁が考える程大差はない。

何時もの表情に戻った田中が淡々とした口調で言う。「浜野さんは犯人がバイト先にも現れたと考えているんですか？」

「ええ、そう考えています」常日頃から思考を言葉にするのは難し

い、と愁は考えていた。特にこの手の話は。出来うる限り、穏やかな表情と声を保ちながら続ける。「殺人はメインディッシュ、付け狙うのは前菜」

ならばデザートは？

「犯人の心理、ですか？」

「1、2ヶ月、じっくりと調べあげているとすればそう考えても良いでしょう」

田中は頷くと、煙草を綺麗な灰皿で揉み消し、勢いよく立ち上がった。「よし、じゃあ、行ってきます。他に何かあれば電話下さい。じゃ、後はラボで」

愁が返事をする間もなく、田中はボタンツとドアを閉めて出て行った。

ならば、デザートは何だ？次の標的を見つかるまでのプロセス？犯行を思い出している余韻？

*

反吐が出る。

ハゲタカ、ハイエナ、様々な呼び名はあれど、その意味に大差はない。死肉を漁り、血を啜る。『真実を知る権利』とやらを振りかざし、時に振り回して。ペンを剣に変え、何と戦う。

記者を生業にした友人が一人、記者と知っていて友人になった者が一人。愁が個人的に知っているのはこの2人のみで、後は仕事上の付き合い。後者に良いイメージは微塵も持っていない。友人達や

限られた記者達の仕事は、間違いなく尊敬に値すると思っ
ている。彼等が熱っぽく語る仕事への情熱も、理想と現実もある程度は理解
している、と愁は思う。一緒くたにしている訳ではない。記者の中
にも刑事の中にも、腐りゆく人間は何処の世界にも存在するのだか
ら。“真実”よりも“売れる”事が重要になれば、真実は途端にち
っぽけなものに変わってしまう。

愁は日本に来てから、週刊誌やスポーツ新聞の類は殆ど読んだ事
がなかった。読むのは新聞だけで、社会面しか目を通さない。それ
だけで事足りるのだ。

『ライター』という週刊誌を、この時始めて愁は目にした。ライ
アーは低俗、それ以下でもそれ以上でもない雑誌だった。大阪の事
件の記事だけしかない事が有難い。

記事は大阪の事件の被害者、田部仁の恋愛遍歴で始まっていた。
彼が同姓にもてた事、付き合った男の数。田部が複数の男に囲まれ、
にこやかな笑みを浮かべる写真も一緒に載っていた。過去の男だと
いう人間の話や、働いていた会社の上司の話、学生時代の友人、そ
の殆どが彼の死を心底嘆いているとは思えない台詞を吐く。田部の
死で自分の一部を失くした人間にとっては、追い討ちを掛ける様な
言葉の数々。

虫唾が走る。

次のページは事件の明細。愁が目を通した記事の中で一番事細か
に書かれていた上に、図まで載せていた。彼が何をされ、どう命を
奪われたのか。殺害現場の様子、同じ間取りだという部屋の写真。

警察の中に腐り果てた人間がいる事と、この安田という記者が売
れる事に重きを置いている、という事は記事だけで容易に理解出来
る。

これだ、と愁は思った。東京の事件はこの記事を手本にしている。
犯人はこれを読んだのだ。そして実行した、図の通りに、明細の通
りに。だから、大阪と東京の事件は似ているのだ。関連等ないのに、
デスクの上で携帯電話がガタガタと震える。愁は電話を取ると、

眉をひそめた。「はい、浜野です」

「今、何処にいるの？」

「オフィスです」

「そう、少して良いから私のオフィスに来てくれない？今、大阪の署長と話しているの」

「ええ、直ぐに伺います」穏やかな口調で言いながら、立ち上がる。ジャケットのボタンとネクタイを締め直してから、「では」と電話を切って、それをポケットの中に押し込める。

冷子が愁を呼び出す事は決して珍しくない。愁とマッドは一係と鑑識に配属されているが、直接の上司は冷子になっていた。総監の椅子に座り、書類や幹部達の駆け引きだけに時間を裂く事等、彼女の本意ではない。出来るだけ現場と関わっていたかった。愁やマッドはその為の、細い糸だ。

愁が総監の部屋のドアをノックすると、中から声がした。「入って」

ドアを開け、中に入り、一礼する。「失礼します」ドアを閉め、冷子を見ると電話で話している最中だった。愁は少し迷ったが、デスクの前へと歩み寄る。

「今、来たわ」ブランド物のジッポを手の中で転がしながら、冷子は愁に座る様に目配せした。「ええ、そうよ」

愁は言われるままに腰を下ろした。

「替わるわ」冷子はそう言うと、受話器を愁に差し出した。

迷いもせず、愁は受話器を受け取り、口を開く。「替わりました、浜野です」

「清水です。お手数お掛けして申し訳ない」柔らかな、中年男性の声。

「いいえ」

「プロフィール、ありがとうございました。只、それに該当する人物が多く・・・」言い淀み、言葉を選んでるのが沈黙となつてあらわれている。

30代前半から後半、被害者に近い人物（顔見知り以上）。犯行は短絡的であり、情のもつれからなるもの。体格は被害者と同じくらい、又はそれより良い。極めて真面目であり、有職者である。学歴もあり。

沈黙は愁によって破られた。「そうですね、犯人はもしかしたら自殺を図っているかもしれません」

「え？」清水の声色が変わった。

「事件の後、被害者の周りで自殺を図ったり、未遂に終わった人物はいませんか？この犯人の場合、逃亡したりする事は考えにくいと思われまます」

受話器の向こうでキーボードを打つ音が聞こえる。清水がうーんと唸り、優しげな口調で言った。「少し待っていて頂けませんか？直ぐに折り返しお電話しますので」

愁が「ええ」と言うのと、清水は電話を切った。受話器を冷子に差し出すと、彼女は眉を寄せた。

「今ので終わりなの？」

「いいえ、折り返しお電話頂けるそうですよ」

受話器を電話に戻し、冷子は淡々とした口調で言った。「何故、自殺なの？」

「さあ？」愁は肩をすくめた。

さあ？って何よ、あんたが言ったんじゃない、冷子は心中で悪態を付く。腹立ち紛れに煙草に火を点け、深々と吸い込んだ。愁は何時も手の内を見せてくれなかった。マッドは始めから、全てをさらけ出すタイプの人間だったから、愁とは正反対だ。どうしてあの2人が友人同士なのだろう、冷子は2人が話しているのを見るたびに思っていた。

自殺、愁がそう考えたのは、皮肉にもライターや他の記事を読んだからだだった。叶わぬ恋、記事には同姓同士の恋愛について触れられていた。例えば好きになっても、その相手が彼女や妻がいたら。相思相愛になっても、今の日本の法律では結婚は望めない。理解を

示す人間が増えているとは言え、まだまだ肩身は狭い。

「自殺しているとしたら・・・」

冷子の声に思考が中断された。

「無理心中って事？」

愁は再び肩をすくめた。「さあ、どうなんでしょう」答えるには曖昧過ぎた。現場写真、セミダブルのベットのの上に寝かされていた被害者の隣は、ほんの少し空いていた。恐らく犯人はその隣で永遠の眠りにつこうとしていたのではないかと愁は考えていた。一生叶わぬ恋ならば、せめてあの世で、と。だが、何かがその場を離れさせた。隣では死ねないと。

冷子は眉をひそめただけだった。

電話が鳴り、玲子が取った。「はい？あぁ、待ってて」受話器をずいっと愁に差し出す。

「はい、浜野です」冷子の様子に苦笑しつつも、穏やかな口調で愁は言った。

「清水です。お待たせして申し訳ありません。自殺した人間ですが、居ました。只・・・」そこで少しだけ清水は口ごもった。「彼は被害者の同級生で妻帯者です。事件の3カ月後に“仕事が辛く、生きて行くのが嫌になった”と言う遺書を残して、飛び降り自殺しています」

「妻帯者である事は差ほど重要な事ではありません。プロフィールには当てはまりますか？」

「ええ、真面目な性格で、体格も良く、会社勤めをしていたそうです」

庇ったのは妻か、愁はそう感じた。世間の目から妻を守ったのだろう。同姓との浮気、殺人、その上隣で死んだら全てが公になる。晒される、確実に、世間の冷ややかな目から。

愁が口を開かないのを察知した清水が口を開く。「彼だとお考えですか？」

「ええ」

「同級生という以外の接点を探してみます」

清水がそう言うと、愁はちらつと玲子を見た。彼が身も知らぬ男の言い分を呑み込むのは冷子の人望か、はたまたプロフィールの本場で学んだというステータスなのか。愁にはそのどちらも、という気がした。「宜しくお願いします。また何かあれば何時でもお電話下さい」

「はい、その時は宜しく。冷子に替わって貰っても良いですか？」

「ええ、では、失礼します」愁はそう言うと、玲子に受話器を差し出す。

「はい」冷子は電話に出ると、いつもの淡々とし感じではなく、柔らかな口調で話した。「ええ、良いのよ。お互い様じゃない」

同期ね、愁は彼女の様子を視界の端に見ながら、心中でこちた。

マッドなら飛びつく様な冷子の反応だが、彼は口元に優しげな笑みを浮かべただけだった。

「じゃ、また」冷子は静かに受話器を置くと、愁の方に向き直した。「助かったわ、ありがとう。彼には返しても返しきれない借りがあるの」

「いいえ。まだ犯人と決まった訳ではないので」

冷子はふつと柔らかな笑みを浮かべる。「そうね」

「ライターという週刊誌をご存知ですか？」

「ええ、勿論よ。日本で一番ひどい雑誌だわ」玲子は先ほどまで浮かんでいた笑みを消し、険しいとも言える表情になった。「それが何だっけ言うの？」

「大阪と東京の事件を結んでいるのがライターかもしれない」

彼女は大きく溜め息を付いた。「もう・・・」

「内通者がいるようですね」愁は声のトーンを落とした。別段誰に聞かれている訳ではなかったのだが。

冷子はデスクに肘を付き、組んだ両手を額に当てた。「恥ずべき事だけど珍しい事じゃないわ」

「ええ、残念ながら」

珍しい面子が揃ったな、ラボの隣の会議室で机を囲む男達を見回し、加藤は思った。

捜査一課一係の田中、彼の相棒で下手すると高校生にさえ見える風貌の桜井達也。プロファイラーの浜野、鑑識からは加藤とマッド。その上何故か一係の係長吉沢と、たまたま暇していたからという監察医の内田隆士まで来ていた。

鑑識と監察医の前にはファイルとコーヒー、一係の三人は手帳とコーヒー、プロファイラーはコーヒーだけが置かれていた。

マッドが愁の隣に腰を下ろすと、田中が口火を切った。「じゃ、まず内田さんから良いですか？」

「ああ」内田はそう答えると、ファイルを捲った。ジープンに黒のタートルネック、左耳に金のピアス、医者と判断出来るのは、上に羽織った白衣のみ。38歳、独身。田中程ではないが、見た目もそれなりに良い。問題はその性格だが、監察医としての腕が良いのでここにいる男達には大した問題ではない。只、加藤だけは内田を正面切って『スケコマシ』と呼ぶ。

「監察医の内田さんだよ」マッドが愁に囁いた。

「死因は腹の傷による出血多量死。一つの傷が深い。他の二つは致命傷になる様な深さはない。薬物検査にも回したが、あの体内の状態から見て何かが出てくるとは思えない。レイプ痕あり。裂傷がひどく、血が出ていたところから見て、死後におこなわれたものでは

ない。両手首、口に軽い内出血が見られる。柔らかい物で縛られていた様な跡もあり。他に暴力を受けていた跡はない。口と気管に白い繊維有り。遺体発見の時点で死後二日経っている」

田中と桜井は何やら手帳に書き込んでいたが、他の者はただじつと内田の声に耳を傾けていた。

内田の後を引き継ぐ様に、加藤が口を開く。「口と気管にあったのはコットンだ。よくあるタイプのだな」

「タオルですか？」少し高い声色で桜井が言う。

「多分な、メーカーまで特定出来るか解らんが、あの部屋の物とは今の所一致しない」

この部屋にいる全員が同じ事を考えたが、誰一人としてそれにはしない。多分、そこから犯人は割り出せない。

「便器の裏に血痕があった。血液型は被害者と一致。DNAは調べ中。ユニットバスの排水溝の二つのうち一つはびつかびか。もう一つは大量の毛髪とカビ。玄関前に付着していた血痕の血液型は被害者と不一致。ドア、窓を含めた指紋は被害者のものが殆どだ。あの部屋を訪ねた家族や友人には提供してもらった指紋と一致しなかったのは15人。13人はドアや玄関、2人は窓やキッチン、トイレと至る所に着いていた」

「有力な証拠はなしですか・・・」桜井がぼそつと呟く。

「いや、そうでもない」加藤がニイツと笑った。「被害者の履いていたジーンズに精液が付着していた」

捜査一課の4人の男の目が瞬間輝いた。だが、愁だけはすぐさま元に戻った。椅子の上で身を丸め、目頭を揉む。ジーンズの裏に付着した精液。犯人のミス？それともわざと残したのか？大阪の事件を手本にしていればミス。だが・・・。

「DNAが出次第、データベースにかけてみるが・・・」加藤はそこで口ごもり、愁を見た。

「前科はないと思います」愁が受け継ぐ。

「だが」吉沢が始めて口を開く。「犯人が見付ければ証拠になる」

勿論、この精液が被害者のものでないとすれば。

「俺達の方は」田中が淡々とした口調で言った。手帳の間から葉書くらいの大きさの紙を取り出し、机の上を滑らせる。一枚は加藤と内田の間へ、もう一枚は愁とマツドの間へ。「目撃者に協力してもらったモニタージユです。1から2ヶ月、あのアパートの周りをつろついていたそうです」

モニタージユ写真は一時の様な見にくさはなくなったが、それでも違和感が残る。モニタージユ写真の男は何処にでもいる優男に見えた。ごく普通の男。

田中がスーツのポケットの中から、簡易ケースに入ったDVDを三枚取り出す。「職場の防犯カメラの映像です」

「それだけか？」加藤が眉をひそめた。

「記録は一週間分しか保存しない様です。後の映像は消去してしまっそうなので」

桜井が言葉を継ぐ。「ですが、バイトの子達にこのモニタージユを見せたら、一人の子がこの男を覚えていました。その男が「長い指がモニタージユ写真を指す。被害者の後を追い掛けていた」と「追い掛けて？」加藤が呟く様に言った。

「ええ、ですからその子は2人が友人なのかと思ったそうです。只、2人が会話をしていたとは記憶していないそうです」

沈黙が8人の間に、重く押し掛かる。

「モニタージユを公開するか・・・」吉沢が深く溜め息をつき、重々しい口調で言った。朝よりも大分濃くなつた顎鬚を、大きな手で擦る。「どう思う？浜野」

「私に異論はありません」

「なあ・・・」加藤が口を挟んだ。「大阪の事件はどうなったんだ？」

視線が吉沢や田中に飛び交っていたが、2人は口を開かなかつた。どうやらまだ知らされていない様で、お互いの顔を見つめ合っていた。

「大阪に返しました」愁が穏やかな口調で言う。

「違うのか？」

「はい。大阪の事件は怨恨だと思われます。清水さんという方にその旨お伝えしておきました」

清水の名前に加藤と吉沢が反応したが、口には出さなかった。

「大阪で起きた事件が怨恨だとすると、こつちで起きたのは模倣犯ですか？」

「ライターという週刊誌に載っている記事を手本にしていると思われる。大阪の事件はきつかけであり、犯人にとつては犯行を犯す後押しになったのかもしれない。頭の中で描き続けていた計画が偶然起きたのですから、それは驚いたでしょうね」

驚いたでしょうね、じゃねえよ、と加藤は心中でこちた。「なあ、何で大阪のは怨恨なんだ？随分似通つてたじゃねえか。確かにこつちのは手本にしたのかもしれないけどよ」

一係の3人と内田が愁に視線を集める。聞きたくても、聞けなかった様だ。マッドだけはコーヒーに息を吹き掛けながら、ちびちびと口を付けていた。

「大阪と東京の被害者には共通点もありますが、違いもあります。容姿や年齢、それに同性愛か否か。又、大阪の事件には被害者の手には防衛創も見られ、部屋も抵抗の跡が見られます。一方、こちらの事件では抵抗の跡は見られません」愁はゆっくりと言葉を選びながら話していた。だが、幸い誰も口を挟んでこなかった。「清水さんとお話をしていてプロフィールに該当する人物が浮かび上がりました。今、調べて頂いています」

「じゃあ、こつちの事件で小腸が引つ張りだされていたのは何だ？」「犯人のサインでしょう。大阪は手本ですが、こちらは自分のだ、と示す為に」

納得をした表情を見せたのは、田中一人だった。彼は頭の中で大阪の事件を切つて捨てた。

田中とマッドを除く4人の表情に、愁は思わず苦笑した。信用さ

れるにはまだ時間が必要だと思う。「もしも、大阪の事件が進展を見せ、それが公表されればこちらにも何等かの形で影響が出るかもしれない」

プロファイラーの言葉に、マッド以外の誰もが顔を曇らせた。

「影響とは？」吉沢が問う。

「例えば・・・」愁はそこで口ごもった。机の上で肘を付き、組んだ両手を唇に当てる。「次の犯行が早まる・・・」

締め切っていた窓の外から、パトカーのサイレンが鳴り響く。2台程のパトカーがサイレンを鳴らしながら、遠ざかっていく。

パトカーのサイレンが聞こえなくなるのを待っていたかのように、田中が口を開く。「マッドさんはどうですか？」

マッドは緊張感のかけらもない声で言った。「世田谷の証拠、調べなおしても良いかな？」

一係と加藤の心の中の声が、マッドと愁には聞こえた気がした。

何処の国でもきつと変わらない、捜査権の争い。大まかに考えれば仲間のはずなのに、それは意図も簡単に一番近い敵になる。

吉沢が顎を擦る。その音が聞こえてきそうだった。「それは俺が交渉しよう」

「ありがとうございます、吉沢さん」マッドはにつこりと微笑んだ。彼は複雑な表情を浮かべて笑う。

携帯のバイブ音がして、内田が白衣の中をまさぐる。シルバーの携帯を取り出し、画面を見ると顔をしかめた。「私はこれで失礼します」ファイルを横の加藤の前に滑らせ、彼は電話を取り、話しながら部屋を出て行った。

ドアが音を立てて閉まると、田中が口を開いた。「他には何かありますか？」

「俺はない。そのDVDを寄越せ」加藤は田中に向かって、ごつい手を差し出した。DVDを受け取ると、モニタージュ写真の上に置く。

田中が一通り、男達に視線を送る。が、誰もそれには答えず、最

後に視線を送られた吉沢が口を開いた。「俺はこれからモニターに公開をする方向で上と話してみる。後の事は任せたぞ」彼は隣に座る田中の肩をぼんつと叩き、加藤に一礼し、「じゃ」とだけ言い残して部屋を出て行った。

吉沢が部屋を出て行くのが合図だったかの様に、田中と桜井、加藤が席を立つ。3人は座ったままの愁とマッドを気にする事もなく、部屋を出て行く。

「シューウ」

視線だけを、愁はマッドに向けた。

「端折りすぎだよ、さっきの説明」

「そうか？」

コーヒーをぐくりと飲んで、マッドが眉をひそめる。「田中さんしか納得してなかったよ」

「彼以外は俺をまだ信用していない。だから仕方ない事だと思う」なに、冷静に分析してんのさ、と口に出そうとしたが、マッドはその言葉を呑み込んだ。浜野愁という男は何時もこうなのだ。出会ったときから今に至るまで。それに田中以外がまだ信用していない、というのは真実だとマッドも感じている。マッド自身も加藤以外の鑑識仲間に信用されている、と感じた事はなかった。まだたった3カ月だ。だから仕方のない事ではある。だが、少し寂しいと思うのも事実。

「なあ、マッド、どう思う？」机の上で肘を付いたまま、目頭を揉む。愁が事件を考え始める時の癖。

その様子を見て、マッドは苦笑する。何処に行っても、愁は事件に捕らわれるんだね、と思いつつ口を開いた。「大阪のは捕まりそうなの？」

「恐らく」

プラスチックのカップに入ったコーヒーを飲み干して、マッドは何時もの優しげな声で言う。「ねえ、シューウは部屋を何日置きに掃除する？」

目頭を揉んでいた手で頬杖をついて、愁はマッドを見た。「前回、何時したのか覚えてない」

ああ、そうでしょうとも、とマッドは思った。「聞いた僕が馬鹿だったよ。昨日の被害者もマメに掃除していなかったみたいだよ」マッドはふふんと笑う。「床にいっぱい残ってた訳」

「証拠が」2人は同時に言った。そう、つまりは犯人も掃除をしていかなかったという事になる。

マッドはにっこりと笑い、再び口を開いた。「世田谷の事件の証拠とも比較してみるよ。きつと見付かる。エドモンド・ロカールもそう言っている」

エドモンド・ロカール・・・科学捜査の祖。犯人、犯罪現場、被害者の中で、

換される、

どんな微細なものでも、常に物体が交
と科学捜査の基本的な原則を定義した

方です。

水曜日

翌日、午前中いっぱいかけて、大量殺人を犯した死刑囚と面会し、愁は警視庁へと戻って来た。捜査一課一係の部屋の前を通り過ぎると、中からくぐもった声が追い掛けてきた。「ばばのさん」

愁が振り返ると、口の中に食べ物をめい一杯詰めた桜井が部屋から出て来た。彼はしきりに口を動かす、無理矢理口の中ものを飲み込んだ。桜井が着ているスーツが高校の制服に見える。とても26歳には見えない容姿だが、彼もまたエリートだ。コミュニケーション能力の低い田中より、早く上に行くのではないかと専ら噂されている。「DVDの画像にモニタージユによく似た男が映っていました。被害者が殺害される一日前の映像です」

桜井が話しながら部屋へと戻って行くので、愁はその後ろを付いていく。「画像は鮮明ですか？」

「モニタージユよりはマシって言うところですかね」桜井は自分のデスクに行くと、ノートパソコンを指差した。

桜井のデスクの隣で、パンを田中がパンにかじりついていた。「マッドさんが映像を処理してくれたんですよ。すごいですよ。元はかなりひどい画像だったんですよ」

愁はパソコンに映し出されている画像に見入る。確かにモニタージユよりはマシ、と言うくらい荒い画像だった。だが、モニタージユよりは見やすい。

画像の人物はモニタージユの男によく似ていた。ごく普通の男。大きくもなく、小さくもない目。どちらかと言えば白めが大きく、ややきつい印象を与える。小ぶりの鼻。薄い唇。髪の毛は黒く見えるが、キャップを被っている為正確なところは不明だ。髪型も不明。ジーンズに白っぽい丸首のティシャツ、黒のパーカーを着ていた。

レジ台に遮られ、全身は解らない。

「この帽子はどこのものですか？」

「W/Bというブランドのものです。渋谷と原宿にしか店舗がない、若い男性に人気の店の様です。今、池上達を行かせています」田中が2個目のパンの袋を開けながら言った。コンビニのロゴの入ったビニール袋の中から菓子パンを一つ取り出し、愁に差し出す。「一つどうですか？」

「いえ、結構です。ありがとうございます」愁はにっこりと微笑む。それ、ソーセージ入りでしょ、食べられませんよ、と心中ではきっぱりと断る。

「午後はこれを持って聞きこみです」

「何かアドヴァイスは？」何時もの田中の締め台詞。

目に掛かった前髪を指でかき上げ、愁は少しだけ考えてから口を開いた。「そうですね、出来れば世田谷の方を中心に。モニターユの公開は何時になりましたか？」

「まだ決定していないそうですよ」桜井はそう言いながら、愁をちらつと見た。「何故、世田谷の方を中心に、なんですか？」

「誰でも“始めて”は入念に準備をすると思いませんか？」

「なるほど」桜井は納得した様に頷いた。

「この画像、私にも送って頂けると有難いのですが」

「マッドさんが送るって言っていましたよ」

桜井のデスクの上にプラスチックのカップに入ったコーヒーが置かれ、愁はその手の先を見た。

制服を着た若い女性。「どうぞ」彼女は微笑むと言った。

「ありがとうございます」愁はにっこりと微笑み、再びパソコンの画面に視線を戻した。「この防犯カメラは目立つ場所にありましたか？」

「いえ、隠しカメラだそうですよ。最近は色々物騒なので一台を目立つ場所に、一台は隠しているそうです。客席にもありましたよ、買って直ぐに店を出ている様なので映っていないなかつた様です」温泉

マークが所狭しと描かれているマグカップとパンを両手に持ち、田中が少しずつ口に運びながら言った。

「実際見ましたけど、上手く隠されていました。殆ど外からは判断出来ないと思います」

「どうかしましたか？」愁が目頭に手を持っていくのを見て、田中がさかさず口を開く。彼にも愁の癖が分かりはじめていた。

「この画像は隠している方で、目立つ場所のカメラにはこの男は映っていないんですよね？」

「ええ」と田中は言った後で、はっとパソコンの画面を見た。「こいつはカメラの場所も解っていた上で店に行っていたのか・・・」

「世田谷の方の被害者はコンビニエンスストアで働いていましたよね。店には防犯カメラが2台あったと記憶しています。そのどちらにも怪しい人物は映っていなかったと書かれています」

桜井がパソコンの中の男を見つめ、呟いた。「じゃあ、これはラッキーだったって事か」

警察にはラッキー、犯人にはミスだ、と愁は思った。目頭を揉んでいた手を唇に落とし、愁は画像をじっと見つめた。世田谷の防犯カメラの映像にこの男は映っていないだろう。防犯カメラが設置してある事は、大概の店がドア及び窓に警告してある事だし、コンビニエンスも例外ではない。それに殆どがガラス張りの窓から、その位置が確認出来る。だから、この男が防犯カメラをうまく避けているとしても、差ほど不思議な事ではない。この男は闇雲に殺人を犯している訳ではない。きちんと下調べをするのだ。

「止めないとな」田中が呟く様に言った。「こいつはずっと殺り続ける」

報道が過熱し始めたのは、警察が『連続殺人事件』と発表してからだ。朝から晩まで、事件を取り上げ、様々な臆説が飛び交っていた。著名と言われる犯罪心理学者、元刑事、ありとあらゆる人間がコメントを寄せている。無論、犯罪心理学者によるプロフィールもされていた。

新聞の社会面以外は殆ど目にしない愁だが、その過熱ぶりは否応なしに耳に届いた。だから、自分の車の後ろを付いてくる車が見えた時、吐き気がした。黒いセダントタイプの車は、愁の車から1、2台を開けて、警視庁から付いて来ていた。

この手の事はアメリカでも経験済みだったが、苦手である事と煩わしいと思う事には変わりはない。大体刑事でもない自分に付いて来てどうするのか、と愁は思う。だが、そこで自分が捜査一課に配属されている事を思い出して、深い溜め息を落とした。

付いて着ている車を巻くべきか決めかねていると、携帯電話が鳴った。路肩に車を止めると、黒のセダンが横を通り過ぎて行った。車を運転していたのは30代後半くらいの女性で、明らかに慌てふためいていた。その様子が余りにも可笑しくて、愁はククツと笑った。

だが、携帯電話のディスプレイを見て、笑みは消えた。藤沢冷子。

「はい、浜野です」

「今、何処にいるの？」

「出先です」

「あら、残念」

愁は穏やかな口調で言った。「何でしょう？」

「大阪の事件が解決したそうよ。清水があなたにお礼をって」冷子が少し弾んだ声で言った。例えば自分の元にある事件ではなくとも、

解決出来た事は素直に嬉しいと思う。事件に絡む感情は別にしてお蔵入り事件なんて真つ平御免だ。

黒のセダンが随分と前の方で路肩に停まるのを見て、愁は眉を上げた。「お礼等無用です。お役に立てた様で光荣ですとお伝え下さい」

「光荣ついでに」

愁には冷子の満面の笑みが見えた気がした。

「もう4、5件のプロファイルを頼みたいそうよ」

「ええ、構いません。パソコンに送っておいて下さい」

「あー、ファイルで送って貰う事にしたわ。その方が見やすいですよ？多分、明日には着くんじゃないかしら」

ええ、ファイルの方が見やすいですとも、愁はぐつと言葉を呑み込んだ。そもそも自分に選択の余地がある問いなのか。もう明日にはファイルが届くというのに。だが、愁は穏やかな口調で答えた。

「了解しました」

「ありがとうございます」

「一つお聞きしたい事があります」愁は遙か前に停まっているセダンを困った様な目で見つめた。

「何？」

「報道関係者に追い掛けられているんですが、どうしたら良いでしょうか？」

冷子はくすりと笑った。「公務執行妨害で逮捕したら良いじゃない」

愁は文字通り頭を抱えた。彼女に聞いた自分が馬鹿に思える。

「あら、私は本気よ」彼が黙ったままなので、冷子が口を開いた。

「捜査を邪魔するなら逮捕しても構わないと私は思ってるわ。愁、それはあなたが判断して頂戴。捜査官なんだし、手錠だつて渡したでしょう？」

「解りました」捜査官ね、と思う。あの部屋と拘置所や刑務所の面会室が居場所。行動化学課があるのに、何故捜査一課に配属されて

いるのか、彼女の真意が理解出来ない。確かに日本に来る前、プロファイルチームから捜査の方に移動させられている。それとてたかが半年くらいの事であり、そこには様々な事情が絡んできている。冷子にもそれは伝わっているはずだ。捜査官3名が行った穴埋めだとしても、あの部屋にあるファイルの量を考えればいきなり一課に配属させられたのは不自然だと思える。そもそも行動科学課がプロフィールした事件を己にもう一度させている事自体がひどく可笑しい。何か考えがあつての事、とそう思い口には出さないが、行動科学課の人間からは良い顔をされないのも事実だ。

「向こうだつて同じ様なものでしょう？それに餌がないと分れば彼等だつていつまでもウロつく事はないでしょ」

餌ね、肉と表現しないだけかつての上司よりはマシか、愁はロバートの顔を思い出して頬を緩めた。「愁、肉を向こうに放り投げてやればハイエナ達は群を成して走って行くさ」報道関係者達と良好な関係を築く捜査員もいれば、頭からつま先まで嫌がる捜査達もいる。ロバートは間違いなく後者だ。多分、藤沢冷子も。「嫌な思いをされた様ですね」

「当然でしょ、こんな椅子に座っているんだもの。あなたはないの？」

「私は末端にいる人間ですから」あなたほどはありません、と胸中で付け加える。

「そう？まあ、ないに越した事はないわね」冷子は溜め息混じりに言った。「じゃあ、戻ったら電話くれる？」

「了解」

「じゃあね」冷子はそう言って、電話を切った。

携帯をドリンクホルダーの中に入れ、愁は車線から車を途切れるのを待った。後方で信号が赤になり、車がいなくなるのを待って、車を出す。少しだけ車線に戻り、再び直ぐに路肩に戻る。緩やかに黒のセダンの後ろに付ける。アイドリンクのまま、愁は外へと出た。少々荒っぽく、だがわざとらしくならない程度にドアを乱暴に閉め

る。出来る限り睨む様な目で車のサイドミラーを見つめ、ゆっくりと歩き出す。

愁が自分の車を通り過ぎたあたりで、黒のセダンは逃げるように走り出した。脱兎のごとく。

以前これをやった時は名刺を渡されたな、走り去る車をぼんやりと見つめながら愁はそう思った。そいつは友人になれる程気が合う人間ではなかったが、良い仕事をするジャーナリストだった。

自分の車に戻り、愁はドアを開けた。

ヒラヒラと舞い踊るように落ちてきたイチヨウの葉が、フロントガラスや屋根に色を付ける。屋根の上の黄色い葉を手に取り、愁は空を見上げた。青い空に黄色い葉が映えて美しい。歩道に植えられたイチヨウは遙か彼方、終わりが見えない程続いていた。踏み潰された銀杏の香りが、辺りを漂っていた。

イチヨウの葉をクルクルと回しながら、まだ大丈夫と独りごちた。日本に来て3カ月。まだやっていける。スーツの上から首にぶら下げたロザリオに触れると、ちゃりんつと涼しげな音がした。空をもう一度見上げ、愁は車に乗り込んだ。

*

2人目の被害者のアパートに着くと、愁は思わず黒のセダンを探した。幸い見える範囲に車はなかった。

アパートの被害者の部屋はまだブルーシートで隠されていた。そしてその横、制服警官がパイプ椅子に腰を下ろしている。彼は愁を

見ると、すつと立ち上がった。

始めて見る警官だったので、愁は胸ポケットからバッチを取り出した。「捜査一課の浜野です」

彼は敬礼をし、ブルーシートを開けた。「聞いています。どうぞ」「ありがとうございます」穏やかな表情で微笑み、愁は中へと入った。ブルーシートが彼の後ろで床に擦れ、音を立てる。バッチをポケットの中に押し込み、代わりに靴力バーと手袋を取り出す。それを両手、両足に嵌め、愁は大きく息を付いた。

“犯人の頭の中へ入れ。そして戻って来い。呑み込まれるな。引きずられるな”

ロバートの言葉を呟く。小さく、己にだけ聞こえる様に。

恐らく、犯人が被害者のドアを開けさせるのは、至極簡単に出来ただろうと愁は考えていた。物騒になった、とよく聞かれるとは言え、日本はまだ安全な方だ。合法的に銃が手に入る訳ではない。国民の警戒心もけて高いとは言えない。それにこの部屋に住んでいたのは、女性ではなく男性。尤も警戒心が薄いと思われる、若い男性。多少の事なら、誰かに頼らずとも押し返せると思っている。

『渡辺さん、お荷物をお届けしに来ました。判子、お願いします』片手にダンボール、目深に帽子を被り、作業着でも着ていれば、ドアは開く。

ダンボールのしたにナイフを隠し持ち、にこやかに微笑む。相手が判子を探す間に、部屋の中へと滑り込む。ドアを閉め、鍵を閉める。相手が気付いた時には、もう遅い。ナイフを鼻先に突きつける。口元に笑みが広がる。

脅える目が、小刻みに震える華奢な身体が、懇願するその目がその台詞が、その全てが彼の残忍な心を煽る。

顎で中へ進むように促す。チラチラとナイフを動かせば、相手はすぐに言う事を聞く。

『助けて』

『しっ』 耳元で囁く。

『金ならそこにある。財布が、タンスに通帳が』

『黙れ』 恐ろしく、落ち着いた声。

ダンボールを置き、中から白いタオルを出し、口を覆う。両手首を縛り上げる。冷え切った目で見つめながら。ニヤニヤと笑いながら。

脅える目が訴える、どうぞ助けて、と。

煽る。ただ、腹の中にある、何かが蠢いている。

『お前は俺のものだ』

時間はある。あり余りほど。この下にも、横にも住人はいない。

たっぷり楽しめる。レイプも、殺すのも。

一寸の狂いもない、全てが完璧な計画。

俺は捕まらない。捕まるはずがない。出し抜ける、俺ならば。揺るぎない自信。手には怪しく光るナイフ。ダンボール箱には必要なものが揃っている。ゴミ袋、タオル、ヒモ、塩素系漂白剤、着替え、真っ赤な血。

飛び散る、壁に、ベットに、己に。生温かく、それは鼻につく匂い。

ピピピッ、無機質な音が、まだ血の匂いが強く残る部屋に響く。

ポケットの中から携帯を取り出し、愁は軽く息を付いた。

瞼の裏に張り付いた残像が煩わしい。

「はい、浜野……」

言い終わらないうちに、受話器の向こうから明るい声がした。「ハイ、シュウ」

手首に嵌めた時計にちらりと視線を落とす。「随分早いな……」
「戻ってきた？」

マツドの言葉に、愁の眉がぴくりと上がる。マツドの心配は有難い、と素直にそう思っている。

3年前、一人のプロファイラーが戻って来なくなった。彼は口バ

「トの言うところ“引きずられた”のだ。犯人の思考に。何をした訳ではない。彼は加害者になった訳ではない。只、己の身を連続殺人犯の38人目の犠牲者として捧げたのだ。その姿を見つけた看守は、病院のベットに伏している。マッドはその現場に鑑識として呼ばれた。愁はロバートと2人でその犯人に面会をし直す為に、現場に立ち合った。

『まるで獣の様だった。口、というよりは顔中が血だらけで……。床も壁も……。口から臓器が出ていた。あいつは肉を食らっていた。嬉しそうな顔で、まるでステーキでも食っているみたいに』
看守は虚ろな顔でそう証言した。

様々な事情が重なった結果の事件だった。普段であれば面会は一人では行えないし、プロファイラーの精神状態もひどかった様だ。だが、プロファイラーの家族や友人、恋人達を震え上がらせるには十分過ぎる事件だった。事実、これを機に離婚したくない、と辞めた同僚もいた。

「ああ」愁は呟く様に言った。

「で、何が分かった？」

「プロファイルに変更はない。ひどい自信家だ」

ふふん、とマッドが笑った。「僕は良いもん、見つけちゃったよ」

「何だ？」

「おがくず」

愁は一瞬、考え込んだ。生粋の日本人であるのに、マッドの方がはるかに語彙が多い。マッドはメンサに入れる程なのだから、頭脳で勝とうと思った事はない。だが、日本語で負けるのは、何となく情けない気持ちになるのだ。それに彼は10代の頃、日本人の女性の家庭教師兼恋人にたった1年習っただけだ。後は愁の家族に聞いたり、独学で勉強したりしていた。だから、多少女性の様な言葉使いをするが、何不自由なくマッドは暮らしている。

「木の屑だよ」

「ああ」と呟く。

「大工、家具職人、家具を売買している業者、それを運送している
運転手……」

マツドの言葉を途中で遮る。「それは何処で見付かったんだ？」

「2つの現場の玄関だよ。だから被害者が落としたとは考えにくい
と思う。世田谷の方は良い具合に量が残っていたよ。杉の木だって」

「田中さんには？」

「今、信さんが電話しているよ」

よく耳を澄ませば、マツドの近くで加藤が『おつよ』と言う声が
聞こえた。「そうか」

「シユウ、これからどうするの？」

「もう戻る。ありがとう、マツド」

Episode 1

- 4 - (後書き)

メンサ・・・IQが高い人(上位2%)の交流の為の団体です。

木曜日

今の自分の位置は中途半端だ、と愁は思う。捜査の方に進展があったとしても、逐一報告がくる訳ではない。プロファイラーなのだから、それは不思議な事ではない。だが、なら何故一係にいる？

朝のミーティング。田中と桜井、他の捜査員が4名、それぞれのデスクに居る。愁は何時もない捜査員の椅子に座っていた。今日は丁度、田中と桜井の後ろ。愁が椅子に腰を下ろすと、2人は同時に椅子をくるりと回した。2人がペアを組んで1年というが、それ以上に見える。

「おはようございます」

「おはようございます」

愁はにっこりと微笑んだ。「おはようございます。吉沢さんはまだですか？」

「遅刻ですねえ」桜井がからかう様に言った。

田中に視線を移した愁は少しだけ頬を緩めた。今日の田中はその容姿に見合った格好をしている。ノーブランドだが品の良い黒のスーツ、薄いブルーのシャツ、紫色のストライプのネクタイ。そして何時もより数段穏やかな表情をしている田中を見て、昨日はお楽しみだった様で、と心中で愁は思った。

ポケットの中に両手を突っ込んだまま、田中は長い足を組み、つま先を小刻みに動かした。「浜野さん」口を開いた途端、彼の表情が険しくなる。「昨日、鑑識からの報告のおがくずを元にして大工や家具等のスギの木を扱う場所を回ってきました。とりあえず電話を貰ったのが世田谷だったので、まずはその周辺から・・・」

「目ぼしい人物は浮かんでこなかったんですね？」愁は眉一つ動かさない。

「ええ、今日も皆で手分けして回るつもりですが」

視線を感じて愁が田中の後ろを見ると、2人の捜査員が窺う様な目でこちらを見ていた。だが、愁には名前が思い出せない。一人は田中と同じくらいで30代くらいの女性、一人は40代後半くらいの男性だった。

「車のナンバーは世田谷だったのに・・・」桜井が眉を寄せた。

「車のナンバーとは何ですか？」愁が思わず聞き返した。

「世田谷の方の住人が怪しい車が居たと証言しています。中に居た人物は男性だった様ですが、年齢も顔も分からないそうです。例のカメラの写真も見せましたが、判断出来ないと言われました。その車のナンバーが世田谷だったそうですが、それ以外は覚えていないそうです」

中途半端だ、とやはり思う。愁は唇に手を当て、気が付かれない様に小さく溜め息を付く。「それがもし犯人であるとしたら、恐らくレンタカーや盗難車であると思います」

「レンタカー？」と40代の男性が口を挟む。

「ええ、この犯人が自分の車を使って目撃者を残すとは考えにくいと思います。それに車を持っているとも考えにくいですからね。レンタカーでは身元が割れてしまう確立が高いので、可能性は低いと思います。又貸し等なら有得ない話ではないかと思えます」

「犯人は職を転々としている、又はフリーターでしたよね？」と田中。

「ええ。一つの場所で働き続ける事は出来ないと思われれます」

田中がぐるりと椅子を回す。「じゃ、池上と山下さんは一応世田谷のレンタカーをお願いします。レンタカーの方の捜査は今日の手ごたえを見てから判断しましょう。俺達は引き続きおがくずの方を当たります」

2人が頷く。女性が池上、男性が山下、愁は頭の隅に刻む。山下はデスクの引き出しから地図を引っ張り出し、池上はパソコンを立ち上げながら、2人で話し始めた。

田中が再び、愁の方へ椅子を回した。

「遅れてすまない」

野太い声に、部屋にいる全員が声のする方に向いた。

吉沢は小脇にファイルの束を抱え、自分のデスクに走り寄った。

床が軋む音が聞こえてきそうだった。彼はデスクの上にファイルを置くと、椅子に腰を下ろす事はせず、淡々とした口調で言った。「
人事異動だ」

愁以外の誰もが「は？」、「え？」と言った声を漏らす。

「田中」

「え？」田中の顔色が、一瞬青くなった。「はい」

「お前は来週から浜野と組め」

「は？」田中と桜井が同時に素っ頓狂な声を上げる。

愁は眉をぐつと吊り上げた。

「お、俺は？」桜井が立ち上がり、自分をしきりに指差す。

「桜井は俺と、だ」

「えー」心底嫌な顔をして、桜井が叫ぶ様に言った。

睨む様に桜井を一瞥した後、吉沢は愁と田中を交互に見た。「と
りあえず浜野が面会を行っている間は今までのコンビ及び単独、俺
と桜井に合流の方向で考えている。それはその時の状況で判断しよ
う」

3人が同時に頷く。桜井は渋々だったが。

田中が体の前で小さくガツポーズしたのを、吉沢は見逃さなかつた。彼は口元に微かな笑みを浮かべた。アメリカへの研修生に選ばれなかったというよりは上層部が拒否した田中にとって、向こうの捜査を学べるのは浜野とマッドと居る時だ。コンビを組めばより一層話しが聞ける、間近で見れる。何処までも向上心のある男だ、と吉沢は思う。「それと悪いがあ部屋はあのまま使用してくれ。こつちにも空いているデスクはあるから、それを使用してくれても構わない。どちらにしろ、プロフィールはしてもらおう」吉沢はデスクの上に置いたファイルを差し出した。

愁は立ち上がり、吉沢の前に行くと、ファイルの束を受け取った。「総監命令ですね」吉沢にだけ聞こえる声で言う。

「ご名答。知っていたのか？」

「いいえ」愁はそう言うと、元居た場所へと戻った。昨日、藤沢冷子が『あの部屋にあるファイルは終わったの？』と彼に聞いた。愁は『ええ、殆ど』と答えた。その結果が今日、というだけの事。今日は木曜日、残りのプロファイルは来週までに。今日増えたファイルは6冊。

吉沢が各コンビに今日の予定を聞いていた。愁は部屋に籠もっています、と答えた。

「解散」吉沢の声が終わりを告げる。

「じゃ、浜野さん、来週から宜しくお願いします」田中はにこやかに微笑むと、手を差し出した。

愁はその手を軽く取った。「こちらこそ、お願いします」キラキラと輝く田中の目を見て、愁は思わず笑った。彼は新しい玩具を手にした子供みたいだ。なら、自分はどうなのだろう。自分はこの状況を喜んでいるのだろうか。

一方、桜井はがっくりと肩を落としていた。「ずるいですよ」

「そうか？」きよとんとした顔で田中が言う。「何でだ？」

田中の冷めた反応を、見かねた愁が口を挟む。「桜井さんもよろしくお願いします。吉沢さんはやり手の刑事さんだとお聞きしました」

「そう・・・なんですけど」桜井はそう言うと、ぐるりと部屋を見回す。彼が探している男は何処かへと消えていた。「新人の頃、3カ月だけ組んだ事があって、その時聞き込みに行くと皆、係長の顔を見て逃げちゃうんですよ！」必死な顔で、桜井は訴えた。

田中はゲラゲラと笑い出した。

「笑い事じゃないんですよ、田中さん。大変なんですから」

桜井が嫌がっている理由が解り、愁はホッと胸を撫で下ろした。出来る事なら、恨みを買うのは本意ではない。捜査をしなければな

らなくなるのであれば、尚更だと思う。愁はクスクスと笑った。「大変ですね、桜井さん」

「まあ、浜野さんまで」

腕時計に視線を落とし、愁は笑顔のまま言った。「じゃ、私はこれで」

笑っていた田中が部屋のシンプルな時計を見て、ふっと何時もの表情に戻った。「俺達もそろそろ行かなきゃな」

「はい」

もう一度「じゃあ」と言って、愁はファイルを片手に部屋を後にする。廊下はひどくひんやりとしていて、静かだった。自分の部屋の前で立ち止まり、愁は振り返った。「何でしょうか？」

ヒールの音を響かせて、池上は彼の前に止まった。長く美しい茶色の髪が、彼女の背で踊る。黒いパンツスーツを着ている彼女は、刑事という職を生業にしているだけあって雄雄しい。髪と同じ色の切れ長の茶色い目が愁を捕らえる。「あんた、捜査なんて出来るの？」普段の池上を知らないとしても解る、刺々しい口調。

「さあ、どうでしょうか？」愁はにこやかに微笑む。

「馬鹿にしてんの？」

「していません」しれっとした顔で答える。

池上はあからさまに眉を寄せた。彼女にとって、目の前にいる男は未知数だった。日々、一癖も二癖もある同僚の男達と対等に渡り合っているが、浜野愁は何処か癪に障る。女、30歳、生きてりゃそんな奴もいるわ、と思っていたのだが、こいつの何が癪に障るのか単純に知りたい。これから仲間になるのだったら。「護は・・・」

「護？」愁は呟く様に繰り返す。「田中さんですか？」

「同期なのよ」池上は少しだけ頬を染めた。田中を入社当時呼び合っていた下の名前で呼んだ事が、恥ずかしかった訳ではない。この男の前で何かミスをした様で恥ずかしかった。「田中や桜井はあんたを信用しているみたいだけど、私は無理だわ」

「構いませんよ」愁はにっこりと笑う。「ただ、私のプロフィール

は信用して下さいね。それでも色々勉強したんですよ」

私はあるのに喧嘩を売ったのよ、男なら買いなさいよ、池上は尻をぐつと上げ、睨むように愁を見た。気の強い、負けず嫌いの自分には男と張り合う事なんて、日常茶飯事だ。売った喧嘩も、買った喧嘩も、プライベートだろうが仕事だろうが、両手では足りない。「それにチームが信じているプロファイルを邪険にして輪を乱すなんて池上さんも本意ではないでしょう？」

これだ、と池上は思う。ひどく落ち着いている様に思える物腰、これが落ち着かない。確か自分と同じ年のはずだ。周りの友人は、同僚はこんな反応はしない。もつと激しい、感情が、表情が、態度が。だが、浜野愁は常に一定だ。どんなに悲惨な現場を見ても、誰に何を言われても、何時も、この3カ月。だから、嫌なのだ。その大人びた物腰が、自分を子供だと馬鹿にしている様で。「プロファイルは信じてるわよ」

愁はにこやかに微笑んだ。「ありがとうございます」

やっぱり嫌いだ、と池上は心中でこちて、何も言わず踵を返した。長い髪が、彼女の動きに合わせてサラサラと揺れていた。

愁は彼女が自分に背を向けると、部屋の中へと入った。後ろ手にドアを閉め、デスクの上にファイルをドサツと落とす。デスクの上に置いてある煙草に手を伸ばすと、丁度コーヒーマーカーが音を立てて鳴った。1本を口に咥え、火を点ける。立ち上る白い煙を引き連れて、椅子に腰を下ろした。

早速1人嫌われたな、と自虐気味に笑った。池上は藤沢冷子とは違うタイプの刑事だ。藤沢はどちらかと言えば小賢しい手を使っても目的を達する。だが、池上は直情型、思い込んだら頭から突っ込みそうなタイプだ。どちらにしる、現場へ出れば、池上とも接する機会も多くなるだろう。ストレートに感情をぶつけてくる分だけ、藤沢よりは楽だろうか。否、どちらにしる、己の仕事をするだけだ。池上の事は大した問題ではない。

ネクタイを緩めて、愁はファイルを捲った。

PM7:00。

車の量も、行き交う人の量も恐ろしく多い。交差点、横断歩道に入ったまま進めなくなったバンを、特に何も感じていない様子で人々は歩いていく。愁もその流れに沿って、横断歩道を渡っていた。

電車の音、車のクラクション、店の中から漏れる音楽、人の笑い声、怒鳴り声。

線路の高架下、漏斗に吸い込まれるように人が入っていく。愁はスーツの上に羽織ったコートのポケットに両手を突っ込み、高架下に飾られている素人の絵を一瞥する。壁がくり貫かれ、ガラスの入った簡易展示場には絵や彫刻、手芸品まで、様々な物が飾っていた。

高架下を抜けると、若い女性が愁の前にすつとポケットティッシュを差し出した。彼はその手を避け、先へと進む。明るく、華やかな街へ。

きらびやかなのは、常に変わらない。街は何時も変化しているが、そこにあるのは何一つ変化しない。

「ねえ、お兄さん、良い娘いるよ」金髪に染めた、怪しげな男が声を掛ける。

立て看板を抱えた、若い男が叫んでいる。「居酒屋、港です。割引券あります」

スーツ姿の男、OL風の女、茶髪で化粧の濃い女、若いカップル

達。愁は逆らわぬ様に、人の間を縫っていく。

アーチを潜り抜け、路地裏を覗き込む。その姿を見ていた若い女性2人が、あからさまにコソコソと話しだす。華やかな場所で、愁は薄暗い場所を覗き込む。何かを探して。探してみつからない、何か。日本に来て3か月間、ずっと探していたモノ。

『この街は眠る事がない。常に人の魂を食らって生きているのさ』
そう、微笑んで、自分に教えてくれたのは・・・。

「あなたでしたね」

縁石に座りこんでいた、初老の男性が顔を上げる。その汚れた、人の良い顔がひどく歪む。「おい、何だ、兄ちゃん。失礼だろ」意気込むが迫力はない。何十年も使い穴だらけの大きなリュック、毛羽立っているスラックス、白が黄色に変わっているセーターに、汚れたブルゾン。無精鬚を生やしていたが、髪は薄かった。男は立ち上がったが、愁の肩ほどの身長しかなかった。

「随分探しましたよ」

「お前、さつきから何なんだよ。年寄りからかって何が楽しいんだ？それとも何か？お前、ホームレス狩りか！」

男が怒鳴る様に言ったので、行き交う人が2人の方を振り向く。だが、誰もが通り過ぎていく。

ちっ、嫌な世の中だ、と男は思った。今年ホームレス狩りとやらで、仲間が1人逝った。犯人は10代の子供だった。一時期は何人もの仲間が標的になった。数は少し減少したのだろうか。何がホームレス狩りだ。俺達は動物じゃない。お前等と同じ人間だ。なのに何故“狩り”なんて言葉が出てくる。そしてそれが何故、ニユースでさも当然の事のように使われるんだ。まるでゲームの様に、仲間の命が意図も簡単に消えていく。

この目の前にいる男は、さつきから何を微笑んでいやがる。見ればスーツを着て、サラリーマン風だ。サラリーマンでも有得ない事をする人間は幾らでもいるが、特にこの男から恐怖を感じはしないのだが。

「シゲさん、お久しぶりです」

「お前、誰だ？」

愁はにっこりと笑った。「ちょっと待っていて下さいね」穏やかな口調で言いながら、シゲの横を通り過ぎる。シゲの座っていた斜め後ろにある自販機で、ホットコーヒーを二つ買い、一つを彼に差し出した。

一連の動きを、記憶を辿りながら、シゲは目で追っていた。俺の名前を知っている。誰だ、こいつは。こんな男、何処で会った。ハローワークか？シエルターか？炊き出しの奴か？品の良いスーツを着た若い男なんぞ、最近話した事がない。だが、手はコーヒーに伸びた。「悪いな」

「思い出してくれましたか？」愁はコーヒーを開け、一口飲んだ。

「否、誰だ？」悪びれた様子もなく、シゲは言った。コーヒーの缶を両手に挟んで、冷えた手を温める。

愁は苦笑すると、縁石に腰を下ろした。

「おい、汚れちまうぞ」何故かシゲが慌てる。

「構いませんよ。それより一本、どうです？」愁は煙草を差し出した。

「おう、貰うよ」シゲも彼の隣に腰を下ろし、貰った煙草を口に啜えた。愁がライターに火を点け、差し出す。深々と煙草を吸い込み、シゲが言う。「すまねえな」

「良いんですよ。それよりも本当に思い出せませんか？」

シゲは煙草を啜えたまま、頷く。

「少しシヨックですね。じゃ、これなら分かりますかね」愁はそう言うと、睨む様な目でシゲを見て、囁く様な声で言った。「うるせんだよ、クソジジイ」

シゲは目をまん丸にして、愁を凝視した。が、あつ、言って、彼を指差した。「お前、あん時の坊主か！そうだ、その目。何だ、随分立派になったな、坊主」

「坊主はやめて下さい。もう30になりましたよ」

シゲがバンバンと愁の背を叩く。「30か！おつそろしいな。俺もジジイになる訳だな」

変わらない、シゲの笑顔を見て、愁はそう感じた。彼と居ると、自然顔が優しげになる。「シゲさんは一体幾つになられたんです？」「俺か？俺は70に近くなつたなあ」「美味そうに煙草をすいながら、シゲは答えた。

「今年の冬は寒いそうですよ」愁は心配そうな眼差しを向ける。

シゲは空を見上げた。「そっか、今年は外じゃ厳しいのかねえ。年は取りたくねえなあ」

「何故、シエルターに入らないんです？」携帯灰皿をシゲに差し出し、愁は自分も煙草を啜えた。2人の吸う、煙はゆらゆらと揺れながら、風に乗って消えていく。縁石に座りこむ二人を、物珍しそうに通り過ぎる人達が視線を送る。だが、2人はそれを気にしていない。

シゲはフツと笑った。「何でだろうねえ」哀しげな目をして。

2人の間に沈黙が流れていた。だが、それはけして嫌なものではなかった。

「なあ、坊主。お前、名前何て言つたっけか？」愁が差し出した2本目の煙草を吸いながら、シゲは穏やかな口調で言つた。

「浜野愁ですよ」

「あ？そんな名前だつたっけか？」

「そんな名前です」愁はにっこりと笑う。

行き交う人の流れを見ながら、シゲは呟く様に言つた。「なあ、シユウ、あの時俺等、結構探したんだぜ」

嬉しそうに、愁は顔を綻ばせる。「ありがとうございます」

「ま、良いけどよ」彼の表情に、シゲはそれ以上言うのはやめた。誰だつて何かしら抱えているもんがあるのさ、それがシゲの人生の教訓の一つだつた。特にこの街で出会う人間には、野暮な事はしない方が良い。それにこいつは俺等が探したのが嬉しかった様だ。なら、この笑顔を見られただけで、あの時の苦労はチャラだろう。「

しかし、シユウ、何でここに帰って来たんだ？」

「情報屋を探しに来ました」しれっとした顔で言った。

「は？何だってお前、情報屋なんぞ探してんだ？お前、まさか・・・まくし立てる様に言った後で、シゲは眉を寄せ、怒鳴る様に言った。「殺し屋になつたんじゃないだろうな！」

その声と、発言に、行き交う人々が2人に注目する。

愁は一瞬を目を瞬き、ゲラゲラと笑い出した。「どうしたらそんな発想になるんです？」

「ああ、違うのか・・・」心底ホツとした表情でシゲが言った。

愁はまだクスクスと笑っていた。やがて少し落ち付くと、スーツの胸ポケットからバッチを取り出し、シゲに開いて見せた。「殺し屋とは真逆の位置にいます」

シゲはまた目をまん丸にしていた。「ケーシチョー？はあ、こりや、またすごい所に居るんだなあ、シユウ」

「ええ、おかげ様で」バッチをスーツの胸ポケットに押し込んだ。シゲはニツと唇の端を上げる。今日の煙草はイヤに美味いじゃねえか、シゲは心中で独りごちた。目の前を通る、やけに派手な女性が、シゲには少しだけ霞んで見えた。

「やっつけてくれますか？」

「あ？」愁の言葉に、シゲは素つ頓狂な声を上げる。「何だ、俺にやれって言ってるのか？俺がお前の情報屋？」面白くなさそうにシゲは笑う。

愁は思わず苦笑した。その為に3カ月もの間、彼を探したのだ。無論、シゲに会いたいという気持ちがあつたのは事実。だが、それ以上に彼の持つている情報が必要だった。本人はソレにどうやら気が付いていない様だが、シゲには至る所に色々な知り合いが居る。その知り合いからもたらされる情報がすごいのだ。坊主、であった時ですら、そう感じていた。多分シゲはあの頃より、更に多くの知り合いを作っているはずだ。老若男女、多種多様の職業の人間と。欲しいのは警察が掴める情報じゃない。

「俺は情報屋なんてタマじゃねえよ」

「シゲさんじゃないと駄目なんですよ」愁は微笑を浮かべた。だが、その目はひどく真剣だった。

シゲはうーんとだけ唸った。彼の口の端に啞えてある煙草から、灰がぼとりと路上に落ちた。嘘偽りなく、シユウの力になってやりたい、とシゲは思っていた。己を頼る誰かがいる、それがあの時の坊主であるなら尚更だ。手を差し伸べてやりたい。「なあ、シユウ。お前、結婚してるのか？」

「いいえ、していません」

「30だろう？しないのか？」

愁は小さく笑った。「しないんじゃないんで出来ませんよ。モテませんから」

「そうか？」シゲは不思議そうな表情を浮かべた。確かにシユウはハンサムな男ではない。だが、ひどい訳でもない。だからモテないと言うのは言い訳にはならない気がした。古い感覚だとは分かっているが、30歳独身は遅いのではないかと思ってしまう。否、きつと今の時代は俺等の時とは違うのだ、様々な事が。「なあ、シユウ」シゲは呟く様に言った。彼の足元で落ちた灰がくるくると踊っていた。

「何でしょう？」愁の口から白い息が漏れる。それは肺に残った煙なのか、それとも寒さが増してきたせいなのか、愁にはよく解らなかつた。

「もし、お前が結婚して、何時か子供が出来たら俺に抱かせてくれるか？」

「ええ、勿論です」

シゲの顔が綻んだ。携帯灰皿で煙草を揉み消し、シゲは小さな声で言った。「なあ、シユウの欲しい情報ってのは何なんだ？やつぱり事件の事か？」

「ええ、事件の事もですが・・・」愁は少しだけ言い淀んだ。「あの時、私が一緒にいた連中を探しています」

ああ、そういう事が、だからシユウはこの街に戻って来たんだな、シゲは納得した様に頷く。「あいつ等は散り散りになったって聞いた」

愁はコーヒーを飲み干し、封を開けていない煙草とライターをシゲに渡した。「ええ、私もそれは聞いています」

シゲは煙草の封を開け、フィルムをポケットの中へ突っ込んだ。

「俺が知っているのは一人だけだ」その結末を。

「美香ですか？」

「ああ、そんな名前だったっけか」唇の端に煙草を咥えると、シゲは哀しげな顔をした。「あの娘はこの街で生まれて、この街で逝ったよ。何の因果かねえ。俺より先にあんな若い娘が逝っちまうなんて」ライターを点けると、シゲの顔が赤く染まった。

「見たんですか？」何処か宙を見つめて、愁は呟く様に言った。

「ああ・・・」そうだ、警察だもんな、お前は。シゲは愁の顔をちらりと見た。その目は何処かを見ていたが、何処も見ておらず、哀しい色をしていた。「見たよ」その最後の、彼女の姿が今も瞼から離れない。

2人の前を、その沈黙を打ち破る様に、若い男女のグループが騒ぎながら通り過ぎる。踊るように歩き、心底楽しげに笑う。そして、何を思う。

死は命ある全てのものに訪れる。不老不死の薬は出来ていないのだから、仕方がない。何時かもし、不老不死の薬が出来たとしても、そんな物は口にしない、とシゲは思う。俺にも何時か死が訪れるだろう。だが、俺より先に若い奴が逝くのは悲し過ぎる。

路地裏、汚れた壁に寄りかかって死んでいたあの娘は、ひどく青白い顔をしていた。頬がこけ、スカートには血が付いていた。ただ、哀しかった。たった一粒の涙も零れない程、ひどく哀しかった。

「シゲさん」

ふとシゲが隣を見ると、愁は立ち上がっていた。シゲは彼を見上げた。

コートのポケットから名刺を取り出し、愁はシゲの手に捻じ込んだ。「宜しくお願いします」一礼し、にっこり笑うと、愁はシゲに背を向けた。

その背を追う様にシゲが立ち上がると、誰かがポントツと肩を叩いた。

「シゲさん、何してるんすか？」

シゲが振り返ると、金髪の髪を逆立てたスーツ姿の男2人が、ここにこと笑いながら立っていた。

「お前等こそ」

「俺等はこれから出勤すよ」

「そりゃ、ご苦労なこつた」シゲはそう言うと、人ごみに呑み込まれるようにして去っていく愁の後姿を追った。もうその殆どが見えなかった。シゲは手を広げ、捻じ込まれた物を見た。一枚の名刺。

勿論、愁のもの。手書きの携帯番号。裏を見ると、綺麗に置かれた万札があった。

金曜日

ブラックコーヒーに煙草、現場の写真、刑事や監察医、及び鑑識の報告書。クラクラと眩暈がする。胃の中が重い。部屋は真っ白で、さすがに臭かった。

愁が理由を思い付くのは簡単だった。今朝、インスタント食品が底を付いた。だから朝は食べていない。コンビニにも寄れず、煙草とコーヒーで自分を誤魔化してみたが、どうやら失敗だった様だ。マッドは自炊をするが、愁はしない。元々食事には無頓着だったが、日本に着てからは更にひどくなった。ファーストフードやファミレスにはベジタリアンメニューが置いていないし、肉を抜いてくれと言うのも面倒くさい。否、一度やった事がある。その時の店員は思いつき怪訝な顔をして、「そんな事出来ません」と怒鳴る様になった。あれ以来、ファミレスやファーストフードには行かなくなった。今は専らコンビニでパンかおにぎりしか買わない。食べなくても生きていけるなら、それも有りだと思う。仕方がない、自販機で何か買ってくるか、愁は煙草を揉み消すと立ち上がった。

廊下に出ると、ひどくひんやりしていた。自動販売機がある休憩室を目指す。一係とは反対の方向。途中、何人かの捜査員らしき人間と会釈を交わす。

目の前を、スーツのポケットに両手をつ込んだまま、肩で風を切る様に若い男が歩いていった。長身で、体躯も良い。目つきは厳しく、いかにも捜査員らしい。

愁はその男に見覚えがなかった。ただ、これから口にするであろう台詞は100%予想出来ると思った。

通りすがり、男は言った。「よお、FBIさん」

愁はクスクスと笑った。予想通り。

「何がおかしい？」凄む様に男は言う。

愁は振り返ると、穏やかな口調で言った。「いえ、向こうで私は“ジャパニーズ”って呼ばれていたんですよ」

男の眉がぐつと上がる。

「私の友人である連続殺人犯達に」愁はにっこりと微笑んだ。

途端、男の顔が強張った。

友人である事に嘘偽りは無い、と愁は思う。ただ、それは一般的に言う友人ではないけれど。彼等はクリスマスカードやバースデイカードを送ってくる。友情の証だと言つて、自分の描いた絵、持ち物を送ってきたりもする。行けば“ブラザー”と呼ぶ者すらいる。

“ジャパニーズ”と呼ばれるのは、彼等が愁に心を開くまでの名前ではない。無論、永遠に開かない者もいるが。面会さえ続けられれば、“ジャパニーズ”で呼ばれる事は二度とない。

「お前、覚えてるよ」捨て台詞の代名詞である言葉を残して、男は立ち去った。

いえ、今ここで忘れず、愁はそう独りごちた。そして大きな溜め息を付いた。何処へ行つても、大差はない。国や人種の差などほんの僅かだ、と愁は思う。

「浜野さん」

「はい」愁が声のする方に振り向くと、日下留美が立っていた。マツドに執拗に覚えさせられた名前。

「大丈夫ですか？」彼女は眉をひそめた。

「はい？」

「阿部さんと話していたみたいなので」

「ああ、彼は阿部さんと言う方なのですね」

留美はこくと頷いた。その表情は堅い。

「ええ、大丈夫ですよ」曖昧で許されるのが有難い、と愁は思う。

美点とは思わないが。黒でも白でもなく、グレーですらない。だが、それでも許されてしまふ。

「そうですね」 ホツとした表情で留美は言った。「あ、吉沢さんが呼んでいます」

「何かあったのですか？」

「ええ、犯人が自首してきたそうですね。世田谷と月曜日の事件の」
愁は思わず苦笑した。「今すぐに来いとおしゃっていましたか？」

「はい。取調室5にいるそうですね、その隣にと」

自分を見上げる彼女の目に、愁は溜め息を付きたくなった。ほんの少し、コーヒー以外の何かを胃に入りたい。別段、急ぐ必要もなさそうなのだが、彼女ならしっかり見送ってくれそうだ。「行ってきます」

「はい」

案の定、愁が視界から消えるまで、留美はその場に留まっていた。取調室5の隣の部屋に入ると、吉沢、池上、山下が一斉に愁を見た。吉沢がマジックミラー越しに見える隣の部屋を指差す。

小さな枠の中に見えたのは、にやついた20代前半の男と、2人の捜査員。捜査員2人は一係の人間だと言う事は分かったが、やはり愁には名前が思い出せない。

「自白マニアですか？」 淡々とした口調で、愁が言った。

「そう思うか？」 吉沢が問う。

「はい」 あなただっけそう思っているでしょう、と胸中で付け加える。

「何故？」 池上がひどく冷たい口調で言った。

「モニタージュやあの画像の男に似てるとも似てないとも言えないな」 防犯カメラの映像をプリントアウトした写真を手に、取調室にいる男を見比べながら、山下が言う。

「何人か自首した男がいる。で、こいつは画像の男に近かった。自供は報道内容の域を出ない。マスコミに伏せてある腸の事は未だ口にしていない」

愁は吉沢から、犯人だと名乗る男に視線を移した。確かにあの粗い画像に、似ていると言われれば頷くしかない。だが、似ていない

訳でもない。問題はその事ではなく、違ふところにあると愁は思った。ここに居る3人が、この自白マニアを見抜けない様な捜査員ではない事を愁は知っている。少なくとも一係にそんな捜査員はいないだろう。彼等は優秀だ。まぬけではない。なら、自分がここに呼ばれた理由は一つ。「この犯人は捕まるか殺されるかしない限り、犯行を止める事は有り得ません。そもそも自分は頭がよく愚弄なる警察には捕まらない、と考えているタイプの犯人ですから、自首等天地がひっくり返ってもないでしょう」

「愚弄？」池上の眉がぐつと上がり、その目が愁を睨む様に見つめた。

「愚弄なる警察諸君、出来るなら私を止めてみせたまえ、と言う犯人は恐ろしく多いんですよ」

「そうだろうな」吉沢が溜め息混じりに言う。

「まあ、実際2人目の被害者を出した次点でその通りだよな」くくつと意地悪そうに山下が笑う。

「3人目は出さない」凜とした声で池上が言った。その目は燃える様な色をしていた。「その前にとっ捕まえてやる」

池上のその目は誰かに似ている、と愁は思う。犯人を捕まえる事に、刑事という仕事に、飽くなき情熱を向ける。けして汚れる事のない、その目。きつと燃え尽きる事等ないのだろう。ああ、ジェイに似ている、捜査に移った時の相棒。彼も燃える様な目をしていた。自分には決して出来ない目。

「さて、じゃ、ここで時間を無駄にするのは終わりにしよう」吉沢はにっこりと笑うと、愁の肩をぽんつと叩いた。「すまなかつたな。浜野の意見も聞いてみたかつたんだ。他に他意はない」

愁は吉沢に頷いてみせた。

「じゃ、俺は戻る」吉沢はそう言うと、部屋を出て行った。

「なあ、あつちにも自白マニアは沢山いるんだろ？」

「ええ、長いリストが出来る程」

池上は腕を組んで、睨む様に隣の部屋の男を見た。「事件が有名

になればなる程、数が増えるって聞いたわ。はた迷惑な話ね」

「日本も同じさ。この事件は十分過ぎる程世間の注目を集めている」
山下はそう言うと、腰をトントンと叩いた。「そろそろ捕まえないと俺の身が持たないよ。残業ばかりでカミサンはお怒りモードだ」
池上が山下の肩を叩く。「じゃ、犯人を捕まえに行きましょう」
「了解」山下はうんざりとした口調で言うと、ドアを開けた。少し冷たい空気が部屋の中へと入り込む。山下はブルツと身体を震わせた。「泉ちゃん、その前に一服宜しいかな？」

「行ってらっしゃい。私は車で待ってるから」池上はひらひらと手を振った。

山下は飛ぶように出て行った。

池上は静かに閉まって行くドアを足で押さえながら、持っていたハンドバックの中に手をつっ込んだ。目当ての物を手探りで掴むと、愁の前に差し出す。「はい」

「何でしょう？」目の前に差し出された小さい箱を見つめ、愁は穏やかな口調で言った。

「大豆の栄養補助食品よ。あんた、さつきから死にそうな顔してる」池上はにやつと笑った。「腹の減りすぎ？」

愁には池上が女神に見えた気がした。迷わず手を伸ばし、受け取る。「ありがとうございます。助かります」涙が出そうだ。

「それ、動物性のものは一切入ってないの。常備しておくと便利よ」池上さんもベジタリアンなんですか？」

池上は小さく首を振った。「いいえ、肉類が駄目なだけ。魚は食べれるの。でも、食べる物は少ないわね。向こうの料理が恋しい？」

愁はにっこりと笑った。「大豆バーガーが恋しいかもしれませぬ」

「へえ、美味しそうね、それ。こっちはベジタリアンが生きて行くには少し厳しいでしょ？マッドがよく嘆いているわよ」そこまで話して、池上は少し饒舌過ぎたと後悔したくなった。昨日、喧嘩をふっかけた相手なのに。だが、普段しれつとした表情を崩さない男が

ふらついているのが妙に気になった。そもそもマツドが愁はよく食事を抜くからフラフラしていたら助けてやってくれ、と会う毎に頼んでくるのが元だ。田中に頼めと断ったが、彼が頼りになると思っているのかとマツドは笑った。情が絡むと、どうにかしてやりたくなるのが美点でもあり欠点でもある。ただ、この場合情を感じているのは愁ではなく、マツドにだが。

「ええ、厳しいと言わざる得ませんね」

「結婚でもすれば良いのよ。じゃあね」池上はそう言い残して、慌てた様に部屋を出て行った。

愁は苦笑し、手の中に残った箱に視線を落とした。一瞬、打ち解けたのだと思つた。でもそれはただの気まぐれだった様だ。軽い溜め息を付き、愁は部屋を出た。

*

最後のファイルを閉じて、愁は溜め息と言う名の息をつく。何時もとは違う理由で、目頭を揉んだ。

これで土曜、日曜の出勤は免れる。昨日、清水から追加で頼まれたプロファイル2件も、前の6件も、この部屋にあるファイルも全て終えた。約束通り。何もなければ、この2日は丸々休める。携帯を差ほど気にしないで動き回れる最後のチャンスかもしれない。捜査に関われば、非番等あつてない様なもの。それは毎日の様に会う田中が証明していた。犯罪が起こらない日はない。

冷え切ったコーヒールをこぐりと音を立て飲み干す。苦味が口の中

に広がる。デスクの端に転がしたままの煙草に手を伸ばし、最後の1本を抜いて、唇の端に咥えた。箱を握りつぶし、デスクの下のゴミ箱に投げ入れるとカランと音がした。火を点けずに咥えたまま、愁はパソコンに向かう。思いつくままにキーワードを叩き出す。この手のキーワードは無限にある、終わりはない。

パソコンの画面に映し出される殺伐とした映像や文字は、嘘と真実とのボーダーラインがひどく曖昧だった。曖昧さは時に人をひどく惑わす。それは文字を打つ側にも言える事だ。惑わされず正気を保っているには、一体何が必要なのだろう。狂気と正気、それは紙一重。

煙草に火を点け、深く吸い込むと、口の中の苦味がほんの少し消えた気がした。

愁は何かを探して、ネットの世界をさ迷い続けた。スタートもなければゴールもない。カチカチと無機質な音だけが部屋を支配する。しばらくページを捲っていたが、とあるページで止まった。

サム・ウォール。ご丁寧に写真入だった。一枚は裁判の時のもの。もう一枚は報道でよく使用されていたもの。どちらも数年前の写真で、サムは若く、魅力的な微笑みを浮かべている。その微笑の横には、その笑みとは似つかわしくない犯罪履歴。彼が何時、何処で、誰を、どんな風に殺害したのかが書いてあった。書いてある内容は主に雑誌や新聞からの抜粋の様だ。勿論、愁はこれより詳しい事を知っている。否、聞いていた、本人の口から。

深い海のような美しい青色の目、だが生気が少しも感じられないその目。ハニーブロンドの髪、細く長い指先。女性の様な顔立ち。彼は美しかった、その全てが、その心以外は。

連続殺人犯には魅力がある。人を殺めて生きながら、人を惹きつけて離さない不思議な魅力。サム・ウォールはその容姿が拍車をかけて、何処かに彼のファンクラブが存在しているという噂まである。連続殺人の犯人が捕まった後で多数の人達と文通するのは珍しい事ではない。老若男女問わず、彼等の本を書こうと目論む人間から、

極普通の人間まで。そして幸か不幸か、連続殺人犯に愛される女性が出てくる。その中には結婚をしてしまう者もいる。そして2人は無実を叫び出す。

サムは結婚こそしていなかったが、数人の女性と文通していた。彼は数枚の写真を愁とロバートに見せた。どれも美しく、若い魅力的な女性。中にはセミヌードになっている女性すらいた。

『シユウ、恋人を作れよ』とサムに言われた時、愁とロバートは思わず顔を見合わせ、苦笑した。

ドアがガチャリと開き、愁は我に返った。少しだけ心臓が高鳴った。

「ハイ、シユウ」愛想良く、にこやかに微笑みながら、マッドは中へ足を踏み入れた。

フィルター部分でくすぶっていた煙草の火を揉み消し、愁はマッドを一瞥した。「お疲れ」

「お疲れ様」ドアをパタンと閉めて、マッドはデスクの横の椅子に腰を下ろした。パソコンの画面を見て、眉をひそめる。「サム」心底、嫌な顔をした。「何見てるの？」

「サム」愁はニツと笑う。だが、すぐにその笑みを消すと、椅子の背もたれに寄りかかった。「何でだろうな？サムで、どうしても手が止まる」

「取り付かれてるからでしょう？だいたい、何見てたらサムに辿りつくのさ」

愁は肩をすくめる。「予備軍を探していただけだよ」

マッドは大袈裟とも言える程、大きな溜め息をついた。「他にやる事ないの？」

「ない」愁は即答する。

マッドは精一杯険しい顔をして見せた。「探せ」何時からだろう、愁に興味がなくなったのは、マッドは友人を睨みつつそう思った。

大学に入る前、愁はスポーツをしたり、パーティーに参加したりと極普通のハイスクールライフを送っていた。趣味もそれなりにあっ

た。だがそれも今は、ネットや現実世界の犯罪者予備軍を探したり、犯罪心理学の本を読む事が趣味なのではないかとすら思えてくる。仕事が全て、そう言っても御幣がない程に。そしてそれは日本に来てから加速している様に思えた。坂道を転がり落ちていくボールみたいに、コロコロと。「サムじゃないけど」マッドは顎でサムの写真を指した。「恋人でも作つたら？」

「恋だけが全てじゃない」

「仕事だけが全てでもないよ、シユウ」

愁は軽い溜め息を付いた。「そうだな」

一瞬、静まった部屋に、聞き慣れたヒールの音が響いた。昼間なら聞こえない音も、さすがに夜の8時を回ればよく聞こえた。働き蜂の様に動き回る捜査員達も、この時間は半分以上が帰宅しているし、さすがに慌しく動き回る事も多くはない。

愁は眉をひそめた。

マッドは椅子から立ち上がり、ドアが開く前に開けた。「ハイ、ボス」

「あら、マッド」ドアから顔を出した冷子は、マッドを見てにこやかに笑った。黒いラメ入りのシンプルなパーティードレスを着た冷子は美しかった。香水の匂いが、冷子が動いたたびに辺りに広がる。

「とっても綺麗。何処か行くんですか？」マッドが彼女の全身に、嫌味にならない程度に目を走らせる。

「パーティーよ、うんざりする程退屈な」彼女は髪を後ろに払い、溜め息混じりに言った。

「ボスが行けば退屈じゃなくなりますよ、周りの男達はね」マッドはそう言いながら、静かにドアを閉める。

冷子は思わずにつこりと笑った。マッドのこの手のお世辞紛いの言葉は何時もの事だったが、彼には下心もなければ、ゴマをすっているという事もない様だ。ごく自然で、嫌味もなく、悪い気がしないのが不思議だ、と冷子は思う。留学経験のある冷子にとってアメリカの男性は遠い存在ではないし、付き合った事もあれば、今でも

連絡を取り合う友人もいる。だが、彼のように言葉に裏を全くといて良い程感じなかった人は、アメリカでも日本でもいなかった。「ありがとう、マッド」

愁は立ち上がったが、ちらりと冷子の手を見て、内心ホツとしていた。その手には黒い小さなバツクだけ。ファイルはなかった。「あら、愁は恋人の写真を見ていた訳？随分ハンサムね」マッドが座っていた椅子に腰を下ろし、冷子は微笑んだ。

愁は肩をすくめ、椅子に腰を下ろした。

マッドは壁に立てかけられたパイプ椅子を開き、デスクを挟んで愁の正面に座った。

「恋人からデートのお誘いよ、愁」足を組み、冷子は妖艶に笑う。

「今、ですか？」

「いいえ、年明けが良いと言っていたわ。彼があなたに会いたいそうよ」冷子はパソコンの画面に映し出されているサムを見た。

「両思いだね、シユウ」

愁はマッドに微笑んで見せた。「それはどうも」

「日程は向こうと調整して、吉沢と決めてしまっても大丈夫かしら？と言つても年明けてみないと何とも言えないけど」

「ええ、お任せします」愁は穏やかにそう言い、サムの写真を一瞥した。サムは何故かロバートと愁しか話をしない。ロバートは出世をし、現場を離れ、愁も配置替えて捜査員になり、同僚が面会に行くとサムはひどい拒絶を示した。別段、サムが拒絶をするならそれはそれで良かったのだが、連続殺人犯なら他にもいる、彼の場合ここでやめる訳にはいかなかった。彼は2人が面会を始めてから、ちらほらと警察が把握している以外の被害者の名前を出し始めていた。実際、一年をかけた彼との面会で、一名の遺体が見付かり、その身元が判明した。証拠はサムの犯行を示していた。もしも、2人が行く事でサムが黙っている、彼が殺害した被害者が判明するのなら2人を行かせよう、それが上層部が下した判断だった。それは愁が日本に来る事の条件の一つであったし、冷子も了承していた。

自分の身内が行方不明の場合、例え遺体でも良いから早く自分の元に帰って来て欲しい、と願う家族は多い。犯罪に巻き込まれた可能性が高いのであれば、尚の事。無論、心底生きていて欲しい。でも、待ちながら、期待を裏切り続けられながら生きていくのは、ひどく辛い。

「ねえ、サム・ウォールはあなたのどこが気に入ってるの？」

愁は肩をすくめた。「さあ」

「サムはシユウを食べたいんだよね」マッドがニツと笑った。

冷子は柳眉を寄せる。「サムはカンニバルだったわね」

「サムは人の肉を食い、血を飲み、死体と性交を。彼は何でもありだった」マッドはすっと目を細めて、愁を見た。

愁は無感情な目で、彼を見つめ返す。

「ふーん、愁は不味そうね」冷子はそう言うと、くすりと笑った。

「サムはどうやって捕まったの？」

「私達が入る前に捕まっていたので詳しくは知りませんが、パトロール警官が職質をして、トランクの中から被害者の免許書が出てきたそうですよ。サムの逮捕に関しては偶然の産物、と言う人は多いですね」

「偶然ね。偶然でも何でも良いから早く捕まえてくれない？」愁とマッドを交互に見ながら、玲子は至極淡々とした口調で言った。「進展はあるの？」

愁は肩をすくめた。

「冷子さんが知らない事なんてないでしょう？」マッドは眉を上げた。「今は田中さん達が探していますよ。足を棒にして」

冷子は深い溜め息を落とした。「そうね。でもあなた達が思うより私は情報を貰っていないのよ。所詮、私はお飾りだもの」彼女は奥歯を噛み締めた。彼等2人が来てから、冷子は自分が愚痴っぽくなってきたと感じていた。2人と居ると思わず本音が零れる。それは2人が優しいからではない。2人が部外者だからだ。冷子はあの日、言われた事を一生忘れないと思う。「君は優秀だ。そして何よ

り見栄えが良い』屈辱だった。総監になって、ある幹部が言った台詞。その台詞を裏付けるごとく、今実際に実権を握っているのは他の幹部だ。

「ジーンズから検出されたDNAにヒットする人物はなし。部屋の指紋も同じくなし。世田谷も同じ。2つの事件に共通しているおがくずを元に一係がモニタージユ写真を持って捜査しています」マッドがつつらと言葉を並べる。

「そう」

「この犯人は自分が思うほど頭は良くない」

マッドより頭の良い人間なんてそんなにいない、あなたからしたら私も大馬鹿ね、と冷子は思った。「他に証拠は？」

両手を広げ、胸の前で振る。「なし」

「モニタージユの公開はしないのですか？」愁が穏やかな口調で言った。

「私が関わっていると思ってるの？何処かで止まっているみたいね。私はモニタージユ公開の話なんて聞いてないわ」何処で止まっているのか等、冷子には愚問だ。自分を蚊帳の外に置きたい男達の所で止まっている。冷子は腕時計に視線を落とした。「明日の朝一番で話してみるわ。私、もう行かなきゃ」

3人は同時に立ち上がった。マッドが冷子より先にドアに手を伸ばす。

「じゃ、来週から宜しくね」

愁は小さく頷く。「ええ」

ひらりとスカートの裾を翻し、冷子はマッドが開けたドアから外へと出る。振り返った冷子が見たのは、一礼する愁と、手をひらひらと振るマッドの姿。

「行ってらっしゃい」マッドは満面の笑みを浮かべた。

「じゃあね」冷子もそれにつられて微笑み、2人に背を向けた。ハイヒールの音を響かせ、冷子は尤も嫌う社交辞令と腹の探りあいの場合へと繰り出した。

マッドがドアを閉めると、愁は椅子にどさつと腰を下ろした。「サムが俺を食いたいって？」面白そうに笑う。

「本音を言う必要がある？」
「ない」

「じゃあ、別に良いじゃない。それに半分は本当の事もよ？サムは本当にシユウを食べたいのかもしれないでしょ」

くくつと愁は笑った。「そうかもな」そう、確かにサムは俺を食らいたいのかもしれない、否定は出来ない、と愁は思った。サムはロバートの事も気に入っている様だったが、愁の事は殊更気に入っている様だった。ロバートの倍、手紙や絵が送られてきたし、そこには必ず親愛なる、や兄弟と書かれていた。サムははつきりと口には出さなかったものの、愁を仲間にしたがっている、と言うのがプロファイルチームの考えだった。断片的に2人で旅をしたら、もしここを出る事があれば、等サムの手紙や話にはそれを感じさせる要素が散りばめられていた。無論、彼が刑務所を出る時は息をしない時でしかない。サムが裁かれた州は死刑が廃止されていたが、サム・ウォールは17件の一級殺人罪により懲役340年の刑に服す事になっていた。つまり何があっても出られる事はない。

「シユウ、サムと会えるの楽しみ？」マッドは愁の正面の椅子に座り、身を乗り出す様にして、彼の顔を見た。

「そうだな」何処か上の空のまま答えた。「大豆バーガーでも食ってこよう」愁は背もたれに寄りかかり、マッドとの距離を広げた。

「ああ、良いね、それ。後は何するの？」

「教会にでも行って祈りを捧げてくるさ」

マッドは破顔した。「信仰心なんてないくせに」

土曜日

新宿と渋谷は異なる色を持った街だ。その雰囲気も、行き交う人も、流れも。土曜日という事も手伝って、街は買い物客でごった返していた。様々なブランドのロゴが入った紙袋をぶら下げた人達が、楽しげに通り過ぎて行く。

ドラックストアから流れてくる音楽が、まだ早いクリスマス祝っていた。急く事もなく、ゆったりと動く人波の中で、愁もゆつくりと歩いていた。彼の前を歩く20代の女性2人が、彼氏のクリスマスプレゼントの相談をしていた。どうやら財布が第一候補の様だった。

11月中旬だというのに、街はクリスマス一色だった。ショーウインドウにはサンタ、ソリ、トナカイ等がスプレーされ、店先にはツリーが飾られていた。店内はキラキラと輝くモールやオーナメントが飾ってあって、華やかだった。そして葉が一枚もない木にはイルミネーションが巻かれ、光り輝いていた。

日本はそもそも仏教の国ではないのか、と愁は思った。もし祝うのであれば、キリストの誕生日ではなく、仏陀の誕生日の方ではないのか。お宮参りをし、厄除けをし、初詣をし、神前や教会で愛を誓い、葬式にはお坊さんと呼ぶ。生きていくうちに一体幾つの神にその祈りを捧げているのだろう。その祈りはどの神が叶えてくれるのだろうか。

前を歩いていた女性2人が、スーツ姿の若い男に声を掛けられていた。2人は首を振りながら、歩き続けている。男はそれでも横に張り付いて、執拗に話かけている。

2人との間にカップルが入ってきていた為、愁には男が何と言っているのか聞き取れなかった。只のナンパ、という感じではなく、

キヤッチか水商売のスカウトに見えた。

女性の一人が男に手を振り、友人の腕をぐいっと掴んで足早に人波に消えて行った。男は心底残念そうな顔をして、彼女達が行った方向とは逆の人の流れに入って行った。

愁は幾分ホツとした。今、面倒に巻き込まれるのはごめんだ。だが、何かあれば動かざる得ない。

携帯電話がブルブルと震え、愁はコートのポケットから引つ張り出した。画面には知らない番号が表示されていた。「はい、浜野です」

「おう、シユウ、俺だ」

「・・・何故携帯を持っているんです？」歩きながら、シゲの声に耳をすます。

「持ってねえなんて一言も言っただけで、俺は。シユウが聞かないで勝手に帰っちゃまったんだろがよ」シゲは豪快に笑った。「今、何処に居るんだ？随分後ろがうるせーな」

「渋谷ですが」

「仕事か？」

「いいえ、今日は非番です。どうかしましたか？」

「休みなのか。じゃ、ちよつくら付き合え」シゲはそう言うと、一方的に自分の居る場所を言っただけで電話を切った。

携帯をポケットの中に押し込むと、愁は駅へと向かう人の流れに身体を滑り込ませた。

愁は酒を飲まないから、全く種類が分からなかった。酒屋の店主に聞いたなら、明らかに値段の高い物を勧められた。多分、こんな物は受け取らないだろう。ほんの少ししかない知識を絞って、焼酎を選んだ。値段は中の下。これくらいが妥当だろう。それにつまみを幾つか足した。

ビニール袋を下げて、愁はシゲが言っていた場所を目指す。怪しく光るネオン街を通り抜け、薄暗い道を歩く。細い道をしばらく歩

いていると、何か焼ける匂いが愁の鼻をついた。するめ、だ。小さな空き地。カセットコンロを囲むようにして、3人の男が座っていた。その中の一人が愁に向かって、大きく手を振る。

愁は膝くらいまである小さな柵を越え、空き地の中へと入った。

「よう」シゲは座ったまま、近くに來た愁を見上げた。「何だ、お前？休みなのにスーツ着てんのか？」

愁はにっこりと微笑む。「何時呼び出されるか分からないので。でも、ネクタイはしていませんよ」黒いコート、ストライプの入ったグレーのスーツ、濃いワインレッドのシャツのボタンを一つ外していたが、それでもきちんとしていると言った印象を与える格好を彼はしていた。そのまま仕事に行っても差し障りのない格好をしていないと、呼び出された時にすぐ動けない。勿論、バッチャや手錠もポケットの中だ。捜査官になった時、ジエイに教えられた、ルールその1。だが、ジエイは動きやすい格好と言っただけなのだが、愁はそれ以来スーツを着用している。休みの日、出かける時は必ず。「へえ、若いのに仕事熱心だね」と、シゲの前に座っている60代くらいの男が言った。

もう一人も60代くらいの、白髪で小柄な男だった。彼はじつと愁を見上げていた。

3人はビールの箱を裏返したものに座り、それぞれ手にはコップと焼いたするめを持っていた。カセットコンロにはやかんがかけてあり、その端でするめが焼かれていた。

愁はシゲにビニール袋を差し出した。「酒盛りですか？」

シゲは袋を受け取ると、中から焼酎を取り出した。「おうよ、寒みいからな。気が効くじゃねえか、つまみまで入ってる」

彼の笑顔に愁はホッと胸を撫で下ろした。あの焼酎で良かった様だ。

シゲが自分の隣のビールケースをばんぼんと叩いた。「まあ、座れ」

「ええ」愁はその座り心地の良いとは言えない椅子に腰を下ろした。

「ほら」白髪の男がぐいつとグラスを差し出した。

愁はその穏やかな笑みを浮かべる男に見覚えがあった。真っ黒だった髪が真っ白になってしまい、恰幅の良かった体躯が細くなってしまうた為、判らなかつたが、間近で見ればあの優しげな顔は何等変わってはいなかった。「お久しぶりですね、源さん」

「よく覚えてるな、名前。俺はお前の目の玉や顔は覚えてたけど、名前はすっかり忘れちまつたよ」源はそう言つて、嬉しそうに笑つた。

受け取つたグラスにシゲが酒を注ごうとし、愁は焼酎を押さえた。

「飲めないんですよ」

「あん？」

「体が受け付けなくて」シゲから取つた焼酎を、彼のコップに注ぎながら愁は言つた。

「何だよ、つまんねえな」シゲは眉を寄せ、足元に置いてある袋からミネラルウォーターを出して差し出した。

「ありがとうございます」片手で受け取り、源にも酌をする。

「悪いな」

「私が酌をしたところで楽しくはないでしょけど」目の前にいる男にも酌をしようとして、愁は腰を浮かせた。相手がグラスを出すと、注ぎながら言つた。「始めてお会いしますね」

「こいつは棟梁だ」シゲが言つた。

「そうですね。よろしくお願いします」愁はにこやかに微笑む。

「おう」棟梁はにっと笑つた。シゲや源と同じくらい小柄だが、彼はとても筋肉質な体つきをしていた。随分と着込んでいたが、それでも首元や腕、手等を見れば、一目で分かる程に。

愁はコートのポケットから煙草を取り出し、口に啣えると、シゲに回した。火を点け、ライターも回す。シゲは隣の棟梁には渡さず、源に渡した。

源から戻つてきた煙草とライターをカセットコンロが乗っている箱の上に置き、愁は棟梁を見る。「棟梁は吸わないのですか？」

彼は並々と酒が注がれたコップを自分の目の前に掲げた。「俺はこれ1本だ」

「棟梁はザルだからな」

「飲んでも飲んでもなあーんも変わらなくてなあ。俺と源は何時も介抱されてんだ」

「俺は北国出身だからな」

「なーに言ってるんだ。俺だって北国出身だ。でも、棟梁みたいには飲めねえよ」シゲはグイッと酒を呷る。

「あの2人は何時もああなんだ。シゲさんはああ言ってるけど本当に介抱されてるのは俺一人だけだぞ」源が囁く様に言った。「シユウは体質に合わないのか？」

「ええ」愁は2人のやりとりを視界の隅に置きながら、頷いて見せた。酒は飲めない、のではなく、愁は飲まない。底なしではないが、そこそこであれば酒は飲める。ビールやカクテルなら美味いとも感じる。学生時代には飲み明かした事もある。だが、何時からか忘れてたがやめた。説明するのは面倒くさいから、聞かれる時は体質に合わない事にしていた。

「そうか」源が優しく微笑んだ。その目は愁を見ていたが、彼はほんの少し違うところを見ていた。あの頃の愁は同年の子供より随分と大人びた目をしていた。今の様に穏やかに微笑む事はなかったが、笑えば本当に可愛い子供だった。自分が涙ぐむのは年を取ったせいだろうか。子供なんて持った事なんぞないのに、親の気持ちが解った気がした。「立派になつたな、シユウ」

涙ぐむ源の目を見て、愁は優しいげな笑みを浮かべる。「子供を傷付けるのも大人、子供を救うのも大人」あの頃、母親が呪文の様に繰り返していた言葉。シゲや源は明らかに後者なのだろう。あの頃も、今も、自分にとっては。

「何だよ、もう酔ってるのか？」シゲが穏やかに笑う。口調はからかっていたが、シゲには源の気持ち痛み程分かる。自分だって先日、愁と会った時には涙が滲んだ。

源は袖口でグイツと目元を拭った。「そうかもな」そう微笑んで、彼はグラスの酒を飲み干した。

愁にとつてはこの上なく、居心地の良い沈黙が流れていた。ゆらりゆらり、指に挟んだ煙草の煙が、4人の間を揺れている。遠くから聞こえる喧騒が、何故かBGMの様だった。

「なあ、お前、警察にいるんだって？」

「はい」

棟梁は目を丸くした。「何だ、お前、警官なのか？」

「ええ」

「シユウは警視庁にいるんだぜ」何処か自慢げにシゲは言う。「すごいだろう？」

「エリートなんだなあ」グイグイと酒を呷りながら、棟梁は感心した様に言った。

「いいえ、私はエリートではなく下の方の人間ですよ」

「謙遜するなよ」シゲは笑った。

「いいえ、本当に」愁は困った様に微笑んだ。警視庁がエリート集団だという事は、今や世間にとつても暗黙の了解。田中や桜井、池上は東大卒だし、冷子に至ってはハーバードだ。愁は大学を出てはいるが、地元の大学だったし、レベルは中の中。この大学は犯罪心理学を研究している教授が在籍していたので、愁にとつては好都合だったのだが、本来であれば警視庁には入れなかつたと思えるくらいレベルだ。

「なあ・・・」棟梁がポツリと言った。

「はい」

「あの事件、捕まったのか？ほら、若い男がレイプされて殺された事件さあ」

「いいえ、まだです」

「俺の大工仲間がさあ」自分の持っているグラスに視線を落として、彼はゆつくりと言葉を選びつつ話始める。「刑事が聞き込みにきたんだって話してたんだ。ほら、あの変な写真みたいなの持ってさ」

「モニタージユですか？」

棟梁は愁を見上げて、うんうんと頷く。「そう、それ。あと画質の悪い白黒写真な。そいつさあ」彼はそこでじつと愁を見つめた。その先を言うべきか、棟梁は決めかねていた。自分の長年の友人であるシゲや源の昔馴染みなのだから、愁はきつと信用して良い男なのだろうと思う。それにそもそも警察官なのだ。

「何でしょう？」愁は穏やかな笑みを浮かべた。

シゲも源も棟梁をじつと見ていた。源が小さなバケツに煙草を投げ入れる。ジユツという音がし、煙が立ち上り、風に揺られて消えた。

「そいつ、確かじゃねえから言わなかったらしいんだけど、取引先に似ているやつがいたって」

愁は微かに眉をひそめた。警察が掴めない情報。「取引先の名前は解りますか？」至極、冷静な口調で言った。

棟梁は愁の様子にホツとしていた。そして口にして良かったと思つた。確かじゃないから刑事に話さなかったという大工仲間の気持ちも判る。もし間違っていたら罪になるのか、と不安が過ぎる。だが、もしそいつが犯人だったら？とも思っていたのだ。正直、愁がここで何故話さなかったのかと詰め寄ってきたら、ここへ来た事を後悔したかもしれない。「世田谷の柳材木店つてところだ」

「その情報買います」愁は立ち上がると、コートの中から札を出し、棟梁のジャケットのポケットへと押し込んだ。

「おい、俺はそんなつもりじゃねえ」彼は慌てた様にポケットをまさぐる。

愁は人差し指を立て、それを制した。「電話をかけさせて下さい」コートを翻し、3人に背を向け、携帯電話を取り出した。

「取っておけ」シゲが囁く様に言った。

田中の番号を押す。コールが3回鳴つたところで、繋がる。

「もしもし？どうかしましたか？」田中の不思議そうな声が出た。

そう言えば田中に電話をしたのはこれが始めてだ、と愁は思った。

「浜野です。知り合いから情報を貰いました」

「どんな？」

「世田谷の柳材木店と言う所によく似た人物がいると」淡々とした口調で愁は言った。

「世田谷の柳材木店。桜井、調べて」田中が受話器を押さええず、指示している。その後ろから電子音がする。「浜野さん、これから一緒にいきますか？」

「はい？」

「今、どちらに？」

「新宿ですが」

「じゃ、20分もあれば行けるかな。北口のロータリーで待っていて下さい。じゃあ、後で」

ブチツと切れた電話を、愁は思わず見つめた。来週から彼と組むのか、と苦笑した。軽く溜め息を付き、振り返る。

「どうだった？」と眉を曇らせ、シゲが言った。

「これから行きます。すいません、私も行く事になってしまいました」

「おう、仕方ねえよ」と源。

「気を付けてな」

「またな、シユウ」

愁はにっこりと笑い、3人に向かって一礼した。「失礼します」愁はそのまま3人を振り返らず、走ってその場を後にした。

25分を過ぎた頃、ロータリーにシルバーのセダンが停まった。愁は柵を越え、後部座席に滑り込んだ。

ドアが閉まると同時に、車が発進する。ハンドルを握りながら、田中がミラー越しに微笑む。「すいません、思ったより道が混んでいて」

「いいえ、土曜日ですから」シートベルトを締めながら、愁は言った。

桜井が助手席から顔を覗かせた。「休みの日なのにスーツですか？あ、もしかしてデートだったんじゃない」

「いいえ、そういう訳ではありません。私は何時呼び出されても良い様に出掛ける時は大概この格好をしているので」

「へえー、向こうはそんなに厳しいんですか？大変ですねえ」桜井が感慨深げに言った。

「いいえ、私だけかと思いません。以前の相棒には極端だと笑われましたから」ジエイの吊り上った片眉を思い出して、愁は微笑んだ。

土曜日の7時、道路はひどく混んでいた。行き交う車はカップルや親子連れ、友人同士、休みを謳歌している者達が殆どに思える。

時折見るスーツ姿の男女やタクシーやトラックを運転している人は、田中と桜井と同じでその顔は疲労の色に染められていた。

「世田谷の柳材木店は一件しかなく、今日は休日の様です。ですが、店の経営者と連絡が取れ、会ってくれる事になっています」田中は前を見たまま、淡々とした口調で言った。「この情報をどこで？」

「昔馴染みの友人から」シゲがもたらした縁。ただの運だろつか、と愁は思った。シゲの様子からして初めからこの話を知っていたとは思えなかった。

「浜野さんってそう言えば日本に住んでいた事ってあるんですか？」と桜井。

「ええ、もちろんです。14歳まで住んでいましたよ」

「へえー、アメリカにはどうして？」

「父の仕事の都合です」流れて行く景色を見ながら、愁は答えた。日本に来てからこの手のやり取りは何度目になるのだろう、とぼんやり考えながら。

「マツドさんとは付き合いが長いんですか？」

愁が窓の外からバツクミラーに視線を移すと、田中と一瞬目が合った。田中がプライベートな事を聞いてくるなんて珍しい、と愁は思った。「ええ、15年くらいですが」口にして、改めてその付き合いの長さに気付く。人生の半分、その多くの時間を共にしている。「同級生でしたっけ？」と桜井が再び顔を覗かせた。

「いいえ、マツドは私より2つ上です。父親が友人同士なんですよ」「へえー」

車が大通りを離れて、住宅街へと入って行く。それを合図に車内の空気が少しずつ変わり始めていた。田中も桜井も愁も、それから車が停まるまで口を開かなかった。

倉庫の様な、家の様な建物の前で、田中は車を停めた。小さな看板に柳材木店と書いてある。良く目を凝らせば、壁には木が所狭しと立てかけられていた。3人は車を降り、田中を先頭に歩き出した。

田中がガラスのドアを叩く。「すみません」

しばらく待つと、中の明かりが点き、人影が見えた。50代くらいの男性。彼は何の迷いもなく、ドアを開けた。

田中がバツチを取り出して、男に見せた。「先ほどお電話した警視庁捜査一課の田中です。こっちは桜井、後ろは浜野です」

「ああ、はい、はい。まあ、どうぞ、中に」男はにこやかに微笑み中へと入る。「散らかってますけどねえ」

3人は男の後ろを追う様に中へと入った。最後に入った愁がドアを静かに閉める。

「で、うちに何の用で？」ほんの少し緊張した面持ちで男は言った。田中はポケットから写真を2枚取り出し、彼に差し出した。「見覚えはありますか？」

男は写真を受け取ると、2枚を交互に見比べた。「ああ、竹内に

似てるなあ」

「竹内、さんですか？」桜井が目を輝かせた。

写真を田中に返すと、彼は部屋の奥に置いてあるスチール棚へと向かう。「ええ、竹内学。半年くらい前に雇ってくれて来たんだけど、2日前から来なくなっちゃって。最近の若い奴は根性がなくてねえ。すぐに辞めちまいやがる」本棚からファイルを取り出し、ペラペラと捲り、指を止める。彼は3人の側に戻って来ると、ファイルを差し出した。「ほら、似てるでしょう？」

田中が受け取り、呟いた。「似てる」

桜井と愁もファイルを覗き込む。小さく桜井が言った。「ビンゴ」

3人の視線が絡んだ。

「この履歴書頂けますか？」

「ええ、勿論。」男の顔が引きつる。「こいつ、何かしたんですか？」

「いいえ、まだ判りません。参考人です」と桜井が穏やかな口調で言った。

田中はその横でファイルから履歴書を抜き取っている。

「参考人？竹内は暗くて大人しい奴だったけど、悪い事しそうな奴じゃなかった」彼の顔が悲しげに歪む。「割と真面目に働いていたし」

「2日前から来なくなったと言いましたね？突然ですか？それとも何か変わった事がありましたか？」桜井が落ち着いた口調で言った。

2人の後ろで愁は思考を飛ばす。無論、竹内は逃げているだろう。何かを察知したのだろうか。警察が迫ってきたのを感じたのか。

「突然ですよ。電話も繋がらなくなっちゃって。明日にでもアパートに行ってみようかって思ってたんですよ。イヤ、何かあったら大変だからね」

「それは私達が確かめます。どのくらいの体格の男でしたか？」

田中から返されたファイルを受け取り、彼は桜井を指差す。「あなたくらいかな。体つきはもう少し良かったけど」

「そうですね」桜井は小さく頷く。

「免許書や保険証等のコピーはありますか？」

男はきよとんとした顔で田中を見た。「そんなものないよ。日払いだったし、保険は自分で払うっていうしさ。竹内は運転が苦手だっというから殆どさせてないし」

偽名かもしれない、3人は同じ事を考えていた。彼はそういう場所を選んだのだろう。身元を確かめられない、働き場所を。

「ああ、でも」と男は何かを思い出したかの様に口を開く。「一回だけ車を貸してくれ、っていうから貸してやったら信号無視か何かで捕まったって言ってた。オタク等なら調べりや分るんでしょ？」

「ええ、それ何時頃の事ですか？」と桜井が聞く。

「えー、先々月の中旬くらいかなあ」

「車のナンバー、教えてもらえますか？」

「外に停まつてるセダンだよ」

3人はそれから幾つかの質問をし、丁寧にお礼を言って、外へ出た。桜井が外に停めてあるセダンのナンバーをメモ帳に書きとめる。「アパートに行きましょう」田中が愁に向かって言った。「逃げると思いますか？」

「ええ、何処か遠くへ」

田中は頷くと、車に乗り込んだ。

*

20分後、竹内の履歴書に書いてあったアパートの前に、2台の

車が停まった。1台はセダン、1台はサイレンを鳴らしていないパトカー。

制服警官2人が降りて来るのを見て、田中と桜井が車を降りた。愁もその後を追う様に降り、4人の側へと歩み寄った。

「桜井と庭の方へ行ってもらえますか？部屋は102。自称、竹内学。24歳、170センチくらいで体格もそこそ良い様です。犯人であれば2人をナイフで殺害していますので、くれぐれも気を付けて下さい」

警官2人が力強く頷く。その顔には緊張が見えた。

「浜野さんは俺と」

「ええ」丸腰ですが、と愁は思ったが、口にはしなかった。どうせ逃げている。それに銃が簡単に手に入る国ではないのが幸いだ。万が一、居たとしても田中と2人で対処出来ない事はない。

古いアパート。102号室は真つ暗だった。人の気配はない。

田中がドアをノックする。「竹内さん、いらっしやいますか？」
応答はない。

「竹内さん」更に数回ノックし、声をかける。「こんばんは」

2人の横でガチャツとドアが開く。「なあ、うるせえよ」30代前半くらいの男が103号室から出て来た。金色の髪をかき上げ、彼は不機嫌そうな表情を緩めない。「隣なら帰って来てねえーよ」

田中がバッチを見せる。「警察です。隣の方と付き合いがあったんですか？」

「警察？あいつ、何かやった訳？」面白そうに笑う。「付き合いなんてある訳ねえーじゃん。このアパート、ちょー安いけど、ちょー壁が薄い訳。丸聞こえなんだよね、音がさ」

「そうですか、何時から聞こえなくなりましたか？」

「うーん、昨日、今日は静かだったと思うけど？」

「そうですか。ご協力感謝します」田中が頭を下げた。

「静かにしてくれよ」と男は言うのと、ドアをボタンと閉めた。

大家からあらかじめ借りてある合鍵を取り出し、田中は愁に小さ

く頷いて見せた。「入ります」鍵を入れ回すと、辺りに漂っていた静寂が打ち破られる音がした。田中の手には銃が握られていたが、銃口は下に向けられている。ドアを開け、田中は中へ踏み込んだ。

愁は田中の後ろから部屋へと入った。スーツのポケットからマグライトを取り出し、中をざっと照らす。

部屋はもぬけの殻だった。8畳ほどのワンルーム。玄関から全てが見えた。隠れられる様な場所はない。トイレのドアは開け放たれており、押入れもない。家具も殆どなく、あるのは小さな机、テレビ、畳まれた布団、小さな冷蔵庫だけ。

田中が大きな溜め息を付き、肩の力を抜いた。「2日か・・・」彼は小さく呟いた。

もしもモニタージユを公開していたら、否、もしもの話をしても切りはない。起きてしまった事や、過ぎてしまった事を口にしたところで、現状は何一つ変わらない。だから2人は黙って、視線を交わしただけだった。

日曜日

街の片隅でひっそり佇む様に建つ小さな花屋。ショーウィンドウにはクリスマスのスプレーペイント、色とりどりの花束が飾ってあった。バラ、カサブランカ、胡蝶蘭、比較的派手な色合いの花が多いのは、街のせいだろうか。鉢植えは殆どなく、店の中は美しく、華やかな切り花ばかりだ。

季節感がない、と愁は思った。花の知識がある訳ではないが、彼の母親は庭によく花を植えていた。チューリップが11月に咲かない事くらいなら、愁にでも解る。他の花だってこんなに寒いのに、美しく咲くのだろうか。美しいが、どこか偽りだと思える。

にこやかな笑みを浮かべた店員が、愁に近付いてくる。「どう言っただものをお探ですか？」

ガラスケースの中を見回しながら、愁は呟く様に言った。「小さな花束を・・・」花屋で花束を買う事なんて大学生以来だな、とぼんやりと考えていた。大学最後の夏、バイト代を叩いて大きな花束を買った。両手では抱え切れない程のひまわりとカスミソウの花束家に帰り渡したら、母は破顔した。あの時の彼女の嬉しそうな顔を、愁は忘れないと思う。

「お相手の方の年齢はどのくらいですか？」店員がガラスケースを開けると、冷たい空気が2人の間を流れた。

愁は目に留めた小さな淡紅色の花を指差す。「あれを花束に出来ますか？」

「アザミですか？」店員はアザミの花に手を伸ばす。「他には何を入れますか？」

「いいえ、アザミだけで」

ちらりと視線を愁に投げ、店員はアザミの花を手を取った。「分

かりました」

愁に手渡された、小さなアザミの花束はとても可愛らしかった。オーガンジーの白い布が二重に巻かれ、アザミの花と同色のリボンがしてあった。店員のセンスの良さが窺えた。愁は思わずにこやかな笑みを浮かべる。「ありがとうございます」

代金を払って外に出ると、身を切る様な冷たい風が吹いていた。雪が降り出してもおかしくないほど、今日は冷える。

寒さを紛らわすかの様に、道行く恋人達は肩を寄せ合い、指を絡めている。アメリカ程ではないが、道で唇を重ねる2人もいた。太陽が沈めば、家族連れは家へと急ぐ。

小さな花束を片手に、愁は急ぐこともなくゆっくりと歩いた。

多分、この花を彼女は喜ばないだろう、愁はぼんやりとそう考えていた。きつとあの店で目立っていた赤いバラの方が喜ぶ。華やかな物の方へと引き寄せられていく様な女だから。

途中、コンビニに寄って、ホットコーヒーとビールを買った。

ネオン街を抜け、ひどく寂しい道を歩く。裏道、小さな街灯だけがぼんやりと輝いていた。アスファルトには紙くずや煙草が転がっていた。スナツクの名前の書いてあるゴミ箱や古い自転車が並び、奥は薄汚れた壁。

細い電信柱の下、愁は花束を置いた。花束の横に缶ビールを置いた。そしてその横に腰を下ろす。アスファルトはひどく冷たい。愁は缶コーヒーを開けた。

ビルの隙間から見える空は、星一つ見えない。まるでこの世には星等存在しないかの様だ。日が落ちて暗くなっているというのに、何故か濁っている様にすら思える。人は何を求めて、空を見上げるのだろうか。

缶を合わせると、鈍い音がした。

「遅くなった・・・」声には出さず、口の中で呟いた。「すまない」

木村美香、享年25歳。彼女はそれ早すぎる生涯を、ここで終えた。警察のパソコンのデータベースに残っていた記録。事件性はゼ

口だったが、美香が血を吐いていた事から警察が呼ばれた。スカ―トにも血の跡があり、事件性を疑った警察が監察医に解剖を依頼したものの、解剖する事もなく病死だと判明した。美香が何故病院でもなく、自宅でもなく、この場所で息を引き取ったのかは謎のままだ。力尽きて倒れたのではないかと警察は推測している。美香の命を奪ったのはエイズだった。

煙草を啜え、火を点ける。ぼつと上がった火が、まるでマツチ売りの少女の一場面を思い出させるかの様だった。幻影が見えそうだが愁は思いつきり吸い込んだ煙を少しづつ身体の外へと放つ。ぼんやりと只、その煙を目で追っていた。

随分と長い時間そこに居て、愁はふと気が付いた。この場所は街の喧騒や人の気配を感じられるが、人は全く通らなかった。

「お前らしい、人がいない場所で、人の気配を感じながら逝くなんて」愁はそう呟く。この場所で彼女が永遠の眠りに付いた理由が、愁には理解出来た気がした。

背中と尻が冷たく、痛くなってきていた。指先が寒さで痛い。缶コーヒーは冷蔵庫で冷やしたかのように冷え切っていた。それでも愁は立ち上がらず、ただぼんやりと宙を見つめていた。

「いい加減にしないと風邪引くんだからね」
声の主の方へ、ゆっくりと愁は視線を送る。その声色だけで誰だか分る。

「ここに何時から居るの？」カサブランカの美しい花束を抱え、マツドがにこやかに微笑んだ。薄暗い道なのに、何故か彼の周りだけ明るくさえ見える。マツドはゆっくりと歩いて、愁が置いたアザミの花束の横に、カサブランカの花束を置いた。しゃがみこみ、目を閉じ、胸の前で十字を切る。

「ありがとう」

「シユウの友達に僕は僕の友達だよ」マツドはそう言って、にっこりと笑う。

「何時の時代の台詞だ？」愁はからかう様な口調で言ったが、マツ

ドがそう心から思っている事は解っていた。

マツドは口元に笑みを浮かべた。視線を花束へと移す。「アザミの花言葉、知ってる？」

「いや・・・」

「独立、安心、触れないで」マツドは花束から愁へと視線を移した。彼と視線を絡め、淡々とした口調で言った。「復讐」

愁はふつと自虐的な笑みを浮かべる。「復讐か・・・」

「何でアザミなの？」

「どこことなく・・・」愁はアザミの花束に視線を落とす。「この花が美香に見えたから」高価なバラより、華やかな花の中でゆらゆらと揺れているその様が。存在を主張するくせに、何処か頼りなく見えた。「触れないで、か」その真逆を生きた女だった。

マツドは美香の現場写真を思い出していった。事件性はなかったのに、数は少なかったが、彼女がどう死んでいったのかを知るには十分だった。美人ではないが、彼女は俗に言う男好きをする顔立ちをしていた。目元に、薄いピンクの口紅を引いた唇に、白い肌に、色香が漂っていた。身に付けている服もアクセサリーも、美香の容姿をうまく引き立たせていた。病気の為か頬がこけ、体も至極細かった。きつと病が体を蝕む前は男を惹きつけてやまない女性だったのだらうと思わせた。

愁がふと顔を上げ、マツドを凝視した。「何でここが分った？」

マツドは肩をすくめ、にこやかに微笑んで見せる。「GPS」

「ああ、そう」愁は眉を吊り上げて見せる、効果がないと分っても、冷子から2人に渡された携帯にはGPS機能が付いていたが、緊急時にしか使用出来ない用になっているらしかった。愁にはその仕組みが理解出来ないが、マツドの事だ、どうにかしていじくったのだらう、と言う事だけは解る。

「ちよつといじくつて。僕のも愁の携帯でわかるよ」マツドはニコニコと笑う。「何かあったら助けに来てね」

行かない理由が見付からない、と愁は思う。「ああ」

「僕が何で日本に来たのか知ってる？」笑みを消し、マッドは視線を伏せた。

「知ってる。俺を監視する為だ」立てた膝の上で組んだ両手に視線を落とし、愁は淡々とした口調で言った。マッドがこっちに来る事は痛手だ。鑑識チームの主任が随分反対をし、行く直前まで散々もめたと言う話を愁も耳にしていた。それでも来る事になったのはマッドが行くと言って譲らなかつた事と、ロバートの後押しがあつたからだ。彼等がどんな話し合いをしたのか愁は知らない。だがそこに自分が絡んでいる事だけは知っていた。

マッドは愁の左肩を指先で突いた。「シユウには前科があるからね。しっかり見てないと暴走しちゃうからさ」

「あれは暴走じゃない」愁は眉をひそめる。「勝算はあつたし、別に命に係わる様な事じゃなかつただろう？」

よく言うよ、とマッドは思った。こつちの気もしらないで。確かに勝算はあつたのだろう。犯人は1人だけだつたし、持っていたのはひどい改造銃だつた。逮捕の後、試し撃ちをしたら、どんなに狙つても右に反れて飛ぶ事が分つた。ジェイも愁もその事には気付いていたらしいが、そんな事は問題ではなかつた。問題なのは、愁が撃たれたという事実。弾は左肩を貫いた。命の別状があつた訳ではない。でも、この上ない程、動揺した。聞いた瞬間、自分の血の気が引いていくのが分つた。指先が小刻みに震え、心臓が早鐘の様に鳴っていた。こんな職業を生業に選んだくせに、世界が歪んで見えた。もうあんな思いは二度と御免だ。

「でも、反省してる」愁は咳く様に言った。無謀な事をしたつもりも、命を粗末にしたつもりも、愁にはなかつた。だが、怪我の程度よりも、ひどかつたのが周りの反応だつた。母は泣いた、マッドは怒つた、ジェイは呆れた、ロバートは命の尊さを説教する神父を連れて来た。中でも愁の心が一番痛かつたのは、父の姿だつた。父親は病室に入つて来て、笑いながら泣いた。『愁が生きていて嬉しい』と。愁は普段穏やかで、強い、父親の涙を始めて目にした。驚いた、

というよりはひどくショックを受けた。だが、そのショックが何なのか未だに理解出来ない。己の心なのに。

「なら、良いけど」マッドはそう言つと、穏やかな微笑を浮かべた。愁が心底反省しているのは、マッドにも分りきつてきている事だった。

余りにも長い時間、マッドと愁は同じ時間を共有してきている。愁がアメリカに越してきてから始まった2人の友情。2人の両親が共働きという事と、近所に住んでいた事もあって、殆ど家族同様に過ごしてきた。人は2人を正反対のタイプの人間だと言う。でもそれでバランスが取れているのだ、とマッドは思う。「それに僕のお嫁さんみつけないきゃ」

愁は柔らかな笑みを浮かべる。「そうだな」

マッドは立ち上がると、ジーンズの膝に付いた小さな砂利をぼんぼんとはいた。「ねえ、彼女のお墓は何処にあるの？」穏やかな口調でそう言い、ちらりと花束へ視線を落とす。

「ああ、どつかの寺の無縁墓地だよ」

「そつちには行かないの？日本人は命日には仏花持つて、線香立てて、手合わせて墓参りするんだよ」

ゆっくりと立て上がり、愁はコートに付いた砂利や埃を払う。「別にそんな決まりはないさ。それにマッドだって仏花じゃないだらう」

「まあ、そうだけど」マッドはそう言つと、花束を見下ろし、もう一度胸の前で十字を切った。既に歩き始めている愁の後を追う。マッドはすぐに追いつき、彼の隣を歩き始めた。「愁は彼女の事好きだった？」

ちらつとマッドを見て、愁は眉根を寄せる。「何でそう思うんだ？」

「可愛かったから」

「そうか？」

ダウンジャケットの襟をぐつと合わせて、マッドは頷いた。「うん」

「むしろ・・・」愁の口から溜め息が漏れ、それは白い煙に変わった。「嫌いだっただ」

「何で？」

「コバンザメみたいで。強い奴に媚びていて、その姿が堪らなく嫌だった」愁は淡々とした口調で言った。「でも今はそれも仕方のない事だったと解る。美香はそういう生き方を選んだのではなく、そういう生き方しか出来なかったんだと思う」

「うん」マッドは愁の顔を盗み見る。その顔は哀れみに歪んでいた。2人はそれつきり口を噤んだ。薄暗い道をゆっくりと歩き、それぞれ別の事を考える。しばらく歩くとネオン街へと出た。広場の中央で2人の若い男がギターをケースから出していた。どうやらこれから歌うらしい。その2人の前には数人の若者が始まるのを待っていた。一方、その横では数人の中年男性が眉をひそめて通り過ぎていく。

歌が始まる。歌っているのは白い髪の小柄な男性。その横で長身の男がギターを弾いていた。歌声もギターも圧巻だった。心地良い声とギターの音色。

愁とマッドはその横を通り過ぎる。

「アライブだつて」マッドが看板の様なものに貼ってある手書きのポスターを見て、呟いた。

「うっせえなあ、こんなところで演奏しやがってよ」通り過ぎる男が言った。

愁は思わずその男を見た。2人に喧嘩を吹っかけそうなタイプには見えなかった。男はブツブツ文句を言いながら、歩いていた。

「うまいのにな」

「文句を言いたいだけの人間もいる。うまかろうが、下手だろうが、そんなものは大した問題じゃないんだ」

「まあね」人ごみに消えていく男を振り返り、マッドは頷く。どうぞ彼と二度と会う事がありません様に、とマッドは心の中で祈る。ほんの些細な事、他人にしてみれば理解し難い事で、事件を起こす

人間は山のように居る。口論、暴力沙汰から始まり、それは殺人ま
でに至る。そしてその後、自分のした事に愕然とするのだ。道を踏
み外すのは、ほんの少しのきっかけに過ぎない事もある。

「マッド」

マッドが横を見ると愁の姿はなく、彼は少し前で立ち止まってい
た。ぼんやりと先程の男の事を考えていたせいで、随分と遅れてい
た様だ。マッドは慌てて駆け寄った。「ごめん」

「夕飯、食ったか？」

「ううん、まだだよ」

愁は少し前を指差す。「あれでどう？」

「良いね」

肉を抜いてくれ、と言っても怪訝な顔をされないサンドウィッチ
屋。看板を何処かで見つけると、嬉しくなると言っても御幣がない
程だ。

2人はそれぞれ注文し、会計を済ませると、窓際の席に座った。
窓際はカウンターで他に座っている人間はいなかった。そもそも店
はそれ程混んでおらず、テーブル席に学生らしい男女4人と女性の
2人組がいるだけだった。

「なあ、あれ、どうなった？」ホットコーヒーを啜りながら、愁は
少し声を落として言った。他の客に聞かれない様にとの配慮からだ
ったが、店内には音楽が掛かり、2人の座っている場所は彼等とは
かなりの距離があった。

サンドウィッチにかぶりつき、口の中をいっぱいにしたまま、マッ
ドがもごもごと言った。「あれ？昨日の？」

「竹内のやつ」窓の外に視線を向け、愁は小さく呟く。

「DNAが取れそうなやつは何個あったよ」マッドは昨日の夜、
竹内学の部屋の鑑識を行っていた。マッドが呼び出されて部屋に付
いた時には、愁や田中の姿はなかった。2人は人伝にお互いが同じ
現場に絡んでいるのを聞いていた。「ブラシに毛根付きの毛髪、ハ
ブラシとか。凶器類は出て来てないね。包丁はあったけどルミノール

ル反応はなし。他にナイフ類は見付かっていない。白いタオルとか包帯とかはあったけど量販されている物だろうし、口の中から出てきたやつと合ったとしても証拠として使えるかは微妙なところだよ。後、事件と関連付けれそうな物は見付かってない」

「本名は？」

マツドは眉を寄せた。「教えてもらってないの？」

愁は肩をすくめた。

「松本淳、25歳。本籍は埼玉だって」

「住所は？」

「実家にビンゴ。免許書の住所変更していなかったみたいだよ」

愁がゆっくりとマツドを見た。

「行って来たよ」最後のサンドウィッチを口の中に放り込んで、マツドはにっこりと笑った。「怪しい物がわんさと出てきた。ビデオに雑誌にパソコンからも大量に」

マツドが言わんとしていることはこの場にはふさわしくない事。暴力的なポルノが出て来たのだろう。無論、松本の場合は同姓のものだ、と愁は思った。世の中にはそんな物が五万と存在する。マツドも愁もこの手のビデオを仕事で何度も目にしている。偽者と分かっていても、気分が悪くなる代物。この手のビデオや雑誌を持っているからと言って、必ず犯罪者になる訳ではない。この手のビデオや雑誌を持っていないからと言って、必ずしも犯罪者にならないとは限らない。そのポーターラインは曖昧かもしれない。

「親はひどかったよ」アイスコーヒーをぐくりと飲んで、マツドは視線を窓の外へと投げた。「母親はヒステリックに泣き叫んでいて、父親は無関心だった」

テーブルに頬杖を付いて、愁も窓の外へと視線を移した。遠くで歌っていた、あの2人の姿が集まってきた人で見えなくなっていた。「そんなもんさ」

「うん」ストローでグルグルとコーヒーを混ぜ、マツドは小さく頷く。「今朝一番でモニタージュと氏名、年齢、公開したんだよ。テ

レビ見てないの？」

「テレビはない。知ってるだろう？」冷子が用意してくれたアパー
トは隣同士だった。

「ネットは？新聞だって朝刊は時間的にアウトだったけど夕刊には
載ったみたいだよ」

「家に帰ってないんだ」

「ふーん」ちらつと愁を見てから、マツドは続けた。「公開した反
応はそこそこあったみたいだよ。一番有力なのは関西方面に逃げた
っていう情報みたい。今、その情報を元に山下さんと泉ちゃんがあ
つちに行ってるよ」

愁は眉をひそめた。「泉ちゃん？」

「そ、池上泉ちゃん」目に掛かった褐色の髪をふうと吹き上げる。

「ふーん」今度は愁がちらつとマツドに視線を送る。「で、その池
上さんはどこに行ってるって？」

「大阪。一番情報が集まった。他にも京都の駅で見たとか、神戸と
か、色々な場所で目撃情報があったんだけど、新大阪である写真の
男とぶつかったって言う人がいて、それが一番有力だったみたいだ
よ」

「大阪・・・」またか、と愁は思う。

「また、大阪」マツドはずつと音を立て、最後のコーヒーを飲み干
した。「拘っているのかな？それともただの偶然？」

温くなったコーヒーを飲み干し、愁は淡々とした口調で言った。

「偶然だとしたら無意識だろうな」

「そう言えば実家の本棚にはライターがいっぱいあったよ。愛読し
ていたみたいだね。まあ、中でも大阪の事件が載った号は机の引き
出しの中にあつたり、パソコンに取り込んでいたりと寵愛していた
みたいね」

「なあ、大阪の事件の犯人を発表した後、ライターは発売されてい
ないのか？」

「されてないよ。ライターは週刊誌だし、月曜日発売だからね」

愁はマッドに視線を向けた。日本に来て3カ月、マッドの日本の知識はどこまで増えたのだろうか。彼の知識に幾度なく助けられ、この先何度助けられるのだろうか。科学から一般的な事まで、その内容は実に様々だ。「明日か」

「大阪の事件の犯人が発表されたのは木曜日だね。三日前・・・」
マッドは愁の顔を見る。「気が付いてた？」

「何処までも絡んでくるな、大阪と」

「警察が動き回っている事に気が付いて逃げたのかと思ったよ」

「否、それは正しい。実際、田中さん達は良い線まで迫っていた様だし、その話が松本の耳に入っても可笑しくはない。人の噂が回るのは早いからな」

淡々と話す愁の横顔をマッドは見つめた。一瞬、大阪の事件が解決した事で松本が動き出したのかと考えた。きっかけにしていた事件が解決されてしまい、怒りを抱いたのかと。だが、大阪の事件の犯人は既に亡くなっていて、怒りをぶつけようにも会いに行こうにも、行く場所がない。それに警察が発表した情報には情愛が絡む怨恨であり、自分との動機の違いは明確だと解ったはずだ。だが、歪んだ思考の持ち主にそれが当てはまるとは思えない。「あっちに行って、犯人の家族とかに接触したりしないよね？」

愁は僅かに肩をすくめた。「解らん。奴にとつて襲う対象ではないと思うが、墓や家を見に行く事はするかもしれない」

マッドは眉根を寄せた。

携帯のバイブ音がして、愁はコートのポケットから電話を引っ張り出した。その横でマッドもダウンジャケットから携帯を取り出す。

「誰？」とマッドが言った。「僕は信さん」

「田中さん」

「お仕事だねえ」苦笑を浮かべ、マッドは席を立つ。

「俺はまだ非番だよ」

「甘いよ、シユウ。冷子さんはそんなに甘くない」

寂しく、薄暗い道。一枚のレシートがひらひらと風に吹かれている。ジューズの空き缶が道の隅で、落ち葉に埋もれていた。

溜め息を付けば、それは白い煙に変わる。道行く人、誰もが身を縮ませて歩いていった。夜が深まる毎に寒さが募る。

「今日は冷えるなあ」一升瓶を胸に大事そうに抱え、シゲがブルツと身体を震わせた。

「異常気象つてやつかね？去年はこんなに寒くなかったよなあ」と源が言う。

「温暖化つていうけどよお」つまみが入った袋を抱え、棟梁が呟いた。「俺は毎年寒みいよ」

3人が角を曲がると、知った顔が見えた。

「そろそろ来る頃だと思ったのよ」

「美子ママ〜」と3人は同時に言った。

スナツクの裏口のドアを開け放ち、後ろから後光の様に淡い赤色の光を浴びた美子ママは綺麗だった。少なくとも3人にとっては。

長年の飲酒でハスキーになった声、片手に煙草、片手には大好きなビール、50代前半で独身。子供は居るが、随分前に出て行ってしまった。それ以来、子供は家にも店にも寄り付かず、たまに誕生日やクリスマスにプレゼントを送ってくる。美子ママは煙草を口に啜えると、店の中に手を突っ込み、レジャーシートを引っ張り出した。「今日は冷えるからね」とシゲに差し出す。

「有難いね」

*

美子ママはニツと笑った。その目元に深い皺が刻まれたが、その顔はたまらなくチャーミングだった。「今日は先客がいたよ」

「先客？」源がきよとんとした表情を見せる。

彼女は煙草を挟んだ指を指した。「ほら、花束」

3人は美子ママのネイルアートが施された爪先が指差す方向を見た。

「どんな奴？」と棟梁が言ったが、その答えは3人共分っている。が、分らないのは、花束が二つある事。

「1人はスーツ姿のサラリーマン。もう1人は外国人だったわ。良い男だったわよ。背が高くてさ、顔も優しげで。日本人の方はいかにサラリーマンだったけど、悪くも良くもないわねえ」

「シユウだ」シゲは花束に視線を落とした。

「外人は誰だろうな？」

「2人はお友達だったみたいよ。仲良く話してたから」グラスの中の酒を呷って、美子ママは言った。

「ずっと見てたのかあ？」棟梁がからかう様に言った。

「やあねえ」彼女はにこやかな笑みを浮かべる。「だって良い男なんですもの。それに気になるじゃない？」

「まあ、確かに」

美子ママはふうと煙を吐き出し、二つの花束に視線を落とした。

その目は哀しげだった。「恋人かなんかだったの？そのシユウって人。少しは彼女の事、愛していたのかしら？」

シゲは花束からゆっくりと空を見上げた。「さあ、どうだろうな

・・・」

月曜日

マツドの言う通り、冷子は甘くはなかった。昨夜、愁は電話で田中に呼び出され、マツドと共に現場へ向かった。当初、プロファイラーとして呼ばれたのかと思っていたら、捜査員としてだった。

呼び出された事件は、松本淳が犯した事件とは全くの別物。松本の方は池上と山下が先に大阪へ向かい、それを追う様に桜井と吉沢他の捜査員達が夕方東京を発った。田中は自分が行けないのを不満に思っており、それが態度や表情に出ていた。彼はその事を隠す努力もしていなかった。

呼び出された事件は、現場に到着してから5時間後に解決した。犯人が近くの交番に出頭したのだ。

当初、強盗殺人事件と思われた事件は、蓋を開けてみれば借金を催促された被害者の親戚が殺害に及んだというものだった。被害者は43歳の会社経営者、加害者は50歳の工場経営者。被害者はナイフで刺され、犯人は自首時、その血の付着したナイフを持っていた。そのナイフは被害者宅から無くなっていた果物ナイフで、計画性はなかったものと推測された。

時間が時間だっただけに、犯人を搬送し、指紋の確認を取って朝を迎えた。犯人、東の所持していたナイフは被害者前川の妻により、自宅のナイフであると確認された。付いていた指紋も東のものと同じ。ナイフの血は前川の血液型と一致。DNAは調べ中。前川の妻は東が自首をしてきたと聞いても驚かなかった。両者は東の借金の事で散々揉めていた様だ。

「解決ですね」椅子にドサツと身体を投げ出して、田中は疲れ切った表情を見せた。スーツのポケットから煙草を取り出し、1本咥え、火を点ける。

「ええ」愁は田中が部屋に入ってきて来るまで見ていたファイルを閉じ、灰の掛からない場所へと置いた。

「何です？」

「大阪の事件のファイルですよ」

田中はきよとんとした表情を見せた。彼の魅力的な大きな目の下には、薄いクマが出来ていた。「大阪の？どうしてです？」

「この事件の何が、どうして、松本の心を惹きつけて離さないのかと思ひまして」

背もたれに寄り掛かり、煙草を持つ手以外の力を抜き、田中は頭だけを働かせる。「うーん、実家に行つて奴の部屋を見た時、俺が感じたのは崇拜ですかね。パソコンの中に残っていたデータとか記事とか。すごく大事に扱っているって感じがして」

「崇拜、ですか」

「ええ。まるで神聖な物の様に」

「なるほど」愁は小さく頷いた。

うーん、と唸つて、田中は煙を吐き出した。「はあ」溜め息も吐き出す。彼は苦笑すると言った。「すいません、いまいち頭が働かなくなつて」

「眠れていますか？」田中の目元にあるクマが十分な休養を取れて居ない事を物語っていたが、愁は一応尋ねてみる。

「ええ、そこそこは。でもベットではないのでなかなか疲れが取れないんですよ。ここにもソファーが何か置いてもらつた方が良いでしょう」肩を揉みながら、田中が溜め息混じりに言った。その疲労した顔には説得力があつた。

愁はデスクの下を指差した。「寝袋を持ってきました」

「はあ？」

「後、ロッカーに入るだけの着替えを」愁はにっこりと微笑んだ。

「出来れば使用したくはないですけどね」家に帰れない事態はイコール、捜査が難航している事を示す。それに犯罪がこの場合は人が死んだという事実 行われている事も、犯人が捕まって居ない事

も。

「本当ですね」

だが、今日早速使う事になりそうだった。朝の5時。東の取調べが開始されるのは、昼食後からになっていた。家に帰って眠るより、ここで眠った方がはるかに効率が良い。大阪に行っている同僚の事もあり、田中も帰宅する意志はなさそうだった。

「ま、でも松本淳が捕まれば少しは落ち着くと思います」短くなった煙草を揉み消し、田中は大きく身体を伸ばした。

「ええ」

「じゃ、俺、あつちで仮眠取ってきます。何かあれば起こして下さい」

「はい」

田中はふらつく足取りで、部屋を出て行った。

愁は大阪のファイルデスクの上に広げ、パソコンを立ち上げた。パソコンが唸る様な音を上げる以外、部屋も警視庁のビルも静寂に包まれていた。

見損なつたままのニュース。松本淳の写真、年齢、身体的特徴がトップニュースだった。松本の写真の横には、彼が殺害した2人の被害者の写真が載っていた。

2人目の被害者のジーンズの内側に残っていた精液のDNAが、松本のアパートにあったDNAと一致。目撃者の数名の意見も松本が被害者のアパートの周辺をうろついていた男である、と一致していた。

大阪の事件の犯人の家族や墓には、私服警官が付き、パトロールを強化する事になっていた。何かがある、とは誰一人思っていないが、念の為の措置だった。後は引つ切り無しに掛かってくる目撃情報の真偽を見抜き、正しい方向へと行けば松本は捕まるだろうと思われた。世間の目がこの事件に向いている今がチャンスだ。これを逃せば情報の数が減る。

崇拜、神聖な物、取り憑かれた男。行くなら何処へ行く？犯人の

親か？妻？墓？事件現場？自分なら・・・？愁はそこまで考えて、思わず「あっ」と声を上げた。昨日の夜、自分がマッドに言った事と、美香の命日を何処で過ごしたのかを思い出したのだ。息を引き取った場所。

否、本当に行くだろうか？自分の考えを一から否定してみる。松本淳は決して愚かではない。犯行は計画的であり、捕まらないと考え、行動していたはず。現場から愁が見たのはとてつもない自信だった。警察を欺けると言う自信。精液を残さない様に、ジーンズの内側に残っていたのはミスだろうし、指紋もゼロ、防犯カメラの位置を確認し、職場では偽名を使う。

だが、その完璧な計画がガラガラと音を立て崩れ始めた。大阪の事件が解決した、警察の聞きこみが自分の側まで迫って来ている、松本の耳に入ったのはどちらが先だろうか。逃げなければ捕まる。なら、何処へ逃げる？東京は駄目だ。遠くへ、人が多く、紛れ込みやすい場所へ。大阪へ。警察は大阪の事件と東京の事件の繋がりはないと発表している。犯人は別にいる。大阪の犯人は自殺、東京は捜査中。大阪と東京の事件の二つの事件は別物。大阪の警察の会見はそこを強調していた様に思える。ならば、安易な考えではないかもしれない。警察は自分が大阪へ逃げた、とは思わないかもしれない。松本自身は自分と大阪の繋がりを、警察が掴んでいるとは思っていないのかもしれない。

そこまでは良い、と愁は思った。問題はその後だ。大阪に着いて、自分が手配された事を知る。名前、年齢、顔写真、身長、体重。新聞、テレビ、ラジオ、自分の名前と写真が繰り返し報道されている。一抹の不安が頭を過ぎる。警察の捜査が迫ってきている。だが、テレビでは松本淳の顔写真が相変わらず流れているが、何処へ逃げたのかは流れていない。

だが、今動くだろうか？テレビに顔写真が流れている、今？携帯電話がブルブルと震え、愁は息を飲んだ。携帯はスチール机にぶつかり、ガタガタと音を立てていた。

早鐘の様に鳴っている心臓を無視して、電話を取る。マッド・カーペンター。

「もしもし」

「グッモーニング。起きてた？」恐ろしく明るい声。

「ああ」デスクの上の煙草に手を伸ばした。

「やっと分ったよ。松本淳が何でライターに拘るのか」

「何故？」

「彼の敬愛する伯父様が記者だったんだって」

愁は返事の代わりに、煙草に火を点けた。

「伯父様は2年前に別の雑誌の担当になったんだけど、松本はそのままライターの虜。あんな良い加減な記事ばかりなのに大スキ、な訳。昨日の夜、松本の父親が信さんに教えてくれたんだってさ」マッドは怒った様な口調で言う。

「で？」深々と煙を吸い込むと、脳の奥がクラリと揺れた気がした。

「手に入れたのか？」

「入れましたよ、最新号」

「何て書いてある？」

「全て、だよ。大阪の事件の犯人、小林の全て。それこそ靴のサイズから毛髪の断面まで載せそうな感じだよ」

「自殺した場所は？」

「写真付きで載ってるよ」マッドはごくりと何かを飲んだ。「何？松本が墓参り？この写真からなら場所特定出来るかもよ。地元の人なら見ただけで解るだろうしね」

「他のマスコミが自殺した場所を報道したか知ってるか？」

マッドがカチャカチャとキーボードを叩く音が、愁の耳に届く。

「テレビで見た記憶はないなあ。全部ではないけどさ。この事件はさ、小林が自殺した事より、2人の関係とか彼が妻帯者である事の方が人の関心を惹くんだよね。だから、大抵の雑誌やワイドショーなんかはそこを掘り下げて行く訳。この2人はさ、見た目もそこそこ良いから、どうしても人の興味を惹いちゃうんだよね。うん、な

い

「ありがとう、マッド」

「行くと思うの?」

「考えが正しければ」

「それは勘違っていうんだよ、シユウ。じゃ、また後で」

電話を切って、携帯のアドレス帳を開く。グループ分け等していない。五十音順の一番上、出てきた人物にかけた。好都合、と愁は思った。コールを三回、聞いた。

「もしもし?」明らかに不機嫌で、だが、同時に戸惑っている声だ。

「おはようございます、池上さん」

「何なの?今、ああ、もう。まだ5時じゃない」

「ライターが発売されました」

「へえ?それで?」やけに低い声で池上が答える。

彼女の眉がぐつと上がった顔を思い出して、愁はほくそ笑む。「ライターは松本淳の伯父さんが記者をしていたそうです。松本はその伯父さんを敬愛していたそうで、それ以来雑誌を集めている様です」

「で?」

「小林の自殺した場所がライターの最新号に載っています」

「で?」さつきよりも更に不機嫌に、池上は言い放った。

「墓参りに行きます」

「松本が?」池上は呟く様に言った。「自殺した場所に?墓ではなく?」

「ええ」

池上は小さく溜め息を付いた。「プロフィールってそんな事も分るの?」

「いいえ、勘です」

彼女はくすつと笑う。「ふーん、あんたも勘なんて頼る訳?面白いじゃない」

「ですが、賭けでもありません」絶対ではない、確証はない、と愁は

思っていた。

「そうね」池上はそう小さな声で答えて、少しの間だけ口を噤んだ。そして何かを決意したかの様に、凜とした声で言った。「こっちの捜査も行き詰ってるのよ。良いじゃない、その賭け、乗る。勘が外れたら高級料理でも奢って貰うからね」

「ええ、構いませんよ」穏やかな口調で愁は言った。

「私と山下さんで行くわ」

「くれぐれも気を付けて下さい」

その愁の声に返事はなく、電話は切れた。

*

愁はつかの間、夢を見た。ひどい夢だ。

ネオンサインがキラキラと光る店の横で、横たわっていた。足を投げ出し、身体を横にして、汚れたアスファルトを見ている事しか出来ない。指はどんなに動かそうとしてもぴくりとも動かさず、唯一動かせるのは目のみ。足元で両親が泣いていた。マッドが怒っている。シゲと源が空を見上げている。ロバートと神父が胸で十字を切り、神に祈りを捧げている。

美香が笑っていた。彼女は凍り付く様な声で言う。「死ぬ気持ちはどう？」

目を開けると、汚れたデスクの裏側が見えた。幾分ホツとした。だが、今の夢が自分に問う答えを、愁は探したい衝動に駆られる。だが、デスクがコンコンと鳴っていた。

身体を起こし、デスクの下から這い出ると、体中が痛かった。

「おはよう」

頭上から降ってきた声に愁は顔を上げる。「おはよう」

「コーヒー、飲む？」愁の答えを待たずに、マッドは立ち上がった。マグカップにコーヒーを注ぎながら、やけに明るい声で言う。「何の夢見てたの？“うるせえ、黙れ”って呟いてたよ」

寝袋から、羽化する蝶の様にノロノロと出る途中で、愁は動きを止めた。「そうか・・・」

「何だっというのさ？」二つのマグカップをデスクの上に置き、マッドは眉をひそめる。

足に引つかかった寝袋を振り落とし、つま先でデスクの奥に飛ばす。側にある革靴に足を突っ込みながら、ちらっとマッドを見た。

マッドは質問した事に答えがないのを、特に気にしてはいなかった。デスクの上に置いてある大きなコンビニ袋の中に手をつ込み、次々に中身を取り出している。「ねえ、何が良い？コーヒーにおにぎり、僕随分慣れたよ。梅でしょ、こんぶ、しそわかめ、高菜、野菜サラダにお新香」

椅子に腰を下ろし、煙草に手を伸ばす。「マッド、寝たのか？」

「昨日、シユウと会う前にね。今日はもう帰るよ」おにぎりの包みをペリペリと開けて、マッドはほがらかに笑った。「今日のお仕事は終わり」

壁に掛かっている、少し黄ばんだ時計を見ると、10時を過ぎていた。愁が煙草に火を点けると、マッドが眉を吊り上げた。もっとひどい匂いの中でも眉一つ動かさない男のくせに、と愁は思う。

おにぎりにかぶりつき、マッドは至福の笑みを浮かべる。「こしひかりのおにぎりってどうしてこんなに美味しい訳？でもさあ、どこのお店のを食べても美佐子さんの作ったおにぎりが一番美味しいと感じるのは何でだと思う？」

「知らない」コーヒーをぐくりと飲んで、愁は呆れた顔をした。

マッドは愁達家族と時間を共に過ごす様になってから、日本に興

味を持ち始めた。最初は愁の父徹と母美佐子が作る料理に夢中になり、次は日本人の女の子と付き合い、日本語を覚えた。まだベジタリアンではなかった頃は刺身やかつおだしの味噌汁が好物で、マツドはよく母親を困らせていた。

そのうちマツドは日本の歴史や風習を勉強し出し、何時か日本に住むのだと言い始めた。マツドが17歳の頃の話だ。それから15年、夢は現実となった。後は日本人の女性と結婚できれば完璧、とマツドは思っていた。

愁が煙草を吸い終え、やっとおにぎりに手を伸ばす頃、マツドは3個のおにぎりとお新香を食べ終えていた。コーヒーをまるでお茶の様に飲んでいる。

ドアの向こうは騒がしかった。捜査員達が歩き、時に走り、話、時に怒鳴る。街の中にいる時の様に、それは2人の耳には雑音と同じ様にしか聞こえない。

ガチャツとドアノブが回る音がして、2人は同時にドアから入ってくる人物へと視線を投げた。

前髪が全て左に寄り、額に細かい皺を付けた田中が飛び込んできた。「浜野さん！」目は極度の興奮のせいでキラキラしていた。

「おはようございます、田中さん」

「捕まりましたよ」

愁とマツドは思わず視線を絡めた。

「松本淳が？」マツドはひどく落ち着いた声で言った。

「勿論です」

「何処で、ですか？」愁は淡々とした口調で言った。

「小林の自殺したビルの屋上です。池上と山下さんと大阪の警官数名が張りこんでいて、今朝来たそうですよ」

賭けには勝った様だ、と愁は思った。

「ただ・・・」興奮が一気に冷めたかの様に、田中は眉を寄せる。

「山下さんと警官1人が負傷しました」

「えっ？」愁とマツドが同時に声を出した。

「命に別状はありません。山下さんは左腕を骨折、警官はナイフで腕を切られたそうです。松本はナイフを所持していて、振りまして暴れたそうです」

2人はホツと胸を撫で下ろした。こんな時、銃でないのが有難いと心底思う。遠くからでも近くからでも、銃なら引き金を引くだけ。プロの殺し屋でもない限り、ナイフであれば警察が生きて犯人を捕らえられる。簡単に、とまではいかなくとも、人質さえ取られなければこちらに分がある。相手が幾ら強くても所詮は素人。一対一になる事はまず有得ないし、場数を踏んでいるのは警察の方が断然多いのだ。

「松本淳も軽い怪我をしているらしく、治療してから、夕方くらいには大阪を発つそうですよ」

「そうですか」愁は呟くように答えた。松本淳、やはりひどい自信家だ。手配されているのにも係わらず 変装をしていたとしても、外へ出て行くとは。プロファイリングの為に会って話す時がいずれくるだろう。その時、どんな話が聞けるのか楽しみだ、と愁は思う。「もうすぐテレビの速報が流れると思います。じゃ、俺、後2、3件電話しなきゃいけないので」田中にはっこりと笑い、入ってきた時と同じ様に、飛び出して行った。ボタンツと大きな音を立ててドアが閉まった。

コーヒールをずっと飲んで、マッドがにっこりと笑う。「良かったね、シュウ」

「ああ、そうだな」おにぎりを口に放り込む。

マッドは足を組み、コンビニの袋の中からライターを取り出し、デスクの上に置いた。「一応買って来たんだけど、どうする？」

愁は肩をすくめた。「なあ、何で奴は伯父を敬愛してるんだ？」

「彼の父親が言うにはさ、母親が何時も『兄さんはすごいよ、だからあんたも兄さんみたいになりなさい』って言ってたんだって」「ブラザーコンプレックスか？」

「父親が言うにはね」マッドはごくりと音を立て、コーヒールを喉に

流し込んだ。「彼女は本当は自分の兄と結婚したかったんじゃないのかって言うんだ。彼女は夫に対しても、息子に対しても、常に『兄さんならどうする』って言うってたんだって。ちよつとも兄を悪く言おうものなら烈火のごとく怒り出して大変だったそうだよ。その上、なァーんと兄嫁も見事に追い出したんだってさ」

「何かあるのか、その兄妹？」

「さあ？」マッドはほんの少し肩をすくめた。「父親は『絶対ある』って言い切ってたけどね。まあ、異常愛ではあるよね。夫だけならともかくとしても、息子よりも兄上様が好きなんでさ。きつとツタンカーメンの時代に生まれたかったんじゃない？彼女にはウエスタマーケ効果はなかった訳だよ。フロイトの言う通りだね」

「へえー、話してみたい、2人だな」愁は淡々とした口調で言った。「両思いな訳？」

マッドは眉根をぐつと寄せた。「両思いでしょ？兄さんはお嫁さんとバイバイしちゃったんだよ？妹が自分の奥さんにグチグチネチネチ嫌味や皮肉を言うのを黙って見ていたっていうんだから相当じゃない？」

「それは悪魔で父親の意見だろう？まあ、どのみちその父親だって歪んでいるのに変わりはないだろうが」そんな妻の元で夫として何十年も過ごし、己の子を託していたのだから。それは一体何の為に？それは一体誰の為に？

「まあ、そうだけど」マッドはライターをちらりと見た。

「でも、彼はその事に気がついていない。だろ？」

「だね。自分は我慢していたそうだよ。妻と義兄は異常だと解ってはいたけど」

「子供の為に」2人が同時に言った。

小雨がパラパラと降り出していた。昏間は幾らか暖かかったのに、今は雨のせいでひどく寒い。折り畳み傘を広げる人や小走りに地下鉄に入っていく人、歩道は家時を急ぐ人達が行き交っている。

小雨を避ける為に、愁は通りにある大きな本屋へと入った。別段買うものがあつた訳ではなかったが、フラフラと中を歩く。

気が付けば、何時もの場所に立っていた。アメリカで買った本があるのを見つけて、思わず手に取った。パラパラと捲ると、自分が感じていたものとは若干違う訳がされていた。それから2、3冊さわりだけ読み、自分が感じたのとは違う訳の本を2冊買った。

レジで会計を済ませると、本屋の中に小さな雑貨屋があるのに気が付いた。この本屋に来たのは3回目だったが、この時始めて気が付いたのは店内がクリスマス一色に染められていたからだろう。

普段なら見向きもしないが、クリスマスだから仕方ない、と愁は思う。この手の店に入るのは、気恥ずかしい。

入り口の所に壁一面、クリスマスカードが置いてあつた。シンプルなものから、オルゴール付き、キャラクターの絵のもの、形も色も実に様々だ。

愁はシンプルなものを5通、他はそれぞれの送る相手に合いそうなものを選んでいった。大学時代の友人へ、記者の友人へ、ジェイへ、マッドの両親へ、マッドへ、両親へ、そして君へ。

E
P
I
S
O
D
E
1
.
.
.
E
N
D
.
.
.

Episode 1

- 9 - (後書き)

ウェスターマーク効果・・・幼少期から一緒に暮らしている相手には性的興味がない

ロイトが批判。

くなるという現象。だが、同時期にフ

水曜日

窓枠に頬杖を付いて、愁はぼんやりと空を見上げた。空は12月に入ったというのに、抜ける程青い。今日はコートを脱いでもいっても寒さを感じない程暖かった。頬に当たる太陽の光が心地よく、自分が今居る場所を忘れそうになる。全て忘れて帰りたくなる。

空と海との境界線が判らなくなるほど、青く美しい海。打ち寄せる波の音。潮の香り。海水浴客が落として行くゴミが散乱する浜辺。思い思いの水着を着て、日光浴をしている若い女性達。その女性に声をかける男達。通りに佇む、派手な服を着た女性。何処からか聞こえる怒鳴り声。悲しみと喜びを背負った子供の笑い声。十字の付いた、古い建物。太陽の光を浴びて、この世のものとは思えない程の美しさを放つステンドグラス。

愁はワイシャツの上から、無意識に首にかけたロザリオに触れた。「早いな」

随分と聞きなれてきた声に、愁は振り返り、微笑んだ。「おはようございます」

「おはよう。珍しいな、こっちにいるなんて」吉沢はそう言うと、スーツのポケットから煙草を取り出した。彼の後ろで、ドアがゆっくりと閉まって行く。彼はふうと軽く溜め息を付いて、煙草を啜えた。

「あの部屋の窓は小さいので」愁はにつこりと微笑んで見せる。「今日は良い天気ですから」

煙草に火を点け、吉沢は窓の外へ視線を向けた。「そうだな。こんな天気の日ならここにいるのは本意じゃないな」

吉沢に釣られたかの様に、愁も煙草に火を点けた。ほんの少し風が吹いて、愁の前髪と白い煙を揺らした。

「だが、残念な事に仕事は毎日ある訳だ」吉沢は小さな紙をスーツのポケットから取り出し、愁に差し出した。「三係が多忙で回ってきた」

差し出された紙を受け取り、愁はそれにちらっとだけ視線を落とし、ポケットの中へ押し込んだ。「了解」

「それで、だ」大きな灰皿に灰を落とし、吉沢は愁をじつと見つめた。「何と再び人事異動だ」

「総監命令ですか？」愁は淡々とした口調で言った。冷子が関わっているとしたら 関わっていない理由が見付からない、それは間違いなく自分が絡む。

吉沢はにっこりと微笑んだ。「そうだな。それもあるだろう。でも、今回の事を一番望んでいるのは山下さんだ」

「山下さん？」

彼は松本淳を逮捕する時に負傷し、全治一ヶ月と診断された。今はまだ自宅療養中だった。来週辺りからデスクワークに復帰する予定だと言われている。完治すれば職場復帰、愁はそう聞いていた。

「ああ、今回は彼が言い出しっぺだな」煙を吐き出し、吉沢は煙草の先に視線を落とした。だが、直ぐに愁に視線を戻す。「池上を頼む、山下さんからの伝言だ」

愁は眉をひそめた。「どういう意味です？」

吉沢は深い溜め息を付いた。「正直、俺には今回の事がよく解らない。人事の事に関してだけ言えば、浜野と池上が新しいコンビを組む事になった」

それは愁にも想像が容易に付いた。今の話の流れからすれば、決して読めない話ではない。

「上と山下さんの間でどういう話がされたのか、俺は知らされていないんだ。だが、山下さんは以前からデスクワークの方に異動したがつているという話があつてな」

「デスクワークに？」

「ああ、随分前に腰を強打してから、年と共にひどくなってきたら

しくつて。これは悪魔で俺の推測だが、池上は多少暴走するところがあつて、山下さんはそれを止めてくれる自分の後釜が現れたらそうしようと思つていたんじゃないのかと思つ「吉沢が太い指で灰を振り落とすと、灰皿の中で火の粉がジュツと音を立て、煙を上げた。「どつ思つ?」

何をです? 心中で問う。「池上さんは嫌がるでしょうね」

吉沢はくくつと笑つた。「田中からは文句が出そうだな。喜ぶのは桜井だけ、かな」

田中は文句を言い、桜井は喜んだ。

池上は小さく頷いただけだつた。その様子から、彼女が山下から事前に話しを聞いていた事が、愁にも吉沢にも解つた。池上のその目は、ほんの少し哀しげだつた。

「解散」

愁はあらかじめ部屋から持ってきていたコートに袖を通した。スーツのポケットから喫煙スペースで吉沢から受け取つた紙を出し、デスク越しに池上の前へ滑らせる。「どちらが運転しますか?」

「私よ」紙を掴んで、池上は立ち上がった。デスクの上に倒れているハンドバックを引つつかみ、歩き出す。

愁はニツと笑い、彼女の後を追う。

出入り口近くにあるコートハンガーから自分の黒いコートを掴み、池上は何も言わず部屋を出て行く。

「大丈夫かな・・・」

愁の耳に桜井の呟く声が聞こえた。

「運転はずつと私」池上はヒールの音を響かせながら、至極冷静な口調で言つた。

「何故です?」

「だってあんた右側走りそうなんだもの」

思わずくくつと愁は笑う。「私を何だと思つているんです?」

「分かんない。とにかく、私。それから車は禁煙」

「了解」

階段を軽やかに降りながら、池上は紙に視線を落とす。吉沢の難解な文字を難無く読んだが、池上は眉をひそめた。「何なの、これ？」

「三係が多忙で回ってきたそうですよ」

肩越しにちらりと振り返り、池上はぐっと眉を上げた。「明細は？聞いてない訳？」

「そう言えば聞いていませんでしたね。まあ、行けば分かる事ですから」愁は穏やかな口調で言う。

紙には住所と強盗殺人？被害者一名の文字しかなかった。池上は眉を寄せ、腹立ち紛れにヒールのかかとに体重をかけて着地した。階段にカツンツと音が響く。

愁は彼女に気が付かれない様に、小さく笑った。

15分後、2人は紙に書かれた住所に着いた。道路にはパトカーが停まり、通行を規制する為に制服警官2人が立っていたが、野次馬は少なかった。最も平日の朝早くでは、仕事や学校で例え惹き付けられても留まる事は難しいだろう。だが、マスコミらしき人間もまだ見えなかった。

池上は白いセダンの後ろに車を停めた。「林さんの車だ」サイドブレーキを引きながら、呟く。彼女は愁の答えも相槌も待たず、キーを抜くと、車を降りた。

林さんとはどなたでしょう？と独りごち、愁も車を降りた。ドアを閉めると、ガチャンツとロックが掛かった。

住宅街、まだ比較的新しいと言える、レンガ作りのアパート。アパートは101、102、201、202の4つしかなく、真ん中に階段がある。同じ作りのアパートが敷地の中に、もう一棟建っていた。

アパートの階段の前にパトカーが1台停まっていた。パトカーの後部座席のドアは開け放たれていて、その横には若い制服警官が立っていた。彼は目の前の状況を、表情のない顔で見つめていた。そ

の変化を見逃さない様に。

パトカーの中には、20代前半くらいの茶髪の男性が座っていた。彼の腕の中には3歳くらいの男の子が無邪気に笑っている。パトカーの内部をキョロキョロと見ながら。男性は声を押し殺して泣いていた。

その2人を見た時、愁はその光景に違和感を覚えた。普通に考えれば2人は親子。だが……。

「あの2人似てない」小さな声で池上がそれを口にする。

「ええ」

似ていない親子等五万という、そんな事は2人にも分かっていた。だが、2人は余りにも違い、余りにも2人である事が不自然だった。抽象画の画家と具象画の画家が同じキャンパスに描いた絵のごとく。無論、今のこの時代、再婚家庭は珍しいものではなく、この2人はその可能性が高いと言える。

「何か、変……」愁を見て、池上が小さく顎で2人を指す。誰にも気が付かれない様に。

「ええ」愁も小さく頷いた。「私もそう思います」

だが、その何かが池上にも愁にも分からなかった。感じた違和感の意味が。

101号室。ドアの横に、キャラクターが描かれている三輪車が置いてあった。そのカゴの中には、小さなバケツとコップ。三輪車の下には、錆ついたビニール傘が放置されていた。

玄関前で池上と愁は手袋をはめた。ドアやポスト周り、インターホン等、指紋採取用の粉が付着していた。

池上がドアノブに手を伸ばすと、ドアがゆっくりと開いた。中からスーツ姿の若い男が顔を出し、ふうと息を付いた。彼の顔色は真っ青だった。それでも、2人を見ると、かろうじて笑顔に見える表情になった。「おはようございます、池上さん、浜野さん」

池上はクスクスと笑った。「まだ慣れないの？顔、真っ青よ」

「駄目です」男は弱々しく首を振る。彼はそう言いながらも、ドア

を大きく開け、2人に道を譲った。「吐くなら外で吐けて井上さんが・・・。少し外の空気を吸ってきます」

池上は中へと入り、小さな声で言った。「お大事に」

愁がドアを押さえると、男はフラフラと外へ出て行った。彼の背中を見送りながら、愁は名前を思い出そうと頭を捻った。彼が何時ぞや冷子に言われた『新入り』であり、『吐いていた若い男』であることは思い出せたのだが。

「彼は山田祥平、中にいるちよい悪オヤジ風なのが林正雄さん」池上が振り返り、刺々しい口調で言った。「2人共一係の人間よ」

愁は池上に視線を移し、穏やかな微笑を浮かべる。「そうですね」「せめて一係の人間くらい覚えたらどう？マッドが言ってたわよ。」

事件や犯罪者の名前、プロフィールなんかはばっちり覚えるけど、周りの人間の事は余り覚えないうって「彼女はそう言っただけ、心底呆れた表情を浮かべた。「どんな脳みそしてんの？」

愁は苦笑してみせる。「さあ・・・」

「まさか、とは思っけど私の名前、分かる？」

彼女のその表情から、その質問が嫌味ではなく本気だと言う事が愁にも分かった。彼は小さく頷く。「無論、知っています」

「そう？なら良いけど」池上はそう言っただけ、愁に背を向け、現場へと足を踏み入れた。

愁も池上の後を追って、部屋の中へと入った。彼の後ろで、ドアがゆっくりと閉まった。

2DKのアパート。外観と同じで中も作りが可愛らしい。若い女性が好みそうな雰囲気だった。至る所に飾り棚があり、レンガが所々壁にセンス良く埋め込まれていた。飾り棚には何も置かれておらず、玄関は女性物のブーツやヒールのある靴が散乱していた。子供用の靴と男物の靴は一足ずつ。バスルーム、トイレ、ベッドルーム、キッチンへと続くドアは全て開け放たれている。全ての部屋に繋がるのが玄関の様だ。

池上と愁はまずダイニングキッチンの中へと入って行った。物が

雑然と置かれている。家具類は少なく、冷蔵庫、ゴミ箱、小さな食器棚とレンジ台が置いてある。だが、荒らされた様な跡はない。

ダイニングキッチンともう一部屋を仕切る襖は取り外されていた。もう一部屋の方はリビングとして使用しているらしく、テレビとこたつ、パソコン台、カラーボックス、キャラクター入りの衣装ケースが置いてある。南側の窓の側にテレビがあり、その正面にソファ―が壁を背に置いてあり、被害者はそこで息絶えていた。

「おはよう」紺色のジャンプスーツを着た、赤い髪の若い女が満面の笑みを浮かべた。

「おはよう。林さんは？」

「ベットルームよ」

「そう」池上はそう言いながら、彼女の横を通り過ぎた。

「おはよう、愁」

「おはようございます、井上さん」

井上彩乃はにつこりと微笑んだ。27歳、独身。とても小柄だが、彼女は遠くにいてもその存在がすぐに分かる。その真っ赤な髪の毛もそうだが、全てが派手だからだ。両耳に計7個のピアス。仕事中は邪魔にならない様なものになっているが、それでもカラフルな7個のピアスは目立つ。ジャンプスーツの中のTシャツは虹色、短く切った爪も虹色。その上、飛ぶ様に歩くから、加藤とマッドが付けたあだ名は“レインボーラビット”。

井上は証拠袋に入った免許書を2人に差し出す。「被害者ね」

「ありがとう」池上が受け取り、読み上げる。「野口恵。えつと、23歳ね」

愁は遺体の側へしゃがみ込んだ。遺体はソファ―に座った状態のまま、頭だけがガツクリと後ろに倒れていた。金に近い茶色の長い髪の毛が、顔や肩、ソファ―に広がっている。両手は身体の脇に投げ出されていた。細く長い爪には、バラの花が立体的に描かれている。デニムのホットパンツ、チェック柄の入った黒いタイツ、襟ぐりの大きく開いた黒いラメ入りのセーター。キラキラと光る十字

のネックレス、揃いのピアス、左手にはシルバーの指輪が二つ。ア
イラインで黒く縁取られた目は半分開き、虚空を見つめている。テ
カテカと光るグロスを塗った口も半開きのままだ。デニムのホット
パンツとソファアには黄色い染みが出て来ていた。

首には絞殺痕が残っていた。その痕から、手ではなく、紐などを
使用した事が判る。細く、強い紐。ロープ等ではない。絞殺痕の他
には、爪で引つ搔かれた傷があった。上から下に、彼女が空気を求
めて付けた傷だ。

「化粧、これでも薄いんだって」

「誰がそんな事を？」

「外にいる、2番目の旦那さん」井上は外を親指で指す。「因みに、
大体気が付いているだろうけど、あの子供は彼女の連れ子ね。前の
旦那は彼女の実家の親と一緒に連れて来てくれるらしいよ。でも他
県に住んでいるから来るのは時間が掛かるだろうけど」井上はひら
ひらと手を振りながら、片手でカメラを構えた。

「そう」池上は免許の写真と遺体を比べた。確かに化粧は少し薄い
のかもしれない、と池上は思った。免許の方の写真はつけまつけを
していたし、唇が更にテカテカしていて、顔中もキラキラしていた。
「第一発見者は旦那さん？」

「そうよ」遺体を色々な角度からパシャパシャと撮りながら、井上
が答える。「ヤダ、なあーんにも聞かないで来た訳？」

「ええ、新しい相棒がそういう主義なの」池上は井上の邪魔になら
ない程度に、遺体に近づく。

ふふん、と井上は笑った。「そんなくらいで文句言ってる様じゃ先
行き不安ね。まあ、今の一係の面子の中じゃ2人はベストだと思う
けど」

そうかしら、と池上は喉まで出掛つた言葉を呑み込んだ。山下も
何度も同じ事を自分に言った。彼の腰の事は間近に見て来たから、
十分過ぎる程理解していた。もう、彼の身体は限界だった。だから
山下がデスクワークに異動したい、と打ち明けてきた時、ついにこ

の日が来たのだと思った。その事は淋しいが仕方がない。だが、山下は仕切りに浜野愁と組め、と勧めてきた。寄りにもよって何でアイツなのだ。何がベストなのだ。池上にはその理由が今ひとつ理解出来なかった。

「旦那は野口翔、25歳。印刷工場で働いていて、昨日は夜勤だったそうよ。朝の7時過ぎ、仕事から帰って来たら妻は遺体。子供はベツトルームで寝ていたんだって。物はざっと見たところ盗られていないそうだし、玄関も鍵が掛っていたそうよ」

「窓はどうでしょう？全て内側から鍵が掛っていましたか？」愁は立ち上がると、ぐるりと部屋を見回した。

「バスルームもトイレでさえも、ね。玄関にはピッキングの跡もないから、合鍵を持っていたか、彼女に開けてもらって合鍵を持っていちゃった、かね」井上はカメラを自分の鑑識キッドの上に置くと、遺体を凝視した。「または旦那の勘違いか嘘」

「死亡推定時間は？」

「昨日のPM12:00〜2:00。その時間にこのメイク？」

池上はその問いに対する答えを、頭の中で探す。「これから落とすつもりだったのかも」

「子供と一緒に風呂に入って？12時に？3歳じゃ1人で入るには危険過ぎるわ。昨日は旦那も仕事だったし。だとしたら考えられる理由は三つ。子供を何等かの事情でお風呂に入れていない。子供と一緒に入ったがもう一度化粧をし直した。風呂に入ったがそもそも落としていない。何にせよ、深夜にこのメイクは変よ」

「女が化粧をするのは他人と会う時」池上がぼそつと呟いた。

「誰の言葉？」井上はちらつと彼女を見た。

「母よ」池上は井上に免許書を差し出した。「このメイクが普段より薄いのであれば、突然の来客があったのかもしれないわ。時間がなくて何時ものメイクが出来なかった」

「ふーん、私ならすっぴんでも出ちゃうけどなあ」井上は免許書をキッドの中に入れた。

そりゃ、あなたならそうでしょうとも、と池上は心中で独りごちた。

部屋の中をじっくりと見て回りながら、愁は2人の会話を聞いていた。ノートパソコン、固定電話、携帯電話はまとめて高い場所に置いてあった。パソコン台の本来であればプリンターを置く場所にパソコン台の横にはキャラクター入りの衣装ケース、中には幼児の玩具が詰まっている。その隣には白いカラーボックス。ボックス内は三つで、その全てカゴが入っていた。

愁は一番上のカゴを引いた。中は雑然としていて、色々な物が入っている。通帳、ハンドクリーム、子供の小さな玩具、ヘアスプレー、ペン、メモ帳、ライター、ハーレクインの本が三冊。一番上のカゴを戻し、今度は2番目のカゴを引く。「彼女は働いていた様ですわね」

遺体から愁へと視線を移し、池上は軽く息を付いた。「何処で？」
「カラオケBOXと書いてあります。不特定多数の人が出入りする場所ですね」愁は人差し指と親指で、慎重に端を摘み、カゴの中から給与明細を引っ張り出した。

「まあ、とりあえず不特定多数より旦那からしたら？」井上はニツと笑う。

「そうね」

愁は肩をすくめた。『第一発見者を疑え』は確かに鉄則だ。それに配偶者も、だ。だが、この事件の場合まず疑う必要はないだろう、と愁は考えていた。何より彼の涙は不自然さを感じなかった。そして仕事をしていたとすれば直ぐに裏が取れる。こういう場合、嘘を付くのなら遊びに行っていた等の方が無難だ。勿論、仕事を抜け出し、殺害、また仕事に戻る事は、距離や業務内容によっては可能な事なのかもしれないが。

10分後、林と山田は被害者の夫と子供と、警視庁へと戻って行った。それから更に10分後、遺体が内田の所へ運ばれて行った。

「で、どう思う？」カメラを首からぶら下げて、井上は愁を見上げ

た。その目は爛々と輝いていて、好奇心に満ち溢れている。

「どう、とは？」

井上が愁の足を思いっきり踏みつけた。

「井上さん、痛いです・・・」

「で？」

「犯人は男です」

井上の眉がぐっと上がった。「あゝら、素敵。人口の半分が減ったわね」

「じゃあ、もう少し減らしましょう。犯人は日本人です」愁は穏やかな口調で言う。

池上がクスクスと笑い出した。

「さて、後は内田さんの解剖と井上さんの腕にかかっています」

「どーという意味よ？」彼女はきよとんとした表情を向ける。

愁はにっこりと微笑み、パソコン台を指差した。「携帯、パソコン、固定電話が子供の手の届かない場所に置いてあります。他のライター等の危険と思われる物は割と無造作に置いてあるところからみて、被害者の野口恵さんにとって余ほど大切だったのだと思われます。特に消されているアドレスやメールなどは必ず復元して下さいね。井上さんならお手の物でしょう？」

「オーケー、愁がそういうって事は消されているモノがあるって事よね」

愁は答えの代わりに曖昧に微笑んだだけだった。

冷たい風が吹いて、池上はコートの襟を寄せた。朝出掛ける間際に見た天気予報は、『9月並みの暖かさ』と若い男性の予報士が満面の笑みを浮かべて言っていた。朝は確かに良い天気だったのだが、たった4時間で9月から12月になった様な寒さだ。天気予報士を信用して、タイツではなくストッキングを、セーターではなく薄手のインナーにしたのが間違이었다。もう絶対にあのイケメン予報士は信用しない、池上はそう誓った。

「要りますか？」

ぶるつと身を振るわせて、池上は振り向いた。「何を？」

愁は使い捨てカイロを彼女に差し出した。

「ありがとう」

「ネットの予報では夕方から冷え込むって書いてあったんですけどね。もう十分寒いですね」

池上は破った袋をコートの中につ込み、カイロを軽く振った。

「やだ、私が見たのは一日良い天気だったのに」冷え切った指先にほんのり温かくなってきたカイロが心地よかった。「ねえ、この事件、本当はどう思っているの？」

何処の国の刑事もせっかちだ、と愁は思った。プロファイルをするにはもう少し情報が必要だ。例えば被害者はレイプされているのか、殴ったり蹴飛ばされたりしているのか、抵抗した跡があるのか、犯人は指紋を至る所に残しているのか、情報は多ければ多い程良い。「池上さんはどう感じましたか？」

「嫌な感じがした」池上はぼそつと呟いた。立ち止まり、ごく普通のアパートを見つめる。「前に何度か殺しを生業としている人間が関わったと思われる現場を見た事があるの。その時に似ている気がする。何て言うのか、無駄がなくて」

「そつという人間が関わっていると思いますか？」

池上は弱々しく首を振った。「いいえ。でも怨恨ではないと思う」階段に吊り下げられているブルーシートが、ごく普通だったアパートに異変があつた事を伝えていた。彼女はその異変に終止符を打つ為に、ここに居る。「相棒でしょ？ 勘でもなんでも良いから言いなさいよ」池上は睨む様なまなざしで、愁を見上げた。

愁は溜め息を呑み込んだ。「同感です。犯人は彼女を憎んでいた、と言つよりは殺害する事を楽しんでいたのだと思います。彼女は恐怖に慄きながら殺害されたのだと思います」

「ええ、失禁してしまう程ね。犯人は脅したのかしら？」

「あるいはニヤニヤと笑いながら首を締めたのかもしれない」美

しい女が死んでいく時の表情にひどく性的な興奮を感じる、と言ったのは昔観た映画の中の台詞だったのか、それとも実際にこの耳で聞いた事だったのか、今の愁には思い出せなかった。

トランクの中に置いてある、使い古したスポーツバックの中から、池上は淡いブルーのマフラーを引っ張り出した。このマフラーは一度一年前、付き合っていた あれが付き合っていたというのなら、彼からのクリスマスプレゼントだった。特に思い入れもなく、ほんの数回デートしただけの、今や顔も思い出せない人だったがマフラーは気に入っていたので取って置いた。友人は新しいのを買えと呆れていたが、別段“元彼からのプレゼントなの”と吹聴する訳ではないのだから、今の今まで捨てていない。だが、首に巻いてから、やけに心地悪い事に気が付いた。

微かに匂ってくる煙草の煙に、池上はふっと視線を上げた。車のドアに寄り掛かり、愁が煙草を吸っている。手には携帯灰皿、しかも風下で吸っている事に、池上はちよつとした感動を覚えた。山下は何度言っても、何度携帯灰皿をプレゼントしても、一度も持ってきた事がなかった。無論、風下で吸う等という配慮等皆無。車の中は禁煙だったが、灰皿には何時も灰が溢れて、常に煙草臭かった。嫌煙家ではないが、ずっと匂っているとさすがに頭痛がする。

愁はずっとアパートを、あの部屋をじっと見つめていた。煙をくゆらせながら、ただじっと。

携帯電話の着信音がして、池上はトランクをボタンッと閉めた。

コートの中から黒い電話を引っ張り出す。林正雄。

「はい、池上」

「俺だ。まだアパートか？」低く、渋い声で林が言う。

「ええ、そうです。これから周辺の聞き込みをする予定でいます」「そうか。とりあえず分かった事だけ言うぞ。旦那は白だ。職場での裏が取れた。抜け出すのも不可能の様だ。証人も多数存在する。それから旦那の話では彼女はカラオケBOXで準社員として働いていたそうだ。休みは日曜日と平日に1日。殆どが昼のシフトだった

が、ごく稀に深夜も入ったらしい。子供はその間、保育園か旦那が見ていたそうだ」

池上は携帯を肩と耳に挟んで、スーツから手帳とペンを取り出した。

「それから友人が多い様で旦那も把握していないと言っていた。リアルだけじゃなくて、バーチャルも山ほどいるそうだ。彼女はブログやツイッターとかをやっていたそうだ。只、恨まれる様なトラブルを起こしたっていう事は聞いてないし、ないと思う、と旦那は言ってる。ストーカーもない、心当たりもない、らしい」

また一步怨恨から遠ざかった気がする、池上は溜め息をつきたくなった。松本が送検されたのに、またこの手の事件。怨恨なら、人を辿れば犯人がおのずと見えてくる。でもこのタイプの犯人は被害者と接点を持たない場合が多く、あぶりだすのに時間を食う。そしてまた次の被害者……。

「池上？」

知らずにぎゅっと握りしめていた手を、池上はゆっくりと解いた。

「すみません」

「熱くなるな」林はふうつと息を付いた。「冷静にな」

「はい」

「被害者は旦那が夜勤の時に友人を呼んだりすることが多々あったそうだ。昨日もそうだったのかもしれない、と旦那が証言している」

問題はそれが本当の友人だったのか、それとも友人の仮面を被った犯人だったのか。

「彼女の両親と前夫は夕方くらいにこっちに着くそうだ。それまで旦那は子供とここで待つと言ってる。とりあえず吉沢さんが1日居るらしいから、俺達も聞き込みに戻る。俺達はカラオケBOXと保育園を当たる。池上達はアパートの周辺とその近くにいる友人を聞いておいたから、友人を当たってくれ。友人の住所や氏名は日下にメールしてもらおうから」

「了解」

「夕方、警視庁で落ち合おう。じゃ」林はそう言つと、電話を切つた。

池上はコートの中に電話を戻した。

「林さんは何と言っていましたか？」

池上はちらつと愁を見上げた。「旦那は白。林さん達は被害者が勤務していたカラオケBOXと子供が通っていた保育園を、私達は近所とこの近くにいる友人に聞き込み。夕方、警視庁で。以上」池上はそう言つと、後部座席のドアを開け、ハンドバックを取り出した。ハンドバックには殆ど何も入っていない。池上は財布や手帳はコートやスーツの中に入れてある。ハンドバックを持ちながらの捜査等、邪魔なだけ。只、聞き込みをするには、持っていた方が見栄えが良いのだ。それに万が一、犯人に出くわしたら投げつけて武器にする。惜しくはない、犯人を捕らえる事が出来るのならば。

「そうですね」携帯灰皿で煙草をもみ消し、愁は灰皿をパチンツと閉めた。

池上はボタンツとドアを閉めた。「今ので納得した訳？」

「ええ、しました」灰皿をコートのポケットの中へ入れて、愁は池上を見下ろした。その彼女の吊り上がった眉を見て、愁は柔らかな笑みを浮かべる。「池上さんが怒っているところからして、怨恨から遠ざかった、というところでしょうか。おそらく被害者の旦那さんはこう言ったのでは？恨まれる様な心当たりはない、と」

「それプロファイリング？」池上は彼を見上げ、はあつと息を付いた。

「いいえ」分かりやすい人だ、と愁は思った。彼女の表情や声、その一挙手一投足がその心に即座に反応している。池上はそれを隠そうとはしない。否、事件関係者には殊の外うまく隠している。

池上は両手をポケットの中に突っ込んだ。左手には車のキーが、右手には温かくなつたカイロが触れた。再び携帯の着信音がして、池上は少しだけ温かくなつた携帯を取り出す。日下留美からのメールだ。画面をスクロールして、池上は溜め息を付いた。「この辺り

にいる友人は10名ね。本当に友人が多いみたい。林さんが持つて行ったアドレス帳には他にも40名程の名前が書いてあるって」

「なら、携帯やパソコンを合わせると3桁はいくかもしれませんか」

3桁、彼女の場合、それくらいはいるかもしれない。池上は電話の画面を見ながら、そう考えた。アドレス帳に書いてあるのは、間違いなくリアルな友人。住所や電話番号をきちんと知っている友人。一方、携帯に入っているのは、どの程度の付き合いがあるのか、会うまでは分からないだろう。一度遊んだだけの友人の友人、その後一切連絡がない人物、中にはそんな付き合いのアドレスも入っているのかもしれない。だが、もっと不明なのはパソコンのだ。ネットの中だけの友人、ネットからリアルになった友人、通りすがりの人々。きつと際限なく、全ての人間を探し出す事は不可能だろう。

「行きましようか」愁は穏やかな口調で言った。

池上はふつと我に返り、顔をあげた。愁が何時もの微笑を浮かべて、自分を見下ろしていた。大嫌いだ、と池上は思う。感情に流されそうな自分が。山下はそれで良いのだ、と言ってくれた。刑事には熱くなる奴も冷静な奴も同じくらい必要なのだ、と。色々な刑事がいて、それで解決する事件もある。でも、冷静に全ての事を見れば、とも思ふのだ。例えば目の前で穏やかに微笑む、この男の様に。携帯をコートの中に戻し、池上は小さく頷いた。「ええ、じゃあ、102号室から」

アパートの、ブルーシートの中へ戻り、池上は102号室のインターホンを押した。中から微かにピンポンと音が聞こえた。2度鳴らしても出ず、二人は顔を見合わせる。池上は最後のつもりで、もう一度インターホンを押した。

中からガタガタと物音がし、インターホンの向こうから女性の声がした。「はい？どちら様ですか？」

「警察の者ですが」池上はスーツの中からバッチを取り出し、カメラに向かって広げて見せた。「少しお話を聞かせてもらっても宜しいでしょうか？」

「はい？何かあったんですか？」明らかに怪訝そうな声が返ってきた。「ええーと、少し待ってて下さい」ブチツと音がし、インターホンが切れた。

池上は愁に向かつて、眉をぐつと寄せて見せる。

愁は肩をすくめた。

2、3分してからようやくドアが開いた。30代前半くらいの女性がノーメイク、ジーンズに着古したトレーナー、その上にカーデイガンを羽織って出てきた。彼女の足元には女性のハイヒールが1足、子供の靴が2足、男物のスニーカーが1足、きちんと並べられていた。

池上は再びバッチを広げて、彼女に見せた。「警視庁捜査1課の池上と浜野です。お隣の事で少し話を伺いたいのですが」

「お隣？」興味深そうにバッチを見つめていた女性が、二人の間を通り越して101号室のドアを見た。「お隣、どうかしたんですか？」

「気が付かれなかったんですか？」池上はバッチをポケットの中に戻しながら、穏やかな声で言った。「今朝早くに救急車とパトカーが来たはずなんですが」しかもサイレンを鳴らして。

「パトカー？」きよとんとした顔で女性は言った。

「昨晚、お隣の野口恵さんが何者かによって殺害されました」池上はそこで口を噤んだ。この先の言葉を続けたいが、どうせ相手は聞いてくれない。例え、殺害されたのが、全く接点のない人でも、嫌いな人でも。

「え？」彼女は長く、美しい指先を口元に当て、目を見開いた。「そんな・・・」

「昨夜は夜勤ですか？」愁は彼女の手を見て、穏やかな口調で言った。

「え？ええ、そうです。6時にあがって、6時半にはアパートに。でも、どうして？」

愁は自分の左手を指差した。「左手に病室の番号と思われる数字

とブドウ糖と書かれてあるので、看護師さんなのかと思ひまして」
「ええ、この近くの西南病院に勤めています」少し潤んだ目を拭いた。

「じゃあ、昨夜の12時から2時の間は？」

「勤務でした。9時には家を出ていました」

「ご主人は御在宅でしたか？」

「いいえ、主人は一昨日から出張に出ています」

「野口さん、ご夫妻とはお付き合いがありましたか？」

「少しだけ。私にも4歳の娘がいるので、家の前で何度か遊ばせた事があります」

彼女はきつと何も知らないだろう、と2人はそう考えた。

池上はそれから幾つかの質問をし、丁寧にお礼を言つて、彼女と別れた。不審者は見ていない、家族仲は良い、思い当たる事は何も無い。

2階へ上がり、201号室のインターホンを押すと、仲からパタと足音がした。102号室の女性は耳栓やアイマスクをして寝ていて、パトカーのサイレンの音や警官の声に気が付かなかったのだろう。普通の反応としては、こちらの方が断然多い。

ドアが開き、40代前半くらいの女性がおずおずと顔を出した。

「はい」

池上がバッチを見せる。「警視庁捜査1課の池上と浜野です。少しお話を宜しいですか？」

「はい。下の野口さんの事ですよね？」

「ええ、早速ですが、昨夜12時から2時の間、何か変わった事はありませんでしたか？例えば物音がしたとか」

「いいえ。あつたとしても寝ていましたので」彼女はちらちらと池上と愁を交互に見た。

「何時頃、寝られましたか？」

「11時頃かしら。昨日は疲れてて、朝までぐっすりだったの」

彼女の足元の汚れた大きな靴を見て、池上が言った。「息子さん

は御在宅ですか？」

女性は首を振った。「修は部活の朝練に。6時に家を出て行きま
した」

「そうですか。息子さんも早く寝られたんでしょうか？」

「さあ？部屋は別なので。でも、遅くまでは起きていないと思いま
すよ、今日早いのが分かっていたので」

池上は溜め息をつきそうになるのを、ぐっと堪えた。怒鳴り声や
物音を聞いているとしたら、階上であるこの部屋の住人が一番可能
性としては高い。

「息子さんは何時頃帰宅されますか？」愁が微笑を浮かべて言った。
玄関にある、小さな飾棚、中学生くらの快活そうな少年と母親の姿
が、可愛らしい写真立てに入っている。写真立ては5つ、そのどれ
にも2人以外の人間は写っていないかった。

「7時頃には。息子にも聞くんですか？」

「ええ」安心させる様に、穏やかな口調で愁は続ける。「ご近所の
方は全員にお聞きしています」

女性は小さく頷いた。「分かりました。私はこれから仕事なので、
その時はいられません。息子には伝えておきます」

愁は小さく頭を下げた。「ご協力感謝します」

「いいえ」

「野口恵さんと個人的なお付き合いはありましたか？」

女性は首を振った。「いいえ、会えばご挨拶をする程度です。で
も、とても良い感じのするご夫婦で、会うと必ず子供がうるさくな
いのですか、とか気を使って頂いて」彼女の目から涙が落ちた。

手掛かりはまたもなかった。家族仲は良い、不審者は見ていない、
思い当たる事はない。

「ありがとうございます」池上と愁は深々と頭を下げた。

202号室の住人は留守、隣の棟のアパートも殆どの住人が留守
だった。唯一在宅だった女性に聞いたのは、2人と同じ答え。

それから2人は1時間かけて、近所の聞き込みに回った。野口夫

妻のご近所付き合いはアパート内部に限れていた様だが、会えば挨拶をしている程度には知られていた。この辺りで不審人物が出たという情報はどこからも上がってこなかった。

2人は近くにあるパン屋で昼食を買い、アパートの前に停めた車の中で休憩していた。

「何も出てこない」クリームパンをかじりながら、池上はぼそつと呟いた。車内にはパンの良い香りが充満していた。かじったパンもすごく美味しい。中からトロリと甘さを抑えたカスタードクリームが出てきた。「美味しい」彼女はふつと力を抜いて、無邪気に微笑んだ。

「ええ、本当に」クルミパンを片手に、カーナビに住所を入れていた愁が答える。

「どっちに対しての“ええ、本当に”？」

池上をちらりと見て、愁は再びカーナビに視線を戻した。「どちらに対しても、です」

愁が最後のクルミパンを口の中に放り込むと、池上はひらひらと手を振った。「外で吸って。後はやっておくから」

「煙草ですか？」

池上は愁の顔をマジマジと見つめ、不思議そうな表情を浮かべる。「山下さんがご飯の後の一服はめちゃくちゃウマイんだって言うてた。違うの？」

「いえ、じゃ、お言葉に甘えて」愁はにつこりと笑い、外へと出た。ドアを閉める時、カーナビを操作する電子音が聞こえた。

ドアに寄り掛かり、ポケットの中から煙草と灰皿を取り出すと、愁はふつと全身の力を抜いた。煙草を口に啜る前に、長い溜め息をつく。火を点けると、風に飛ばされて火の粉が舞った。

嫌な事件だ、と愁は思った。池上が感じた事は愁も同じ様に感じていた。無駄がない。無論、今の段階では、どんな可能性も捨てられない。怨恨、殺しを生業としている者の犯行。殺される理由と依頼した人間がいれば怨恨にもなるが、快樂殺人。だが、直慥は怨

恨ではないと告げている。

直勤等信じるな、データを使え、何度も言われ続けた言葉を思い出して、愁は自虐気味に笑った。ロバートの後任で、プロファイルチームの主任になったラッセルの言葉だ。彼は愁の人生の中で一番忌み嫌われた男だ。散々な目に合わされているので、愁もラッセルを好いてはいない。ただ、彼には感謝をしている。チームを追い出される様にして、捜査の方に移動させられたのはラッセルの影の努力のお陰だ。きっと色々な要素が加わって、自分は今日本に居られる。ラッセルもその一つの要因だろうと思う。

*

愁と池上が警視庁に戻って来た時には、野口恵の元夫安田和也と両親、現在の夫が揃っていた。4人はそれぞれ目を腫らし、廊下の長椅子に憔悴し切った表情で座っていた。子供は祖父母の間に座っていた。その3人を挟んで、野口と安田がそれぞれ座っている。

池上はその5人を見て、立ち止った。

「どうかしましたか？」愁は彼女の隣で呟く様に言った。

「子供、どうなるのかしら？」池上は悲しそうに呟く。何度、こんな状況を目にしてきたのだろう、と思う。片親が殺され、片親が様々な事情を抱え、育児困難になる事もある。祖父母や養護施設、子供の行き先には更なる悲劇が待っている事が多い。只でさえ、愛する親が殺害されているのに、その上自分の行き先で大人がもめる。「彼を一番愛してくれる人と暮らせる事を願わずにはいられないで

すね」

池上は視線を上げ、愁を見た。その表情を見て思う。何処の国も同じなのだ。彼もこんな状況を見てきたのだ、嫌になる程。

「彼女つてばイケメン好きよね」

2人が振り返ると、井上が立っていた。手にはクリップボードを持ち、赤い髪はおろされている。2人は家族の方をもう一度見た。

「でも、タイプが別。元夫は真面目で礼儀正しいイケメン、現夫はチャライイケメン。でも、どっちも同じくらいイケメン」井上は2人の間に割り込み、ボードを愁の前に突き出した。「携帯に着信アリ。11:05、公衆電話。消されていた、犯人かしら？彼女かしら？携帯に付着していた指紋は殆ど彼女のもの。後は現夫のもの、子供のもの、不鮮明なのが2つ。はっきりしているのが1つ。拭き取られている様な形跡はなし」

「他の着信はどうですか？」愁は受け取ったボードに挟んである紙に、ざっと視線を走らせる。携帯の着信と発信履歴だ。

「登録されているものもないのも、非通知も公衆電話もいっぱい。

とりあえず3カ月分FAXで送ってもらったんだけど、途中FAXがぶつ壊れるかと思っただわ」

愁は池上にクリップボードを渡した。彼女は受け取ると、視線を走らせた。「すごい量ね」

「何と着信だけで511件よ。発信入れたら倍よ、倍」

「で、目ぼしいのは？」ペラペラと紙を捲りながら、池上が淡々とした口調で言う。

「11:05」

「では、パソコンの方はどうですか？」愁は井上を見下ろす。

「それがさあ、彼女幾つものフリーメールを使用してさ。とりあえず幾つか見つけて、パスも解除したけど、少しだけ使っていたり、ブログの感想用だったりして。あ、ブログは大した事書かれてなかったみたいよ。事件に関わる様な事は特に」

愁は穏やかな口調で言った。「以上ですか？」

井上はにっと笑った。「そんな訳ないでしょ。1つ、使用度が高いのがあって、その中に怪しげなメールがあつたわ。要は会う事を前提としたメールのやり取りなんだけど」井上は愁と池上を交互に見上げた。「5名居て、内3名は女性、残り2名は男性だった」

真面目で礼儀正しいイケメン、まさしくその通りだと池上は思った。

「あの、犯人の目ぼしは掴めたのでしょうか？」おずおずと、だが意思の強さを窺わせる口調で安田は言った。ネクタイを外しているが、スーツ姿で、背筋をぴんと伸ばして座っている。

「心当たりはありますか？」池上は穏やかな口調で、切り出す。

安田は首を振った。「正直良く分かりません。離婚してから年に3回くらい子供の写真を送ってもらったり、実家に帰って来た時に子供に会わせてくれたりはしていましたが、個人的な話はあまり……」

「立ち入った事をお聞きして申し訳ありませんが、離婚は何時頃、何が原因で？」

「別れたのは3年前です。子供が産まれてから半年後に」小さな声で安田は言った。「あの彼女のご両親には言っていないので、出来れば伏せておいて欲しいんですが」

池上は小さく頷く。「勿論です」

「原因は恵の浮気です」

池上と愁は思わず顔を見合わせた。「浮気ですか？」池上が口に出す。

彼は悲しげに笑った。「はい。元々付き合っている時も一度されて、出産してからも一度も……。彼女は常に自分を可愛い、綺麗と褒めてくれる人が良いそうで、ナンパに付いて行ったと言っていました。僕は温かい家庭が欲しかったけど、彼女は常に恋をしていました。僕が温かい家庭が欲しかったけど、彼女は常に恋をしていなかったんだと思います。何時もキラキラ輝く様な」

「そうですか」一昔前であれば女性が言う事の方が多かったセリフ

だろう、と池上は思った。安定した結婚生活。結婚はした事がないから、今ひとつぴんとこない。だが、一生添い遂げると誓って結婚するのではないのだろうか。今や、それは時代錯誤な考え方なのか。恋の延長が愛なのではなくて、恋の延長が結婚？「離婚した後、野口恵さんは東京に？」

「はい。元々憧れていたみたいで、子供を引き取って一緒に行くと聞いてくれませんでした。もしもあの時、僕がもっと強く引き止めていれば、彼女は今でも・・・」安田はそこまで言うと言葉を詰まらせ、涙を流した。「息子も大事な母親を失う事はなかったのかも」

愁は彼の前にボックスティッシュを差し出した。

安田は小さく頭を下げてから、ティッシュを取り、涙を拭った。

「彼女はどんな方でしたか？」愁は彼が少し落ち着くのを待って、とても優しい口調で言った。

「明るくて、気が強くて、奔放な感じですよ。恨みを買う性格か？とお聞きになりたいのであれば、僕はそうです、とお答えしなければなりません。恵は友人も多かったですが、敵も多かったと思います。こちらでの生活は分かりませんが、地元ではそうでしたから」

「例えばどんな敵ですか？」多分この手の話はあの両親からは出てこないだろう、と愁は思った。彼等は、娘は強盗に殺されたのか、レイプされて殺されたのか、と林達に迫っていた。つまり怨恨が原因で殺害されたのだとは思っていないのだ。両親に伝えられているのは現夫が知っている事のみ。玄関には鍵がかかっていた、物は盗られていない、絞殺、殺害時間、部屋に争った跡がない。もう2つ、3つ野口が言っているかもしれないが、どれも強盗は指していない。娘が殺されパニックになっていたとしても、『誰が？』ではなく、『強盗』『レイプ』だと思えば親は珍しい。

「彼女はその・・・」安田はそこまで言うと、2人の顔を交互に見た。その顔には戸惑いが見える。

池上と愁は黙ったまま、安田の言葉を待った。

「簡単に言えば」まるで誰かに聞こえてしまうのを恐れているかの様に、とても小さな声で言った。「いじめっ子体質で、常に誰かを嫌い、もうあの人は話さないだの、皆でハブにしてやったのって・・・」

23歳、3歳の子供有、結婚2回、離婚1回、友人が多く、浮気性。そして人をいじめる。

「最初はただの愚痴なのかと思っていましたが、段々違うんじゃないかって思えてきて」

「違う？」池上は眉をひそめた。

「出産した時に同室だった人が4人いたんですが、退院しても仲良くしてもらっていたんです。皆、恵より年上でしたが、良くしてもらっていました。ですが、ある日を境にその中の一人を無視する様になって。理由を聞いたら嫌味を言うからと言っていたんですが、僕が知る限りそんな人ではなくって。でもそのうち、あの人は自分より容姿が悪い、女として終わってる、メイクもしないで、でも旦那はイケメンで金持ちって言い出して」

嫉妬、7つの大罪のうちの1つだ、と愁は思った。犯罪の動機にはなるが、彼女は被害者 加害者の様な事をしていたとしても だ。「彼女は実際どんないじめを？」彼女の子供が将来友達をいじめたら、彼女は何と怒るつもりだったのだろう、池上は心中で答えを野口恵に問う。

安田は小さく首を振る。「いいえ、詳しい事は・・・」

「そうですが。あの、一つお聞きしたいのですが」池上は遠慮がちに口を開いた。

「はい」

「お子さんはどうなさるんですか？」

「僕が引き取るとご両親と話しました。野口さんもさすがに引き取るとまでは言いませんでした。元々親権が欲しかったので、こうなった以上僕が引き取るのが自然かと思えます」

「親権が欲しくて殺害。動機としては十分。安田は1人暮らし。確かなアリバイはゼロ。こっちに来て元妻を殺害。高速を飛ばして5時間。余裕しゃくしゃく」

「ええ、本当に」

池上はハンドルを握り直しながら、ちらりと愁を見た。「何？その気のない返事」

「いいえ。別になんでもありませんよ」

言ってみただけよ、と池上は思った。安田が会いに来たとしたら、野口恵は家に入れるかもしれない。それに疾しい気持ちがあれば着信だって消すだろう。何と言っても彼女は浮気性なのだから、元夫と再燃したとしても何等不思議はない。そんな話は世の中に五万とある。それに親権問題を加えれば動機は十分。例えば再婚を迫って断られた。だが、悪魔で動機が十分なだけだ。刑事としての勘も経験も、安田が犯人だと告げていない。あの犯行現場がどうしても安田とイコールにならないのだ。もしも彼が犯人であるとしたら、自分分は刑事として終わりだと思う。

池上は愁を見てから、淡々とした口調で言った。「何考えてるの？」

「いいえ」目頭を揉みながら、愁は穏やかな口調で言った。「何も考えていませんよ」

「嘔吐き。目頭を揉んでいる時は事件をどっぷり考えている時」

マッドめ、余計な事を、と愁は胸中でごちた。「マッドは池上さんに私の事を何処まで話しているんですか？」

「そんなに聞いてないわ」池上は肩をすくめた。「初めて付き合った彼女の名前くらいまでよ」

愁は相棒をちらつと見た。「そうですか」

「で、何を考えていた訳？」

「犯人が遺体を隠さなかった理由です」

池上はふつとある男の顔を思い出した。「処理する時間がなかった、だからそのまま置いて逃げた」ある殺人事件での、犯人の供述だ。「でも、この事件の場合は弱いかしら」

「時間はあつた様に思えます」

「そうね。犯人が友人や顔見知りであれば旦那さんの職業を知っている可能性は高い訳だし、友人でなくても少し調べれば分かりそうな事なもの。犯人が野口夫妻の事がある程度していた上で遺体を隠そうとしないのであれば殺害したのは予想外の事でパニックになつて逃げた」池上はそこまで言つて、深い溜め息をついた。「これも弱い」殺害したのが予想外であれば、部屋は荒れている方が自然だ。「子供が起きてきた」愁はボソツと呟く。

池上は愁を見て、眉をひそめた。「ゾツとする」

「これも弱いですね」

「そうね・・・」池上は窓の外に視線を戻した。もしも子供が起きてきたとしたら、おそらく犯人は子供も殺害している可能性が高い。目撃者だから、という理由で子供と一緒に殺害する事は決して少ない、恐ろしい事に。又は子供が起きてきた事に勘づいて逃げた。もしも子供が起きてきたとして、3歳の子供ならば母親の異変に気が付くだろうか。幾ら呼んでも起きない母、その時子供はどうするだろうか。3歳なら腕や手を掴んで揺する？だが、遺体は倒れていなかった。泣き叫ぶ？声をかけても反応しない母を諦めてベットに戻り再び眠る？それなら最初から起きてこなかった、という方が余程筋が通る。

「端っから隠すつもりはなかった。あるいは見せしめ」

「見せしめ？何のため？」

「さあ」愁は肩をすくめた。

「さあって何よ。あんたが言ったんでしょーが」

愁はくくつと笑う。「そうですね」

*

何かが崩れていく時はあつと言う間だ。高く、慎重に積み上げていった積み木が、わずかな振動で崩れ落ちてしまった時の様に。

午前中、午後をかけて行った聞き込みでは、“良い家族”という証言しか得られなかった。それは林、山田が行った職場でも保育園、友人でも同じだった。元夫の安田以外、誰もが 両親や現夫も含めて 彼女には恨まれる要素等ない、と証言していた。

ドアを開けた若い男は茶髪に白いメツシュを何本も入れ、唇に金のピアスを二つしていた。黒のスーツにワインレッドのワイシャツ、手首には高級時計。

池上はバツチを見せた。「水谷さん、警視庁捜査1課の池上と浜野です。少しお話をよろしいですか？」

愁はその男の顔に見覚えがあつた。

彼は一瞬、ひるんだ表情を見せ、それを瞬間にして何かを思いついた表情に変えた。「分かった、恵の事だろ？」

「ええ、そうです」けしてあなたを捕まえに来た訳ではありません、と池上は心中で付け加える。どうせケチな事をしているんだろう、と思う。水谷は善良な市民でもなければ、頭の切れる犯罪者でもない。煙草と酒、香水に混じって、微かだがマリファナの匂いがする。池上は眉を吊り上げたくなるのを、何とか堪えた。

「あいつ、殺されたんだって？犯人は旦那？」ニヤニヤと笑いながら、水谷は言った。

「どうして旦那さんだと思われるんですか？」至極冷静な口調で池上が言う。

「あん？あんた等、刑事だろ？俺とあいつの関係知ってるから来たんしょ？」

「関係とは？」

「セフレ」

「でしょうとも、と池上は思う。

「純粹に体の関係だけですか？」愁が穏やかな口調で言った。

「純粹？」水谷はゲラゲラと笑う。「金とかつて事なら何も無いよ。そりゃ、セフレだけど誕生日プレゼントくらいは買った事あるけどさあ。あいつはさ、金なんていらねえの。欲しいのは男の注目」

「そうですか。だから、あなたが考える犯人は旦那さんな訳ですね？」

愁を見下し、水谷はふんつと笑った。「当然っしょ。あいつ俺のダチともヤツてるし」

「あー？と叫びたくなるのを池上はぐっと堪えた。そしてほんの少し、後ろに下がる。

「なるほど」愁は落ち着いた口調で続ける。「あなたが知っている限りで構いません。彼女にはそう言った方がどのくらいいいましたか？」

「あー？」彼は視線を右上に漂わす。「俺入れて3、4人つてここじゃねえのかな。なあ、犯人絶対旦那だって。マジでさあ、俺、そう思うんだよね」

「ご意見ありがとうございます。参考にさせていただきます」

ふふん、と水谷はどこか得意気に笑った。

「その、3、4人の方の名前、教えて頂けますか？」愁はにっこりと微笑んだ。

水谷はあっさりとして3名の名前を言あつた。内2名に関しては携帯の番号まで。もう一人は名前しか知らないそうだが、他の2人に聞けば分かるだろうと話した。

野口恵とは半年くらい前にナンパし、月に1、2度会っていたと言っ。

「あいつは簡単に付いてきた」と彼は笑う。

愁は丁寧にお礼を言っ、彼の部屋のドアを閉めた。愁が歩き始めた時には、池上は廊下から階段へと消えていた。只、廊下に響く彼女の足音がその心を表していた。怒り。

分からなくもないが、と愁は思っ。水谷は被害者の死を悼もうともしなかつたばかりか、どこか小馬鹿にしていた。池上が怒るのも無理はない。

アパートの外へ出ると、池上は既に車に乗り込んでいた。

愁は軽く溜め息をついてから、車へ乗り込んだ。ドアを閉め、彼女の吊り上がった眉を見て、愁は思わず微笑んだ。

「何よ？」池上はむっとした顔で、愁を睨む様に見た。

「いいえ。池上さん、麻薬課に知り合いはおられますか？」

池上はアパートを顎で指した。「マリファナの事？」

「ええ、まあ、それもありますが。彼はおそらく売人の方ですね」

「何でそんな事が分かる訳？」池上はそう言いながらも、コートの中から携帯を取り出した。この際、あの馬鹿男をぶち込めるのなら何だつて構わない、と思っていた。

「唇に二つのピアスの男が、麻薬を売買しているという情報がありました」実際には狭い路地裏に消えていくあの男の姿を見たのだ。シゲに尋ねたら売人だ、と言っ事だつた。あの男に間違いはない。

「ふーん」池上は納得できない、とばかりに目を細めた。

愁はその彼女の顔を見て苦笑した。

だが、池上はそれ以上何も言わず、携帯で麻薬課の友人へ電話をかけた。

水谷は小物だつた様だ。麻薬課でも既にその存在は押さえていたが、名前や住所までは掴めていなかった様だつた。只、この後ろにいるのが最近勢力を伸ばしつつある、新手の組織でうまくいけばそれを抑える事が出来るかもしれないと言っ。友人はひどく喜んで借

りができたわね、と笑った。
池上は携帯をコートに戻し、愁をちらりと見てからエンジンをかけた。

*

その少年はいかにもスポーツをしている、といった風貌だった。身長は愁と同じくらい、体格は華奢だったが、腕や足、肩には程良く筋力がついていた。

彼は2人を見ると、爽やかな笑顔で言った。「こんばんは。母から聞いています」

「こんばんは」思わず池上也笑顔になった。

「こんばんは」愁は軽く会釈した。

少年も慌てて会釈する。

「早速だけど、昨日何か変わった事とか、物音とか聞いていないかしら？」池上は出来るだけ穏やかな口調で言った。

少年は少しだけ暗い表情になった。「下の階の人の事ですよね・・・。昨日の夜、殺されたって」彼の表情には悲しみと恐怖が入り混じっていた。

「ええ、残念ながら・・・」

彼は視線を落とした。「昨日の夜は早く眠ってしまったので、何も気が付いた事はありません」少年は2人の顔色を窺う。

池上は優しい微笑を浮かべた。「何か気が付いた事ある？」

「いいえ、あの、あの子どもになるんですか？」

「お子さんの事？」池上はそう言ってから、少しだけ戸惑った。別段事件の事に関わりがないのなら、教えても問題はないのだが。

「気になるんですか？」愁が優しい微笑を浮かべる。

少年は小さく頷いた。「あの子ども何時も泣いてて……。だから、えっと、あの子、お父さんと一緒にこのまま暮らすんですか？」

「え？」池上が思わず口を挟む。「泣いてて？」

「はい。うちの母が言うにはあのくらいの子はそんなもんだって言うんですけど。僕の部屋にいとよく泣き声が聞こえてきて。それに……。自信なさげに、声がどんどん小さくなっていく。「お父さんとお母さんの怒鳴り声も」

池上と愁はほんの少しだけ、視線を絡めた。「それは毎日？頻繁に？」

「はい、毎日です。たまにベランダとか玄関に放り出されてて」

「そう……。池上の表情が暗くなる。

「あの……。彼は不安そうな顔をして、2人を交互に見た。「母は子供を育てるのは大変なんだって。子供は良く泣くし、親は羨むの為に怒鳴る事も多いって」

「ええ、そうかもしれませんが」愁は安心させるかのように穏やかな口調で、微笑を浮かべたまま言う。「ですが、今はあなたの感じたままをお話して頂けませんか？お母様の話は横に置いておきましょう。それで、他にはどんな事がありましたか？」

少年は頷いたものの、その目には明らかに戸惑いが見える。「あの、一番ひどいなって思ったのは……。死ねって声が聞こえて……」

「その声はお父さんですか？お母さんですか？」

「お母さんの方です。その後、あの子の泣き声が……。その目が悲しみに歪んだ。子供という同じ立場での視線だ。「あの子」を自分に置き換えてみる。無論、2人は年齢も違うし、彼はもう3歳で怒られる様な事はしないだろう。だが、それでも共感する部分があ

るのだ。彼の母親が野口恵の怒鳴り声に共感していた様に、同じ立場で人は共感する。

「物音はどうですか？何か聞こえてきましたか？」

少年は首を振った。「いいえ、怒鳴り声と泣き声だけです」

「そうですか。他にはどんな事を言っていましたか？」愁は淡々とした声で言った。

「あつち行つて” あんたなんかいらぬ”とか」

「それは主に母親の方？それとも父親も？」池上は悲しげな目をして、悲しげな口調で言った。

「殆どはお母さんの方だと思います。でも時々お父さんも“うるせえ、クソガキ”とかつて」

ほんの数秒、3人の間に沈黙が流れた。その数秒がひどく重い、ひどく長い。

「お子さんは実のお父さんに引き取られる様ですよ」愁はにこやかに微笑み、落ち着いた口調で言った。

「実の？」

「とても良い人そうだったわ。きっと大丈夫よ」池上は少年の肩をぽんぽん叩きながら、にっこりと笑う。

少年は安心した様に笑った。

愁は彼に携帯電話の番号入りの名刺を渡した。特に現夫が子供に言ったであろう、暴言を思い出したら電話する様にと。無論、事件に関する事も何か思い出したら、何時でも、と。

2人は重い足取りでアパートを出て、車に戻った。

愁がドアを閉めると、池上が口を開いた。「彼女は被害者でもあるけど、加害者でもある訳？」

「ええ、そうらしいですね」

池上は彼をちらつと見た。「ねえ、野口の暴言なんて聞いてどうするの？暴言くらいじゃ警察は動かないわよ」

「そうなんですか？」

「ええ、残念ですけどね。日本では精神的な虐待での逮捕者が出る

なんて現時点では稀でしょうね。それどころかまだまだ虐待についての法律は甘いよ。子供を大事にしない国に未来なんてないのに、この国の役人達は何をちんたらしているんだか」池上は吐き捨てるように言った。綺麗事じゃなく、痣だらけの子供の体を何度も見た池上は心底思う。

「そうですか。ですが、どちらにしろ安田さんには話しておかないればなりませんし」ひどく冷静な口調で、愁は眉ひとつ動かさないまま言った。

「ええ、そうね」彼は知らなければいけない事が山積みね、と池上は思った。元妻が殺害され、その妻が息子を虐待。もしかすると現夫も。彼はどう受け取るだろうか。否、安田より息子の将来が心配だ。2人はうまくやっていけるだろうか。

「心配ですか？2人が」

池上はハツと顔を上げ、愁を睨んだ。「私の心を読まないで」

「読んでいません」そんな芸当はありません、と心中で付け加えた。だいたい車のキーをそんなに強く握りしめていたら、殆どの刑事なら何を考えているのかくらい分かるだろう。その表情は暗く、悲しげで。

ふんつと言ってから、池上は車のエンジンをかけた。

*

昼間留守だった近所の住人、友人の聞き込みを、ようやく2人は終えた。

「残りは明日ね。後一軒で今日は終わりにしましょ」缶コーヒーを一口飲んでから、池上は呟く様に言った。一体明日は何人の友人、知人に話を聞く事になるのだろうか。その中から重要な話を聞けるのは何人いるのだろうか。浮気相手とは2人会えた。その2人が口を揃えて言う。『彼女は常にちやほやされていた女』一方、虐待の話は出て来なかった。野口恵のいわゆるママ友は、彼女は子供を叩く事が多かったとは言いが、それが虐待とは結び付かなかった様だ。自分達も彼女程ではないが子供を叩く事がある。だからあの少年の母親の様に、母親の立場に共感している様だった。

車のドアに寄り掛かり、何時間ぶりかの煙草を吸いながら、愁はふうと煙を吐き出した。「ええ」

コンビニの味気ない食事。便利でそこそこ味も良い。なのに満たされない。同じ弁当でも、家で食べたいと思う。池上は溜め息を付いた。後一軒回ったら、家に帰って熱いお風呂にでも入ろう。

携帯のバイブ音がして、2人は顔を見合わせる。

「私じゃないわよ」

愁はコートのポケットから携帯を引っ張り出した。見慣れない番号。躊躇する事もなく、彼は電話に出た。「はい、浜野です」

彼が話しているのを横目に、池上は車の中へと戻った。温かいコーヒーをちびちびと飲みながら、足首をグルグルと回す。骨の鳴る音が聞こえた。

助手席のドアが開いて、愁が滑り込む様に乗れ込んだ。彼はボタンツとドアを閉めると、シートベルトに手をかけた。「内田さんの電話番号知っていますか？」

「ええ、知ってるわ。でも、何で？」

「安田さんから電話がありました。子供の体に無数の痣があるそうです」

「なっ……」池上の顔が悲しみに歪む。

「私は井上さんに電話を、池上さんは内田さんをお願いします」
池上は小さく頷くと、携帯を取り出した。

30分後、4人は安田の宿泊しているビジネスホテルで落ち合った。安田はとても悲痛な顔をしていて、今にも泣きだしそうだった。子供は既に眠っていた。セミダブルベッドの中央に寝かされている。その眠っている表情は、とても愛らしかった。

「すみません。起こした方が良いでしょうか？」

「いいえ。診るだけなので、このままで大丈夫ですよ」内田は淡々とした口調で言った。

「写真撮らせて下さいね。それからあのパジャマって昨日着てたやつ、なんて事はないですよ？」井上がキッドの中からカメラを取り出す。

「いいえ、そのスーパーで今日買いました。何も子供のものはないので」安田は狭い部屋の端に置いてある、スーパーのロゴ入りの大きな紙袋を差した。

井上はその紙袋を見て、小さく頷き、内田の後ろに立った。

内田はかけられていた布団を剥がし、子供を起こさない様に慎重にパジャマのボタンを外していく。肌着を捲りあげると、内田は舌打ちした。「事件とは関係ない。この痣は数カ月および数日経っている痣だ。どういう事だ？」

3人の視線が池上と愁に向いた。

「これは殴られたりした痣なの？」池上が怒気を含んだ声で言った。

「ああ。腕には強く掴まれた様な跡もある」子供の腕や背中を診ながら、内田はハッと顔を上げる。「虐待か？てつきり事件絡みかと思っていたが……」

「ぎゃくたい……？」安田は大きく目を見開いて、内田を見つめた。

内田は子供を井上に任せ、安田の傍に歩み寄る。「おそらく間違いはないと思います。痣は1、2カ月前のもの、1、2週間前のものがあります。3歳くらいであればよく転びますし、痣も多いかも

しませんが、普通の生活をしていれば上半身に何個もの痣は出来
ないでしょう。それに殴られたり、抓られたりといった様な痣なの
で」

「ああ・・・」安田は小さく呻き、涙を流した。

その涙は後悔の涙だ、と池上と愁は思った。自分が離婚をする時
に、親権を取らなかった事に対する涙。

安田は年に数回子供と会っていたが、虐待については全く気が付
かなかつた様だ。尤も会ったとしても泊まった訳でもなく、公園や
動物園に2人で出かけただけ。服を着ている状態では気が付く事は
難しいだろうと思われる。

子供は彼にとてもよく懐いていて 野口恵と翔が虐待をしている
のなら当然だが、警察が許すのであれば明日にでも連れて帰りた
いと安田は言った。落ち着いた場所で、早く普通の生活を送らせて
あげたいと。

池上は201号室の少年が聞いた、暴言の内容も伝えた。安田は
涙を流しながら、小さく頷いていた。

「あの、彼を捕まえられますか？」

「ええ。彼自身が暴力行為をしていたかどうかは分かりませんが、
止めなかつた責任があるので。ですが・・・」

安田は弱々しく頷いた。「分かっています。大した罪にはならな
いのでしょうか？でも、僕は息子を傷つけた恵も野口も許せない」

私も許せない、許せるものですか、と池上は思った。

井上はシャッターを切りながら、隣にいる愁に囁いた。「ねえ、
愁の相棒、火傷しそうな程燃えているわよ」

「知っています」愁はにっこりと微笑む。「今日は帰れそうにあり
ませんね」

「あら、カワイソ」井上は呟く様に言った。全ての痣の写真を撮り
終え、彼女はサイドテーブルにカメラを置いた。ベット脇に跪き、
子供の肌着を着せていく。そっと、慎重に。指先に触れる、子供の
肌はとても柔らかく、温かかった。このまま触れていたい、と井上

は思った。ほのかに香る石鹸の匂い、それに混じって汗の匂いもある。井上はそつと痣に触れ、どうぞこの子がこれからの人生を幸せに生きていけます様に、と祈った。

内田と井上が帰った後、2人は同じビジネスホテル内に居る、野口翔の部屋へと向かった。階下へと降りるエレベーターの中には、他に誰もいなかった。

「ねえ、さつき安田さんに何渡していたの？」池上は目的の階のボタンを押した。ゆつくりとドアが閉まる。

「友人の名刺です」

「友人って？」

「大学時代の友人が2年ほど前から日本で暮らしているんですよ。一種の転勤みたいな形なんです」

「ふーん、それで？」

愁はにこやかな笑みを浮かべた。「彼は犯罪心理学を学ぶ事に嫌気が差して、犯罪を起こさせない様、子供の心理学へと転向しました。そこで気が付いたそうです。子供を変えようとするのではなく、まずは大人が変わろうと。そして親の為のワークショップを開いている団体に所属し、2年前日本へ派遣されました。彼なら子供の心理にも長けていますから、きっと2人の力になってくれると思います」

木曜日

パソコンの画面を見つめながら、マッドは椅子を半回転させ、腰を捻った。井上が仮眠をとっている間、パソコンと睨めっこしている。既に2時間が経過し、目や腰、手が限界を訴え始めていた。

被害者、野口恵のいわゆるメル友は5名。内3名は女性、2名は男性。女性3名は簡単に身元が判明。一方、男性2名はフリーメールアドレスを使用。その登録情報は偽物。井上が追跡し、1人は自宅から、1人は大手電機メーカーの会社のパソコンから送られている事が判明。

判明した時間が遅かった為、まだ林達には伝えていなかったが、井上もマッドもこの2名は犯人ではないと踏んでいた。男性2名を含む5名は、ブログから送れるメールでやり取りしている。このフリーメールに被害者は頻繁にログインしていて、使用度も高い。しかし野口恵はこのフリーメール以外に、見つかっただけで3つのフリーメールに登録していた。3つのうち1つは以前使用していたとみられ、もう1つは未使用だった。そして問題なのは3つ目。3つ目は空だった。だが、井上がメールを復元した。

野口恵とメールしていたのは、ハンドルネーム『S・A』という人物。2人のやり取りからして、野口恵とS・Aは複数回会っていると思われる。

『こないだはありがとうございます。すごく楽しかったです。また一緒に遊んでくれると嬉しいです』と野口。

『こちらこそ、とても楽しかったです。また是非お会いしましょう。』とS・Aが返している。

2人のやり取りはとても簡潔だった。どれも短く、特別意味のある内容にも思えない。そしてS・Aの性別もまた不明だ。

S・Aとのメールが怪しいとマッド達が思うのは、その交わされた内容ではなく、メールが全て消されていた事でもない。井上とマッドがどんなに頭を悩ませても、メールの出所が掴めないからだ。マッドは背もたれに寄り掛かると、大きく伸びをした。体の至る所の骨が音を立てている。ブラインドが掛っている窓を見ると、外は既に明るくなっていた。鳥の鳴き声や車の音、街は朝の始まりを告げていた。

ドアをノックする音がした。

「どうぞ」マッドはそう言うと、椅子をドアの方に回転させた。

ドアが開き、愁が不思議そうに笑う。「井上さんは？」

「仮眠中だよ。僕の担当していた事件が片付いたから、仮眠の間だけお手伝いしてるの」

静かにドアを閉め、愁は近くの椅子を引きずりながら、マッドの側へ寄った。小さなコンビ二袋を彼の目の前に差し出す。「てつきり井上さんだと思ったからチョコレートとサンドウィッチなんだ」マッドは袋を受け取ると、椅子を飛ばして立ち上がった。「後で渡しておくよ。僕はさっきおにぎり食べたんだ。コーヒー飲む？」マッドは部屋の隅に置いてある小さな冷蔵庫へと向かう。冷蔵庫の隣には小さな棚があり、コーヒーの粉やカップ、パンやお菓子が置いてあった。棚の上には電気ポットとコーヒーメーカー、マッドと井上が勤務中の時は常に落としてあった。

「ああ」愁は椅子に腰を下ろすと、パソコンの画面を見つめた。「S・Aって？」

「消されていたメル友」冷蔵庫の中へコンビ二袋を入れ、コーヒーを自分のカップとプラスチックのカップに注ぐ。瞬時にコーヒーの香りが辺りに漂いだした。「ラビットちゃんが見つけたんだよ。どうやら被害者とS・Aは何回か会ってるみたいだね」

「何件あった？」

「S・Aからは5件。彼女から送信したのは7件」

「内容は？」

「殆どたいした事は書かれてないよ。“会えて楽しかった。又、会いましょう”みたいなお礼メールばかりだった」マッドはコーヒ―を二つ持ち、デスクに戻ると、プラスチックのカップを愁の前に置いた。「さつきシユウのパソコンにも送っておいたよ、12件全部」

「ありがとう」

「メールの内容からだけじゃ、S・Aが男か女かも分からないし、2人がどんな関係かも判断出来なかった」マッドはデスクの端に淡いブルーのカップを置き、椅子に座ると、マウスを動かした。パソコンの画面に野口恵とS・Aのメールを出す。

どちらのメールも多くて5行程度だった。日付の古い順にマッドが出し、愁が読んで頷くと、次のメールを出す。一番日付が新しいのは3日前だった。

「どう思う？」マッドは12件目のメールを出してから、マウスを離した。

愁はデスクの上で肘を付き、手を唇にあてた。「男だろうな・・・」

「

彼女が浮気性だから？」

「それもあるが・・・」愁はじつとメールの文字を見つめた。只のお礼文だ。絵文字もなく、いわゆるタメ語でもない。「どちらも何かを隠しているとしたか思えない。こんなにちは、ありがとう、また会いましょう。何処で、何をしたのか、具体的に書かれていない。女性同士ならまずこんなメールにはならないんじゃないか？他のメールはどうだった？」

「絵文字がた沢山使ってたよ。パソコンも携帯もね。それに長かった、だいたいはね」マッドは軽い溜め息を付いた。「何かを隠しているって事はさあ、犯人じゃなくても浮気相手かな？」

「その可能性が一番高いだろうな」他に関係を隠す様な事が思い浮かばない、と愁は思う。そこでふっと思い出した。「浮気相手の1人が売人だった」

マツドは両手でカップを大事そうに包み、息を吹きかけた。「野口恵も麻薬常習者？それとも売人仲間？」

「麻薬常習者かは内田さんが調べてくれるだろう」愁は頼杖をついて、マツドを横目で見た。「そう言えば解剖は何時だ？」

「今日一番でやるって。昨日は立て込んでたからね」

「そう」

「で、野口恵は売人だと思うの？」

「いいや、思わない。麻薬をやった事ならあるかもしれないが」

「どっぷりと嵌っていたとしたらあの部屋から何か出てきてもおかしくないもんね。でも、薬の類は出てきてない」マツドはふうと息を吹きかけてから、ずずつと音を立てコーヒーをすすった「あつっ」

麻薬絡みの殺人であれば遺体を隠さなかった理由がつか、見せしめ。池上が言う様に殺しを生業としている人間が絡んでいる可能性も格段に高くなる。だが、愁には野口恵が麻薬絡みで殺害される様には思えなかったし、何よりこれは快樂殺人だと考えていた。「まあ、麻薬の線はすぐに白黒つくだろう。で、S・Aのメールの出处は掴めたのか？」

マツドは愁をじつと見つめた。「掴むさ」その声には確固たる自信が見えた。

「ああ、頼む」

「S・Aは相当きれるよ。こいつは海外サーバー経由していたり、狡猾い事をいっぱいやってる」

「第一容疑者だな」パソコンのメールを見ながら、愁は呟く様に言った。怪しい事をしているから、隠す、ごまかす。そもそも、このメールのやり取りの意味さえ理解出来ない。意味がない内容。「いや、容疑者だな」

「第一じゃなくて？」

「馬鹿にしてる。S・Aが浮気相手だと仮定しても、このメールはそもそもいらなかったはずだ。最初に出しているのはS・Aであって彼女ではないし、こいつが仕掛けているとしか思えない」

「警察に喧嘩を売ってる、訳ね」

そんな奴は珍しくもないが、と愁は思う。「他には何がでた？」

「インターホン、ドアノブの指紋は被害者家族のものが殆ど。他には部分指紋が沢山出たけど、どうかな？」

「どうかな？」

「この犯人に前科があると思う？」

「ないだろうな」愁はコーヒーを一口飲み、呷く。

「僕もそう思う。それに多分、指紋を残す様なへマをする奴じゃない」

マツドの目がランランと輝くのを見て、愁は深い溜め息を落とした。

「そう言えば合鍵作ってたみたいだよ」

「合鍵？」

ふふん、とマツドは笑った。「ラビットちゃんが見つけたんだよ。被害者の鍵に白い物が少量付着してて、調べてみたら粘土だった。粘土自体は何処にでも売ってるものだったけど」

「計画性の証拠にはなるな」それが犯人の付けたものであるのなら、「因みに被害者の家に粘土はなし。勿論捨てちゃった可能性はあるけど。それに子供が通っていた保育園にならきつとあるだろうし、そこで付いたとも考えられる」

「そうだな」

マツドは長い脚を組み、コーヒーをずっとすすする。「推測は出来るけど、確証はない。でもそう考えるとつじつまが合う。現夫いわく入居時もらった鍵は三つ。一つは被害者、一つは夫、一つは玄関に置いてあった。部屋は密室。窓にも玄関にもピッキングの形跡はない」

愁は落ち着いた口調で言った。「そうだな。トリックって考えるよりは現実的だな」

マツドはつま先で愁の足を軽く蹴飛ばす。「もう」

「他に目ぼしい物は？」

「今のところないみたいだよ」

「そう」ならば後は解剖を待つしかない。

マッドはコーヒを一口ごくりと飲んで、ちらりと愁を見た。「
そう言えば泉ちゃんは？」

「家に帰ったよ」

「へえー、よく帰ったね。ラビットちゃんが言ってた。泉ちゃんが
メラメラ燃えてたって」

「そうだな、燃えてたな」愁は池上の怒りに燃えた目を思い出した。
それは被害者野口恵と、その現在の夫翔に対する怒り。

昨夜、任意の取り調べに応じた、野口翔はあっさりと虐待を認め
た。ただし、自分は妻が子供に暴力を振るっていたのを止めなかつ
たと話、詫びた。彼自身は躰程度に怒った事はあるが、叩いたり、
殴ったりした事はないと言い張った。

だが、池上は全く信じていなかった。無論、愁も。

落ちたのは、日付が変わってからだだった。野口は自分も何度か叩
いたり、押し倒したり、暴言を吐いたりしたと認めた。その上で妻
の子供に対する暴力はひどかった、と言った。野口は恵がそもそも
何故子供を産んだのか、そして安田が親権を欲しがっているのに何
故渡さないのか、理解出来ないと言う。恵は口癖の様に『あんなな
んかいらない』『産まなければ良かった』と言っていたらしく、元
々子供は好きじゃないし、可愛いとも思わないと言っていた。『元
旦那に育ててもらえば？』と野口が提案しても、彼女は頑として首を
縦に振らなかつた。夫が暴力や暴言を止めると、恵はひどく怒った。
だから次第に野口は何も言わなくなり、虐待は日常的になっていっ
た。

当初、池上の目は怒りに燃えていたが、それは次第に哀しみに変
わっていった。

「精根尽き果てた顔してたな」事の経緯を大まかに話した後、愁は
溜め息混じりに言った。

「そう」マッドは呟く様に答えた。

家へ帰ると廊下を歩いて行った、池上の後ろ姿はひどく小さく、弱々しかった様に愁は思う。彼女の握りしめた拳が小さく震えていた。

「この世で一番嫌いなもの」マッドがどこを見てもなく、視線を宙に泳がし、淡々とした口調で言った。「子供が被害者になる事件、泉ちゃんが言ってたよ」

尤も、それを好む者は殆どいない。刑事も鑑識も監察医も。しかし子供が被害者となる事件は余りにも多く、慣れてしまう人間がいる事も事実。怒りを持続しながら、捜査をするのは難しい。冷静さを欠くのは大概の刑事にとって、命取りだ。だが、池上は怒りをエネルギーに変えて捜査している。

2人の間に沈黙が流れ、外から聞こえる鳥の声や車の音がやけに大きく聞こえた。マッドも愁も互いを見る事もなく、別の何かを考えていた。

「マッド」

「うん？」視線を絡める事もなく、マッドが答える。

愁はマッドを見ると、ニッと笑った。「池上さんは大和撫子じゃない」

「知ってるよ」マッドは肩をすくめた。

*

愁はデスクの上に写真を広げた。遺体と部屋、証拠の写真だ。さつき内田から口頭で聞いた解剖の結果のメモもある。

解剖の結果は紐状のもので首を絞めた事による、窒息死。彼女の首は、その長い爪によって掻き抜いた跡が幾つもあった。爪の間にあった皮膚及び血液は、被害者本人のものであると思われたが、DNAはまだ結果が出ない。抵抗し、犯人の皮膚が入っている可能性もある。

他に暴力を受けた痕跡はない。レイプ痕もなし。麻薬の反応もなかった。

S・Aのメールの出所は未だ不明。出所が判ったとしても、恐らく自宅や職場などの身元が分かる場所ではないはずだ。さしずめネットカフェが良いところだろうと思われる。防犯カメラ等無い様な店。

愁は大きな溜め息をついた。デスクの上に並べた写真やメモに一つ、一つ触れ、頭の中に叩き込んでいく。目を閉じていても、瞼に張り付くくらいに。

コンコンとノックの音がした。「おはよう」

愁が驚いて顔を上げると、ドアは開かれ、池上が立っていた。「おはようございます」心臓は大きく鳴っていたが、落ち着いた声で言った。

池上はライトグレーのパンツスーツを着て、低い位置で髪を一つに束ねていた。彼女は少しだけ困った様な表情を浮かべた。「プロファイル中？」

「ええ」

「御邪魔？」

愁は微笑を浮かべた。「いいえ。どうしてそう思うんです？」

池上はその言葉を聞くと中へ入り、ドアを静かに閉めた。「別に集中しないと出来ないのかと思っただけよ」

「誰が隣に居てもプロファイリングは出来ますのでお気遣いなく」愁は視線を写真に戻した。

あら、そ、何度ノックしても気が付かない程集中している訳ね、と池上は思った。彼女はドアの横にある棚のプラスチックカップにコーヒーを注いだ。一つはフレッシユを入れ、一つはブラックのまま。二つを持ち、一つはデスクの空いている場所に置いた。自分のコーヒーは持ったまま、椅子に座る。

「ありがとうございます」

池上は微かに肩をすくめた。彼女はコーヒーに少し口を付けながら、デスクの上の写真やメモを一つずつ見ていく。「解剖の結果が出たの？」

「ええ」愁はメモを池上に渡した。

メモを受け取ると、池上はざっと目を通す。「紐状のものって？」愁は鑑識のメモも池上に渡す。「二種類ある様です。一つはピアノ線のような痕、もう一つは細かい繊維状のものを擦じってある様な痕だそうです。被害者の爪の間から生成りの繊維が数本出てきていて、ウール100%だったそうです」

「ウール？例えばマフラーとかかって事かしら？今の時期ならしていても不自然にならないし」そこまで言うてから、池上は思わず愁を見た。「マフラーをしてきて、被害者をそれで殺害、又マフラーをして帰る」自分の口から出た言葉なのに、嫌悪感で吐き気がした。

「ええ、凶器がマフラーである可能性は高いですね。強度が不安でピアノ線などを仕込んだのかもしれないし」ウール100%の繊維の販売元はまだ不明だが、数本ある為うまくいけば判明するかもしれない。

ノックもなしに、いきなりドアが開いた。赤い髪をポニーテールにした井上が文字通り、部屋に飛び込んできた。彼女はボタンツとドアを閉め、にっこりと笑った。「S・A、出所が掴めたわよ」

「S・A？」池上は井上と愁の顔を交互に見た。

「野口恵のパソコンにあった消されたメールの主がS・Aっていうハンドルネームを使ってたの。メールの内容はたいした事ないんだけど、S・Aは色々な手を使って出所を掴めない様にして、出所

が判明しなかった訳」

愁から差し込まれたメールのプリントアウトしたものを受け取り、池上は一通目に視線を落とした。「それが判明した訳ね」

「そうよ」井上は壁に立て掛けてあるパイプ椅子を広げ、愁の正面になる様に座った。「案の定ネットカフェだった。3件が判明したんだけど、1件は新宿、1件は渋谷、1件は秋葉原。お店は全てバラバラだった」目をキラキラさせて、井上が捲し立てる様に言った。彼女はジーンズのポケットからメモ用紙を取り出し、デスクの上に置いた。「3件の住所と名前」

「ありがとうございます、井上さん」愁はにっこりと微笑んだ。

「プロフィール、出来たの？」井上はデスクの上の写真に視線を落とした。昨日の朝、自分が撮った写真だ。

「ええ」

池上がメールから、愁へと視線を上げた。

「へえー、で？」

「20代後半から30代前半。前科なし。前科はないが、犯行はこれが初めてではない。おそらく10代の頃から様々な犯罪に手を染めている。学歴は中卒及び高校中退。だが、IQは高い。仕事はしているが、比較的時間の自由になる職種。例えば営業職や自営業者など。お金にも不自由はしていないでしょう。1人暮らし。人当たりが良く、話し上手。未婚であるが、パートナーはいる。幼少期に性的虐待、身体的な虐待を受けている」

「で、とびつきりのイケメン」とにこやかな笑みを浮かべて、井上が言った。

再びメールに視線を走らせていた池上が彼女を見て、眉を寄せる。

「イケメン？」

「当たり前でしょ？被害者はイケメン好きなんだから」

「確かに」と池上は言った後で、持っていた紙をデスクの上に置いた。「浮気相手がイコール犯人であるなら、イケメンかもしれない」「しれないじゃない、絶対だと思うわ」井上は言い切るように言っ

た。メールをプリントアウトした紙をトントンと指で叩く。「S・Aは彼女の浮気相手」

「随分な自信ね」池上は苦笑し、コーヒーを口にした。

井上はニツと笑い、ちらっとだけ愁を見た。彼は現場写真に見入っている。まるで自分達の会話など聞いていないかの様に。「ねえ、愁。プロファイルにパートナーって言うてたけど、どう言う意味？」愁は視線だけを井上に向ける。

「被害者の事だったりする訳？」前髪をクルクルと擦じりながら、井上は被害者の写真に視線を落とす。生前の野口恵の写真だ。まるで雑誌から出てきた様な笑みを浮かべている。

「いいえ、被害者ではないでしょう。パートナーは不特定多数かもしれないし、1人と限定しているかもしれないが」

「ふーん、燃え上っていたのは彼女だけなのかしら？」井上は大袈裟とも言える程、大きな溜め息を落とした。

「どういう意味？」池上が眉を寄せる。

愁はコーヒーに口を付けながら、井上を見た。

「うん。昨日、今日とメールを見てて思ったんだけどさ。彼女、野口翔に不満があるみたいなのよね。離婚だとか、他に好きな人がいるだとかっていうのはつきりとした言葉を使っている訳ではないし、メールを受け取った相手も差ほど真剣に受け取っている感じもしないんだけど」井上は小さく首を傾げる。「何人かの友達にもブログにもチョコチョコ書いてあるのよ、旦那の悪口が」

「悪口ねえ」池上は小さく溜め息を付いた。友人の一人が旦那の悪口を言う為だけ、としか思えない電話をかけてきた事があった。離婚なのか、そんなに大変なのか、と思いきや真剣に話を聞いていたが、彼女はしばらくすると「あ、旦那が帰ってきた。じゃあね」と言つて、一方的に電話を切った。池上はそれ以来、旦那や妻の悪口は話半分しか聞かない。彼女は足を組むと、手をひらひらと振った。「そんなの分かんないじゃない。何処まで本気なのか。夫婦なんて色々だろうし、まして野口恵は浮気しているのよ」

「まあ、そんなだけだよ」井上が納得出来ない表情を浮かべる。
「どうして彼女がS・Aに燃え上っていたと思うんですか？」

井上はデスクの上で腕を組んだ。「うん。メールが他のと明らかに違うからかな。パソコンや携帯に残っていたメールは職場の人のを含めても、絵文字とかギャル文字とか多用していたし、です、ます調のものはなかったの。です、とかなら沢山あったけど」

「この関係を・・・」愁は被害者の遺体の写真に視線を落とす。
「彼女は大事にしていたんでしょう。周囲にはれない様にメールを消し、万が一見つかった場合にも内容が分からない様にしていたのだと思います」彼女は自分が殺される事を知らないまま、犯人の言うままに動いていたのだろう。彼のメールの目的が、警察を挑発する行為だとは露知らず。

池上は椅子の背もたれに体を投げ、呟いた。「忍ぶ愛・・・」

「S・A」井上は目を大きく輝かせ、いたずらっぽく笑う。「忍ぶ愛だったりして」

「S・A？」

「ローマ字でSINOBUでS、AIでA」

「まさか・・・」池上は苦笑した。

井上は小さく肩をすくめる。「私もそうは思っけどさ」

警視庁を出たところで、携帯が鳴った。

横に居たマッドが首を振る。「僕じゃないよ。着メロだもん」

愁はコートの中を弄り、何とか切れる直前に携帯を探し出し出た。

「はい」

「シユウか」何時もより、何処か悲しげなシゲの声。

「ええ」

「仕事中か？」

「いいえ、今日は終わりました」

「そうか。なら、ちよっくら会えねえか？」

愁は思わず眉をひそめる。「どうかしましたか？」

「頼みがあるんだ・・・」

「分かりました。どちらへ行けば良いですか？」

「アルプスの前で待ってる。よろしくな」シゲはそう言うと、電話を切った。

携帯を閉じ、コートの中へ突っ込むと、愁は頭を働かせる。アルプスはこじんまりとしたバーだ。愁は坊主だった頃に何度も、日本へ来てからも何度か、マスターには世話になっていた。尤も世話になっっていたのは坊主だった頃で、今は客として店に通っているだけだが。アルプスは繁華街から少し外れた場所にある。

問題はシゲが待ち合わせの場所をアルプスに選んだ事ではなく、その声だ。何時ものシゲはもっと明るく、声に張りがある。それが今日はま逆と言って良い程だった。

「どうしたの？」

愁は隣にいるマッドを見た。「用が出来た」

「ふーん、今のはシゲさん？」ニツとマッドは笑った。「僕も行こうかな」

「勝手にしろ・・・」愁はそう言い残して、歩き出した。

30分後、2人はアルプスの店の前へ着いた。シゲの姿はない。見渡す限り、人っ子ひとりいない。アルプスの文字のネオンサインと街灯だけが、唯一道を照らしていた。

突如、暗闇から、ぬつと人影が現れた。

「わっ・・・」マッドが思わず息を呑む。

「シユウ」街灯の下に来たシゲは2人を交互に見た。スーツ姿の愁と、ジーンズに黒のダウンジャケットを着たマッド、シゲは『誰だ、こいつは?』と口をひらきかけた。が、思い出した。『カサブランカの花束を抱えた、少し良い男の外人』美子ママの言葉を。「友達か?」

「ええ、マッドです」

「どうも」マッドは人好きのする笑みを浮かべる。

「おう。お前もアレか?警察か?」シゲは少しだけ困った様な表情を浮かべた。

「はい。鑑識ですけど」

シゲは小さく頷いた。「そうか。なら、良い。2人とも、付いて来てくれ」シゲはそう言うと、元来た道を引き返した。街灯から離れると、シゲの後ろ姿はぼんやりとした人影になった。

2人は一瞬顔を見合わせてから、慌ててシゲの後を追った。

シゲは黙ったまま、振り返る事すらせず、ただ歩いて行く。

シゲが止まる前に、マッドが口を開く。「あ、ここ・・・」

「知ってんのか?」2人の少し前で立ち止まったシゲが振り返り、悲しげな顔をした。

マッドは小さく頷き、シゲの横で立ち止まった。「一週間前、6歳の男性の遺体がここで発見されている」彼はその場所に視線を落とす。カラス避けの黄色のネットがアスファルトの上に丸まっていた。その少し上には“ごみを捨てる時のマナー”と書かれた看板アスファルトにはまだ少しチヨークの跡が残っていた。そこから大分離れた場所に枯れかけた花束、真新しい花束、お菓子、多数の酒

が置いてあった。

愁はマツドの横で立ち止まった。「確か全身に殴打の痕があった」マツドは愁の言葉を遮った。「殴打だけじゃないよ。被害者の洋服には木片なんかも付着していたし、足跡も付いてた。蹴られ、殴られ、更に棒のようなもので殴れている」

「マツドの事件か？」

「ううん。信さんだよ」

そうか、なら疑問はない、と愁は思う。「捜査は確か2係がしてたはずだ」

「俺のダチだった・・・」シゲがポツリと言った。

愁とマツドはシゲを見た。予想はしていた事だが、何と声を掛けているのか分からなかった。

「シユウ・・・」シゲが息と同時に声を漏らした。「どうして犯人が捕まらない？もう一週間だぞ」ひどく悲しげな表情を浮かべて、シゲは2人を交互に見た。

「すみません」愁は深く頭を下げた。

シゲは困惑した表情を浮かべる。「お前が捜査してるのか？」

頭を上げ、愁は小さく首を振る。「いいえ」

「探してくれないのか？」

愁は思わずマツドの顔を見た。「分かりません。プロフィールくらいいなら、させてもらえるかもしれませんが」

「何でも良い。捕まえてくれ」シゲはその優しげな顔を歪めた。「ササは良い奴だった。早くに女房を亡くしてからは酒に溺れちゃまって、気が付きゃ1人息子にも見離されて、仕事も首になっちゃまってさ、でも・・・」シゲの目に涙が滲んだ。「俺等には優しくして良い奴だったんだ」ポロリと涙が落ちた。

マツドがダウンジャケットの中からハンカチを出し、シゲに握らせた。「心当たりはありますか？」

2人の予想に反して、彼は頷いた。「随分前になるがササは少しの間、ヤバイ事に手を出していた」マツドのハンカチではなく、袖

口でぐいっと涙を拭う。

「ヤバイ事ですか？」

「おう・・・」シゲはそう言うと、口ごもった。2人の近くにまで歩み寄り、囁く様に言う。「売人だ」

愁とマッドは視線を交わした。マッドは小さく首を振る、知らない。

「でも何回目かの取引でしくじったらしい。何をしたのかは知らないが、捕まってははいないし、その後特に何かをされていた訳でもない」シゲは窺う様な目で2人を見た。

「ササさんはその時に足を洗ったんですね？」愁は至極冷静な口調で言った。

シゲは力強く頷いた。「俺達が説得したんだ。しばらくは危ないと思つて、ササは身を隠した。でも、特にササを追つてるやつはいなかつたし、何もなかつた」

それが今になつて？「それは何年前の話ですか？」

「三年くらい前だ」

3年前の売買でのトラブルが今？それはあり得ないだろう。愁は思考を巡らす。その事件を聞いたのは殆どがニュースだ。2係の事件だし、プロフィールの要請もきていない。だから、愁が知っているのは大した事ではない。

「最近、ササさんの周りで何か変わった事はありましたか？」

シゲは首を振った。「ない。ササの様子も普段と変わらなかつた。特に何か変わった事があつたとは誰も聞いていなかった」

コートの中からマグライトを取り出して、愁はササの遺体が横たわっていたと思われる場所を照らす。白いチヨークの跡、加藤が這いつくばつて、証拠を探す姿が愁の脳裏に浮かんだ。何も無い、この状態を目に焼き付ける。ただ、じつと。

狭い路地。人通りは皆無、明かりは街灯のみで、犯罪を抑制させる程の明るさはない。叫んでも誰かが助けに来るとは思えない。周りは工場らしき建物と数件の民家。

愁は遺体があつたと思われる場所から、上の塀へとライトの明かりを移動する。何も無い。ならば、とアスファルトの上、反対側の塀へ、とライトを移動しながら探す。何も無い。ここ数日、雨は降っていないはずだ。だとすれば殺害現場はここではない。ここは遺体を遺棄した場所。

愁は右方向を見た。さつきシゲ達と来た道だ。愁の立っている場所から20M程の所がT字路になっていた。そこを右へと曲がればアルプスと2件程のスナック。左に曲がるとビジネスホテルが1件。左方向は暗く、幾つかの細い道へと繋がっている。人目を避けるなら、左から着て、遺体を遺棄し、左に逃げる。この路地に車は通れない。犯人は複数。あるいはバイク及び自転車を使用。だが、それなら遺体に痕が残る可能性がある。だとすれば、一番可能性が高いのは複数の人間が遺体を運んだ。

愁はマッドの名を呼ぼうとし、口から出かかった言葉を呑みこんだ。シゲを見ると、引きつった笑みを浮かべていた。愁は穏やかな口調で言った。「3年前、ササさんが関わったとされる組織やグループ名、もしくは個人名をご存じですか？」

シゲは小さく首を振った。「いや、ササは俺等が危なくなるかもしれないからって最後まで教えてくれなかった」

結局の所、シゲはそれ程の情報を持っている訳ではなかった。ササは笹木充、10年前くらいに妻を交通事故で亡くし、酒に溺れ、大手企業を解雇される。当初は各地を転々としていたらしいが、4年前くらいからこの界限を拠点としていた。性格は酒が入らなければ温厚そのもの。酒が入ると多少気が大きくなるのか、飲み仲間と揉める事があつたそうだが、それもけて大きなトラブルになった事があるという訳ではなかった。

3年前、ササは売人にスカウトされた。その当時のササには悩みがあつた。1人息子の事だ。息子とは何年も前から会っていないが、だが、彼は何処からか息子が結婚すると聞いてきた。式に呼ばれる事はないだろう、会ってもくれないだろう、でもせめて祝いくらい

は渡したい、それがササの願いだった。売人になれば良い金が入る、ササは道を踏み外した。

愁とマッドはアルプスでシゲと別れ、彼の姿が見えなくなるまでその場に立っていた。やがてシゲが角を曲がり、完全に見えなくなった。

「どの程度覚えてる？」元来た道を引き返し、愁はコートポケットの中に手を突っ込んだ。

「殆ど覚えてるよ。被害者の洋服に付いていた靴跡の分析手伝ったもん」マッドは愁の隣に並んで歩き、ちらつと彼を見た。「冷子さんに言ったらプロフィールくらいはやらせてもらえるかもしれないけどさ。手出したら絶対恨まれるよ、愁」

「分かってる」

マッドは眉をぐいっとあげる。「絶対、分かってない」

愁はマッドを見て苦笑し、溜め息を付いた。息が白い煙に変わる。「そうかもな・・・」

マッドも長い溜め息をつく。愁がこの事件を何が何でも解決しようと考えているのは、マッドにはすぐに理解出来る事だった。きつとプロフィールを2係に渡したくらいでは満足しないだろう。下手をすれば2係を敵に回しても、捜査に係わろうとするかもしれない。マッドはそう考えて、眩暈を覚えた。ポケットの中で携帯電話を握り、しばらくはGPSが活躍しそうだ、とマッドは思った。

愁はササの遺体が遺棄されていた場所にしゃがみ込んだ。目を閉じ、何かに祈る、ササの死を。

「遺体発見の日は、燃えるゴミの日だった」マッドは愁の横で立ち止まり、現場写真を思い出す。「10個程のゴミ袋の上に黄色ネット。被害者はその上に横たわっていた。ゴミ収集業者の3人が第一発見者。それが朝の9時。死亡推定時刻は午前1時から3時の間」

「それまで誰も通らなかつたって言うのか」

「さあね・・・」マッドは小さく肩をすくめ、悲しげに言った。「僕は見たのは鑑識と内田さんの報告書だけだよ」

嫌気が差すのは何も犯罪者だけに限らない、それは愁もマッドも何度が経験していた。普通と呼ばれる人達が時として非情になる。面倒臭い、係わりたくない、だから違うのだと己に言い聞かせて通り過ぎていく。

「死因は全身殴打による頭蓋骨陥没及び脳挫傷。洋服には26.5cmと25cmの靴跡があった。革靴でKAZUっていう10代から20代の若者が好むメーカーのものだった」

「少なくとも2人」愁はそう呟いて立ち上がった。

「ううん。3人。靴跡が全て残っていなかっただけで、つま先に他の二つとは違う、スニーカーのロゴがある靴を履いていた人間が1人」

「木片が付着していたって言ってたな。何の木だ？」

「桜。この辺の公園にはだいたいあるね」

「DNAは？」

「桜の木がこの辺りにどれくらいあるのか知ってるの？その1本、1本のDNAを調べられると思ってるの？」マッドは眉を寄せ、まるで怒鳴る様に言った。だが、同時に愁の言いたい事も理解出来ると思う。人と同じ様に木にもDNAが存在する。そのDNAを使えば、犯人がどの桜の木を凶器として使用したのか分かる。うまくいけば犯行現場が分かる。

「そうだな。すまない」何処か上の空で、愁は言った。

マッドは肩を落とし、小さく溜め息を付いた。そして左方向に歩きだした。

「マッド？」

「こっちに点状血痕があった」マッドは顔をしかめたまま、振り返らずに言った。

愁はマッドの後を追う。暗く、狭い、長い道を。

「血痕はこっちに続いていた」マッドはそう言って、右へ曲がる。さつきよりも更に細い道。そして更に暗い。しばらく歩き、マッドはふいに立ち止まった。少し後を無言で付いてくる愁を待つ。「そ

して、ここで途絶えた」

「どういう意味だ？」

「付いて来て」マッドはそう言うと、再び歩き出した。「血痕と言ってもここから現場まで四つしかなかったんだよ」

「何でだ？ササさんは殴られたりしていたんだろ？」

「うん。出血していたのは目元、鼻、口元、防御創のある両手、頭部の7か所。でも、その全てから大量の血が流れ出ていた訳じゃないし、多分息絶えてからササさんのジャンパーにくるんで運んだんだと思う。着ていたジャンパーは乱れていたし、背中に血が付いていたから」

「血痕を道路に残さないだけの知恵はあった様だな」

2人は道の突き当たりで立ち止まった。T字路になっていたが、今まで居た道よりは広く、明るかった。車一台なら通れそうだが、さほど往来があるとは思えない。時間帯のせいか、歩いている人間はいない。

マッドは左方向を指差す。「そっちに工場がある」今度は右方向を指差す。「あっちは数件のスナック。スナックの客がたまに嘔吐していくんだって」

「洗ったのか・・・」

「そう、朝一にね。元々この辺りはクリーン大作戦みたいなキャンペーンをやっていたらしくってさ。この辺の店や工場の人達は朝せつせと掃除してみたんだよ。範囲を大分広げて捜査したけど、結局それ以上の血痕は見つからなかったんだってさ」

愁は左方向を見た。「そいつはラッキーだったな」無論、犯人にとつて。

「そっち方面の公園、人通りのない様な場所は調べたって。でも殺害現場と思われる場所は見つからなかった。あと、防御創からは桜の木と砂利が出てきた」

「砂利？」愁は振り返り、マッドを見た。

「公園の砂場によく使用されているタイプだって。現場で傷に入っ

たのか、それとも犯人の靴底に付いていたのが蹴られた時に手に付いたのか、だね。洋服にも付着していたし」冷え切った両手にハアと息を吹きかけながら、マッドはちらりと愁を見た。案の定、目頭を揉んでいた。「ササさんの右手の人差指と中指の爪から上皮組織が出た。1人分のDNAで、前科はなし。指紋もジャンパーに付いてたのが5人分とれた」

「明日、現場写真見れるか？」目頭を揉んでいた手をポケットの中に入れ、愁はマッドをちらりと見た。彼はあきれ果てた様な表情で自分を見ていた。

「信さんに頼んでおくよ」きつと彼なら喜ぶだろう、とマッドは思う。加藤はこの事件に解決の糸口すら見えてこない事に苛立ちを隠せないでいた。犯人は多くの証拠を残しているのに、その姿が見えてこない。愁がプロファイルする事で、解決への突破口になればそれに越した事はない。問題はそう思っている人間が全てではない事だ。

犯行現場を今から探し出す、と言いかねない愁の腕を掴んで、マッドは元来た道を戻り始めた。「とりあえず夕飯食べてからね」

「ああ」

繁華街まで戻り、何時ものサンドウィッチ屋へと向かう。

半裸の女性が微笑む、大きなポスターの貼つてある店の中から、大きな男がのそつと出てきた。彼は横も縦も大きかったが、けして太っている訳ではなく、筋肉質な良い体をしている。真っ黒なスーツに、白いワイシャツ、派手なネクタイに、ブランド物の時計、髪の毛は黒かったが、何処か派手だった。男は愁とマッドを見ると、目を細めた。「おい」

マッドがちらりと男を見た。

彼は大股で歩き、2人の前に立ちはだかるようにして止まった。

「おい」

「何ですか？」とマッドが言う。その声はひどく落ち着いている。鑑識のマッドとて、すこまれたくらいで恐怖を感じる事はもうない。

愁はこの時初めて、男に目をやった。向こうも、愁を見ていた。
「本当に戻ってきたんだな」

マッドは2人を交互に見る。「何だ、シユウの知り合い？」

愁はしれっとした顔で言った。「覚えていませんね」

「何だよ、相変わらず嫌な男だな。シゲさんから聞いたんだよ、てめえが戻って来たつてさ」男は親指で自分が出て来た場所を差した。
「俺、今そこで店長してるんだ、何時でも来いよ。安くしてやる」

愁とマッドは思わず大きなポスターを見上げた。

「遠慮しておきます」愁は淡々とした口調で言う。

「ストリップバー？」マッドが呟く様に言った。

「ストリップじゃねえ。キャバクラだ、ただの」男はスーツのポケットのからシルバーの名刺入れを取り出し、名刺を1枚抜き取ると、愁の手に握らせた。「昔の事は水に流そうぜ」

愁は握らされた名刺ごと、ポケットの中に突っ込んだ。

「おめえ、あいつらの事捜してんだろ？」男はニツと笑う。「俺の情報量もなかなかだぜ。色々な奴が来るからな」

「そんな事言っているの？僕達警察だよ？」マッドは苦笑し、思わず口を挟んだ。

「知ってるさ。でも、こいつには悪い事しちゃったからな。それに何でもかんでも教えてやる訳じゃねえ」男はくくつと笑った。「必要やっただけさ」

マッドは肩をすくめた。「必要なやつだけね」

男は愁に向かって、ごつい手を差しだした。2本の指をクイクイツと動かす。「ほら、てめえもよこせ」

愁はスーツのポケットから名刺を取り出し、男に差しだした。

男は名刺を受け取り、そこに書かれている文字に目を落とすと、意味ありげに笑う。「浜野愁ねえ」

「御客さん、入ってるけど良いの？」マッドは店に入っていく男を指差して、囁いた。

「あ、やべえ」彼は男達を見ると、店に向かって歩き出した。少し

振り返り、「じゃあな、愁、また」と言い残して、店の中へ消えた。愁はコートポケットに両手を突っ込んで、歩き出した。

「誰？」

「村上大介」

ダウンジャケットのファスナーを上まであげて、マッドは呆れた様に言った。「覚えてるんじゃない」

「覚えてるさ」愁は口の中で呟いた。

「で、村上さんはシユウのお友達な訳？」そんな感じには見えなかったけど、とマッドは思った。愁の反応は余り良いものではなかった。だからと言って、全く拒否している様にも見えない。

「どうだろうな・・・」

マッドはショーウィンドウに飾ってある小さなクリスマスツリーに目をやった。その横には数々の宝石。可愛くラッピングされた小さな箱。ハートのネットクレス、小さなダイヤのピアス、ブルーの石の入った指輪。表示されている値段は1万から10万くらいまでと様々。

立ち止まってしまったマッドを振り返り、愁はふうと息を吐いた。

「行かないのか？」

「ねえ、クリスマスプレゼント買った？僕はまだ買ってないんだよね。入って良い？」マッドはそう言いつつも、手招きをする。「シユウも入ろうよ」

「遠慮する」

マッドの左の眉がぴくりと動いた。明らかに不機嫌な顔で、彼は愁を見ていた。「付き合って」

愁は小さく肩をすくめる。「脅してるのか」入らなかつたら、報告書なんて見せてやらない、とか言うんだろう、愁はその言葉を呑みこんだ。マッドは自分が何をしたらどう動くのか理解し過ぎている、時として己よりも。渋々マッドに近寄ると、彼はニツと笑った。ショーウィンドウの中で綺麗に並べられているアクセサリーをじっくりと見つめ、マッドはごく自然な口調で言った。「そっいや、

村上さんはシユウに何したの？」

愁はぼんやりと小さな石の入ったネックレスを見ていた。「ああ、
しよぼいナイフで太ももを刺されただけだ」

金曜日

「それで？」と冷子は呆れた表情を浮かべた。「とりあえずプロファイルを作成してくれる訳ね」

「ええ」愁は何時もの微笑を絶やさない。

冷子はパラパラとファイルを捲った。今から9日前。報告は吉沢から受けているが、大した進展は見せていない。確かに愁の言うとおり、プロファイルを作成するのは賛成だ。だが、2係が担当していると知った上で、彼が首を突っ込んでこようとしているのがひどく不可解だった。普段の愁であれば、まずしそうにない行為だ。冷子は目の前に立ったままの愁を見上げた。「プロファイルはお願ひするわ。で、理由は何なの？あなたがこの事件に首を突っ込みたくなる理由は？」

「笹木充さんは私の恩人の友人なので」

「恩人ねえ」ファイルに視線を落として、冷子は呟く様に言った。

「2係が捕まえる手助けができれば良いの？それとも自分の手で捕まえたいの？」

「9日、ですよ？」その問いには答えず、愁はしれっとした顔で言った。「逮捕出来ればそれに越したことはないんじゃないでしょうか？」

「ええ、本当に。それに越した事はないわね」冷子は淡々とした口調で言うと、デスクの上の煙草に手を伸ばした。中から1本抜き取り、口に咥え、火を点ける。煙を吸い込み、溜め息と同時に吐き出した。「やるなら2係にバレない様にやって。あなたもその意味くらい分かるでしょう？」

「ええ、無論です」

手出す気満々ね、と冷子は思った。彼女は煙草で椅子を指す。「

いつまで立っているの？座ったら？」

「いいえ。池上さんがそろそろ出勤してくる時間なので」愁はちらつと腕時計に視線を落とした。

冷子はニヤツと笑う。「彼女にバレたら怖いわよ。せいぜい気を付けなさい」

「ええ」愁は何かを思い出したかのように、ふっと笑った。「本当に」

煙草の灰を灰皿の淵で落とし、そこに視線を落したまま冷子が言う。「池上とはうまくいつてる？」

「ええ、まだ1日ですが、楽しくやっていますよ」捜査に楽しい事等一つもないが、と愁は思う。

「楽しくね」彼女は煙と一緒に言葉を吐き出した。「それは結構だわ」

「山下さんの具合はいかがですか？」

冷子は愁を見上げた。「もしかして責任を感じてるの？」

「感じていないと言えば嘘になります」幾ら犯人を捕らえたとは言えど、池上に電話をしたのは自分だ。

「感じる必要はないわ。そんな事言わなくても分かってるでしょうけど」冷子は淡々と言葉を紡ぐ。「山下の骨折は大した事ないですよ。それよりも元々あった腰痛の方がひどくてね。引き止めたかったけど、もうさすがに無理みたい。山下は良い刑事だったのに、痛手だわ」冷子は悲しげな表情を浮かべた。彼は冷子の後輩で、コンビを組んだ事はないものの、何度も同じ事件を追った。山下は何時も人に辛辣な事を言い、反感や恨みを買ってこそいたが、誰からも一目置かれる良い刑事だった。その彼がデスクワークだなんて。「残念です」

冷子は煙を深く吸い込んだ。「本当に」と言いながら、煙を吐き出す。「山下が言ってたわ、池上と愁は静と動、良いコンビになる」だから頼む、あの2人を組ませてやってくれ、そう直談判にきた。

山下は池上の事を娘か妹の様に可愛がっていた、彼なりに。でなけ

ればここには来ないだろう。彼は上が決めた事に口出しする人間ではなかった。「心配みたいね」

「池上さんは優秀な刑事ですよ。心配など無用です」

冷子は柔らかな微笑を浮かべる。「ええ、そうね」

携帯のバイブ音がして、愁はスーツのポケットから電話を取り出す。

「誰？出たら？」冷子は愁を見上げ、携帯を指差す。

「池上さんです」

冷子は思わず苦笑する。「行って頂戴。笹木充さんの事件のプロファイルは吉沢に、報告は私にして頂戴」

「了解」愁はそう言つと、彼女に一礼し、部屋を後にした。

*

「遅い」池上は愁を睨むように見つめる。

「すみません」

「何してた訳？」彼女は腕を組んで、一係のドアに寄り掛かっている。ダークグレーのパンツスーツを着、愁を見上げるその様は、まるで男子生徒の遅刻を怒る教師の様だった。

愁は小さく上を指す。「上に」

「藤沢さん？ふーん」池上はほんの少し眉を寄せた。冷子が愁やマツドを頻繁に呼び出している事は、殆どの刑事が知っている。きつと幹部達が知ったら良い顔はしないだろうが、現役の刑事の多くは冷子の方の味方だ。誰も口先ばかりで、出世欲の塊の様な男達には

告げ口などしない。池上もその一人だった。

愁は一係の部屋を覗いた。誰一人いない。「ミーティングは終わってしまっただんですか？」

「今日はないって」池上は親指で、自分の後の2係の部屋を指す。

「2係に動きがあったみたいよ」

「動き、ですか？」思わずその指が差す方向を見る。

「一昨日起こった放火殺人の犯人があがったとか言ってた」

そっちな、愁はぐつと言葉を呑みこんだ。

池上は一係の部屋の中へと入った。彼女の髪がさらりと揺れ、その香りを辺りに残した。「林さん達はもう聞き込みに行ったわよ」

愁も彼女に続いて中へと入る。「そうですね」

池上は自分のデスクの上に置いてあるB5の紙を取り、愁に差し出した。「今日私達が回るところ。昨日の残りのメル友3名なんだけど、1人は調べたら転勤で北海道に行ってるそうなの」彼女は小さく溜め息を落とす。昨日聞き込みに行ったメル友は最悪だった。男性2名だったが、どちらも家庭があり、浮気目的で野口恵とメル交換していた。彼女自身もそうだ、と2人は示し合わせたかの様に言った。結婚というものが嫌いになりそうなの、結婚に対しての夢が、これでも少しばかりある。ぶち壊れそうなの、話だった。

「ええ」紙を受け取り、愁は視線を落とした。長いリスト、長い1日になりそうだ。

「どっちが電話する？」

「はい？」愁は顔を上げ、池上を見た。

「北海道のメル友」

愁はにこやかに微笑んだ。「女性同士の方が話しやすいかと思えますよ」

池上はぐつと片眉をあげた。「良いけど」愁から紙を奪い取り、椅子に腰を下ろす。デスクの上にある本来は白いはずの受話器を取り、ダイヤルを押す。

「出掛ける準備をしてきます」愁は囁く様に言った。

池上は肩と頬に受話器をはさみ、愁にひらひらと手を振り、スーツのポケットから手帳を取り出す。愁は穏やかな笑みを残し、部屋を後にした。

受話器からコールが聞こえる。4回目、ガチャツと音がした。

「はい？」若く、だが不機嫌そうな女性の声。

「もしもし？警視庁捜査1課の池上申しますが、ミサトさんですか？」

「警視庁？」彼女の声が上がった。「やだ、何の冗談？」

「いいえ。本当に警視庁の者です。何なら電話番号をお教えしますので折り返して頂けますか？」池上は穏やかな口調で言った。

「いえ、えっと、ごめんなさい。驚いてしまつて。ミサトは私です。あの、何の用ですか？」

「メル友の事でお伺いしたい事があるんですが」

「メル友？えっと、誰かしら？あ、東京だったらメグちゃん？」

「ええ、本名は御存じですか？」

「はい。彼女がどうかしたんですか？」

「殺害されました」敢えて感情は込めずに言う。

「え？」凍りついた様な声だった。「嘘でしょう？」

「いいえ、残念ながら」

受話器の向こうで息を呑む音が聞こえる。そしてそれはすすり泣く声に変わった。

池上は辛抱強く、ミサトが話をできるまで待った。電話だと相手の反応が見えず、この上なくやりづらい。慰めの言葉を掛けながら、彼女と野口恵はメル友以外にどんな関係があつたのだろうと思つた。会つた事もなく、ネットの世界で繋がっている友達。それだけ？「あのお聞きしたい事があるんですが」彼女の鼻をすすする音が落ち着くと、池上は話を切り出した。「野口恵さん、彼女とはメール以外にはどんなお付き合いがあつたんですか？」

「電話で話した事が何度か。あとはチャットとか、です」

「彼女は何か、そのあなたに言っていないませんでしたか？変わった事

とか、揉め事とか」

「揉め事？」ミサトは小さな声で言った。しばらく何かを思い悩んでいる様に、彼女は沈黙を作る。「あの、誰にも話したりしませんよね？」

「どついう意味です？」

「旦那さんに、とか」

今更何を言われても野口は驚かないんじゃないかしら、と池上は頭の片隅で思う。妻は誰かに殺害されて、もうこの世にはいない。そして自分は虐待容疑で逮捕された。これ以上何を驚く事がある？

「ええ、勿論です」

「彼女、好きな人がいるって言っていました」

「好きな人ですか？」どうぞ、その名前を知っていて、と池上は心の中で願う。好きな人がS・Aであれば、何かが野口恵と繋がる。

「その人との関係は言っていませんでしたか？」

「もう関係があるみたいでした。でも、ただの浮気ではなくて本気だって、メグちゃん、すごく悩んでいました。彼の事がどうしても諦められないって」

「その人の名前、ご存知ですか？」

「ええ。あいださとしさんって言っていました。愛にたんぼの田、悟るの悟だそうですね」

「あいださとし」池上は手帳に名前を書きとめる。その横にアルファベットでA I D A S A T O S H Iと書く。S・Aだ。「そのあいださんの年齢や容姿、何処で会ったのかとかはご存知ですか？」若干の興奮を隠せぬまま、池上が言う。

「ええ、年齢は30歳で185センチくらい。モデルみたいに格好良くて、すごく優しい人だって言っていましたよ。仕事は一流企業のサラリーマンだそうです。会ったのはナンパじゃなかったかしら」「ナンパ？」池上はメモ帳に書いたS・Aの文字をグルグルと丸で囲む。その横に185cm、30歳と足す。

「ええ、結果的に。メグちゃんはナンパとは言ってませんでしたけ

ど、私にはナンパに思えました」ミサトは小さく溜め息を落とした。
「渋谷かどこかで道を聞かれたとかって」

それはさぞ運命的な出会いだったんでしょね、池上は胸中で毒づく。「愛田悟さんが何処に住んでいるのかとか、勤め先って言うのは・・・」視界の端に愁が部屋から入ってくる姿が見え、彼女はメモ帳を宙に差し出した。

「さあ？さすがにそこまでは聞いていません」ミサトは申し訳なさそうに言った。

「他に何か彼に関して聞いた事がありますか？」

愁は池上が差し出したメモ帳を取った。彼女がグルグルと丸を付けた箇所に視線を落とす。

池上は受話器の向こうから聞こえる声に耳を澄ましながら、愁を見上げた。読唇術が使える訳ではなかったが、彼が呟いた言葉だけは理解出来た。『わざとらしい』

「一か月前くらいに出会ったって事と、とにかく格好良い人ってくらいで」

とびつきのイケメン、井上の予想は当たった訳ね、池上は唇の端を上げた。犯人「S・A」愛田悟、になればの話ではあるが。

ミサトはそれ以上の事は知らない様だった。否、これだけ知っていれば十分な収穫だ。池上は丁寧にお礼を言っ、電話を切った。

「何がわざとらしいの？」池上は受話器を置くと、愁を見上げた。

「愛だ、さんですか？忍ぶ愛であり、愛田悟さんですよ。まあ、どちらにしろ偽名でしょうけどね」穏やかな、だが、言い切る様な口調だった。

彼が差し出したメモ帳を受け取り、池上はそれをポケットに戻す。

「まあ、偽名なのは否定しないけど」そこで本名を使う様な犯人ではない、と池上も思う。S・Aと愛田悟が同一人物であれば尚の事。「犯人、S・A、愛田悟は同一人物？」

愁は彼女を見て微笑んだ。「池上さんはどう思われますか？」

「質問を質問で返さないで」池上の眉がぐっと上がった。彼女は立

ち上がると、デスクの上に置いたハンドバックを掴んだ。

彼女の背中で揺れる髪の毛を見ながら、愁はくくつと笑った。「おそらく同一人物でしょう。確証はありませんが、あの意味のないメールと良い、犯人は警察をおちよくつているんでしょうね」

コートハンガーにかけてある黒いコートを取り、池上はちらつと振り返る。「愚弄なる警察諸君、つて訳ね」

愁はニツと笑った。「メールを送ったネットカフェには防犯カメラもありませんでした。メールを送る自体にも手間をかけ、その上ネットカフェまで調べています。犯人は現場に毛髪一本、指紋一つ、残さない。そして愛田悟はその存在を彼女以外の誰にも分からない様になっています」

「でも、ミサトさんは知っていた」

愁は小さく頷く。「彼女に野口恵さんが話したのは犯人にとって誤算だったでしょうね」

コートに袖を通しながら、池上は歩き出した。「野口恵さんは黙ってられなかったのかも。本気で好きになってしまったから」浮気心は理解出来ないが、その気持ちなら理解出来る、と池上は思う。

「ミサトさんが北海道在中の方だったので安心して話せたのかもしれないですね。彼女は他の浮気相手についても友人達に話していた訳じゃない様ですし」下らない話や、愚痴はこぼせても、本心は話せない、現代病だと何処かの心理学者が呟きそうだ。

何人かの捜査員が2人の横を走り去っていく。バタバタと、音が廊下に響いていた。

「知っていたのは唇に二つのピアスの男、水谷だけ。でも彼でさえ愛田悟の存在は知らなかった」否、知らなかったのは、自分の友人ではなかったからか？水谷は野口恵の浮気相手の名前も電話番号も知っていた。池上はある思いに達して、眉をぐつと上げる。「何で水谷が自分の友人と野口恵が関係しているのを知っていたか、分かっていた？」

「ええ、まあ・・・」愁は苦笑した。

池上は水谷が一生刑務所から出られない事を願ったが、それは無理な願いだった。

*

革の手袋を嵌めた手で、インターホンを押す。

中からパタパタと足音がする。ガチャツと鍵の開く音がして、ドアがゆつくりと開いた。綺麗に染め上げた茶色の髪の毛が揺れた。

『こんばんは』彼女は嬉しそうに微笑んだ。

『こんばんは』

『入って。でも子供が寝ているの。静かにね』野口恵はいたずらっぽく笑う。

安心させる様に、優しいな笑みを浮かべる。

部屋の中は綺麗だった。きつと掃除したのだろう。子供がいる割には玩具一つ転がっていない。

野口恵は照れた様に笑い、リビングに案内する。『何か飲む？』

『いらないよ』彼女の手をそっと取る。

彼女をソファーに座る様に導く。隣に座り、唇を重ねようと顔を近付ける。彼女は目を閉じる。

マフラーを取り、その首に、気が付かれない様に回す。そっと甘い言葉を囁きながら。

違和感に気付いた彼女が目を開けた時、そこに見えるのは冷淡な顔。冷やかな目、冷やかな笑い。それはひどく恐ろしい。彼女の目が何かを感じて脅える。恐らくそれは本能だろう。

マフラーをふわつと彼女の首に巻いて、につこりと微笑んだ。野口恵は安堵の表情を浮かべる。その瞬間に、一気に締め上げる。

彼女の顔が歪む、苦しさに。『やめて……』

その苦しげな表情が、ひどく美しいと思う。

細く長い指先、バラの花が描かれた爪先が、空気を求めてマフラーを掴む。首筋に爪先が付けた傷が出来、赤い血が滲んだ。彼女の脅えた、恐怖に満ちた目が、己を捕らえる。手は緩めず、その顔をその目を堪能した。冷やかに笑いながら。

彼女が恐怖の為か、苦しきの為か、失禁した。その事さえ、己をそそる。

長く、短い時間。

事切れた彼女への興味はもうない。命を奪ったマフラーを抜き取り、自分の首へ巻く。野口恵が首に付けた香水がマフラーに移り、柑橘系の匂いがした。魂が抜けた野口恵の体を一瞥して、部屋を後にした。

あらかじめ用意しておいた合鍵を使って鍵を閉める。

そして闇の中へ。

野口夫婦の部屋の中を見回してから、愁は深い溜め息を落とした。殺害や滞在に時間は掛けていないだろう、と愁は考えていた。子供が起きてくるリスクがある。旦那も何かしらの事情で帰ってきてしまつかもしれない。

それなのに、何故野口恵を選んだのだろうか。彼女の何が犯人の気を引いたのだ。何故、彼女でなければならなかったのか、それがどうしても分からなかった。

彼女の容姿が犯人の目を引いたのだとしても、野口恵の様な格好や化粧をしている女性は多い。彼女は確かにスタイルも良く、美人であったと思われるが、街を歩けば誰もが振り返る様な女性ではなかった。リスクの高いと思われる家族持ちの女性を襲った理由は何だ？

遺体が発見されなければ、疑われる可能性は少なくなる。殺人者達は遺体をまず隠す事を考える。失踪と殺人事件では警察の対応が天と地ほど違うのは、最早常識だ。遺体が発見されれば、殺人事件になる。多少の偽装をしたところで、今時の警察は早々騙されないだろう。だから、殺人者達はアメリカであればハイカー、日本であれば家出少女、1人暮らしの人間を狙う。彼等がいなくなっても、回りの人間が気付かない場合が多いからだ。下手をすれば、失踪届けですら出されない。家族は家に帰って来ない事を不思議がらない。コンコン、とドアを叩く音。「どう?」

愁は目頭を揉んでいた手を落とした。声の主の方へ振り返る。「どう、とは?」

池上は肩をすくめた。「一時間経ったのよ。もう本読むの、飽きた」

「すみません」

池上はリビングの中へと入り、野口恵の遺体があったソファーに視線を落とした。「愛田悟、S・A、犯人、全て同一人物だとして彼女は何処で目を付けられたのかしら? ミサトさんは渋谷か何処かで道を聞かれたらしい、と言っていただけ」

「犯人が野口恵さんを見つけたのはそこではないでしょうね」

「何処かで彼女に目を付け、しばらく彼女の事を調べてたのかしら?」

「ええ、おそらく。野口恵さんがどんな人物なのか、調べ上げた上で出会いを演出したのだと思います。元夫の安田さんは彼女の事を常にキラキラ輝く様な恋をしたかったのだ、と思うと言ってました。それに彼女はハーレクインの小説も何冊か持っていました」
「それは文字通り最後の恋になった様だ、愁は彼女の笑顔を思い出し、そう思った。」

PM 9:00

愁は相棒と別れ、警視庁の長い廊下を歩いていた。思ったより時間がかかったのは、野口恵の友人の数が多一事と、捜査が難航しているせいだ。

鑑識の部屋を通り過ぎ、愁は三つ先の部屋をノックした。ドアには加藤と書かれたプレートが付いていた。鑑識で個人オフィスを持つ事はあまりないが、加藤は出世した後輩を脅したらしいと実しやかに囁かれている。

「おう、入れ」

愁はドアを開け、中へと入る。初めて入る部屋だったが、存在はマッドから聞いていた。だから、この部屋に入る誰もが開けた瞬間にする反応を、愁はしなかった。彼は加藤とマッドを見て、にっこりと笑う。「すみません。思ったより時間が掛ってしまっ」後ろ手にドアを閉めて、2人の正面に立った。

ドアがある壁と空気の入れ替えをする分には十分な窓、その他は床から天井まで全て棚だった。入って左側の棚は全て本。ありとあらゆる学者が書いたと思われる本が規則正しく並んでいる。繊維、毛髪、DNA、砂、虫、草、木、人体について、そして何故かコスプレの本まで。右側の棚にはホルマリン漬けのウジ虫、何かの臓器、真っ赤な液体の中に浮かぶ白いもの、どす黒い塊等が20個程置いてあった。そしてその横には人体模型がアロハシャツを着て、鑑識の帽子を被っていた。

部屋の中央にはスチールデスクではなく、大きな白い机が置いてあった。机の上には写真が何十枚と広げられている。写真の他には地図とコピーが三つ、それに解剖の報告書。

「いいさ」加藤は写真を二枚、愁に差し出した。

愁は写真を受け取る。40代くらいのスーツ姿の男性、同じく4

0代くらいのスーツ姿の女性、その2人の子供と思われる20台前後の青年。3人は笑顔だった。笹木充の人生で一番幸せな時期。愛する妻と子。

もう1枚は遺体となった笹木充の姿だった。殴打され顔が腫れあがっている。目元、鼻、口元には出血が見られる。至る所に痣が出てきていた。着ているジャンパーにも血が付着している。ゴミ袋の上に黄色いネット、その上に彼は横たわっていた。その目は閉じられ、人のよさそうな顔は苦痛に歪んでいる。

「麻薬絡みの線も出てきてるって？」加藤は足跡の写真を3枚差し出した。

愁は顔すら上げず、写真を受け取る。「ええ、その様です」

「そいつあ、ちよつと厄介だな。あのあたりの売人は幾つものグループに分かれてるからな。探し出すのは困難だろうな」

「しかも3年前じゃあね」マッドはコーヒをちびちびと飲みながら言った。「でも3年前の揉め事を今さらどうにかしようと思うのかな？」

「人の恨み、辛みは長いからな。この世で果たせないのならあの世まで持っていく」加藤はそこまで言って、自虐気味に笑った。「科学捜査してる、俺が言うセリフじゃあねえな」

「怪談みたいだね」

加藤はコーヒを一口飲んでから、写真に視線を落とした。「せめてその、何にしくじったかだけでも分かれば良いんだが。今日2係が少し動いたらしいが、麻薬のまの字も出て来なかったって言ってたぞ。それどころか3年前売人だったって話もゼロだったよ」

「少しの間の話みたいだからね」

「本当にやってたのか？その情報、当てになるのか？」加藤が腕を組み、2人を交互に見た。だが、愁は写真を手に取り、一枚、一枚じっくりと見ていた。顔すら上げず、誰の話も聞こえていない様だった。

マッドは愁を一瞥した後で、小さく頷いた。「間違いはないと思

う」

「そうか・・・」加藤はファイルを手を取って、パラパラと捲った。この事件のめばしい容疑者は未だゼロだった。被害者がホームレスだという事もあり、当初はホームレス狩り、仲間内の争い等の線から捜査されたが、怪しい人物は一向に浮かんでこない。目撃者が1人も出てこない事もあるのか、証拠は山の様にあるはずなのに、容疑者はゼロ、加藤は日増しに苛立っていた。

マッドは笹木の写真を手に取った。優しいな笑みを浮かべた、笹木充の顔。彼が埋葬されたのは、無縁墓地。息子には連絡が取れたが、彼は父親を拒否した。酒に溺れ、墮落していった父親を許せないと。笹木はその息子を思って、それが例え犯罪でも、息子に拒否される要因が増える事になろうとも、麻薬の売買に手を染め様とした。まだ息子にはその事実は知らされてはいない。それを教えたら、息子はどうするだろうか？余計、父親を拒否するのだろうか。

「ゴミはゴミ捨て場に」愁がボソツと呟いた。
ファイルから顔を上げ、加藤が彼を見た。「あ？何だ、それどこで聞いた事があんな」

「3年前、16歳の高校生2人がホームレスを殺害。逮捕時、彼等が言っていた供述です」愁は写真を机の上に置き、コーヒーを手を取った。

「ああ・・・」加藤は最近やけに落ちた記憶力を駆使して、何とかその事件を思い出した。3年前、優秀だと評される高校に通う生徒2人が、ホームレスを殺害。2人は遊んでいて、道を塞ぐ被害者が邪魔だと言って暴行。一時間に及んだ暴行の末、弱った被害者に向かって大小様々な石を投げつけ、ゲームをしたと言う。2人は直ぐに捕まったが、反省の色は全くなかった。その時に「俺達はゴミをゴミ捨て場に捨てただけ」と言った。加藤は眉を寄せ、手に持ったファイルに再び視線を落とした。「これもそうだっていうのか？」
「ええ。麻薬うんぬんは無関係だと思われます」少し冷めた、濃いコーヒーを口にする。シゲの情報は、今回は役に立たなかった様だ。

「犯人は15歳から19歳の男性。おそらく裕福な家庭に育ち、真面目な人物。学校にもきちんと登校していています。自分達と結び付く場所で笹木充さんを殺害したんでしょう。だから、遺体を運んで、あの場所に遺棄したと思われれます。ジャンパーに付いていた革靴からおそらく高校生ではないでしょうか。あのあたりの中学校はスニーカーが指定だったと思いますし」

「あの辺りの奴らならそうだろうけど、あの街は色々な人間が集まる」

「ええ。ですが、遺棄した場所等を知っている事から、土地勘もあつた様なので。地元の間人が有力だと思われれます」

「いわゆるホームレス狩りってやつか？」

「どうでしょう？ですが、何かが彼等の気に触ったんでしょうね、笹木さんの」どちらにしろ、その差はないだろう、と愁は思う。ホームレス狩りであろうとも、何かが気に触って殺害しようとも、違いはない。彼等は笹木充を殺害した。その事実は揺るがない。

加藤は唇の端を噛み締めた。またか、声に出さずに呟く。どうしてこいつ等は気が付かない。一時の『むかつく』だけの気持ちで、人の命を奪う事や多くの人間の人生を大きく変えてしまう事に、前途溢れる自分の人生全てを棒に振る事に。何故、理解出来ない。

「結び付く場所って何処かなあ？」マッドはデスクの上に置いてある地図を広げた。黒いペンをジーンズのポケットの中から出し、遺体発見現場にxを付ける。「遺体発見現場はここ」点状血痕があつた場所4箇所にxを付ける。「点状血痕」

「犯人が3人と仮定して」愁は穏やかな口調で言った。3人と仮定するのは、靴跡がなかっただけで、暴行に加わったものが他にいても可笑しくはないからだ。「笹木さんの身長は175センチ、体重は65キロ、夜中とは言え、人目が気になるでしょうから、大した距離は運んでいないでしょう」

「だとしたら」マッドは遺体発見現場の周り、1、2キロ辺りをぐるっと丸で囲む。「この辺り」

「学校が二つあるな」加藤が地図を睨む様に見た。

「小学校と中学校。この二つなら愁の言う結び付く場所になるね」

「だが、公園もある」加藤はマッドが囲んだ丸の中の公園を指差す。丸の中には大小合わせて4つの公園が存在していたが、3つは警察が既に調べていた。残りの一つを、加藤は指でトントンと叩いた。

「ここは調べてない」

「公園なら何時も溜まり場になっているのかもしれないね。だから遺体を放置しておく訳にはいかなかった」マッドは腕時計に視線を落とした。「この三つ、行ってみる？」どうせ、言わなくても行くのだらうけど。

愁は2人を交互に見た。「勤務中ではないんですか？」

「俺は勤務中だが、マッドはもう上がってる」加藤はマッドを顎で指した。「行くなら残業手当が付く様に主任に言っておいてやる」

マッドはニツと笑った。愁とマッドの給料はFBIから支払われている。日本の税金からではない。

「俺はプロフィールを吉沢に渡してくる。その後、合流出来れば行くが、事件が起きなかつたら、だな」出世を断ったとしても、加藤が現場の責任者になる事は多い。その上、夜勤はこの上なく人手不足だ。現場を任せられる人材がいれば、飛び出して行けるが、生憎今日は1人もいない。

2人は小さく頷いた。

車内で簡単な食事を済ませてから、愁とマッドは公園に向かった。遺体発見現場から一番近いのが、この公園だった。

公園とは言っても、入り口から全てが見渡せる程小さなものだった。周りを取り囲むように、まだ細い木と民家の塀がある。他にはカラフルな滑り台、ジャンゲルジム、砂場、ベンチが三つ。

「桜はないね」マッドは近くにある細い木を見上げる。「これは桂だね」

「ああ、その様だ」愁はマグライトを持ち、入り口から左へと進んだ。

「じゃ、僕はこっちかな」マッドはそう呟いて、右側へと進む。警視庁鑑識と書かれたジャンパーの中から、マグライトを取り出す。入り口に程近いベンチを照らす、あるのは鳥のフンと誰かが忘れた玩具だけ。マッドはしゃがみ込み、ベンチの下を照らす。何もなし。木の周りや芝生も照らし、じっくりと見たが、何もなかった。

落ちているのは紙くずやら、お菓子の空き箱、コンビニ袋、ビールの缶くらいだった。

「何かあったか？」

マッドが振り返ると、愁が後に立っていた。彼は立ち上がると、首を振った。「ないよ。そっちは？」

「ないな」愁はマグライトをポケットの中に入れた。

「笹木さんが殺害されてから9日。雨は小雨が一度あったみたい。血痕全てを洗い流してしまっようなものではなかったけど、もしかしたら犯人達が洗い流しているかもしれない」

「後は埋めたか、だな」

「埋める？」マッドは砂場をちらりと見た。「どう思う？あれ？」

「通報がなかったという事は掘り返れてないって事だろう？この公園には人が出入りしている気配がある。掘り返されていない可能性は少ない。血痕が公園や学校にあれば通報されていてもおかしくない」愁は淡々とした口調で言うと、歩き始めた。

マッドはキッドを持って、後を追いかける。「でも、公園や学校

なら子供がよく怪我をするから通報されないかもしれないよ」

「そうだな。だが最悪、人の印象には残る。それで犯行現場が分かる」

マッドは腕時計に視線を落とした。この時間では、学校には人が少ない。加藤が小、中学校に電話し、門の鍵を開けておいてくれる様に頼んではいるが、たまたま残っていた教師が数人いるだけの様だった。他の教師達は既に帰宅しているだろうから、聞き込みは出来ないだろう。

2人は公園から近い、小学校へと向かった。

門の前で立ち止まり、2人は違う場所を見る。

「桜が2本」マッドが呟くように言った。門の側に2本、大きな桜の木が立っていた。

「マッド」

「何？」桜の木に目を凝らしたまま、マッドが言った。

「靴跡がある」

マッドは愁を見て、彼の視線の先を追う。門の上に泥にまみれた靴跡があった。大分薄くなっているが、修正を加えれば照合出来そう。乗れ越えたのかな？だとしたら指紋も取れそうだけど、犯人かどうかは微妙なところだね」マッドはキッドを足元に置き、中からラテックスの手袋を取り出した。「門を乗り越える子供なんて小学校には沢山いそうなもの」

「そうだな」愁はマグライトで靴跡を照らしながら、淡々とした口調で言った。「外から中へ入ってるな」

マッドは手袋を嵌めると、カメラを取り出し、靴跡を映し始めた。「あの、すみません」

愁とマッドが声の主を見ると、40代くらいの男性が立っていた。くたびれたスーツ姿で、サンダル履き。髪は白髪交じりで、顔には疲労の色が浮かんでいた。

愁はバッチを取り出し、広げて見せた。「警視庁捜査1課の浜野です。こっちは鑑識のカーペンターです」

「そうですね、御苦労さまです。私はこの学校の学年主任をしています、平本と言います」

「御忙しいところ申し訳ないのですが、お話を窺っても宜しいですか？」

「ええ」平本は何処か緊張した面持ちで言った。

マッドが門を開け、愁は中へと入った。平本の側へ行くと、彼は穏やかな口調で言った。「最近、ここで何か変わった事がありませんか？」

「え？」平本は顔を引きつらせ、門の靴跡を採取しているマッドを見た。「何かうちの学校であつたんですか？うちの生徒が何か？」

「いいえ。生徒さんが何かに巻き込まれた訳ではありません」

平本は安堵の表情を浮かべた。「そうですね。変わった事ですよ。ね？」彼は愁が頷くのを見ると、頭の中に手を突っ込んで掻き廻り始めた。「えーっと」

「例えば、誰かが夜中に校庭に侵入したとか・・・」

「夜中？ええ、それは何度もありますよ。ここ何日か前も佐藤さんが朝掃除をしていましたし」平本はそう言うと、校舎の裏を指差した。「門は閉めてから帰るんですが、校舎の裏のフェンスは低くてよくそこから入ってくるようです。朝お菓子の紙くずやらフィルムやら、煙草の吸殻やビール缶が散らばっている事が多々あります」

「その佐藤さんという方はいらっしゃいますか？」愁は校舎の一階の明かりの付いた窓を見た。窓の中には数人の人影が見え、こちらを見ていた。

平本は小さく首を振った。「もう帰宅しました。呼んだ方が宜しいですか？」

愁は一瞬考えてから、「いいえ」と言った。「電話番号を教えてくださいませんか？」

「はい。今、取ってきます」平本はそう言い残して、足早に校舎の中へと消えていった。

愁は桜の木をマグライトで照らした。愁が手を伸ばして届く高さ

の枝が折れている。「マッド」

「何？」

「枝が折られてる」折られた枝を見ながら、愁は少し大きな声で言った。

マッドはキッドを抱えると、愁の側へと言った。ライトで照らされた部分は間違いなく剪定されたものではなく、折られた跡だった。枯れかけていない事から、まだ折られてから日が浅い事も判る。「佐藤さん呼んでもらった方が良いんじゃない？何だったら僕が話聞くよ」マッドはいたずらっぽく笑った。

愁は手をひらひらと振って、彼に背を向けた。「俺は校庭を見てくる、ここは頼む」

「イエッサー」

校庭は狭かった。それでも鉄棒にブランコ、小さな砂場、隅に体育館があり、その上にプールらしきものが見える。愁はマグライトを片手に端から照らして行った。

マッドはキッドの中からナイフを取り出した。

「あの、刑事さんは？」

マッドが振り返ると、平本と30代くらいの女性が立っていた。平本の手にはあるべきものがなかった。

「どうかしましたか？」

「佐藤さんから話を聞いたんですけど、何日か前に校庭に血みみたいな跡があったって」女性は平本とマッドを、不安げな表情で交互に見ながら言った。

「それは何時頃の話ですか？」

「先週の・・・」彼女は視線を泳がす。「えっと、水曜日か木曜日辺りだったかと」

「どの辺りに血の跡があったのかわかりますか？」

「いえ、そこまでは。佐藤さんなら覚えているかと思います」

平本が不安げな目でマッドを見た。「呼んだ方が良いでしょうか？」

「そうですね。呼んで頂けると助かります」マッドは落ち着いた口調で言った。

平本は頷くと、再び校舎に戻って行った。

「あの、桜の木少し貰って良いですか？」

「え？」女性はきよとんとした顔で彼を見た後、すぐに頷いた。「ええ」

マッドは満面の笑みを浮かべた。「ありがとう」

15分後、門の前に一台の軽自動車が停まり、中から50代くらいの女性が降りてきた。彼女はジーンズと黒いコートを羽織っていて、髪は濡れていた。門の所に立っていた平本が女性と一緒に、2人の側へ来た。

愁はバッチを取り出し、彼女に見せた。「佐藤さんですね？わざわざお越しいただき申し訳ありません」

「いいえ」佐藤はコートの襟を寄せて、小さく首を振った。「電話で聞いたんですけど、あれが血の痕かどうか自信がなくて」

愁は穏やかな笑みを浮かべる。「それでも構いません。場所はどのあたりでしょうか？」

「こつちです」佐藤は歩きだした。「でも、もうその痕は消えてしまった様ですよ？子供達が遊んでいるせいか、その日のうちには消えてしまった様で」

「大丈夫ですよ」マッドは振り返った彼女に微笑んで見せた。「見つけたのは何時ですか？」

「先週の水曜日でした。お菓子の箱とかフィルムとか、煙草の吸殻とかが落ちていて、その近くに血みたいな痕が点々としていて」

「どのくらいありましたか？」

「えーっと、そんなにひどくはなかったと思います」

「その時のゴミなんかは、まだありますか？」

「いいえ、捨ててしまいました」

「校庭に入られたり、荒らされていたりとかってというのはよくある事なんですか？」

「ありますよ」佐藤はふうと溜め息を付いた。「一番ひどい時は一階の窓が全て割られて昇降口が血まみれでしたから」彼女は鉄棒の側で立ち止まった。「この辺りです」

愁とマッドはそれぞれマグライトで地面を照らした。あるのはいくつかの子供の足跡。足で円を描いた跡もある。確かに目に見える限り、血痕はない。

佐藤と平本は2人から離れた場所で、不安げに見守っていた。

マッドは鉄棒の近くにしゃがみ込み、キッドの中からルミノールを出した。まずは、と鉄棒にスプレーする。青白い光が三つ。マッドはその上からヘアスプレーをかけ、固めた。「シユウ、見て」

愁はマッドの側にしゃがみ込む。青白く光る三つの血痕、一つは上から下に落ちた事を示していた。もう一つは指紋付きで、擦り付けた様な痕。もうひとつは真横からぶつかった様な痕。

「殴られた時に飛んだ血痕かも」マッドは首にぶら下げたままのカメラを構え、シャッターを切った。「もう少し血痕が見つかったら信さんに電話する。そしたらシユウは帰った方がよいよ」

「ああ、そうするよ」愁はそう言うのと立ち上がり、平本と佐藤の方へ向かった。

ちゃんと帰ってよ、マッドは親友の後ろ姿に向かって呟く。

「すみません、もう少しお話を窺っても宜しいでしょうか？」

「はい」2人は同時に頷く。

「夜中に学校へ入ってくる人物の心当たりはありますか？」

「色々ですよ」佐藤は首を振った。「繁華街が近いですし、酔っ払いや不良やらが入って来るみたいで。一か月前は朝鍵を開けて入ったら2人の男の人が校庭で寝てましたし」

「ホームレスの方が雨宿りしてた時もありました」平本が昇降口付近を指差した。

「そうですね」

「近所の方が夜中うるさいって警察を呼んだ事もあるんですよ。花火とか爆竹とか鳴らしてたみたいで」佐藤は大きく溜め息を付いた。

「中にはこの学校の卒業生もいて」

その溜め息以上のやり切れない思いを、今後2人に与える事になりそうだと愁は苦笑した。そしてそれはすぐに現実のものとなる。「シュウ」

愁が振り向くと、地面が点々と青白い光を発していた。そしてその先には30cm程の光。そこから引きずった様な跡が青白く、暗い場所に浮かぶ様に光っていた。

土曜日

「遅いって言わないで」

「まだ何も言っていないよ、井上さん」

「何の話？」

井上は眉を曇らせたまま、一係の部屋の中へ足を踏み入れた。真っ赤な髪を高い位置でまとめ、ジーンズに小さな虹が沢山描かれたシャツを羽織っている。大事そうに胸に抱えたクリップボードを、愁に差し出した。「被害者の爪の中から出てきたウール100%の繊維の販売元が判明したの」

クリップボードを受け取り、愁はそこに視線を落とした。「そうですか」

「手芸用の毛糸だった。既製品としては売っていないくて、完全に手作り専用みたいよ」

池上は椅子から立ち上がると、クリップボードを覗いた。「それで？」

「販売元に聞いてみたら、都内に8店舗、関東近県だけで23店舗全国に至っては合計で45店舗もある手芸店に卸しているみたいなの。その店のオリジナル商品だったんだけど、人気NO1商品だった」

「人気商品じゃ、誰が買ったかなんて覚えてないわよね」クリップボードに視線を落としたまま、池上が穏やかな口調で言った。

「毛糸は何万個も売れたらしいわ。インターネット販売もしていたらしいから、それこそ全世界に」

「編み物する人、そんなに多い訳？」池上は自虐気味に笑う。編み物なんて中学生以来していない。そして中学生の時に悟った、これは自分には無理だと。

「毛糸を買ったのがイケメン男性ならきつと店員も覚えているんだろうけどね」井上はちらつと愁を見上げた。

「男性が編み物をしていても別に可笑しくはないでしょうから、それも有得ない話ではないでしょうけど」愁は井上に穏やかな笑みを向けた。「ただ、この犯人の場合は別でしょうね」

「それって彼女か誰かの編んだ贈り物のマフラーで被害者を殺害したって事よね？」井上は心底嫌そうな表情を浮かべる。その表情から誰に感情移入しているのか、直ぐに分かった。「狂ってる」

「狂っていない殺人者なんかいたかしら、特にこの手のタイプの犯人で」池上が眉をひそめる。

「この犯人は特別よ」井上が何処かムキになつた様に言った。

「ええ、特別ですね。頭の良さでも郡を抜いています」

井上と池上が同時に、愁に視線を向けた。「どういう意味？」

愁はクリップボードから視線を上げる。「松本淳の比ではない、というところでしょうか」その声はひどく淡々としていた。

池上は両手をぐつと握り締めた。

「ねえ、犯人は過去に殺人事件を起こしているんでしょう？」井上は腕を組み、デスクに寄り掛かった。

「ええ」愁は池上の握り締めた手を見て、表情を緩めた。「十中八九間違いないと思います」

「プロフィールに該当する事件はあった？」

「いいえ。野口恵さんの容姿、性格等に似通った被害者の事件は3件ありましたが、どれも手口がバラバラで、プロフィールも一致しませんでした。また、殺害方法からも調べてみましたが、野口恵さんの様に暴行されていないものはありません」だからこの犯人は狡猾なのだ、と愁は思う。犯行の手口を変えていけば、なかなか連続殺人と結び付けられない。ある時は絞殺、ある時はナイフを使い、ある時は毒殺。又、被害者が似通っていれば、それも連続殺人の対象に上がるが、それもない。例えば野口恵の様な今時の格好をした若い女性、中年男性、子供、年寄り、一見接点のないと思われる人

間を違った手口で殺害していれば、そこから警察が接点を見つけ出すのにどのくらいの時間が掛かるだろうか。恐らくそれは気が遠くなる程、長い時間が掛かる。無論、愁はその時間を短縮する為にいるのだが。だが、一見バラバラに見える被害者達も、犯人から見れば好みの対象なのだ。なにもテッド・バンデイの様に、黒髪の若い女性ばかりを狙う、そういった犯人が全てではない。

「遺体がまだ発見されていない、とかそういう事かしら？」池上はゆっくりと両手を解き、長い髪を後ろに払った。

「その可能性もあるかと思えます」日本であれば死体を何処に隠すだろうか、と愁は頭を捻らせた。アメリカでは死体を自宅地下に埋めたりする。サムも自宅の地下に3人の遺体を埋めていた。ご丁寧にコンクリートをその上に流し込み、腐敗臭を押さえていた。住宅事情の違いから、日本ではその可能性は低い。だとしたら山や森、海などに遺棄するのが多いのだろうか。山や森から白骨死体が出てくる事件も多い。だが、野口恵の遺体はそのままだった。

「嫌な事件」井上がボソツと呟く。

愁はクリップボードを井上に差し出した。「ええ、本当に」

井上はボードの中からメモ用紙を抜き取り、愁に差し出した。「とりあえず毛糸を売っている都内の店舗」

「ありがとうございます」愁はその紙を受け取った。メモには店舗名と住所、電話番号が書いてあった。

携帯のバイブ音がして、3人は一斉に自分の服を弄った。

愁が手を小さく上げる。「私です」マッド・カーペンター。愁はその名前を見ると、眉をひそめた。「もしもし？」

「はい、シュウ、おはよう」恐ろしく明るい声。「良い天気だね」愁は携帯に耳を澄ましたまま、一係の部屋を出て行く。

「あれ？女？」彼の背中を追いかける様に、井上のからかう声が聞こえた。

「シュウ？」

廊下に出ると、愁は小さな声で言った。「何か分かったのか？」

2人の視線を避ける様に、一系の部屋から少し離れた場所にある喫煙スペースへ向かう。

「うん」マッドは朗らかな声で言う。「今、何処？何でそんなに小さな声で話す訳？あ、分かった。泉ちゃんが近くににいるんだね」

「一系の部屋から、今出たところだ。それで？」喫煙スペースには入らず、廊下の窓に寄り掛かり、愁は窓の外へ視線を投げた。マッドの言うとおり、今日は良い天気で、頬に当たる日の光が心地よかった。

「桜のDNAが一致したよ。門から採取した指紋と靴跡もジャンパーに残っていたものと一致」

「被害者のDNAは？」

マッドは大袈裟な程、大きな溜め息を付いた。「知ってるくせに。まだ無理に決まってるでしょ？早くても今日の夜だよ」

「他に何かあったか？」

「ないよ。小学校だからね。鉄棒には嫌になる程の指紋が出たけど、結局ジャンパーの指紋とは合わなかったし、足跡は皆無」桜と血のDNA、100を軽く超える指紋、それだけで昨日は楽しい夜を過ごせたよ、マッドは心の中で呟いた。椅子の上でほんの少し眠れただけ、今は若干吐き気がしていた。超過勤務も良いところだった。しかしそれを言ったら、愁も同様なのだけれど。昨日、GPSはあの界限から動かなかった。

「捜査の方はどうなってる？」

「信さんが吉沢さんにプロフィールを渡して、今それを元に捜査してると思う。僕が知ってるのは、昨日あの後二係が卒業生の名簿を貰っていた事くらいだよ」15歳から19歳まで、と愁は言ったが、二係は14歳から20歳まで広げて持って行った、その事実をマッドは黙っていた。「多分、今日は卒業生を調べるんじゃない？」

「そうか、ありがとう。マッド」

「何？」

「そろそろ帰れ。今日は非番のはずだろう？」

マツドは乾いた笑い声をあげる。「無理だね。僕が一番DNA早く出来るんだもの。信さんが休みを調整してくれるって言ってたから大丈夫だよ。人の事より自分の事も気を使った方が良いよ、シユウ」

*

「いらつしゃい」

「こんばんは」

「何だ、珍しい2人が揃ったな」マスターは啜え煙草のまま、グラスを拭いている。彼は顎でカウンターの奥を指した。

愁は小さく頷いた。

「喧嘩は御免だぞ、シユウ」マスターは呟く様に言った後で、低い声で笑った。「失言だったな。刑事に向かつて」

愁は苦笑し、店の奥へと進む。店内は暗く、狭い。カウンター席が10席と四人掛けのテーブル席が2つあるだけの小さな店。今はテーブル席に3人の若い男が座って、談笑しながら飲んでいるだけで、他に客はいない、村上大介以外は。

その小さな椅子に腰を下ろした彼は、座り心地の悪さに何度も腰を動かしていた。足を組もうにも、カウンターが邪魔で組めない。大きな身体を揺らす度、椅子は悲鳴の様になき、マスターは苦笑を彼に向ける。彼の前には水色のグラスが、ビール瓶と共に置いてあった。瓶は既に空で、グラスの中にはビールがほんの少し残っていた。

「すみません、遅くなりました」愁は大介の隣に腰を下ろした。

「構わねえよ」大介は横を向き、愁を見つめた。「それより、そのしゃべり方、どうにかなんねえのかよ？ 気持ち悪いんだけど」

愁は微かに肩をすくめた。「無理ですね。癖になっっていますから」大介はぴくりと眉を上げ、ふんつと笑った。「癖ね。警察だから」まるでそれだけで、全て納得出来るとも言いたげな口調だ。

マスターが茶色の液体が入った、しゃれたグラスを愁の前に置いた。「飯は？」

「お願いします」愁はにつこりと微笑む。

アルプスはバーではあるが、常連達は酒も頼まず、飯を頼む者が多い。マスターは元板前で、カクテルより、料理の方が断然美味しい。「大介、お前も食うか？」マスターは煙草を灰皿で揉み消し、流し台で手を洗いながら、彼に笑顔を向けた。

「食う」大介はビールを飲み干すと、グラスをカウンターの端へ置いた。「ついでにこれも」

マスターは頷くと、冷蔵庫からビール瓶を取り出し、栓を抜いた。彼はグラスにビールを注ぎ、2人の前から立ち去った。

愁はスーツのポケットから煙草を取り出した。ウーロン茶を一口飲み、煙草を啜え、火を付けた。煙を吸い込むと、睡眠不足のせいか、視界がぐらりと揺れた。

「お前、ちゃんと寝てるのか？」

「え？」愁は大介の顔をきよんとした表情で見つめた。言葉の意味を、理解して思わずにやつと笑う。「まさかあなたの口からそんな言葉が出てくるとは思いませんでした」

「失礼な奴だな」大介もにやりと笑う。自分の目の下を指差し、彼はからかう様な口調で言った。「クマ、出来てるぞ。そんなに働かされる職業なのか？ 警察つてのはよ」

「いえ、そういう訳ではありませんけど」愁は思わず柔らかな表情を浮かべた。大介は大介なりに心配しているのだ。只、大丈夫なのか？ と聞けないだけで。「ここのところ、事件が立て混んでいたの

で

「そうか」大介は溜め息を付く。「物騒な世の中だもんな。ササさんをやった犯人はまだ捕まってるのか？」

「ええ」愁は視線を伏せた。二係は殺害現場の小学校の卒業生を調べてはいるが、進展はないようだった。ただ、以前花火がうるさいと夜中に通報を受け、駆けつけた警察官が2人の高校生 制服はブレザーだったが、何処の高校までかは覚えてない、私服姿の15、6歳の子供を覚えていた。その他にもあの小学校はたまり場になっているのか、金髪の若い男が爆竹を鳴らしていたり、暴走族が喧嘩を始めていたり、警官が何度か呼ばれている様だった。だが、プロフィールに合うのが、高校の制服を着た2人と私服の1人だった。大介は小さく頷く。「そうか」

「ササさんとは交流があったんですか？」カウンターに肘を付き、愁は煙草の先から立ち上る煙を見ていた。

「交流？面倒くさい言葉を使うなよ」大介はほんの少し表情を緩める。「あの人はシゲさんみたいにお節介なんだ。なあ、息子さんの話は知ってるか？」

「ええ」

「だからだと思っけど、アホな若い男を見ると声を掛けずにいられないみたいだ。俺も、女と路上で揉めてる時に声を掛けられた。好きな相手なら喧嘩なんかせずにしっかり守ってやれってさ。人生なんて何時何が起きるか分からないだからってさ。後でササさんの奥さんの事聞いて、その意味が染みたよ」彼は照れた様に笑う。「この街にはシゲさんやササさんに声を掛けられた野郎や女は死ぬ程いるんだよ。昔の俺等みたいにさ」大介はビールをぐいっと喉に流し込んだ。

愁は大介に視線を向けた。

「何だよ？」

「昔の私達のように声を掛けたのかもしれません」小学校に落ちていた煙草の吸殻。彼等はきつと煙草を吸っていてササさんに注意をさ

れたのだ、だから気に障ったのだろう。そしてササさんの命を奪った。人、1人の命を奪った、接点。

「はあ？」大介はあからさまに眉をひそめた。

愁は煙草を揉み消すと、立ち上がった。「すみません、1本電話をかけてきます」

大介はこめかみをポリポリと搔いて、面倒くさそうに笑う。「あ
あ」

愁はスーツのポケットから電話を出して、思案する。誰に？この時間ならば冷子に電話しても、動くのは明日になる。吉沢か加藤、どちらにかけるか悩みながら、店を出た。カランとドアの上にぶる下がっている鈴が鳴った。ドアが閉まるのと同時に加藤の携帯に電話をかけた。

加藤は一回目のコールだけで、電話に出た。「おう、何だ？」

「浜野です。お疲れ様です」

「おう。まだDNAは出てないぞ」

「ええ、解っています」愁は辺りに人通りがないのを確認してから、話始めた。アルプスの看板がジジツと音を立てる以外、遠くに聞こえる喧騒だけが聞こえていた。「犯人達は煙草を吸っていて、ササさんに注意されたのかもしれませんが」

「煙草？ああ、そういや、小学校に吸殻があつたって言ってたな。だが、吸殻は捨てちまつたんだろう？」

「ええ、その通りです。ですが、佐藤さんという方が銘柄を覚えているかもしれません。それに鞆の中かポケットに確実に持っていると思います。それに匂いもするでしょう？」愁は穏やかな口調で言う。

「なるほどな。だが、それはめぼしを付けた後に判断出来る材料にしかない」

「そうでもありません。今は煙草を購入するのに規制が厳しくなっています。自動販売機はタスポがないと購入出来ませんから、高校生が買うとしたらコンビニ等の対面販売で年齢を偽って購入するし

かないでしょう。あの界限に煙草を売っているコンビニや煙草店など、比較的店員の意識が緩ければ身分証を提示しなくても売ってしまふ可能性もあると思います。あの界限で絶対に購入しているという保証はありませんが」

「やってみる価値はあるな」加藤が愁の言葉を遮った。「ちよつと待て」携帯を無造作にデスクの上に置く音が響く。キーボードを叩く音が聞こえ、続いて加藤の独り言が聞こえる。「コンビニ、煙草店。今時煙草店なんかあったか？1、2、3」ガタガタと音がして、加藤の声が今度は受話器から聞こえた。「コンビニは3件。煙草を売ってる酒屋が2件あった」

愁はスーツのポケットから手帳を取り出した。「教えて下さい」「馬鹿言え、俺がやる。オタクが動いたらややこしい事になるだろうが。動くんじゃねえぞ」

ブチツと音がして、電話が切れた。愁は手帳を終い、携帯もコートの中へ滑り込ませた。小さく溜め息を付くと、息が白い煙に変わった。愁はアルプスの店のドアを開けた。

カランと音がし、マスターがこちらに視線を向けたが、直ぐに手元の包丁へと視線を戻した。小気味いい包丁の音がし、微かに味噌の香りがしている。

愁は大介の側へと戻り、椅子に腰を下ろした。「すみません」

「もう良いのか？」

「ええ」

「早く捕まると良いな」大介が呟く様に言った。「なあ、シュウ」

大介は大きな両手で、水滴だらけのグラスを包んだ。

「はい？」愁は彼の横顔を盗み見た。柔らかく、何処か嬉しげな表情をしていた。始めて見る、大介の顔だった。

「俺、もうすぐ子供が産まれるんだ」

「はい？」

大介は眉をあげたが、直ぐに穏やかな笑みを浮かべた。「何だよ、その反応はよ。俺に子供が産まれちゃまずいのかよ」

愁も穏やかな笑みを浮かべた、心底。「いいえ、おめでとございます」

「だから」大介は呟く様に言った。「あの時の事を償いたい」

*

目がチカチカする、腰が痛い、腕と指が攣りそうだ。

「くそう」マウスを離して、加藤は椅子の背もたれに身体を投げ出した。一時間、恐ろしく長い時間だ。こんなにもパソコンを見続けたのは何時以来だろう。加藤は右腕を揉んだ。何時もは若い連中、こういったパソコン操作は任せていた。

一時間掛けて見ていたのは、コンビニの防犯カメラの映像だ。2件は終わったが、1件まだ残っている。笹木充が殺害された日の昼過ぎから0時までの映像。

「ちくしょう、老体にムチ打って働いてるのになぁんにも出てきやしねえ」

「やだ、何1人でぶつくさ言ってるの？」

加藤が肩越しに振り返ると、髪の毛と同じ真っ赤なパンツと、黄色地に虹が描かれたトレーナーを着た井上が、ファイルを抱えて立っていた。

「なぁーんだよ、虹色ウサ子か」

井上はパソコンの画面に視線を送る。「これってコンビニの防犯カメラ？」

「ああ」

「ふーん」井上はマウスを動かし、再生ボタンを押した。音声は元々ない。映像の下にはPM4:12。井上は映像を一定速度早め、視線をそこにやったまま、再び口を開く。「犯人は煙草を買ってるんだっけ？」

「そうだ」画像を再び見ると、加藤は脳みそが悲鳴を上げる声が聞こえた気すらした。

パソコンの画面には忙しく動く人々が映っている。井上は首を傾げて、画像に見入っている。加藤は脳みその悲鳴を無視して、肩を回しながら見続けていた。

しばらくすると、井上がマウスを動かし、画像を止めた。「見て」止まった画像にはダウンジャケットにジーンズを履いた、黒い髪の若い男がレジ台の前に立っていた。

「この荒い画像じゃ、これが未成年かどうかかんねえな」

「違う」井上はマウスから手を離し、男の後ろを指差す。「ほら」

加藤は画面に近寄ると、老眼鏡を上げた。「制服姿の男だ」

「犯人は3人でしょ。革靴、制服の男2人とスニーカーの男。制服じゃさすがに煙草買えないものね」井上は再びマウスに手を戻し、制服姿の男2人の画像を鮮明にするべく、何度か修正した。「もう少し見えると、制服が分かりそうだけど」

「顔は無理か？」

「微妙なところね。荒いもの。でも、制服は分かると思う」井上はパソコンに見入ったまま、マウスを動かし、キーボードを叩いた。

「何処のだから分かる？」

加藤は画像の若い男を睨むように見て、頷いた。「分かる、随分と良い高校に通ってんじゃないか」

Episode 2 - 8 - (後書き)

テッド・バンディ・・・1974年から1978年にかけて30人以上の女性

を殺害したとされるアメリカのシリアルキラー。

真ん中分けの黒髪、若い白人女性を殺害。
(因みにサム・ウォールは架空の人物です)

日曜日

翌日の夕方過ぎ、池上と愁は警視庁へと戻ってきた。野口恵の事件の捜査は行き詰っていた。愛田悟も、S・Aも、犯人も、誰1人見付からない。その欠片さえ、警察は追えずにいた。

「煙じやあるまいし」池上は苛立ちを隠す事もなく、幾度となく呟いていた。「どうして何も捕まらないの」

2人は一系の部屋まで階段で上がり、廊下へと出た。長い廊下には数名の捜査官達が浮かぬ表情で歩いている。今日は日曜日だ。世間は休日で浮かれているのに、警視庁は静まり返っている。

「丁度良いところに来たな」二系の部屋から吉沢が出て来て、二人を見て駆け寄った。「池上、浜野を借りても良いか？」

「はい？」

「プロフィールしてもらった事件の容疑者があがった。今、任意で事情聴取してるんだ」

池上は心底疲れきった表情で、ひらひらと手を振った。「どうぞ。林さん達には私から言っておきます」彼女は若干ふら付いた足取りで一系の部屋の中へと消えた。

「宜しくな」吉沢は池上の後姿に向かってそう言うと、階段へと続くドアを開けた。

「何の事件です？」

「笹木充さんのだ」吉沢は淡々とした口調でそう言い、すごい音を立てながら階段を駆け下りて行く。

愁は慌てて、彼の後を追う。「何時、捕まったんですか？」

「さつき着いたばかりだ」

「何人です？」

「3人」吉沢はそう言い残して、廊下に飛び出して行く。

愁が廊下に出ると、加藤とマッドがそれぞれ鑑識キッドを持ち、吉沢と取調室の前に立っていた。吉沢は取調室1と2の間のドアを開け、先に加藤を通した。愁はマッドの後から部屋へと入った。

部屋の中からマジックミラー越しに見える、取調室1と2にはそれぞれ若い男と捜査官がデスクを挟んで座っていた。捜査官の顔は苛立ちに歪んでいる。その表情から、取調べが難航している様子が窺えた。

「おちよくってる」吉沢は取調室1の男を指した。「特にコイツがこっちの奴ものらりくらり交わしてる」2の部屋にいる、薄ら笑いを浮かべた男を指さす。「もう1人の奴はひたすら『お母さんを呼んで下さい。お母さんと一緒じゃないと何も話しません』って言い続けてる」

「阿呆が」加藤が吐き捨てる様に言った。

「何故、彼は制服なんですか？」愁は1の部屋にいる男に視線を向けた。彼は制服姿で、2の男は私服だった。2人の服装は乱れてはいない。制服はきちんとボタンがしめられていた。私服の男もジーンズにジャケット、中に白いタートルネックのセーターを着ていた。髪の毛も黒く、自然のままになっている。いわゆる不良ではなく、真面目な学生といった雰囲気をしていた。

吉沢は1の部屋にいる男を顎で指した。「今日は高校で何かイベントがあったみたいだ」

「それは幸運ですね」愁はぼそつと呟いた。

「幸運？どういう意味だ？」吉沢は眉を寄せる。

マッドが取調室1の部屋の男の足元を指差した。「革靴履いてる。多分、犯行時のまんまじゃないのかな？きつと制服もね」

「洗ったところで血は落ちねえからな。奴等の家に取りに行く手間が省けたな」加藤が腕を組み、厳しい表情を浮かべる。

吉沢は小さく頷いた。「1の男は18歳、2の男は19歳、もう1人は15歳の高校生だった。3人は家も近所で、頭も良い。19歳の男は何と俺の大学の後輩だ」彼は心底嫌な表情を浮かべた。「

問題はどうかやって落とすかだな」吉沢は愁を見、マツドを見た。勿論2係の捜査員は優秀だ、吉沢はそれを疑った事はない。彼にとつて一係も二係も同じ様に頼れる良い部下達だ。

「では、15歳の子からいきましよう。お母さん、を頼っているのですから、是非とも来て頂き同席してもらいましよう」愁はにっこりと微笑んだ。

確かに、と吉沢は思う。彼が一番脅しをかければ落ちそうではあった。常にソワソワして落ち着かず、捜査員が話しかけると世間話でさえビクビクとしている。2人は比較的落ち着いていたが、15歳の子の方は今にも泣き出しそうだった。だが、何故母親をわざわざ呼ぶ? 「それで、どうする? 」

「母親の前で笹木充さんの写真を見せて下さい。出来れば生前の写真と遺棄した時の写真が良いかと思えます。そして『彼を殺したのは誰か?』と2人に聞いて下さい。その子は常に誰かに依存して生きていくタイプの子なのだと思います。家では母親に、外ではこの2人に、と言った具合に。母親の前で自分が殺害した笹木さんの写真を見せられれば動揺を隠しきれないでしょうから、何かしら話し出すと思います」

「母親が否定したら? 」うちの子がそんな事をするはずがない、警察の陰謀だ、と叫んだ親が過去に何百人いた事か、と吉沢は思う。

「いいえ。自分が殺害した、ではなく、悪魔でもあの2人が殺害した、と話すと思います。責任は母親やあの2人であつて、自分には責任がないと考えているのだと思えます。その為に誰かに依存しているのでしょうか」責任を擦り付ける為に、自分がへマをする人間だと思わない為に。今、こんな場所に連れられて来て、恐怖を感じても、なお話さないで母親を待っているのは、その為だ。責任を押し付けられる誰かがいなければ、何も出来ない。

「昔、親に言われたな。『皆がやるからお前もやるのか』って」吉沢が愁を見て、ひきつった笑いを浮かべた。

「15歳の子はきつと言われた事がないのでしょうか」愁は1の部

屋にいる男を指差した。「こちらの男が主犯でしょう。実質、主導権を握っているのは、と言う意味ですが。彼の方がひどく落ち着いている様に見えますから」

「ちっ」加藤は思わず舌打ちする。この場においても落ち着き払っている高校生なんて、とんでもねえ奴だ。大の大人だつて大抵はびくつく。こいつ等は将来、どんな人間になるのだろうか。少年院に入ったところで、そう簡単にこの手のタイプの人間が更生するとは思えない。裁判員制度が始まり、少年法が変わり、刑は以前より随分重いとは言え未成年の刑期はやはり短い。否、刑期は長くても、早く出所する可能性は高い。未成年の場合更生の余地があるから短いのだが、その時間だけでは更生しきれないと思える。罪を償うのと更生するのは全く別物だ。無論、きちんと罪を償い、更生していく奴もいる。だが、鑑識をやっていて分かった事がある、罪を償い、ここにまた戻ってくる奴の多さを。

「じゃ、まず彼等2人は指紋かな」マッドは加藤に人懐っこい笑顔を見せ、自分のキッドを持った。「僕、1の子ね。信さんは2の子お願いね」

それは助かる、加藤は内心そう呟いて、頷いた。

*

未解決事件がぎっしりと詰まった本棚のガラス戸を開け、愁は一冊のファイルを抜き取った。デスクの端にファイルを置き、反対側のガラス戸を開ける。そこからファイルを二冊抜き、デスクに置く。

ガラス戸を閉め、隣の本棚のガラス戸を開け、今度は三冊のファイルを取り出す。反対側からは二冊。デスクの上には八冊のファイルが積み上げられている。

愁は椅子にドサツと腰を下ろした。デスクの上に置いた煙草を一本啜え、火を点ける。溜め息と同時に煙を吐き出し、愁は一番上に置いたファイルを手に取った。

20代後半から30代前半の男性、前科なし。ただし、人を殺害したのは始めてではないと思われる。学歴は中卒、及び中退。IQは非常に高い。仕事はしているが、比較的時間の自由になる職種。人当たりがよく、話上手。未婚であるが、パートナーはいる。幼少期に身体的及び性的虐待を受けている。

プロフィールに該当する人物が、過去に犯したと思われる事件。愁がピックアップしたのは八冊だが、これが全て同一人物とは考えではない。

愁が選んだのは、犯人のIQがずば抜けて高い、と思われる事件のファイルだった。被害者は男女、年齢、容姿、生活環境、はバラバラ。殺害方法もまたバラバラだった。また、犯人に繋がる様な証拠はほぼ残っていない。そして秩序型。

まるでサム・ウォールの様だ。遺体を隠したり、放置したり、ナイフで刺し、銃で撃ち、鈍器で殴り、首を締め、まるで警察をあざ笑うかの様に次々と人を殺害して行く。被害者は若い女性であったり、売春婦であったり、ハイカーのカップルだったり、少年や青年中には中年男性が混じっていた。被害者、17人に共通する接点が無だにはつきりしない。サムは無秩序型の犯人ではない。何かに執り付かれて、無秩序に殺害を繰り返すタイプの犯人ではないのだ。『俺が殺した奴等がたった17人だと思うか？』サムは優しげな口調で、嬉しげな笑みを浮かべて、刑務所という単調な毎日の暇つぶしであるゲームを始めた。ロバートと愁を相手に、永遠のゲームを。

一冊目のファイルをデスクの上に投げ出し、愁は二冊目のファイ

ルに手を伸ばした。途端、デスクの上に置いた携帯がガタガタと音を立てる。愁はファイルに伸ばした手を、そのまま携帯へ伸ばした。携帯を見て、溜め息を付く。藤沢冷子。「もしもし？」

「私よ。今、何処？」

「オフィスにいます」

「そう」冷子はふうと溜め息を付き、淡々とした口調で言った。「今から来てくれる？」

「了解」愁は立ち上がり、「では」と言っただけで携帯を切った。スーツの中へ携帯を入れ、こめかみを揉んだ。小さな溜め息を付き、愁は部屋を出た。

愁は重い足取りで総監室へと向かった。冷子の口調から、何かがあったのだと推測するには十分だった。今度は何だ？

総監室のドアを叩き、愁はネクタイをきゅつと締めなおした。

「入って」その声は何時になく重い。

ドアを開け、愁は頭を下げた。「失礼します」中へと入り、ドアを閉める。冷子の方へ向くと、彼女は窓際に立ったまま、暗くなつた外を見ていた。

冷子はダークグレーのツーピースを着て、髪を無造作に一つにまとめている。その彼女の後姿は何処か悲しげだったが、怒りにも燃えていた。冷子は窓の外を見たまま、淡々とした口調で言った。「笹木充さんの事件、解決したのね」

「はい」

「高校生と大学生が犯人ですって？」

愁は彼女が見ている窓の外に、視線を投げた。外は暗く、ビルの明かりだけが浮きだつて見える。「ええ、15歳、18歳、19歳だそうですね。マスコミが群がっています」

冷子は窓の外の下にちらりと視線を落とした。「だから、賑やかだったのね。純粹なはずの子供が犯す事件は何度起きても衝撃的だものね」この部屋から外の音は聞こえないが階下に行った時やけに賑やかだった、と冷子は思い出した。どんな事件でも犯人が捕まれ

ばマスコミは来る。だが、少年犯罪や大量殺人、連続殺人等のセンセーショナルな、発行部数を伸ばしそうなものは一際騒ぎ立てる。冷子はマスコミ担当とまで揶揄されているが、幹部達にだが、全ての事件に対応している訳ではない。華やかな会見を開く時、それは上を目指す者が仕切りたがる事が多い。「ギャルママ殺人事件は？」

「ギャルママ？」

冷子は振り返ると、力無く微笑んだ。「野口恵さんの事件をマスコミがそう言ってるわ」

「そうですか。残念ながらまだ犯人の尻尾さえ掴めていません」

彼女は身体中から搾り出すかの様に、深い溜め息を落とした。「今日、会議があった」

「はい」

冷子は窓に寄り掛かると、淡々とした口調で言った。「私の直属の部下である、あなた達が槍玉にあがってるわ」

要はあなたが責められている訳ですね、と愁は解釈した。違う国の違う組織所属である愁やマツドを能なしだと責めたところで、それが漏れた時に立場が悪くなるのは幹部達の方だ。特に日本とアメリカの関係を見れば、外交問題にさえなりそう。幹部達が気に入らないのは2人ではなく、悪魔で冷子自身だろう。彼女とて、それくらいは身に染みている。だが、冷子をそう簡単に警視総監からは降ろせない。彼女が着任してからの検挙率の良さや、マスコミ受けの良さを考えれば、何も汚点がない状態で降ろす事は出来ない。権力を握りたい幹部達はジレンマに陥っているのだろう、だから何かを見つけては責め立てる。

「一つの案が出たの。有得ない案よ」彼女は視線を窓の外に向けたまま、呟く様に言った。「事件が一定期間解決出来なければ他の係に回す。現場を無視した意見だわ」

「一定期間とは？」

「まだ分からないわ。でもコールドケースになる前よ。きっと月単

位で考えているはずよ」

「それが野口恵さんの事件なのですか？」愁の脳裏に浮かんだのは池上が激怒する顔だった。

「ええ。それとマッドが抱えている強盗殺人事件、通り魔事件」

愁は視線を合わそうとしない、冷子の横顔を見つめた。「マッドの方は知りませんが、野口さんの事件が難航しているのは確かです。ですが、何処に回してもこの事件は難航します」

冷子はゆっくりと視線を愁に向けた。「どう言う意味？」

「マッドと井上さんが追ってもなかなか尻尾を出さなかった犯人ですよ？」冷子はこの事件も、マッドが現在進行形で抱えている事件二つも、2人から逐一報告を受けている。だから殆どの内容は既に知っていた。

冷子は肩をすくめた。「そうだったわね。で、どうするの？」

「一都四県以外の未解決事件のファイルが欲しいのですが」

「山の様に来るわよ？」

「無論、全てではありません」

冷子はふうと息をついて、デスクに戻った。デスクの上に転がしてある煙草に手を伸ばし、淡々とした口調で言う。「何処の警察にも優秀なプロファイラーがいる訳じゃないわよ。どうやってよりわけするつもり？」

「大都市と言われる土地で、過去15年から20年の間、証拠を一切残さず、目撃情報もなし、あるとすれば185センチでモデル風の容姿。秩序型」

煙草の煙を吐き出し、冷子は座り心地だけは良い椅子に腰を下ろした。「やだ、それだけ？何百ってくるわよ？」

「構いません。マッドと2人でより分けますから」

「マッド？彼、プロファイルまで出来るの？」冷子は柳眉を寄せる。「その辺の新入りプロファイラよりは出来ますね。マッドはプロファイラの息子ですし」愁は出会った当初、マッドはロバートの跡を継いでプロファイラになるのだと思っていた。マッドはプロ

ファイラ であるロバートを尊敬していたし、誇りに思っていると口癖の様に言っていた。だが、マッドはその頃からすでに科学オタクだった。ロバトはマッドに捜査をやらせるつもりはなかったらしく、息子は研究室か少なくとも科学捜査に行った方が世の為だと思っていた様だ。しばらくするとロバートは愁をスカウトする様になった。そのきっかけが何だったのか、そしてロバートの口説き文句が何だったのか、愁は幾ら思いたそうとしても思い出せない。何年も口説かれたのに。

「マッドに出来ない事ってある訳？お願い、あるって言って頂戴」
「じゃないと自分が無能だと言われている様だ、と冷子は思う。科学捜査にプロファイル、どちらもちんぷんかんぷんではないものの、やれるかと言われれば出来ない。その上マッドは料理もプロ並み、他の家事も完ぺきにこなすと聞いた。それに引き換え、自分は料理も家事も一切出来ない。出来るのは仕事だけ。」

「結婚生活の維持ですかね」いたずらっぽい笑みを浮かべ、愁は何時もの穏やかな口調で続ける。「学生時代に結婚したんですが、半年で離婚しましたから」

冷子はニツと笑った。「それ、初耳だわ」

*

部屋の明かりを点け、愁は手紙の束をデスクの上へ投げた。コートとスーツのジャケットを一緒に脱ぎ、ベットのの上に放る。ベットの上に腰を下ろし、愁は深く長い溜め息を付いた。

日本での住まいはマッドに言わせれば、『悲惨さが滲み出ているものだった。確かにアメリカの部屋はもう少しマシだったと、自分でも思う。』

ベット、デスクに椅子、ノートパソコン、備え付けの電子レンジと冷蔵庫とエアコン、クローゼットの中にダンボールに入れたままの洋服、かろうじて出してあるスーツ類は中にかけてある。デスクの横には本が、やはりダンボールに入ったまま置いてある。それでも開いているだけマシで、玄関近くにはまだ封すら開けていないダンボール箱が積み重ねられていた。

キッチンはあるが、使用した事はない。やかんもなければ、コップすらない。否、あるが箱の中に入れっ放しのままだ。どうしてもまとまな物が食べたい時は外へ出るか、最悪となりのマッドの部屋へ行く。

ネクタイを解き、コートの上へ投げ、愁はワイシャツの胸ポケットから煙草とライターを取り出した。煙草を抜き、火を点け、箱とライターをデスクの上へ置く。その手に触れて、手紙の束から紙がヒラヒラと舞い落ちた。愁はその落ちた紙を取り、呟く。「ガス」基本料のみ。

愁は立ち上がると、椅子に腰を下ろした。ここ数日、家には帰っていたが、ポストを覗くのを忘れていた。今日久しぶりに開けたら手紙や請求書、ちらしが山の様に入っていた。

ちらしと光熱費の請求書を選び分け、愁は手紙を一つ手に取った。クリスマス用のシンボルカラーである緑と赤で縁取られた封筒。差し出し人の名前は両親だった。

愁はちらつと時計に視線を落とす。12月24日。PM20:25

そう言えば街はカップルだらけだったな、と愁は思いだした。両親からの手紙をノートパソコンの上に置いて、愁は手紙の中から目的の字を探す。手紙は大概がアメリカの友人からだった。その殆どがクリスマスカードだろう。それぞれ封筒にはクリスマススを思わせる絵柄が描かれていた。ジェイの殴り書きの様な文字も、ロバート

の見慣れた文字も、次々とパソコンの上に置いていく。その中から癖のある日本語で書かれた、井上の字を見つけて、愁は思わず苦笑する。だが、それもパソコンの上に置いた。

真っ白な封筒、求めていた、美しい文字。筆跡鑑定士がこの字を見たら、何と鑑定するのだろうかと思はる。

愁は丁寧にレターオープナーで封を開けた。同じ真っ白なカード。レースの十字架が神秘的に描かれ、氷の結晶が所々に描かれていた。封筒の中に何かが入っているのに気が付き、愁は中を覗いた。レースペーパーに包まれ、リボンのシールが止めてある小さな包み。そつと慎重にシールを取り、紙を開けると、アクリル樹脂で作られた十字の付いたストラップが入っていた。こんなもの、何処で買ったんだろう、と愁は思った。アメリカではストラップを付けている者は殆どいない。売っている場所もさほどある訳じゃない。尤も愁も付けておらず、マッドは常に2、3個のストラップを付けている。左の手でストラップをそつと包んで、愁はカードを開いた。

E p i s o d e 2 . . . E N D . . .

Episode 2 - 9 - (後書き)

秩序型と無秩序型・・・簡単に、ですが、

秩序型は犯行を計画し、被害者を誘いこむだけの高い知能がある等々。

無秩序型は被害者を気まぐれに選び、

人格には関心を示さない等々。

混合型も存在する。

ロバート・K・レスラー/トム・シャ

ットマン(早川書房)

『FBI心理分析官 異常殺人者た

ちの素顔に迫る衝撃の手記』

(ロバートの名前は無意識化で拝借し

ていた様です。最近気が付きました。恐ろしや)

日曜日

ネイビーのツーピース、同色のピンヒール、シンプルなダイヤのピアス、同じデザインのダイヤのネックレス、細く形の良い脚を組み、妖艶に笑っている。その姿は警視総監というよりは、モデルの様だった。その写真の横には警視総監、藤沢冷子の文字。

二枚目の写真の冷子は警視総監室のエグゼクティブチェアに座っている。その後ろには朗らかな笑みを浮かべるマツドと、何時もの穏やかな笑みを浮かべる愁の姿があった。2人の手は冷子が座る椅子に掛けられ、3人共カメラの方を見ていた。

珍しくスーツを着たマツドは、その上に鑑識のジャンパーを羽織っている。だが、小さく切りぬかれた写真は、マツドの人の良い笑みだけが映っていた。

愁も小さく切りぬかれた写真が一枚あった。が、特記事項の様に、その写真の下には『彼の目は左右で色が違い、不思議な魅力があると書かれていた。』

記事は2ページにわたる。白黒だが、見出しにもなっていた。

『FBIとの交換留学。警視庁総監・新たな挑戦』

記事の1ページは冷子の様々な写真と、彼女のインタビューが載っていた。

もう1ページは愁とマツドへのインタビュー。

喜んでいる人物が1人。

「プロファイラ になっただきっかけはサム・ウォールの事件に興味を持ったから？」雑誌を手に、ニヤニヤと笑いながら、井上が愁を見る。

「ええ」半分は真実ですね、と愁は心中で付け足す。尤も、その時

点で警察もFBIも、犯人がサムであるとは突き止めてはいなかった。ただ次々と起こる、殺人事件に世間は戦々恐々としていた。単純に興味を持った、と言うよりは強く惹かれた。もう半分はロバートのスカウトだ。

「何処までも執りつかれてるからね」マッドが朗らかな笑みを浮かべて言う。無論、嫌味。

「ふーん」井上はマッドの記事へと視線を走らせる。「科学捜査に興味を持ったのは科学が元々好きで、FBIに父親が居たから？」

「まんま、なんだけどね」マッドは苦笑した。それ以上の理由もそれ以下の理由も、存在しない。

「ふーん。で」井上は雑誌を2人の目の前に差し出す。「何で、ライアーな訳？」

「何でだろう？」マッドはほんの少し首をかしげる。

「他にもあるでしょ？冷子さんを取材したい雑誌なんて、それこそ山のようにあるでしょう？何で、これ」井上はデスクの上に雑誌を投げた。「何でこの低俗雑誌なの」

「何ででしょう？」と愁。

「ふざけてるの？」

愁は肩をすくめた。

「で？」井上の眉が上がる。

愁は軽く溜め息をついた。「低俗だから良いのですよ。低俗であればある程、ある一定の人間が好みますからね」

「殺人鬼とか？」

その言い様に愁は優しげな笑みを浮かべる。「ええ、まあ、そんなところですね。彼らにとっては事件を明細に報道する雑誌等はポルノに値しますから」

井上は雑誌をペラペラと捲った。確かにどの雑誌、新聞よりも明細に、事件の事が書かれている。だから、井上は低俗で嫌いなのだが、殺人鬼達はそれが良いらしい。ふと頭に浮かんだ事を、そのまま口にする。「自分達を宣伝している訳？」

「宣伝？」マッドはニヤツと笑う。「それ、面白いかも」

「そうですね」愁も穏やかに笑った。「ある意味、当たっているかもしれませんね」

「かかってこいや」井上はファイティングポーズを取って、2人を睨みつける。「つてな訳？」

「抑止力の方だけどね」

「まあ、確かになる人にはなるかもね」

「ならない人には絶対ならないけどね」とマッドは肩をすくめる。これくらいの事で殺人を犯さなくなるのは、元々殺人への欲望が強い事示す。欲望や妄想が膨らみ押さえられなかった者は、これくらいでは止めないだろう。否、止められない。死刑ですら抑止力にならない殺人への願望を、自分達がいる事を知らせただけで抑制出来る、等と考えた訳ではなかった。

「じゃ、取材された意味あんの？」井上が怪訝な表情を浮かべた。

ある、と愁は声に出さずに即答した。正直、ライアーの記者にプライベートを含む事まで根掘り葉掘り質問されるのは、冷子もマッドも愁も反吐がでる程嫌だった。だが、それだけの価値はある、と三人は考えていた。『FBI』のブランド 嫌われている組織という『プロファイル』『科学捜査』は映画やドラマの影響もあり日本のそれとは比べ物にはならないはずだ。それに加え、冷子の犯罪に対しての講釈は素晴らしいしかなかったと言える。幸い、ライアーの記者もそれを掲載している。ただし、マッドの言う通り、抑止力にならない人間は絶対にならない。それでも一部の人間には効果を発する事が出来るはずだ。『捕まる可能性が高い』という抑止力。

「多分ね」マッドはにこやかに微笑んだ。

「ふーん」井上は再び雑誌に載った愁とマッドの笑みを探す。デスクの上で頬杖を付き、左手の人差指でマッドの写真をトントンと叩いた。「御嫁さん募集中？」

マッドはニツと笑う。「うん」

「これが抑止力になる訳？」

「だってさ、記者さんが根掘り葉掘り、彼女居るのか、居ないのかって聞くからさ。リップサービスだよ」その他に何を聞かれたのか、マッドは思い出したくもなかった。

「愁は」井上はちらつと愁を見上げる。その目は爛々と輝きを放っていた。「冷子さんと出来てるの？」

思わず、愁はくくつと笑った。「そんな訳ないでしょう？」

「うん、まあ、そう思うけど」さすがにこの記事が全て真実だ、と井上も思っていない。「でも、そう取れる様に書いてある」

「ええ。何故でしょうね」その理由はライターの記者にしか分からないだろう、と愁は思う。記事に書いてある様な『2人は視線を絡めた』『見つめあって微笑む』は何時したのだろう。

陽気なメロディが流れて、愁とマッドは視線を絡めた。

「何これ？」マッドがクスクスと笑いだした。

「レインボー戦隊、ナナレンジャーの歌よ」ジーンズのポケットから携帯を引っ張り出して、井上は不思議そうな表情を浮かべる。「知らないの？BSでやってるの。結構人気があるのよ」井上は捲し立てるように行った後で、携帯に出た。「もしもし？」

「知ってる？」マッドが愁に囁いた。

愁は肩をすくめただけだった。

「だよな」

井上は携帯をパチンと閉じ、軽い溜め息を付いた。「お仕事になっちゃった」

「いつてらしゃい」マッドはにこやかに笑い、小さく手を振る。

「行って来ます」井上は立ち上がると、歌いながら出て行った。

「虹、虹、虹が出てると奴らがやってくる、レインボー戦隊、ナナレンジャー」

深夜の警視庁に、ひどく場違いな陽気な歌が響いている。ドアを閉めていても聞こえる、彼女の大きな歌声が徐々に遠ざかっていく。「頭に残りそう」マッドはげんなりした表情で呟いた。

愁は軽く溜め息を付いた後で、ノートパソコンを開いた。

マッドもノートパソコンを開く。「それでさあ、サムは元気だったの？」

「ああ」パソコンに映し出された京都の未解決事件の画像を見ながら、愁は答える。「元気だった」

「ふーん」マッドはちらりと愁を見た。彼は視線を上げもせず、表情も変えない。「何か新しい事、しゃべった？」

「ああ。被害者がもう一人いるらしい。だが、それだけだ」

それだけね、とマッドは思った。あと、何回の面接を行えばサムはその被害者の名前を言うのだろうか。「その新たに分かった被害者は女性？男性？」

「さあな」愁は淡々とした口調で答える。「サムのご機嫌が麗しくなかったからな。そこまで教えてくれなかった」

「ご機嫌ね」マッドがうんざりした口調で言った。「まあ、そうだよね。デートのお誘いが12月なのに、実際行ったのが、1月半ばじゃあ、普通は振られるよね」君は特別ではない、と言うメッセージをサムに向けてるのは、マッドも知っている。問題なのはサムに主導権を握らせる事だ。

「なあ、マッド」

「何？」

「幾つ、怪しいのがみつかった？」

日本を東京で分けて北と南、マッドは北を担当、愁は南を担当している。野口恵の犯人のプロファイルに該当する人物が過去に犯したと思われる事件。全国の警察から送られてきたファイルは膨大だったが、プロファイルをする訳ではないからそう時間を取られる事はなかった。

「僕は9つ。そっちは？」

「3つ。東京近辺を合わせれば6つってところだな」15、ここから絞り込むのは愁の仕事だ。

「計15、残るのは幾つか」マッドは大袈裟な程、大きな溜め息

を落とした。

*

スチール机をコンコンと連続で叩く音。その音は一定で、ずっと鳴っている。

愁はとても穏やかな夢を見ていた。だが、内容が思いだせない。自分も友人達も大事な人達も、サムまでも、全ての人間が微笑んでいた。そんな事等有り得ないはずなのに。

ゆっくりと目を開けると、汚れたデスクの裏が見えた。コーヒーの香りの中に、微かな香水の匂い。愁はもそもそと、デスクの下から這い出た。それに伴って、音が止んだ。

「おはよう」

「おはようございます、池上さん」

「帰国して、直ぐにここに泊まった訳？」池上は椅子を弾き飛ばすように立ち上がり、呆れた様な口調で言った。「おかしいんじゃないの？」

愁は寝袋から這い出ながら、思わず苦笑する。「そうかもしれないせん」

池上がコーヒーを注ぐ音がし、それを追いかけてコーヒーの香りが部屋中に溢れた。

寝袋をデスクの下に蹴飛ばし入れ、愁は脇に避けておいた椅子を戻した。乱れていたワイシャツを直しながら、窺う様な視線を池上に向ける。「煙草を直しいですか？」

「あなたのオフィスでしょ？」彼女は背中越しに言った。その声は穏やかだった。

「そうですね」愁は椅子に腰を下ろし、デスクの上の煙草に手を伸ばした。何時の間にもやたら綺麗になっている灰皿の上に、煙草とライターが乗っていた。一瞬だけその理由を考えたが、直ぐにその思考は追い払われた。

「はい」池上が愁の前にコーヒーを置き、何かを思つて眉を上げた。「まさか、空港から警視庁に戻ってきたって言わないわよね？」

「まさか、言いませんよ」無論、スーツケースをアパートの玄関に投げてきた。「ありがとうございます」

池上は少し肩をすくめ、椅子に腰を下ろした。「なら、良いけど。あなたがアメリカでサムとデートしている間、特に変わった事も、捜査に進展もないわ。だいたい、私、殆どデスクワークだったのよ。あなたとコンビを組まれた事を恨みそうになったわよ」池上のその口調は、何処か刺のある言い方だ。

「すみません」反射的に謝る自分が少しおかしかった。

「ねえ、硝煙の匂いがする。射撃場に行ったの？」

「ええ」愁は思わずワイシャツを摘まんで、匂いを嗅いだ。確かに、微かに匂いが残っている。「腕が落ちてしまいそうで」帰っている間は最低一日一回、その時に近くにある射撃場へ行く様にしていた。元々愁はアカデミーでの銃の成績が悪く、射撃の腕を上げるのに随分苦労した。折角上がった腕を落とす理由はない。いずれ帰るのだから。日本での射撃場は手続きが面倒臭く、行く暇もない。帰り際に行った射撃場で、ぎりぎりの時間まで居たのがまずかったらしい。飛行機の隣の席の体格の良いアメリカ人が、嫌そうな表情でジロジロと見ていたのは、この匂いのせいだろうか、と愁は思い出した。「ふーん」コーヒーに口を付けながら、池上が呟く様に言った。「とりあえずシャワー浴びて、着替えた方がよさそうよ」

「そうします」とりあえず一服してから、と愁は煙草に火を付けた。「まずは、一服してからね」

「ええ」愁は柔らかな笑みを浮かべた。

デスクの上のファイルを手に取り、池上はパラパラと捲った。ファイルは事件発生時の日付、場所、被害者の名前、重要だと思われる証言や証拠が簡単に書いてあるだけだった。「ギャルママ事件の？」

「ええ。犯人のプロファイルに該当する事件が全国で15件ありました。そこから絞り込みをかけます」

「そう」池上はちらりと愁を見上げる。「どのくらいありそうなの？」

愁は肩をすくめた。「どうでしょうね。詳しく見ていかないと今のところ判りかねますが。ファイル自体が悪魔でも明確にまとめたもの、を送られてきていますから、絞り込んでから明細な事件の記録を請求しなければなりません。それと証拠を」

「また証拠を取り寄せる訳？あつちこつちの警察に喧嘩売ってるみたいよ」

愁は苦笑すると、小さく頷いた。「そうですね。ですが、池上さんも思うでしょう？自分の所の鑑識が一番だ、と。向こうも同じなら、こちらと同じですから」

池上はふつと笑った。「そうね」恐らくそれは鑑識の人間もそう思っているのだろう、と池上は思う。加藤も井上も、マッドも。そしてそれは愁の言う通り、何処の警察でも同じ事。自分の所の鑑識が一番だ。

「その辺りを悩むのは総監にお任せしましょう」愁はにっこりと微笑み、煙草を深く吸った。

「そうね」池上はコーヒーを一口飲み、そしてニツと笑った。「おかえり、相棒」

そこは異常な光景だった。

黄色のテープが張り巡らされ、警官が普段の倍近い人数、そのテープの中に立っていた。テープの外側には数多くのマスクミ、そして野次馬がいる。野次馬達は携帯やデジカメで写真やビデオを撮っている者、泣いている者、興味深そうに中を覗き込もうとしている者、様々だった。

野次馬達の遙か後に車を止め、池上はうんざりとした溜め息を漏らす。「今日は一段とすごいわね」

「ええ、本当に」愁はシートベルトを外した。

「確かに衝撃的な事件なのは分かるけど」池上はシートベルトを外すと、思わず事件現場の建物を見上げた。「現場が小学校じゃあねえ」

私は日本に来て二度目ですけどね、と愁は苦笑した。

2人は制服警官にバッチを見せ、誘導されながら野次馬達の間を抜けていく。もみくちゃにされながら、何とか黄色のテープの中まで入ると、池上は思わずふっと息を付いた。

2人が小学校の門まで来ると、制服警官が小さく敬礼した。「現場は西側の2階、一番奥の職員室になります」

「ありがとう」池上はそう言うと、につこりと笑った。

小学校は4階建ての古臭い建物だった。ところどころに修復の跡が見られ、何度もペンキを塗り直しているのが窺える。制服警官が言った職員室と思われる場所には、ブルーシートが三階の教室から吊り下げられていたが、隙間から明かりが漏れていた。

校庭は広く、その周りにはフェンスが張り巡らされ、フェンスにはマスクミと野次馬が群がっていた。

池上と愁はそれを気にする事もなく、昇降口から校舎の中へと入

った。小さな上履きや、大きな上履きが個別になった靴箱に入っていて、床に二つ程転がっていた。

普段は小学生で賑わう校舎も、今や警官や鑑識が忙しく動き回っていた。

「おはよう」

手すりの指紋を取っていた井上が、赤い髪を揺らして振り返った。

「おはよう」

「おはようございます、井上さん」

「どう?」

「手すりの指紋の事?」井上は指紋採取用の刷毛を持ったまま、睨む様な目で2人を見た。「小学校、おそるべし、よ。私、今日帰れると思う?」

池上は苦笑し、肩をすくめた。「無理かもね」学校中の指紋を取る、それを在校生及びその保護者、教師、全ての人間と照合、考えるだけでうんざりしそうだ。

「帰れる様に無駄話はやめる。マッドが上にいるから後はマッドに聞いて」井上はそう言うと、手すりの指紋に視線を戻した。慣れた手付きで、パウダーを落とし、浮かび上がらせた指紋に採取用のテープを張り付けていく。テープを取り、保護用シールをその上に戻し、キッドの中の紙袋に入れる。井上はその一連の動きを流れる様に繰り返し、次々と指紋を採っていく。

階段の踊り場で振り返った池上が呟く様に言った。「指紋採取のスペシャリストね」

二階の廊下はひんやりとしていた。廊下の隅で警官達が何人か、2人の刑事と話している。池上と愁にはその刑事達に見覚えがなかった。2人はそれぞれ会釈をしたが、刑事達は話に夢中になっているのか気が付かない。

職員室の中は静まり返っていた。大きな窓はブルーシートに覆われている。窓の下には小さな棚が幾つもあり、中に色々な物が入っていた。真ん中にはスチールデスクが10ずつ、向かい合わせにな

つて並んでいる。どのデスクも乱雑に物が置いてあったが、更に乱れた形跡が見られた。床には白紙のテスト、教科書、鉛筆やペンが至る所に転がっていた。その隙間を縫うかの様に、血痕が飛び散っていた。

2人が入ったドアからは一番奥、沢山の生徒の名前が書かれた黒板の下に、被害者は仰向けの状態で横たわっていた。30歳前後と思われる、紺色のジャージ姿の男性。瞼は閉じられていたが、口は半開きだった。黒い髪、顔立ちは良く、背も高い。装飾品類は何も付けておらず、首には笛がぶら下がっていた。

彼の着ているジャージは刃物によって、その肉ごと切り裂かれ、血が出ていた。右肩から胸にかけて一か所、右腕に一か所、右太ももに一か所、左の手の平に一か所、頬に一か所、長く、だが、深くはない。そして切り口は力任せに引きちぎった様に歪んでいた。室内に争った様な跡がある事から、刃物を振り回され、逃げ惑った時に避けきれずに切られたのが推測出来る。

致命傷とみられる傷は左胸、心臓を一突きされていた。解剖をしなくても現場の刑事であれば解るほど、深い傷。そこからは大量の血が流れ、ジャージをどす黒く染めている。被害者の遺体の側は血だまりが出来ていた。

池上は胸の前で小さく手を合わせた。後ろでは愁が目を閉じ、祈りを捧げている。

「被害者の名前は辻純也、29歳、独身。4年1組を担当してるんだって」

「おはよう、マッド」池上はマッドが差し込んだ、被害者の免許書の入った証拠袋を受け取った。

「おはよう、泉ちゃん」マッドは控えめな笑みを浮かべる。「田中さん達は第一発見者の人と話してるよ」

池上はスーツのジャケットの上から腕を擦った。「随分、寒いわね」そう言った彼女の口から出された息が、白い煙に変わった。

「うん。冷房が掛ってるの」マッドは頭上に設置されている、業務

用の大きなエアコンを見上げる。「設定温度が最低温度になった。今は少し上げたけどね。あっちのも最低温度だった」と反対側のエアコンを、ラテッククスを嵌めた長い指で指した。

「死亡推定時刻を惑わす為かしら？」池上也吊られてエアコンを見上げる。

「うーん、どうだろう？」マッドはほんの少し首を傾げる。その理由はマッドにも推測は出来るが、自分より愁の専門だ。「でも、犯人が操作したのは間違いない気がするよ」

「どうして？」

マッドは黒板を指差す。「この溝のところにリモコンが置いてあったし、拭いた後があったの。指紋は勿論ゼロ」

「そう」池上はそう言つと、免許書をマッドに返した。「じゃ、死亡推定時刻は解剖待ち？」

マッドは小さく頷き、自分のキッドの中に免許書を戻した。「うん、正しいのは解剖してからの方が良いと思うよ。とりあえず土曜日だって事らしいけど」

「土曜日？」

マッドは小さく微笑む。「そう。お仕事熱心なのかな」君とか、君の相棒とか、僕みたいに、先生も超過勤務だったのかな、マッドは喉まで出かかった言葉を呑みこんだ。

「他には？」

「被害者の顔に白い紙がかけてあったそうだよ」

池上は不思議そうな表情を浮かべた。「あったそう？」

「うん。第一発見者は声を掛けただけで、何も触らなかつたらしいんだけど、救急隊が触った。紙が動いてない事を察知して、手では触らず、ハンカチで摘まんでビニールに入れてくれたけど」マッドは珍しく厳しい顔つきをしていた。脈を取るなら、腕だけで事足りる。顔に掛った紙をどける必要が何処にあったのか、と。それだけならばまだしも、何人かの隊員が職員室に入り、ご丁寧に足跡を残してくれた。

写真は皆無なのね、そしてあなたは御立腹、と池上は思った。彼女が相棒の姿を探すと、窓際のデスクの前に居た。「そこ、被害者のデスク?」

「ええ」愁は見えていたファイルから顔を上げた。「テストの採点をしていた様ですね」途中まで赤いペンで丸を付けたままの答案用紙がデスクの上に置いてあった。デスクの上は他のデスクと比べれば、幾分きちんと整理されている様に思える。

「他には?」池上はデスクの方に向かう。

「いいえ。財布もカードもありますし、鞆の中や机の中を荒らされた形跡もありません」

強盗の線は薄い、と池上は考えた。そもそもこの職員室のデスクの上は、その殆どが既に強盗に入られたかの様に散乱している。だが、それは元々荒れているものであり、誰かが故意にやったものではない事が分かる。一係の田中や桜井のデスクと大差はない。否、職員室の方が随分マシだ、と池上は思った。

「おはようございます」

愁と池上は顔を上げる。2人が入って来た入り口に、田中が立っていた。

「おはようございます、田中さん」

「おはよう」

田中はくいつと顎を廊下に向かって指した。「池上、ちょっと良いか?」

「ええ」池上は軽く頷くと、持っていたファイルをデスクの上へ置き、「後は宜しく」と言つて、田中の後を追つて廊下へ出て行った。デスクの引き出しの中を全て調べ終え、愁は小さく息をつく。白い煙が目の前に広がり、コートを車の中に置いてきた事を後悔したくなつた。

「何かある?」

「被害者の体に残る長く、浅い力任せに引きちぎられた様な傷、荒れている部屋、飛び散る血痕」愁は視線を並んだデスクの上へ、次

々と走らせる。デスクの上は本や紙、ペン等が転がっていた。

「何か引つ掛かる？」マッドは被害者のデスクとは反対側の通路を指差す。「来て」

愁はマッドの後を追った。

マッドは田中と池上が姿を消した出入り口の方へと向かう。「そっち側のドアは建て付けが悪くて、力を込めないと開かないの。犯人はこっちから入ってる。階段から近い場所の入り口だし、血痕の形状から見てもこっちから入ってきたのは、間違いないと思う」血痕や真っ白な紙、答案用紙、ファイル、本を上手く避けながら、マッドはどンドンと歩いて行く。部屋の真ん中に来ると、くるりと愁の方へ向いた。「僕、犯人」何かを構える格好をする。

愁は血痕の飛び散った位置から、被害者が立っていたと推測される位置で止まった。足元には本があっただが、当たってはいない。

「出入り口に犯人の足跡はなし。でも、ここに一つ、血を踏んで擦れた跡がある。ここから二つ程、犯人と思われる人間の足跡が付着しているけど、靴の大きさ、メーカーは不鮮明で判別するかどうか微妙なところ」マッドは愁の前に立つと、上から大きく腕を振り下ろす。「短いナイフだとすれば、傷の形状から推測して犯人の背は被害者より高い。だけど」

「短ければ逃げられた。被害者は長い傷を負ってる」

「だとすれば長いナイフ？サバイバルナイフとか？ランボーナイフとか？」マッドはほんの少し後に下がり、愁に向かって見えないナイフを振りかざす。「でも、それでも少し短い気がする」

2人の頭の中の映像では、マッドの握ったナイフは愁に届かない。

「レイピア、サーベル、刀なんかだと長いな」

「因みにマグロの解体用の包丁も長いよ。こないだテレビで解体シヨーやってたんだよ」すごかった、とマッドは満足げな笑みを、それでも控えめに浮かべた。「そもそもここは日本なんだから、レイピアやサーベルよりは刀やマグロの解体用の包丁の方が可能性は高いでしょ？」

「何処の国にも、どんな物にもマニアは存在する」

マッドは両手をあげて見せた。「はいはい、確かにね。ナイフや剣類はマニアが多いもんね。まあ、とりあえずマグロの解体用包丁で。長さ、60センチだつて」それでも小ぶりだつて、マッドは心中で付け加えた。マッドは60センチの長い包丁を構える真似をする。

「だとすれば、避けきれない」マッドが振りかざした解体用の包丁を、愁は避けようと体を反らせる。だが、刃先が当たる。「被害者は後向きに逃げている。刃先を避けながら、受けながら」愁は足元の証拠を踏まないように、慎重に、後ろ向きのまま被害者の跡を追う。「ここでもう一度切られた」

マッドは真横に腕を振った。「被害者は恐らく右手でガードしたんだ。だから腕が切られていた。血痕は真横から飛び散り、壁に当たっている」壁にはそれを示す、周りを波型に囲まれた血の跡があった。「あら？僕、良い事気が付いちゃった」

「俺もだ」愁は小さく呟く。

「被害者の傷は右側に集中してる。右肩から胸へ、右腕、右足、右ばつかり。血痕からして上から下に切りつけのは間違いないから、犯人は恐らく左利き」

「長い包丁等であれば構える」愁は長い包丁や刀等を構える真似をする。「振り下ろす、だろうな」

「うん。殺陣なんかをやつてればもつと違つかもしれないけど」テレビの中の時代劇俳優は、左右どちらかに偏るなんて事はない、とマッドは思う。俳優達は流れる様な動きで、まるで踊る様に刀を裁いていく。帰つたら時代劇厳選スペシャルDVDをチェックしてみよう、とマッドは頭の片隅に刻んだ。「それに被害者はデスクの上の物を手当たり次第、犯人に向かって投げたんだろうね。犯人にきつとそれが当たつてる。後で指紋とかを照合してみるよ」

「傷」

愁が言う前にマッドが口を挟む。その眉はこれでもか、と上がっ

ていた。「無論、やりますよ。傷から型を取れば良いんですよ。ミスタースケコマシと喧々譁々やりながらやってやるさ」

「マグロの解体用の包丁であるのなら、あの切り口はない」

「切れ味の悪い包丁だってあるもん」

「面白そうな事してるのね」

2人の視線が、声の主に向かった。

池上は職員室の中に入ると、持っていたメモ用紙をひらひらと振った。「私達は被害者の父親が経営している辻医院に聞き込みだつて。被害者の父親にはもう連絡が入ってるんだけど、彼は現在足を骨折していて自宅療養中だそうよ。身元確認は兄の裕也さんが来てくれるらしいけど、手術があつて直ぐには来られないの。母親は数年前に病死したそうよ」

「了解」

「この後、校長や教職員の人に話を聞く予定なんだけど、学校に登校してくる子供達を帰さなきゃいけないし、親御さん達に連絡を取っているから、しばらくは無理そうなの。外は大騒ぎよ」彼女の表情が一気に暗くなった。

その言葉が持っている意味を、愁もマッドも難なく理解出来た。

E p i s o d e 3

- 2 - (後書き)

ランボーナイフ・・・ 映画「ランボー」に出てくるナイフをモデルにしている

大きなナイフ。

「モンスターペアレント？」愁は思わず呟いた。

池上は愁を見上げ、囁く様な声で言った。「理不尽な要求やクレームを付ける親の事よ」多分、と池上は小さな声で付け足した。本来、この言葉がどういう目的で造られたのかは自分には分からない。だが、そもそもモラルのない人間等、何処にでも、どの時代にもいる。親だろうが、独身だろうが、会社員だろうが、マスコミだろうが、警官だろうが、それこそ教師だろうが。

「そうですか」愁は小さく頷く。日本を離れて16年、知らない日本語がやたらと多くなっている様な気がしていた。

愁の不思議そうな表情を見て、池上は苦笑した。彼女は視線を愁から、田中と桜井、この小学校の校長と教頭に移した。

校長は50代の男性、副校長も50代くらいの女性だった。2人は刑事達の目の前のソファに座っている。副校長は目頭をハンカチで押さえ、目を腫らしていた。校長も泣きこそはしないものの、沈痛な表情で座っていた。

「具体的にどんな事があったのでしょうか？」

校長はちらつと副校長を見た後で、視線を足の上で組んだ両手に落とした。「私は報告を受けるだけですから、明細までは存じていませんが、クレームが多かった様です。例えば子供同士の喧嘩をどうしてやめさせないんだ、あの子がうちの子の悪口を言っているからどうかしてくれ、とか。辻先生の報告には殴られた事もあったそうですが、幸い怪我をした訳ではなかったのと、辻先生が大事にしたくないとの意向で私止まりにしています」

「親御さんに殴れたんですか？」田中は眉をひそめた。

「ええ」校長は窺う様な眼差しで刑事達を見た。その表情は何処か不安げだった。

「その親御さんの名前を教えてくださいますか？」と桜井が落ち着いた

声で言った。

「はい」校長は頷くと、ソファから立ち上がり、自分のデスクへ戻って行った。

「他にはどれくらい、そう言ったクレーム等を言ってくる親御さんがいらしたんですか？」田中は副校長に視線を向けた。

副校長はハンカチを細い太ももの上で握りしめ、しばらく考えた後、口を開いた。「辻先生のクラスの中ではだいたい5人前後でしょうか」マスカラが涙で流れ落ち、目の下が黒ずんでいた。

それが多いのか、少ないのか、愁には理解出来なかったが、副校長の表情から恐らく多いという事が想像出来た。クレームを言う親ならアメリカにもいる。だが、違うのはアメリカが訴訟大国である事だ。クレームは進化させれば裁判になる。それがないだけ、日本はマシなのか、それとも何時までも決着が付かないままなのか。「とても良い先生だったんです」副校長の目から涙がポロポロと流れ始めた。「確かにクレームを言うてくる親御さんもいましたが、辻先生の話からでは余り筋の通ったクレームではなかったですし、子供達からも人気のある先生でした」彼女はうっとうと声を詰まらせ、咽び泣いた。

校長がソファに腰を下ろし、薄いブルーのファイルを田中に差し出した。「この学校のクレーム等の記録です。ですが、外部には漏らさないで頂けますか？」

「ええ。勿論です」田中はファイルを捲った。

桜井が横から、愁と池上が彼の頭上からファイルを覗きこむ。

ファイルは1年生から6年生まで分かれ、更にクラス別に分かれていた。田中は迷わず4年1組のページを捲った。他のどのクラスより、彼の担任しているクラスのクレームの記録が一番厚かった。

田中は自分がざっと読むと、池上にファイルを渡した。

池上は辻が受けたクレームの報告書を読み始めた。副校長の把握している通り、クレームを付けているのは5人。給食費を払いません、等の突飛とも言えるものはないが、確かにモラルに欠けるだろ

うか。『海斗くんがうちの子と喧嘩をしているから、席を代えて欲しい』喧嘩はした様だがお互い其の後は仲良く遊んでいる、と辻が横に書いている。その横に海斗くんとその子が一緒に遊んでいた、と副校長の字があった。

その他のクレームも似た様なものばかりだったが、ただ一つ。『授業が下手くそで、子供が付いていけない』と言うクレームがあった。

「このファイルに書かれている親御さん達と校長先生や副校長先生はお話になった事がありますか？」桜井が穏やかな声で聞いた。

「はい、何度か」校長が小さく頷く。

まだ止まらない涙をハンカチで拭いながら、副校長も頷いた。

「どんな印象を持たれましたか？」

校長は隣の副校長をちらりと見た。「正直なところ、余り良い印象は持ちませんでした。子供同士の事に首を突っ込み過ぎていると言うのか。勿論、我が子が可愛いのは解りますが、子供には自分で解決させる力も身につけさせなければならぬと思います、親が全て口を出すのではなく」

「そうですね」話しを切る様な、些かきつい口調で田中が言った。校長の話が長くなりそうだと判断したので。今は教育論を聞いているのではない、と田中は考えていた。

桜井が一瞬にして凍りついた空気をほぐす様な、とても穏やかな口調で口を開く。「そうですね。子供を教育していくのって大変なんですよ」控えめな笑みを、2人に向けた。彼等が少しだけほっとした様な表情を浮かべたところで、桜井が再び口を開く。「ところで、この辻さんを殴ったとされる花村さんとおっしゃる方はカツとなりやすそうな方ですか？」

「いいえ。そんな感じでは」副校長がハンカチでマスカラを頬まで引き延ばし、小さく首を振る。「とても優しそうな方です。殴られたとありますが、辻先生はそこまでひどくなかったって言っていましたし。その後、お二人の間で話し合いも行われていますし、一応

の解決はしていますから」

*

辻医院は、被害者が務める小学校よりも大きな病院だった。L字の5階建ての白い建物。病院の後は大きな駐車場が完備されている。医院の隣には、純和風の大きな一軒家が建ち、そこが辻純也の実家だった。被害者は3年程前に実家を出ていて、小学校の近くにアパートを借りて1人で暮らしている。迷路の様な廊下をお手伝いの女性に案内され、2人は辻豊の待つ部屋と向かった。

綺麗な中年女性の後ろ姿を付いて行きながら、1人で玄関まで戻れるかしら、と池上は考えた。多分、無理。子供の頃、何処かで入った忍者屋敷みたいだ。だが、廊下の窓から見える中庭は忍者屋敷ではなく、うっとりする様な美しい日本庭園だった。池上に日本庭園の良しあしは解らなかつたが、それでもこの家の庭園は足を止めなくなる美しさがあつた。数十本ある細い竹、大きな岩、岩から溢れだす水、その岩の周りには小さな池があつた。庭の中心の地面は苔で覆い尽くされ、その周りに敷かれた白い小石を浮きだたせて見せている。小石は太陽の光を浴び、キラキラと輝いていた。

女性が突きあたりの部屋の前で止まり、襦袢の前で声を掛ける。「旦那様、警視庁の刑事の方達が見えました」

「ああ、入ってくれ」中から低く、無愛想な声がした。

「どうぞ」女性が襦袢を音も立てずに開けた。

中庭に面した部屋。井草の香りが微かにする。30畳程の部屋の真ん中に革張りのソファ、彫刻が施してあるガラスのテーブル、その下には毛足の長い絨毯が敷かれている。その他には壺、金箔がキラキラと輝く桜の絵が描かれた大きな皿、数多くの美術品がセンス良く置かれていた。壁には徳川家康の絵が数枚、飾られている。2人が部屋の中へ入ると、開けた時と同じく音も立てずに襖が閉まった。

池上は軽く頭を下げた。「警視庁捜査1課の池上と浜野です」

愁も頭を下げる。「ご子息の事、お悔やみを申し上げます」

「ああ」ソファに深く座り、ガラスのテーブルにギブスで固定された右足を乗せ、辻は頷いて見せた。その目は赤く腫れていた。「こんな格好で申し訳ない」力のない口調だった。「どうぞ、かけて」辻は60代前半、白髪だが量の多い髪の毛、小柄だが威風堂々としている。寝巻の上にガウンを羽織り、葉巻を吸っていた。

池上と愁は辻が差したソファへ腰を下ろした。

「息子の遺体は何時うちに帰って来れる？」

「解剖してからになりますから、明後日くらいと思つて頂ければ」池上は遠慮がちに答えた。昨日の夜遅く、放火殺人と見られる事件が起き、死者が4名出ていた。今日中に内田が解剖に取りかかれるか、池上にはつきりした事は言えない。

「そうか」辻は弱々しく頷いた。

その反応は彼が医者だからだろうか、と愁は思った。我が子が解剖される事に良い印象を持つ人間は余りいない。特に日本では解剖率が低い為、宗教上の理由からでなくても嫌がる親もいる。

辻は座っている横に置いてある小さな机から、B5の紙を取った。「私なりに考えてみたんだ。純也が誰に殺されたのかを」辻は手を伸ばし、紙を2人に差し出した。

池上は一瞬だけ眉をぴくりと動かした。「恨んでいる人物に心当たりがあると言う事ですか？」とても穏やかな口調で言いながら、手を伸ばし、紙を受け取った。

辻は長く、深い溜め息を付いた。「人間生きてりや恨みの一つや二つ買うもんだろ？純也は裕也と違って他人に気を使う性格とは言い難かったからな。高校時代には喧嘩もしたし、大学時代には女を取った取ってないのって騒いだ事もあった。よくある青春だろう？」葉巻をガラスの大きな灰皿でもみ消し、辻はふうと煙を吐いた。「だが、馬鹿な息子程可愛いものはない」

馬鹿な息子、よくある青春ね、池上は無表情に小さく頷いて見せた。確かに学生時代、そんな事で騒いでいた友人もいたが、事が殺人事件になれば話も変わる。池上はざつと紙に視線を走らせた。学校で教えてくれたモンスターペアレントの名前はない。主に学生時代の友人の名前だろうか。紙には5名程の名前、住所、電話番号が書いてあった。彼女はその紙を愁に渡した。

愁は彼女から渡された紙に視線を落としたが、意識は父親の方へ向けていた。

「それでも私にとっては良い息子だった。医者にはならなかったが、教師になった。妻が先だったせいか家には余り寄りつかなかったが連絡はくれていた。たまに時計やネクタイも送ってくれて」辻が声を詰まらせる。その目に涙が滲んだが、落ちはしなかった。

池上と愁は何も言わなかった。痛々しい沈黙は辻豊が二男の純也を愛していた事を示している。彼は足を骨折し、自宅療養中。真っ先に容疑者から外れる。

「私のアリバイならさっきの家政婦に聞いてくれ。その他にも家政婦はいる」辻が沈黙を破った。その声はやけに落ち着いていた。

池上は小さく頷いた。この手の会話をしてくる人間は殊の外沢山居る。二時間ドラマの影響だろうか。それとも小説か。何にせよ、『私を疑うつもりか』と怒鳴られるよりはマシだった。

ドンツ、と言う何かにぶつかった様な音に、甲高い女性の悲鳴。池上と愁は顔を見合わせた。

「何だ、今の音は？」辻が2人に向かって言う。

「事故かしら？」

愁はすつと立ち上がった。「私が見てきます。池上さんは話しの続きを」

「ええ」

愁は辻に軽く頭を下げると、部屋を後にした。長い廊下を小走りに駆けていく。来た道を思い出しながら、何とか玄関ホールに出た。ホールには辻の居る場所まで案内してくれた女性が、お盆に三つコーヒーマグを乗せて歩いていた。「刑事さん」彼女はにこやかに微笑んだ。「どうされました？」

「外で物音がしたので少し出て来ます」何時もよりは遙かに無愛想で、早口に言う。

「はい」彼女は小さく頷くと、来た道を引き返した。「門を開けてまいります」

「御願します」愁は小さく頭を下げ、玄関を開けた。外がざわついている。何を言っているのかまでは解らないが、何かがあった、それだけは愁にも理解出来た。

遠くで門が開く、低い音がした。愁は玄関の引き戸を閉め、走り出した。玄関から門まで、苛立つ程に長かった。

幾分息を切らしながら、完全に開いた門から飛び出すと、野次馬と思われる人達が、病院の方へしゃべりながら走って行くのが目に入った。愁も迷わず病院へと向かう。

L字型に建てられた病院の中庭には、噴水とギリシャ神話に出てくる医者アスクレーピオスの像があった。アスクレーピオス像はシンボルである蛇の杖を持ち、走って来る愁を見つめていた。

野次馬が群がっていた。道路から、病院から、次々と人が集まって来る。

愁は走りながら、バッチを取り出す。野次馬をかき分けながら、大きな声を出した。「警察です。開けて下さい」バッチを掲げた愁を、野次馬達は真つ青な顔で通してくれた。中にはうつと口を両手で押さえる者、呆然と立ち尽くしている者もいる。

血生臭い、現場がそこにあった。

病院の玄関口、倒れている男はびくりもと動かない。周りは彼から流れ出る血で徐々に真っ赤に染まっていく。うつ伏せに倒れ、顔を横に向けている男の顔は愁からは見えなかった。男はスーツ姿で、黒髪、長身。

愁が男に駆けよる前に、病院からストレッチャーを運ぶ看護師2人、その前に白衣を翻して走る年配の男性が出てきた。

白衣姿の男性はびくりとも動かない男に向かって、「先生」と叫んだ。

叫ばれた男は何の反応も示さない。

「死んでるの？」野次馬の中の誰かが囁く様に言った。

「先生」年配の男性は何度も叫び、彼を仰向けにした。「早く」

看護師が頷き、三人は掛け声を掛けて、ストレッチャーに男を移動した。男の身体から溢れ出る真っ赤な血が地面を染めていく。三人はストレッチャーを押して、病院の中へ消えた。

愁はバッチを仕舞うと、ぐるりと回りを見渡した。真っ赤な血だまり、片方だけ転がっている革靴、生垣に吐く若者、青ざめた顔をした若い女性、病院に戻って行くパジャマ姿の男性は今にも倒れそうだった。

愁は座り込んだまま、ボロボロと涙を流す若い女性の側へ行くと、目の前にしゃがみ込んだ。「大丈夫ですか？」

女性は弱々しく首を振った。彼女は20代後半くらいの綺麗な人で、長い黒髪を後で一つに結んでいる。女性からは消毒液の匂いがした。

「この病院にお勤めの方ですか？」スーツのポケットから出したハンカチを、愁は女性に差し出した。

「はい」擦れた声で彼女は答えた。ハンカチを受け取り、それに顔を埋め、肩を震わせながら泣いている。

「彼が誰だかご存じですね？」

「はい、辻裕也先生です」途切れ途切れな声。その声は震えていた。「病院から出たら何か落ちてきて」

「え？」愁の眉がぴくりと上がった。

「見回したら、先生が・・・」彼女はハンカチから顔を上げ、涙の止まらない目で愁をじっと見た。「落ちてきて」

愁は思わず空を見上げた。建物の最上階、屋上はここからでは見えないが、白い手すりが見える。

辻裕也、被害者の兄、自殺？限りなく黒に近い、被害者の家族。

愁はアスクレーピオスの像に祈りを捧げた。死者さえも生き返らせる事のできる医者アスクレーピオスよ、辻裕也を救い給え、と。

「僕のお嫁さん探し、一体どうしてくれる訳？」連日連夜の超過勤務でデートらしいデートもしてないよ、とマッドは文句を口にする。

「大体、冷子さんは人使いが荒過ぎるよ」

「それを言うならFBIの時も大差はないだろう」と愁は呆れた表情で言った。

「全然違うよ。だってここ、日本だもん。お嫁さん候補がいっぱいいるんだって」マッドは無邪気な笑顔を浮かべて見せる。

「ああ、そう」愁は心底呆れた口調でそう言ってから、後ろを振り向いた。「何処まで付いてくる気だ？」

マッドはふふん、と笑った。「何処までも」

大きな溜め息を落とし、愁は少しだけ歩く速度を落として、マッドが横に並ぶのを待った。「ところで、遺体の傷跡はどうだった？」

「あ、うん。形や幅から推測すると日本刀だと思うよ」

「日本刀？」

「そう」マッドは時代劇役者が悪人を切り倒して行く様に、空想の刀を振り回した。「種類はまだ不明。さすがにそこまで調べる時間なかったんだよね。今日は2件たて続けに起こったし」

その横を通り過ぎる人達がクスクスと笑いながら2人を見つめる。「そうか」

マッドは愁を見て苦笑する。友人は目頭を揉み出していた。「凶器のチョイスが珍しいものだね。何か意味があるのかな？」

「さあな。だが、辻家は純和風の造りで、美術品も沢山置いてあった」日本刀は目にみえる場所になかったが、と愁は目頭を揉んでいた手を離した。

「うん、日本刀もあるらしいしね」

愁は目を細めてマッドを見た。「誰から聞いた？」

「品の良いお手伝いさん。辻豊は家康が大好きなんだってさ。村正

が何本かあるらしいけど、彼が所有していて、大事にケースにしまっているらしいよ」見てみたいよね、と喉まで出かかった言葉を呑み込んだ。

「そう」

「裕也さんの自殺は目撃者の証言と手すりに付いていた指紋から間違いはないだろうけど、遺書は見つかっていない。純也さんの殺害現場に裕也さんの指紋は残ってないし、今のところ裕也さんと現場を結び付ける物は何も出ていない」

辻裕也は医師達の懸命の措置も虚しく死亡した。病院の屋上に続くドアノブ、飛び越えたとされる手すり部分には彼の指紋が付着。屋上には遺書も靴も残されてはいなかった。裕也は実家に住み、その豪華な造りの部屋も搜索したが、彼が思い悩んでいた証拠となる様なものは一切発見されていない。遺書も日記もゼロ。又、父親である辻豊も同僚の医師達も、裕也が自殺する理由が見当たらないと言う。ただ一つ、今日の午後行われるはずだった、彼の担当の手術を午前中にした理由だけが曖昧で説明が付かないと言う。

「だが、限りなく黒だな」愁は呟く様に言った。

「そうかもね」前から歩いて来る黒い髪の小柄な女性を目で追いかけるながら、マッドは上の空で答えた。

小柄な女性は自分を見つめるマッドに不思議そうな表情を浮かべていたが、彼がにっこり笑うと、小さく微笑み返した。女性は30代前半、着物を着ていたが、派手さはなく、品の良さが窺えた。襟元をすつと直す手の動きがとても美しく、優雅だった。

女性が通り過ぎるのを待って、マッドが言った。「シユウ、和服美人」

その声に返事はなかった。

マッドが隣を見ると愁の姿はなく、ふっと視界に入った人影を見つけて前を見ると、彼は10メートル程先を猛然と走っていた。「シユウ！待ってよ」マッドは慌てて追いかける。

愁の後ろ姿は看板のライトがキラキラと輝く、ラブホテルの中に

吸い込まれていった。

「嘘でしょ」マッドは日頃の運動不足を祟りながら走り、我が目を疑う。そんな場所2人では入れないよ、と1人冗談を言ってみたが、自分ですら笑えなかった。

やっと追いついたマッドはラブホテルの扉から、おそろおそろ中を窺った。息が上がって、眩暈すらした。もしかしてデートだったから巻かれただけ、マッドは小さく声を掛けた。「シユウ？」

「何するんだ！」大きな声ではないが、怒鳴り声がマッドに答えた。「それはこちらの台詞でしょうね」落ち着いた、呆れた様な愁の声。マッドは迷わず扉の中へ飛び込んだ。

30代前半くらいの男性の腕を、愁が捻り上げていた。男性は彼を恐ろしいまでの形相で睨みつけている。その横には若い女性が不安げに2人を見つめていた。彼女はミニスカートにピンヒール、ウールのジャケットを着ていて、ブランド物の鞆を胸に抱いていた。

「離せよ」男性はジーンズに白のダウンジャケット、スニーカーと言うラフな格好をしていたが、恐らく会社員だろう。睨みつけ、精一杯ドスの効いた声で言ってみせるが、2人には彼が極普通のサラリーマンだと解る。「お前、何なんだよ」

愁はスーツの胸ポケットからバッチを取り出し、広げて見せた。

「警視庁捜査1課の浜野です」

男性も女性も目を丸くした。「警察？」男性が先ほどまでの怒鳴り声とは程遠い声で言った。

「あっ」女性は両手を口で押さえ、走り出した。だが、愁の足に躓いて、派手に転ぶ。マッドの足元に女性の鞆の中身がぶち撒かれた。マッドは足元に転がってきたペンや口紅を無視して、慌てて起き上がる女性を凝視した。「あら、ま。高校生かな？」その目にも、顔にも、声にも何の感情も込められていなかった。「ここがアメリカじゃなくて残念だね、シユウ。ネバダ州では未成年とのセックスは20年の懲役だったかな？」日本は5年以下の懲役だそうだよ、という言葉をもマッドは呑み込む。

「刑期は少ないでしょうが、あなたがそれ以上に失うものは何でしょうね？」愁は何時もの穏やかな口調で続ける。まるで世間話をしている様な口調だ。愁は男の手を後ろ手に回し、少しでも力を込めた。「左手の薬指に結婚指輪の跡がありますね。あなたが失うものは奥さんと子供でしょうか？それとも社会的信用でしょうか？」ポケットから手錠を取り出し、男の背中中、両手にかけて。カシャンつと言う音が、辺りに空しく響く。

男の顔色がみるみるうちに青くなっていく。それは己の将来を思っているのか、己のした行動を悔いているのか、彼自身にもまだ解らない事なのかもしれない。

騒ぎを聞き付けた野次馬達が続々と集まりだしてきていた。ラブホテルの塀の外から覗くカップルやサラリーマン風の若い男性、派手な化粧をした女性。ホテルの中から従業員と思われる中年の男性が、自動ドア越しに覗いていた。

刑期や罰金より、世間はそれ程彼にも彼女にも甘くはない。マッドは転んだまま地べたに座り込む、16、7歳くらいの綺麗に化粧をした女の子を見ていた。その彼の目に感情は込められていない。マッドは女の子に背を向け、ジーンズのポケットの中から携帯を出し、警官を呼ぶためにダイヤルを押した。

愁は女の子の側にしゃがみ込み、落ちていく口紅やペンを一つ一つ拾っていく。埃や砂利を丁寧な手で払い落とし、彼女が拾わないブランド物のバックの中に入れていく。「私は職業柄、沢山の売春に係わる女性達を見てきました。その中で幸せになつた人がどのくらいいると思いますか？」愁は顔を上げた彼女に微笑を向けた。「1人は連続殺人犯に殺されました」

彼女の顔には何の感情も見えない。連続殺人等、ひどく他人事なのかもしれない。遠い国でしか起こらない話。自分の身には降りかからない話。

「1人は結婚した男にDVを受け、シェルターに避難、連れ戻され暴行を受け入院。1人は何度も刑務所を出入りしながら、拳銃の果

てに薬物中毒。もう1人は売春と風俗を繰り返し、エイズに感染し、亡くなりました」愁の顔が誰かを思つて、悲しみに歪んだ。「もう1人は……」

サイレンを鳴らしていないパトカーがラブホテルの前に停まった。制服警官が2人、パトカーの中から出て来た。2人はマッドと愁の姿を見ると、不思議そうな表情を浮かべたが、直ぐに何かを思い出し敬礼をした。「お疲れ様です」

愁は女の子の鞆の中身を全て拾い中にしまうと、彼女の座っている前に置いた。「ご自分の未来を大事にして下さい。一時の感情に等流されずに」愁は静かに立ち上がった。

彼女は座り込んだまま、愁を見上げる。その目は無感情だった。

愁は彼女に背を向け、警官2人にバッチを見せた。「警視庁捜査1課1係の浜野です。彼は鑑識のカーペンターです」

「存じています」年配の方の警官が頷く。

ライアーの威力、とマッドは苦笑する。恐らくこの警官がライアーを手に取ったのは、明細な事件記事の為ではなく、自分達の事実上のトップ藤沢冷子の記事を見る為だろう。

若い方の警官が、がっくりと頂垂れたままの男に駆け寄る。警官は2人に小さく会釈し、男をパトカーへ連れて行った。パトカーの周りにはより一層増えた野次馬達が集まっていた。口々に疑問の声が上がっていたが、警官も愁もマッドもそれには答えなかった。

パトカーの中から覗く、女の子の目は何も語っていなかった。自分のした事に対しての後悔も、捕まった事に対しての不安も。ただ、その無表情な目は、じっと愁とマッドを見ている。

「彼女に渡したのは何だ？」愁は走り出したパトカーを見ながら、マッドに囁く。

「彼女には話し相手が必要でしょ？」マッドは散っていく野次馬を見ながら、歩き出す。「愁も僕も根気よく説得していくタイプじゃないから」

小さくなっていくパトカーに背を向け、愁はマッドの背中を追い

かける。「彼女を根気良く説得出来そうな人の名刺？」

マッドは肩越しに振り返り、ニツと笑った。「そう」

「池上さん、か」池上なら全身全霊をかけて、彼女を説得し続けるだろう。例え何年掛つても、何十年掛つても。

「ところで、もう1人はどうなったの？」

愁は深く息を吐いた。吐息が白い煙に変わり、風に吹かれて目の前で消えていく。「もう1人は慈悲深い神父様とシスターたちによつて3年説得されて足を洗い、普通の生活を手に入れた」その彼女の笑顔を幾度となく見て思う、当たり前前の生活の大事さを。

「何だ、幸せになった人もいるんじゃない」マッドは呆れた様に笑った。

*

ハラハラと降り出した粉雪が地面に落ちては直ぐに消えていく。

空はネオンライトに消されて星さえ見えず、暗闇の中、粉雪だけが浮きだつて見えた。

「雪だ」マッドは両手に、はあと息を吹きかける。「寒い訳だよな」

愁は立ち止まる事なく歩き、小さく頷いた。「ああ」

半裸の女性が魅惑的に微笑む、大きなポスターが貼つてある店。

愁はその店に引き込まれる様に入つて行つた。

マッドも愁の後をのんびりと追う。

重厚なドアを開けると、茶髪を逆立てた黒い服の若い男が深々と頭を下げた。「いらっしやいませ」顔を上げ、にこやかに微笑む。

その笑顔には野心が見えた。「2名様で宜しいですか？」

「こんにちは。村上さんはいらっしやいますか？」若い男よりも穏やかな言い方だった。

「店長？お知り合いですか？」

「はい」

遅れて中に入ったマッドは興味深そうに中を見渡す。キラキラと輝くシャンデリア、酒と煙草と香水の入り混じった匂い、怪しげな色の照明、怪しげな会話。NO1から10までの数字と共に並ぶ若い女性の笑顔。

若い男が何も言わずに店の奥へ消えていく。

マッドと愁は広いロビーと取り残された。ロビーからはほんの少し店内の様子が窺えた。店は満員御礼の様だ。賑わいと熱気がロビーにまで流れ込んできている。

愁は腕時計に視線を落とした。約束の時間は大幅に過ぎていた。

「おう」

愁は視線を声の主に移した。「すみません、遅れてしまって」

「いや、構わないさ」大介は淡々とした口調で言った。「こないだ一緒に居た奴だよな？」

「ええ、マッドです」

マッドは大介に向かって小さく手を上げた。「ハイ」

大介はそれに眉を上げて答えただけだった。彼は愁のスーツとは桁違いの、黒いスーツの胸ポケットから一枚の名刺を取り出した。

「石井章介の最後に勤めていた工場の上司だった奴の名刺だ」

愁は差し出された名刺を受け取った。

「章介は中学卒業後、そこに就職したらしい。3年、真面目に勤めて円満退職。退職理由は他の職種に興味を持ったからだそうだけど、俺が話を聞いた上司はその職種を覚えていないそうだ。それ以降、ここ辺りでは姿を見ない。死んではいないんだろう？」

「ええ」無論、調べられる所までは全て調べた。

「全員の居所を調べる気か？」

愁は名刺を胸のポケットに入れ、大介を見上げた。「勿論です」

「何の為に？」

「終止符を打つために」

E p i s o d e 3

- 4 - (後書き)

*ネバダ州の法律は確認出来ませんでした。日本のは確認済みです。

火曜日

AM 6:00

冬のせいか、まだ朝日は昇ったばかりで、空は薄暗い。昨晚振った雪は積もる事なく止み、ただ寒さだけを空気中に残していった。

珍しく自分で入れたコーヒーは濃過ぎてほろ苦く、お世辞にも美味いとは言えなかった。出勤する途中で寄ったコンビニでおにぎりと菓子パンを買い、コーヒーで無理やり胃に流し入れた。

愁は短くなつた煙草を、灰だらけの灰皿に突っ込み、揉み消した。椅子の背もたれに体を投げるように寄り掛かかると、椅子がギシッと音を立てた。デスクの上に積み上げたファイルを手にする。何度も何度も目を通したファイル、15冊。

聞きなれたヒールの音が、静まり返った廊下に響く。カツンツと言う音が、一定のリズムを刻んで、愁のオフィスに近づいてくる。背筋を伸ばし、髪を背中を躍らせながら、颯爽と歩く、その姿が容易に愁の脳裏に浮かんだ。ヒールの音がドアの前で止み、ノックの音に変わった。

「どうぞ、池上さん」ドアがゆっくりと開き、愁の目に映った池上の眉は上がっていた。彼は小さく笑った。

「何で分かったの？」

「足音ですかね」池上はローヒール、他の女性 愁のオフィスに向かう女性に限り はピンヒールかハイヒールだ。ヒールの高さの違いだけでなく、足音は驚く程違う。その足音は性格を表している様に愁は思う。「おはようございます。今日はまた一段と早いんですね」穏やかな笑みを浮かべて見せる。

池上は肩をすくめた。「相棒だもの。一応ね」彼女の後でバタンツとドアが閉まった。「どうぞせ、お泊りして未解決事件のファイル

を漁っているんじゃないかと思つて」その口調は全く嫌味がない。池上はニツと笑つた後で、コーヒーメーカーに視線を向けた。「誰が淹れたやつ？」

「私です」

「自信は？」

「驚く程ありません」

池上はクスクスと笑つた。「淹れなおしても良い？」

「ええ、不味いと吐かれるよりは、そうして頂いた方が良いかと思
います」

「そんなに不味い訳？」池上はコーヒーメーカーから、コーヒーが
沢山入つたガラスのサーバーを取り出した。思わず中を覗きこみ、
匂いを嗅いだ。「濃そうね」そう呟く様に言つて、部屋を出て行つ
た。

同じコーヒーメーカーで淹れたとは思えない程、池上が淹れたコ
ーヒーは美味しかった。

彼女の淹れたコーヒーを堪能した後で、愁は5冊のファイルをデ
スクの上に置いた。「絞り込みました。ですが、もう少し詳しい資
料を取り寄せてからでないと確定しない事件もあります」

「确实だと思つのはどれ？」コーヒーに口を付け、池上は足を組ん
だ。コツツとヒールの先がデスクに当たつた。

「埼玉の事件ですね」青いファイルを池上に差し出した。「資料も
揃つていますし、ほぼ确实だと私は思つています」

池上はカップをデスクの端に置き、ファイルを受け取つた。ファ
イルを捲ると、事件番号と被害者の氏名、年齢、住所等が書いてあ
つた。今から丁度2年前。被害者は2人。夫と妻。夫、31歳、一
流企業に勤める会社員。妻、27歳、専業主婦。マンションの一室
で殺害されているのを、妻の両親が発見。夫妻には子供。当時、2
歳。が居たが、その日は妻の両親の家に泊まつていた。翌日の夕方、
連絡も付かず、子供を迎えに来ないのを不審に思つた両親がマンシ
ョンを訪ねてみると、夫がリビング、妻は寢室のベットの所で死亡

していた。鍵は掛っており、両親は以前から預かっていた合鍵で入った。

「今度は夫婦？」池上はファイルから顔を上げると、思わず口にした。

愁は次のページを捲る様に促した。

池上はページを捲り、そこにある写真を指差す。「野口恵さんとはタイプがま逆ね。黒い髪、ノーメイク、何処からどう見ても真面目そうな女性。夫の方も真面目そうだし、優しそうに見える。ま、悪魔で外見上だけだ」

写真は家族3人のものだった。夫と妻、産まれて間もない赤ん坊は妻が抱き、夫婦は満面の笑みを浮かべている。授かった小さな命を囲む幸せな夫婦。

「ええ。ですが違いはそれだけではありません。凶器は不明ですが、鈍器の様なものによる殴打、となっています。殺害方法も違いますし、部屋には争った様な跡もあります。通帳や印鑑、その他に現金、宝石類が盗まれている事から地元警察は強盗殺人の線で追っている様です」

「でも、あなたのプロフィールでは強盗じゃない訳？」

愁は彼女の手からファイルを取り、目当てのページまで捲り、再びデスクの上に広げた。「通帳と印鑑を盗んでいます。2年経つ今でさえ引き出された形跡はありません。当時の刑事達が質屋に宝石の写真を持って聞き込みをしていますし、都内の質屋に写真を配っています。売った形跡はありません」

「怪しまれる、捕まる、と思って引き出さなかったのかも」現金は10万程度しかマンションにはなかった、預金通帳には全て合わせて800万近くの金、確かに強盗であれば引き出さないのは不自然な程の金額だ。

「ええ、その可能性もあります」最近の強盗殺人事件はATM等で引き出そうとして防犯カメラに映り、逮捕されるケースもある。もしもその時、別の事件の防犯カメラの映像がテレビのニュースで繰

り返し流れているのを見たら、犯人は引き出す事をやめる可能性がある。「ですが」と愁は解剖の結果と写真が貼ってあるページを捲った。

解剖の写真、妻の華奢な首に残る傷跡を見て、池上は顔を上げた。その顔は戸惑いに満ちていた。「何これ？刃物の傷があるの？」

「ええ、犯人は刃物で妻を脅していた様です。ですが、殺害したのは刃物ではなく、鈍器のようなもの。そのどちらも現場からは発見出来ていません。恐らく刃物も凶器になった鈍器も犯人が持ち込んだと推測出来ます」刃物は被害者宅から無くなったと思われるものはなく、鈍器も持ち去られた様なものはなかった。被害者の両親がこれを証言している。

妻の手首には拘束された跡もあつた。妻の手首に巻かれていたのは、ビニール紐。地元警察は持ち込まれた物と推測している。首の傷はひどくはなく、血が滲む程度。夫にはない、手首に拘束された跡も、ナイフで傷つけられた跡も。

愁は解剖報告書の一文を指で叩いた。「死亡推定時刻にもずれがありません」

「夫は深夜1時から3時。妻は3時から5時？」

「地元警察は銀行の暗証番号や現金などの置き場所を聞いていたのではないかと推測しています。夫を先に殺害し、その後ゆっくりと」

コーヒートの湯気越しに池上が愁を見る。「で、あなたはこの間、犯人は何をしていたと思うの？」

「脅していたと思っています。死をちらつかせて、恐怖を煽り、堪能していたでしょう」夫を目の前で殺害されているのだから、その効果は絶大だ。

彼女の目が何かを思っけて吊り上がる。

「野口恵さんの事件との関連付けはこの段階では出来ません。証拠から何か共通したものが出来れば別ですが」

「後の事件は？」

「5年前、北海道で女性が白骨死体で見つかっています。行方不明

時は7年前で被害者は当時24歳、職業はホステス、独身。骨にナイフの跡が残っていた事から凶器はナイフかと思われ、愁は黄色のファイルを指差した。

だが、池上はファイルを手取る事はしなかった。「他は？」

「11年前、京都で一軒家に何者かが侵入。夫45歳はナイフで滅多刺しにされ死亡。妻42歳はレイプされ、殴られて重傷。子供、当時21歳、15歳は寝ていた為無傷。翌朝起きて来た21歳の息子が発見」

「変な事件」池上はボソツと呟いて、愁が指差した赤いファイルを手を取った。ペラペラと捲り、現場写真で手を止める。「21歳の息子と15歳の娘は寝ていた為、無傷？」それくらいの年の子供なら、物音で起きてきても不思議はない。2人の人間を殺害するのに無音は不可能だ。

「睡眠薬を盛られていた様ですね」

「誰が？」

愁は苦笑を浮かべた。「解らない、と被害者も家族も証言しています。その日は家で夕食を取ったそうだし、誰かから頂いたものもなかった、と書いてあります。2人だけが食べたり、飲んだりしたものは無い様ですよ」

「薬を盛られていたのは息子と娘だけ？」検査で少量の睡眠薬が出、夫の解剖報告書の近くに子供2人の検査の結果が添えられてあった。池上は眉を寄せた。「外部からその状況で薬を仕込む事が出来るとしたら水道とか？でも、子供2人だけなんて無理よね」

愁は小さく頷いた。「ええ、まず無理でしょうね。鑑識が水道や冷蔵庫の食品を検査した様ですが、何も出なかった様です。ただし、家の中から同じ種類であると思われる睡眠薬が発見されています」
「家の中の睡眠薬を使ったって事？」ますます意味が分からない、と池上の表情が曇る。「それともたまたま同じ種類だったってだけ？」

「どちらでしょうね」

池上はファイルをパタンつと閉じた。「後の事件は？」

「6年前、兵庫で、当時32歳の女性が失踪。彼女は忽然と姿を消し、家族が失踪届けを警察に提出。それから3年後、山の中で白骨化した頭蓋骨が発見され、歯の治療痕が彼女と一致。周辺の捜査をしたが、頭蓋骨以外は発見されず仕舞いに終わっています」

「もう一つは？」

「10年前、仙台の海で腐敗した死体が発見されました。被害者は当時20歳の独身男性。男性は数か月前から行方不明になっており、1人暮らしをしていたアパートは争った様な跡があったそうです。死因はロープ等による絞殺」

池上は大きな溜め息を付いた。「この5件、全て犯人を示す証拠がない訳？」

「ええ。指紋、DNA、犯人に結び付く証拠の類は見つかっていませんね」

「証拠は取り寄せたの？」

「埼玉の事件の証拠は今日か明日、鑑識に届く予定です」

「他の証拠とか詳しい資料は？」

「これから総監に報告し、取り寄せる事になると思いますが」愁は腕時計にちらつと視線を向ける。冷子はまだ出勤していないだろう。「いずれにせよ、時間は掛るでしょう」

「鑑識は誰がやる訳？」

「マツドか加藤さん、井上さんではないでしょうか」愁は鑑識を指定出来る立場ではない、冷子がチョイスするとしたらあの3人を選ぶだろう、と愁は予測していた。野口恵の事件を迷宮入りさせない為。

池上は「そう」と小さな声で言って、幾分冷めたコーヒーを胃の中に流し入れた。「もしもこの5件と野口恵さんの事件が全て同一人物だとしたら、最初の殺人が11年前の京都の事件よね？」

「いいえ」

「いいえ、って何よ」池上の眉が上がった。

「11年前の事件以前にも恐らく何らかの形で殺人を犯していると思います。野口恵さんの事件の犯人は20代後半から30代前半、11年前の事件では10代後半か20代前半。ですが、事件のプロファイルを見ると20代である可能性が高いと思われれます。この事件が人生初の殺人だとは思えませんね。手慣れていますし、計画性もありますから」ひどく淡々とした口調で愁は言った。

「何らかの形ってどういう意味？」

「例えば、殺害したのは犯人だが、事故として処理された等ですかね」事によっては冤罪も可能性がある。「10代の頃から様々な形で犯罪に手を染めていると思います。連続殺人犯の多くは幼いころに小動物を殺害している傾向がありますから、この犯人もやっついていられるかもしれません」

「何にしても、一切ばれずに今までやってきた訳よね。賢くて、その上運まで持つてる訳よね」その運はここでお終いにしなれば、池上はカップを包んでいる両手に知らずに力を込める。また次の被害者が出る前に。彼女は自分を落着かせる為に、長く息を吐いた。「でも、どうして全国各地で殺人を犯しているのかしら？捕まらないうい為？」

「解りません。犯人が少しの間、その土地に住んでいたのかもしれないし、旅行に行った先で見かけたり、こちらで見かけ追いかけたのかもしれない」どの可能性も捨てられない、池上の言う捕まらない為に、も。

「殺人を犯す為に全国に旅行？」はあつと大きな溜め息を付き、池上がうんざりした口調で言う。

「意外に多いんですよ。バックパックに地図さえ持っていれば観光地ではウロウロ歩いていても余り怪しまれませんからね」愁は京都の事件のファイルを手に取り、パラパラと捲る。「すみません、道を教えて下さい、から始まって被害者に近付く事も可能ですし、被害者も警戒心より親切心の方を大きくしますから」

「その上、差ほど記憶にも残らないわね。そんなのは観光地であれ

ば年中だろっし」

「ええ」

狭いオフィスに沈黙が流れた。愁は京都の事件のファイルを再び真剣に読み出していた。池上はその他のファイルにざっと目を通す。池上はふつと顔を上げると、淡々とした口調で言った。「昨日は家に帰ったの？」

愁は手にしていたファイルから顔を上げた。「帰りましたよ」

「そう？じゃ、すっかり寝た？」

「ええ、もう、ぐっすり」2時間、デスクの下でぐっすり。

「目の下にクマ、出来てるわよ」

「モンスターペアレントって事？」

池上は思わず引きつった笑みを浮かべる。さすがに『ええ、その通りです』とは言えない。学校側は確かにその言葉を使つてはいたが、無論それは悪魔でも当事者がいないから使用しただけ。

「ああ、もう」花村智子は吐き捨てる様に言った。「何て事なの」花村家は学校から10分くらいの所に建つ、2階建ての真っ白な家だった。昨日の事件があつてから、学校は臨時で休みになっている。登校は明日からで、午前中のみ。子供達のシヨックが大きく、カウンセラーがしばらく派遣される事になっていた。

智子は子供が中にいるのを懸念してか、ドアを閉め、そこに寄り掛かつていた。30代後半、チエニックにジーンズ、生え際が若干黒くなつてきた茶色の髪を後ろに結んでいる彼女は、至つてごく普通の女性に見える。

「先生との間に揉め事があつたんですよね？」池上が優しい声で言った。

「ええ、色々あつて、うちの主人が殴りました」智子ははつきりとした口調でそう言いながらも、2人の顔色を窺う様な眼差しを向ける。そこには不安げな表情も見えた。殴つた相手が殺されたのだから、刑事でなくともその先は想像出来る。「でも、殺したのはうちの主人じゃないですよ」

「何故、殴つたんですか？」

「知らないの？」智子は呆れた様な口調で言った。「散々言ったのよ？校長先生にも」そして悲しげな表情に変わった。

「どう言う事ですか？」

「夏休み明けからうちの子供がイジメを受けていたんです。ひどいかひどくないかと言われれば、ひどくはなかつたんですけど。でも、うちの子はシヨックを受けていて、それで辻先生に相談したんです」

智子は何かを思い出して、眉を吊りあげた。「先生は最初だけその相手の子に口頭で注意をしたらいいんですけど、その子が止めたのは一時だけで、結局またイジメだして」

「相手の親御さんは何と？」愁は穏やかな口調で言った。

智子は小さく首を振る。「何にも。知らされてないみたいで」

今時？と愁は思った。イジメはイジメの側に問題がある事は、既に広い範囲で知られている。イギリスではイジメが報告されると、虐めた側の親子にカウンセラーが付く。家庭内に問題がある場合が多いからだ。虐めた側の調査が厳しく、引越してしまうくらいだそう。アメリカでは加害者に矯正プログラムを受けさせる。それでも無くなりはない。日本は文部科学省がイジメ撲滅を訴えてこそのいるが、現場の教師達は根を断ち切らない主義らしい。否、辻純也だけがそうだったのだと思いたい、と愁は心底思った。

「何度も先生に言ったんですけど、取り合って貰えなくて」智子の目が悲しみに歪み、涙が零れた。彼女は手の平でグイッと涙を拭いた。「私だけじゃ駄目だと思って主人と三人で話し合いをしました。でも、先生は子供同士の事だし、うちの子の口が悪いから相手の子もイジメたくなるんだって」

池上は思わず眉を上げた。学校側の説明と花村智子の説明はまさに逆だ。学校側の説明では花村家はモンスターペアレントであり、理不尽な要求を教師にしている、子供同士の喧嘩に口を挟んでいる、との事だった。校長はそれを疑っていなかったし、イジメがあったとは一言も言っていない。池上はどちらの言う事が正しいのか解らなくなつた。目の前で涙を零す花村智子が嘘を付いている様には思えない。だが、校長も副校長も嘘を付いている様には思えなかった。ただ、子供が自殺をすると大きく報道されるイジメ問題の多くは、学校側が嘘を付くケースが多い様に思える。一体、日本の学校の中ではどのくらいの子供が苦しんでいるのだろう。どのくらいの教師や、加害者の親がその問題から逃げているのだろう。

「それで殴つたのですね？」愁はポケットの中からハンカチを取り

出し、智子に差し出した。

彼女は小さく首を振った。「結構です」

愁は断られたハンカチをポケットの中に戻した。「ご子息は大丈夫ですか？」

智子は顔を上げると、「ええ」と頷き、深く長い溜め息を付いた。

「正直、彼が殺されたと聞いても泣きませんでした。嬉しくもないけど、悲しくもなかったもの」

「土曜日はどちらにいらっしやいましたか？」

「アリバイってやつね」彼女は落ち着いた声で言った。「家族で金曜日の夜から温泉旅行に行ってたわ。帰って来たのは日曜日よ。旅館に確認したら？」智子はジーンズのポケットから、ぐしゃぐしゃになった旅館のパンフレットを取り出した。事件が発覚した時、予め予想していたのだ、自分達が疑われる事を。

「こう言った問題は辻先生のクラスでは多いのでしょうか？」愁は敢えて感情は込めずに淡々とした口調で言う。

彼女は小さく首を振った。「知りません。あの、この問題が起きてから、私も友人とかと付き合う事が怖くなってしまっただけ」智子の目から大粒の涙がポロポロと零れだした。

住宅街に建つ小さな喫茶店。学校側が提示したモンスターパーアレントの家。

「殺してないわよ」沢木の妻は睨む様な目で2人の刑事を見た。「殺してやりたいと思っただけ事はあるけど」

「殺意を抱く程の事をされたんですか？」穏やかな口調で池上が聞いた。

彼女はそれには答えなかった。ただ睨む様な目で池上を見た。

「あの先生はひどかったな」優しいな笑みを浮かべた夫が言った。

「理不尽でさ」

妻は大袈裟な程大きな溜め息を付いた後で、捲し立てる様に話し始めた。「授業中にトイレに行きたいって言ったら、『そんなもん

は休み時間に行け』と言われて、漏らした子が3人。宿題忘れた人はトイレ掃除。何か問題があると延々と怒って、何時まで待っても家に帰ってこないくらい。依怙贖は当たり前、体罰まではなかったけど、暴言は沢山あったのよ。『馬鹿』とか『チビ』とか。一体何時の時代の教師よ。うちの子なんてあの先生になってから、突然深夜に起きだして号泣する事もあって、本当に悩んでるんですよ」

「校長先生には？」そんな事、あの2人は一言も言っていないかったけど、と池上は思った。

「言いましたよ、校長にも、副校長にも。でも、強くは言えないんです。最近はこちらと何か意見を言うだけでモンスターペアレントって騒ぐし、それに子供を預かってもらってるんだから」

「更に怒られたり、嫌がらせされたらどうしよう、ってねえ。その相手は子供だからね、僕達じゃあないから」夫は喫茶店の磨かれた床を見ながら、ゆっくりと悲しそうな口調で言った。

「そんな事をしそうな教師だったんですね？」

夫婦はパツと顔を上げ、愁を見ると力強く頷いた。「絶対やりそうだった」妻が言い切る様な口調で言った。「偶然かもしれないけど・・・」そこまで口にして、彼女はその先の言葉を濁した。

「何でしょう？些細な事でも構いません。気になる事があればおっしゃって頂けると助かります」愁は穏やかな微笑を浮かべ、妻を見て頷いた。

「余りにもひどかったから先生に一言言っただけです。授業中のトイレくらい許してあげて下さいって、そしたら」彼女は夫をちらりと見てから、視線を床に投げた。「何日かプリントが入ってなかったんです。数日だけだったけど、学校行事に参加するか参加しないかとかのプリントで。子供は貰ってないって言うし、先生は配ったって言うし」

「偶然かもしれないけど、アレは困ったよなあ」

辻先生よりに見れば偶然、沢木夫妻よりに見れば嫌がらせ、その真実は辻純也が永久にあの世に持って行ってしまった。そしてそれ

は、もう表面に出る事はないだろう。

池上は軽く息を付いた。とても良い香りのコーヒーが胃を刺激した。「クラスの親御さんは皆さん、同意見なのでしょうか？」今は廊下に立たせると二コースになる。授業中とは言えトイレに行かさないとなれば、問題になるのではないのだろうか。

「いいえ、全員じゃない」彼女は弱々しく首を振った。「半分くらいです。でもその半分も、口では変だつて言うけど、問題視するまではないかないんです。多分苦情を言ったのが私入れて数名だと思います」

その数名が学校側にとってはモンスターペアレントなのかもしれない、と池上は思った。もしも花村智子や沢木夫婦が言っている事が正しいのだとしたら。

「確かにねえ、理不尽な事を言う親御さんもいるんだと思うよ。辻先生の授業が退屈過ぎて、成績が下がったつて苦情を言ったつて話も聞くしね」言葉を一つ一つ選びながら、夫はゆっくりと穏やかな口調で言った。まるで誰かを諭す様な口調だった。「でもねえ、辻先生のやり方で良いのかなあ、つて。黙ったままじゃあ、解決はしないよなあつて」

「その成績が下がったと苦情を言った方つて言うのはどういう方ですか？」池上は手帳を取り出し、ペラペラと捲った。

「小山田さんつて方です、その」妻は夫の方を見て、困惑した表情を浮かべた。

夫は彼女を見て、口を開いた。「そうだなあ、カツとなりやすいかと聞かれればそうだと思うよ。刑事さんはそう言う事聞きたいんでしょ？」

ええ、その通りです、と池上は心中で答えた。学校側が教えてくれたモンスターペアレントの名前、小山田と言う文字を見つけた。

田中達が聞き込みに言っている。

「旦那さんが良く喧嘩するつて」妻はためらいがちに口を開いた。「警察沙汰になった事はないみたいだけど、PTAとか自治会

でも相当揉め事を起こしてるらしくって」

「悪魔でも噂だけどねえ」

沢木夫婦のアリバイは、家で過ごしていたとの事だった。確かなアリバイはなし。

車に乗り込むと、池上はハンドバックを後部座席に投げた。「ねえ、どう思う?」

「どうとは?」愁はボタンツとドアを閉める。

「さっきの話。どっちがモンスターだと思う? 辻純也、それとも花村智子、沢木夫婦?」

「モンスターは辻純也を殺害した犯人でしょうね」

*

小学校から車で30分、辻純也が住んでいるアパートは築10年だが、立地も良く、綺麗だった。

「この家賃、幾らだか知ってる?」2人が部屋に入るなり、井上が嬉々とした声で言った。「なあーんと、18万円。教師って素敵な職業ねえ」

「彼の場合、教師だけの収入ではないのでは?」愁はぐるりと部屋を見まわした。リビングダイニング、キッチン、その他に部屋が1つ。大きなテレビに最新型のノートパソコン、革張りのソファ、部屋はモデルルームの様だった。

「ちえっ」と井上は舌打ちした。「何で解る訳? 辻純也は財テクマシだったみたいよ」ラテックスの手袋をした手で、ダイニングテー

ブルの上に置いてある2冊の通帳を広げて見せた。「残高、3000万」

「すごい」池上が通帳をマジマジと見つめた。

「株にFX、それからついでにアフリエイト」リビングから続くドアを指差す。「寝室にはその関係の本がたくさん置いてあった。教師の収入なんて遙かに越してるわね」

「じゃあ、何で教師を続けているのかしら？」

井上は池上を見て、首を傾げる。「何でかしら？子供が好きだから？教師という職業に誇りを持っているから？物を教えるのが好きだから？でも、嘘臭いと思う？」

「嘘臭い？どう言う意味？」

彼女は通帳をテーブルに戻し、池上を見てニツと笑う。「田中達がモンスターペアレントに会ってきたの。でも」と黄色のマネキアを塗った人差し指を立てて見せた。「意見が真つ二つに割れたのよ。学校側から苦情を言ってきたと提示された人達は、辻先生は理不尽な事を言う教師だと言ってた。でも、他の人達は良い先生だと言って涙を流した。さて、どっちが本当？」

「恐らくどちらも、ね」池上は部屋を見回した。「田中達は？」

「小山田さんのおうち」

池上は小さく頷いた。

「あら、愁がいなくなつた」井上は首からぶら下げたカメラを外し、テーブルの上へ置いた。「折角、プロフィール聞こうと思つたのに」キッドの中に手をつ突っ込んで、井上は不満そうな声を漏らす。

「解剖がまだなんだから無理でしょ。解剖は今日やるの？」

ふふん、と井上は笑つた。「プロフィール、少しは詳しくなつてきた訳？解剖は今やってるんじゃない？」

「そんな訳ないでしょ」池上はそう言つて、寝室に向かった。ドアは開け放れていたが、愁の姿は見えず、他の鑑識のジャンプスーツが動くのが見えただけ。ドアから中を覗くと、10畳ほどのスペースにセミダブルのベット、デスクの上にデスクトップのパソコン、

こちらも開け放れたままのクローゼット、大きな本棚があった。クローゼットの中には教師らしくジャージが数点、ノーブランドのスーツ何着かあったが、ブランド物のスーツも数点あった。

愁はしゃがみ込んで、本棚を調べている様だった。

「ねえ、何かあった？」

「そうですね」愁は立ち上がると、振り返った。「相当、勉強していたみたいですね、財テク関係の本がぎっしりです。後は話題になった本やミステリー等の小説」

「それだけ？」

愁は池上を見下ろした。「教育関係の本は一冊もありませんね」

池上は肩をすくめた。「実家にはあったわ。結構な量があったと思っただけ」

「ええ」確かに本棚を埋め尽くす程に教育の本があった。児童心理学から子育ての本まで、大きな本棚を覆い尽くす程に。

「何が言いたい訳？」

「いいえ」

左の唇の端が切れ、血が滲み、青く腫れあがっていた。ハンカチで押さえていたが、白い生地がゆっくりとしたペースで赤く染まっ
ていく。

「大丈夫ですか？」

桜井は弱々しく頷いた。「はい」彼は情けない表情を浮かべ、視線をマジックミラーに移した。「油断しました」

取調室のスチールデスクの上に突っ伏して、大きないびきをかきながら、その男は眠っていた。顔は赤らんでいて、狭い部屋はアル
コールの匂いで充満していた。鉄格子付きの窓を全開していたが、
その匂いは制服警官の顔を歪めるには十分過ぎる様だった。

「全く、昼間から酒飲んでるって何なの？」

その男、小山田武雄は田中達が事情聴取に行くと、既に来上が
っていた。足元はおぼつかず、呂律は回らない。拳句の果てに2人
に絡み、大暴れ。妻や子供達は家にはおらず、田中達は仕方なく小
山田と一緒に連れて帰って来たのだが、車から降りる時に再び暴れ
出したのだ。止めに入った桜井は殴られ、駆け付けた職員達に取り
押さえられた。そして小山田は取調室に入るなり、眠ってしまった。
「小山田は現在日雇いで仕事をしているそうです。元々左官職人で、
自分の会社を立ち上げていましたが、最近になって潰れ、現在はフ
リーで仕事を貰っているらしいとの事です」桜井は口を開くのが痛
いのか、時折苦痛に顔を歪めながら、早口で言った。「妻はフルタ
イムの仕事に行っているらしく、子供達は祖父母の家だとか。全て
近所の方から聞いた情報ですが」

「医務室、行った方が良い。後は田中に聞くから」池上はハンカチ
を差し出し、「変えた方が良いわ。それ、汚いもの」と小さく笑っ
た。

桜井はハンカチを受け取ると、軽く頭を下げた。「ありがとう」

ざいます。田中さんは係長の所に行っています」桜井は「じゃ」と言い残して、部屋を出て行った。桜井を追いかける様にして、パタントンとドアが閉まった。

池上は両手をポケットの中に突っ込んで、マジックミラーの中を覗きこみ、壁に寄り掛かった。「あいつが被害者を殺害したとは思えないわね」

「していませんよ」愁は淡々とした口調で言った。

池上は顔だけを愁に向ける。「その理由は？」

「彼は右利きです」

「確かに。桜井は左を殴られているわね」

小山田武雄が右利きである事は、疑い様のない事実。桜井は暴れた時にたまたま当たったのではなく、完全に殴れている。ただし、辻純也を殺害した犯人が左利きであるのは、現段階では可能性が高い、という事に過ぎない。辻純也の解剖は今、行われている。結果は解剖待ち。

池上ははあっと溜め息を落としてから、ポケットの中で握りしめていた携帯電話を取り出した。「そろそろマッドにかけても良い頃よね？」

愁は微かに肩をすくめた。

池上は「かけてくるわ」と呟く様に言い残し、部屋を出て行った。マジックミラーから正面の壁に寄り掛かり、愁は小山田をじっと見つめる。規則正しく上下に動く肩は大きく、体格も良かった。酔っていたとは言え、桜井の傷は相当ひどいものだ判断出来る。酔いから冷めた時、彼が思うのは一体何なのだろう。それが罪悪感である事を、愁は願った。

しばらくすると池上ではなく、田中が部屋へ入って来た。「まさに、飲んでも飲まれるな、ですね」

「ええ」

「彼は留置所に行かせる事にしました。ここに居ても、とてもあの状態では、起きそうもありませんしね。目が覚めて、頭も覚めるま

で、あの独房に滞在してもらう事にします」田中はそう言うと、端正な顔立ちを緩めた。「まあ、彼が辻純也を殺害した犯人ではなさそうですね」

愁は小さく頷いた。「そちらの聞き込みはどうでしたか？」

マジックミラーの横に寄り掛かり、田中は長い腕を胸の前で組んだ。「理不尽な要求をしている保護者がいるとは思えませんでしたね。辻純也は子供達に理不尽な指導をしている、その内容は筋が通っていると思えましたし」田中は真剣な眼差しを愁に向ける。「まあ、一番理不尽な要求をしていたのが小山田さんの様ですから、酔いが覚めたら彼や奥さんに聞いてみます」

「ええ」池上から報告は受けているはずだから、愁は自分達が聞いた事は言わなかった。現場責任者は田中だ。報告は全て彼にいく。

「ですが、学校が提示した5組の親御さん以外、辻先生の印象はさほど悪いとは言えません。逆に若いのによくやっていると、と話す人もいましたから」

死者を冒瀆するな、の精神に則っているのかもしれない、と愁は思う。「どちらを信用しますか？」死人に口なし、とも言う。

「保護者の方を」田中は淡々とした口調で言った。「浜野さんは？」
「同じです」

ドアの開く音がしたが、2人のいる部屋のドアではなく、小山田がいる取調室のドアが開いた。制服警官が3名入って来て、彼の周りを取り囲んだ。1人の警官が何度も小山田の肩を揺するが、彼は一向に起きる気配がない。3名の警官達は仕方なく、小山田の両腕や腰のベルトに手をかけ、引きずる様にして立たせた。中に居た警官がドアを押さえ、3名は眉間に皺を寄せながら、小山田を取調室の外へ引きずって行く。

田中は目の端で、隣の部屋から運ばれて行く小山田を見送った。

「彼じゃないとしたら、犯人はやはり兄の裕也、でしょうか？」

98%の確率で、と内心では即答したが、愁はそれを口にはしない。「犯人であればマッドが証拠を掴んでくれると思います」

「マッドさんは辻家と病院の捜索をし直しているんでしたね」

「ええ。それに内田さんの解剖が終われば、証拠と共にプロフィールも出来そうですし」恐らくそれは必要ないだろう。犯人はいずれ分かる。ただ、動機が分からないだけだ。

田中は小刻みに数回頷くと、組んでいた両手を脇へ垂らした。「私達はこれから学校側と現場の保存の事で協議しなければいけないので、浜野さん達は辻裕也の周辺を」

田中が言い終わらないうちに、ドアが開いた。「辻裕也は左利きだつて。あら、田中、まだいたの？」池上がそう言つて微笑んだ。

*

鑑識のバンのトランクを開け、その中に座つて、マッドは休憩を取っていた。

有力な容疑者である辻裕也は35歳、独身。実家で暮らしており、部屋は昨日マッドが調べた。何もなし。部屋は書斎と寝室の二つを与えられていたが、遺書もなければ、日記の様なものもなく、犯行を裏付ける様な物証もなく、死を匂わすものもなし。本棚は医学関係のありとあらゆる本や雑誌、医療を題材にした漫画や小説があり、パソコンの履歴も殆どが医学に関するものだった。

彼の生活の大部分が仕事で埋め尽くされている、マッドはそう印象を持った。誰かに似ている。

辻裕也と仲の良い友人は皆、医者。30歳まで同じ大学の女性と付き合っていたが破局。それ以来、恋人らしい恋人はいないらしい。

恐ろしい程、誰かに似ている。

自動販売機で買ったホットコーヒーは甘く、幾分冷めてきていた。読む時間が殆どなく、常に持ち歩く事になっている、最新号の最新・科学捜査。愁がアメリカに帰った時にバックナンバも一緒に買ってきて貰った情報誌だ。何処その警察の鑑識や大学教授、その道のスペシャリスト達が毎回特集を組んで掲載されている。マッドにとってはバイブルの様なもの。

「あら、休憩？」

マッドは本から顔を上げると、朗らかに笑った。「交代でね」

「そう。何を読んでいるの？」池上はコートのポケットの中に、車のキーごと手をつっ込んだ。外は凍える程寒いのに、マッドは何故車の中で休憩しないのだろうか。鑑識の紺色のジャンプスーツとジャンパー姿のマッドは、ひどく寒そうだったが、平然とした顔をしていた。

「科学捜査の本。最新号なの」マッドは雑誌の表紙を見せた。今月号は運悪くウジの拡大写真。ウジが五匹、虫めがねで拡大されている。

「楽しそうね」特にウジの特集が、と池上は思った。表紙のウジの写真の隣には死体農場からのウジの研究結果、の文字が躍っていた。今月号は死体農場に在籍する研究者の特集らしい。内容は専門的過ぎて読めないかもしれないが、表紙に書いてある見出しくらいは池上にも読めた。ウジ虫は見ただけで叫んで逃げる様な事はしないが、好んで触ろうとは思わない程度に慣れている。

「楽しいよ。新しい情報源だからね」マッドはにつこりと笑う。その目は爛々と輝いていた。「それにアメリカに帰ったら僕もこれに載るんだよ。日本の科学捜査で学んだ事と掴んだ事をメインにね」マッドは親に褒められた子供の様に嬉しそうだった。

そのマッドの表情を見て、池上も思わず微笑んだ。マッドの笑顔は何故か吊られる。「すごいわね」その情報誌がどれくらい価値のあるものかは判らないが、少なくとも鑑識の間では価値ある雑誌な

のだろう、と池上は判断した。

「シユウも日本のプロフィールの集計結果とかを載せるって言うたよ」

池上はマッドが持っている雑誌を指差した。「それに？」

「まさか、これは科学捜査。シユウは犯罪心理学ジャーナルって言う雑誌。どっちも最新の情報が載ってるから、見逃せないんだよね。僕にもシユウにも新しい情報は常に必要だからね」

池上はゆっくりと首を傾げ、マッドの持っている雑誌をじっと見つめた。

「どうしたの？あれ？ウジ嫌い？」マッドは慌てて雑誌を後ろに隠した。

「好きではないわ」池上は上の空で答えた。だが、まだマッドが隠した雑誌を目が追っていた。

「泉ちゃん？」

池上は彼の隣にドサツと腰を下ろした。車がガクンと下に沈む車の中は異臭がした。魚が腐った様な匂い。その匂いに負けまいと消臭剤の匂いがしたが、腐った様な匂いの方が圧倒的に勝っていた。「辻純也のアパートには教育関係の本が一冊もなかった。実家にはあったけど、彼は頻繁に帰っていた訳ではないし、何年も前に家を出ている。教育熱心な先生なら、常に情報を求めるわよね？教育界だって新しい情報があっても可笑しくない」

「そうだね、教育熱心な先生なら、ね。でもね」マッドは隣に座った池上を優しげな目で見つめる。「こないだテレビでやってたし、被害者の職場の先生が言っていたんだけど、殆どの教師が新しいものを学ぶ様な時間がないそうだよ。現状やっている事が精一杯で、講義とかにも参加出来ないんだって。それに学校のデスクには数冊、教育学が載っている冊子みたいなのが置いてあったよ、皆のデスクにもあったやつだけだね」

「それは学校で配られたやつかしら？」

「多分ね」だって殆どの先生のデスクの上に置いてあったものと

マッドは思った。それだって、開いてみた後がある人もない人もいたし、最新刊だけ無くなっている人もいた。辻純也は開いた後だけはある。読んだかどうかは本人に聞かなければならぬだろう。

「それに辻純也は土曜日の日にも休日出勤しているよ」

「そうね、でもそれならあなたもしているし、私もしてるわ。それに超過勤務の上に勉強もしてる」池上はマッドが隠した雑誌を取った。「でも、辻純也は教育の本ではなく、財テクの本を読んでいたのかも」それが悪い事だと、池上が思っている訳ではない。教師にもプライベートな時間は必要で、教育関係の勉強ばかりをしると思わない。ただ、何もないのが、まるで教師と言ふ仕事をおざなりに行っている様で何処かふに落ちない。

「それは我々の義務ではないでしょうか？」車の前方から愁の落ち着いた声がした。

「何時からそこに居たの？」

「先ほどから」マッドの横から顔を出した愁が穏やかな微笑を浮かべる。手には缶コーヒーが二つ。そのうちの一つを池上に差し出した。

「ありがとう」池上は受け取ると、両手で缶を包んだ。少し熱い缶は冷えた指先を温めるのに丁度良かった。「義務って何の話？」

「犯人を捕まえる為の義務、だよ。犯罪は日々進化してる。犯人は指紋を気にしだし、DNAを気にする様になった」マッドは池上が膝に乗せている雑誌を指差した。「なら、次はウジ虫かも」

「なら、教師は？」

「教師は子供を預かります。けして学業を教える為だけの職業ではない、と私は思っています」愁は缶コーヒーを軽く振り、缶を開けた。「私の恩師が特殊な持病を持っていました。始め、本人や家族もそれに気が付かなかったそうです。担任の教師もまた同じでした。彼は恩師を怠けもの呼ばわりし、親御さんにまでそう言ったそうです。ですが、同僚の教師がその持病を指摘し、更に専門の病院を教えてくださいました。恩師はその事を一生感謝し切れなと言つて

いました」時代は日々変化し、病気も日々進化し、発見されている。こないだまで親の育て方や本人の怠け癖と言われていた行動が、今は病名が付いている。そしてそれはどうやって知識として得る事が出来るのだろうか。

「辻純也は前者の方だと言っの？」

愁は肩をすくめた。「さあ、どうなのでしょう」

「でも、それが正しくとも動機にはならないわね」

兄である裕也が、弟の職務怠慢だと仮定してを気にして殺害などほしないだろう。まず、それが分かったら、説得するくらいはするかもしれないが。少なくとも彼はきちんとした教員免許を取っているのだから。

携帯のバイブ音がして、マッドが慌てて胸ポケットをさぐる。「僕だ」ターコイズブルーの携帯には、シルバーのMの文字のストラップ、雫型のクリスタルガラスのストラップ二つがぶら下がっている。「もしもし？」

池上はマッドから取り上げた雑誌に視線を落とした。中をペラペラと捲る。一部の英語がどう頭を捻っても、理解出来ない。どうやらこの雑誌は一般向けではなく、悪魔でも鑑識や警察関係で働く人間用。身分証がないと購入出来ず、捨てる際には十分に注意を、との注意書きが目立つ。

「了解」マッドは電話の主に向かって言い、電話を切った。「辻純也の顔に掛っていた白い紙に裕也の指紋が二つ出たって」

「純也くんと仲？」 寺西は眉をひそめた。「冗談でしょ？あいつを疑っているんですか？そんなのひど過ぎですよ、刑事さん！」その目には怒りと悲しさが見える。

どんな言い方をしたところで寺西は怒っただろう、と池上も愁も思った。他の医者や看護師たち、患者に至っても反応は殆ど同じだった。その中でも特に仲が良いと誰もが口を揃えて言ったのが、寺西という裕也の友人だった。彼は裕也とは違う医大を卒業後、辻病院に就職。裕也の方が一つ年上だった。2人の友人関係はそこから始まった。

辻裕也は真面目で優しい、腕の良い医者だった。手術の腕は抜群に良く、何度かテレビや医学雑誌にも取り上げられている程で、彼を頼って遠くの県から手術を希望する人も来る。彼の手術によって命を救われた人が何十人もいる。院長の息子だという事をひけらかさない、嫉妬をされれば謝ってしまう様な人物。多くの人間が辻裕也をそう評価した。

「純也くんと面識は数回しかありませんが、彼と話している時の裕也は良い兄そのものでしたよ。それに、何より」寺西はうつと声を詰まらせる。「あいつが人を殺すなんて。人の命を救いたいと医者になった、裕也が殺人を犯す事なんて絶対ない」エグゼクティブチエアの中に体を丸め、彼は涙を流した。デスクの上で頭を抱え、肩を震わせている。その表情は2人からは見えなかった。

残念だが人の良い医者が連続殺人犯になった事例もある、と愁は思う。そしてその友人達は言うのだ、彼は医者だ、人を殺すはずなんてない、と。

物証がある、辻裕也が辻純也を殺害したのは間違いない、と池上は思う。無論、確定ではない限り、事件関係者にその事は話さないが、恐らく彼らが知るのはニュースになるはずだ。「では、裕也さ

んの自殺の原因、思い当たる事はありますか？」池上は穏やかな口調で言った。

寺西は顔を上げないまま、首を振った。彼の目から涙が飛び散り、デスクに当たって弾けた。「ない、そんなものもない」

「彼は仕事以外に、どんな友人関係があつたのでしょうか？」

寺西はふつと顔を上げ、愁を見た。その顔には戸惑いが見える。話しがいきなりあらぬ方向に飛んだのだから、当然と言えば当然の反応だ。「え？」彼の目からポロリと涙が落ちた。その目は池上と愁とをさ迷っている。「いや、医大の仲間とか、高校時代のクラスメイトとかの結婚式に参加したり、飲んだとかつて話は数回聞きましたけど」

「裕也さんには親しくしている女性はいましたか？」

「ああ、最後に付き合つたのは医大の同級生だつたと思います。えつと、西美奈子さんだつたかな。彼女と別れてから」寺西は磨かれたデスクの端に視線を移した。そこに何かがあるかの様にじつと見つめる。数十秒、考えてから、彼は視線を2人の刑事に戻した。「ここ数年の事だつたと思うけど、裕也が酔っぱらつた時ポロツと言つたんです、好きな女性がいるんだけど、その人との結婚は望めないうつて」

「付き合っていたんですね？」

寺西は首を振った。「いや、そこまでは。ただ、報われない愛でも良い、つて言っていたのが印象的で」

報われない愛、マッドなら全力で否定しそうな愛、2人は同時にそう思った。

「相手の事は解らないけど」寺西は白衣のポケットからハンカチを出して、涙を拭いた。「ああ、院長が反対しているのかな、つてその時感じたんですよね」

「お父様、がですか？」池上は辻豊を思い出した。昨日の彼は弱々しかった様に思う。二男が何者かに殺害され、その後長男が自殺すれば、参ってしまうのは当然だろうが。裕也が屋上から転落し、息

を引き取ると、父親は寝込んでしまった。池上は昨日の夕方に電話を掛けたが、案内してくれた女性が言うには、辻豊は鎮静剤を投与し眠っているとの事だった。『今まで見た事がない程、落ち込んでいらっしやって』と女性は悲しげに言った。

「院長は簡単に言えば古い感覚の男性です。女、子供は自分の言う事を聞くもの、と思っっている様な」寺西はデスクの上で組んだ両手に視線を落とす。「さすがに政略結婚まではさせないでしょうが、息子が選んだ嫁が自分の気に入らない女性であればきっと許さないと思います。特に裕也はこの病院の跡取りである訳です」

今時跡取りね、確かに古い感覚の持ち主なのかもしれない、池上は思わず大正生まれの祖母の顔を思い出した。だが、祖母ですら、良い家系、良い学歴、良い勤め先の人と結婚しなさい、とは言わなかった。

「裕也が直接そう言った訳ではないのですが、私自身、院長と接していてそう印象を持っています。院長は腕の良い、立派な医者です。ですが、経営者としてはワンマンで傲慢な部分があったと思います。それを補っていたのが裕也だったんです」

彼がいなきや働いている意味がない、と泣いて話す看護師がどれくらい居たか、と池上は思う。片手では足りない。その看護師の殆どは女性だったが、中には男性も含まれていた。人望があり、腕も良い医者、容姿もそこそこ良かった、おまけに病院の跡取り息子、とくれば言い寄って来る女性も多かったはずだ。だが、本人は報われない愛に身を投じていた。

寺西のオフィスをみると、辻裕也のオフィスの外で紺色のジャンプスーツを着た褐色の髪の方、20代前半くらいの綺麗な看護師が立ち話をしていた。彼女はとても楽しそうに笑っていた。

辻医院では勤続5年を超える医師は個人オフィスが貰える。差ほどの大きさはないものの、医者達は私物を持ち込んで束の間のリラックスの場所にしたり、医学書等を置いて勉強の場にしていたり、

と各自様々な用途で使用している様だった。辻裕也のオフィスは個人的なものは一切なく、殆どが医学にまつわる物ばかりだった。

「報われない愛」池上がぼそつと呟いた。

愁は苦笑した。「マッド」

マッドは振り返り、2人を見つけると手を振った。「ハイ」彼は再び看護師に向き直り、小さくクスクスと笑った。また彼が何か話しかけると、看護師もクスクスと笑った。

看護師はマッドには小さく手を振り、2人の刑事には会釈をして去って行った。

「オフィスで話しましょうか」愁は池上の肩をポンつと軽く叩いた。池上が愁を見上げると、何時もの穏やかな微笑があった。「そうですね」彼女は歩き出した愁の後を追った。マッドが先に辻裕也のオフィスに入って行く。

池上がパタパタとドアを閉めると、マッドがにんまりと笑った。

「何か分かった？」

「辻裕也には想っている女性がいるそうよ」

「あら、ま。それだけ？」マッドは意地悪そうにクスクスと笑う。

池上の眉が跳ねる様になる。「どう言う意味？」

「今の彼女、以前先生の事が好きで猛烈にアプローチしたんだってさ。若い子って積極的で良いよね」マッドは朗らかに笑う。「そしてたらさ、やんわりと好きな人がいるからって振られちゃったんだって」

池上はスーツのポケットに両手を突っ込んだ。「それで？」

「どんな人が知りたくて根掘り葉掘り聞いたら、誰にも言わないって約束で教えてくれたらしいよ。年上で、とても品のある優しい人だった」

「で？名前は？」

マッドは微かに肩をすくめる。「そこまでは知らないって。それ、調べるの、泉ちゃんのお仕事でしょ」とにこやかな笑みを浮かべた。ラテックスの手袋をはめて、本棚の中から医学書をペラペラと捲

ついていた愁が淡々とした口調で言った。「彼の日常は病院と家の往復でした。酒はほどほどで友人達としか飲まない、ギャンブルはしない、インターネットも医学関係のホームページを閲覧するか、病院のホームページを更新するのみ。出会う場所は限られていた様に思えます」

「まるで君の様」

愁はマッドを一瞥し、再び本に視線を戻した。「常に最新の医学を勉強し、日常の病院勤務、彼は一体何時寝ていたんでしょうね」「きつとデスクの下で寝ていたんだわ。だってここ、警視庁の床より寝やすそうよ」

*

年上で、品があり、優しい女性。2人の目の前にいる人物はまさにそのもの。

村木美恵、42歳、小学生と中学生の子供が2人いるシングルマザー。辻家から程近いマンションに三人で暮らしている。開け放れたドアからは綺麗に整理された室内の一部と、とても美味しそうな煮物の匂いがした。

「私がですか？」

「違うんですか？」

美恵は小さく首を振った。「いえ、あの、どう言ったら良いのか」池上は思わず愁を見上げたが、彼は美恵を優しくな目で見つめていた。

「そんな、あの」彼女はわっと泣き出した。顔を両手で押さえ、肩を震わせ、ただ泣いている。

愁は彼女の指の隙間にハンカチを滑り込ませた。「彼を想っていたのですね？」ひどくゆったりとした、優しげな声。

美恵はハンカチを手の中に収め、涙を拭くと、微かに頷いた。「はい」風の音にすら消えてしまいそうな、弱々しい声で答える。涙は後から後から彼女の頬を濡らして落ち、コンクリートの地面に円を描いた。

「彼があなたを想っていた事に気が付かなかったのですね？」

「はい」少し落ち着いた声だったが、ハンカチを握る手は小刻みに震えていた。涙は彼女の意味とは関係なく、落ち続けている様だった。「そんな事一言も」一息でそう言い、彼女は再び声を詰まらせた。流れ落ちる涙でアイラインが滲み、目の下が黒ずんでいた。

「恐らく言えなかったのでしょうかね」

美恵は愁をすぎる様な目で見上げた。辻裕也が一言も彼女に言わなかったその理由は、美恵にも痛い程分かった様だった。美恵は小さく頷いた。「そうかもしれません」その悲しげな表情は、儚げで、今にも何処かに消えてしまいそうだった。

想いを伝えてもいない相手に心のうち等話するだろうか、池上はハンカチで溢れ出る涙を拭う彼女を見つめた。辻裕也が殺人を犯した理由や自殺した理由を、村木美恵が知っているとは思えなかった。ただ、寺西が言った『報われない愛』がひどく痛々しかった。そして彼女が次に知る辻裕也の姿は、ニュースの画像になるだろう。

池上は美恵が落ち着くのを待つてから、話を再開した。「辻家で働きだして何年になるんですか？」

「5年です。離婚してからですから」

「辻さんのご家族はみな、仲が良かったと思われませんか？」

美恵は2人を交互に見ると、戸惑った表情を浮かべた。「どう言う意味ですか？」

「殺人事件なので、様々な事を聞かねばなりません」愁は穏やかな

口調で言った。「深く考えずに、思ったままにお答え頂けますか？」

美恵は小さく頷いた。「はい。純也さんは年に数回しか帰って来ませんが、仲が良かったと思います。勿論男性同士なので、ベタベタとした仲が良い、ではありませんけど。純也さんが帰って来ると皆さんでお食事を取ったりしていましたし。特に純也さんと旦那様はお2人で将棋をしたり、株か何かのお話をされていたりして遅くまで話していて寝不足だと旦那様がおっしゃっている事もありましたから」

「そうですね」池上は淡々とした口調で言った。

「裕也さんはお二人が将棋をされていたりする時は何をしていたんですか？」

「お仕事を。普段からお食事をされても病院へまたお戻りになる事も多くて」

辻家には村木美恵を含む計5名の家政婦、1名のコックが居た。美恵以外の人間もまた同じ様な事を言っていた。辻裕也が弟の純也を殺害する動機が見えてこない。2人は仲の良い兄弟だった。性格は違うが、争いをする様な2人には見えなかったそうだ。

父親の豊は寺西が言った通りの人物の様で、傲慢な部分があったが、それでも仕事を辞めなくなるほどではなかったらしく、どこそこの家の主よりはマシだと言った意見も聞かれた。

「そうですね。裕也さんと個人的なお付き合いはありましたか？例えば食事に行ったり、など」

「5回だけ、ですが」数える程しかない思い出、美恵の目が悲しみに揺れた。「映画の趣味が同じだったので、御一緒させて頂きました」

「それは何時の話ですか？」

美恵は愁を見上げた。「日曜日です」ポロポロと落ちる涙は、何時までも止まらない気さえしてくる。

「誘ったのは裕也さんですね？」

「ええ。普段は子供がいるので平日なんですけど、どうしても日曜日

に、と「彼女は涙を拭き、小さく頷く。「そう言えば」

変わった事は？の質問を、池上は呑み込んだ。

「裕也さんは最後に『さようなら』と。何時もなら『また明日』か
『月曜日に』と言っのに」

「解決、万々歳」井上は両手を小さく挙げ、直ぐに下ろした。その顔はひどく不満気だ。「とは言い難いわね」

「でも、辻裕也が弟の純也を殺害した事は間違いないと思うわ。純也の顔に掛っていた白い紙からは裕也の指紋しか出なかったし、学校にあった紙とも一致しなかったんでしょう？」池上は足を組み、その上に解剖の報告書に乗せて、パラパラと捲った。見慣れた内田の字。

マツドは4人の前にそれぞれコーヒーを置いた。砂糖とミルクがたっぷり入ったコーヒ―は井上、ミルクだけ入っているのは池上、ブラックはマツドと愁。「しなかったね。学校の紙は安物で、裕也の指紋が付いていたのは高級なやつだもの。手触りからして違うもんね」

「愁、動機は何？」井上は正面に座る愁をじっと見つめる。

「悪魔で推測ですよ」愁は指を立てて見せ、デスクの上に鑑識の報告書を置いた。「恐らく辻裕也は墓場まで持つて行くつもりだったのだと思います」

「動機を？」

「ええ」

マツドは井上と池上の間にパイプ椅子を持ってきて、そこに腰を下ろした。椅子がぎしりと鳴いた。「まあ、元々、全てが計算付くだよね、この事件」

「土曜日に辻純也を殺害、日曜日に村木美恵と最後のデート、月曜日に私と池上さんが辻家に入ったのを見て自殺。手術も前もって月曜日の午前中に速めていた様ですし」

井上がデスクの上で頬杖を付き愁を見て、ほんの少し首を傾げる。

「確かにあの屋上から辻家の門がギリギリ見えたけど、2人が刑事かどうかなんて分からないじゃない？」

「私達が他に何に見えますか？」愁はくくつと笑った。「月曜日に小学校へ職員が出勤し、純也の遺体を発見、そこまでは誰にでも容易に予想出来るでしょう。父親の豊は足を骨折していて動けませんから、刑事か警官が来る事も予想はしたはずです」彼にとってそれは刑事であろうと、警官であろうと、同じ事。どちらにも大差はないのだから。

「まあ、新聞の勧誘にだけは見えないけどさ」井上は小さく肩をすくめた。

「それに彼は最初に靴を落とし、女性の気を引いてから、身を投げています。わざわざ証人まで作ったのですよ」恐らく、彼女が一般の人よりも『死体』や『血』に慣れている看護師である事も計算済みなのかもしれない、と愁は考えていたが、口にはしなかった。

「じゃあ、遺体の顔に白い紙を置いたのは何で？」

「指紋を残す為と純也さんの死に顔を見たくなかったのだと思われ、ます」殺す程憎くても、裕也が死というものに慣れていたとしても、辻純也はたった1人の弟だ。

「指紋を残す為なら、エアコンのリモコンには残ってないじゃない。それにあんだけ頑張ったのに階段の手すりにも一つもなかった」手すりの指紋を採取した事を思い出し、井上はげんなりとした表情を浮かべた。あれは悪夢の様な一日だった。

「エアコンや手すりは直ぐ判明しちゃうからかな。綺麗に拭いたのは捜査を攪乱して、時間稼ぎってところかなって思うんだけど。エアコンのリモコンは解りやすい位置に置いてあったしね」マッドは長い脚を組むと、コーヒーに息を吹きかけ始めた。淹れたてのコーヒーはカップですら熱い。

「見える位置の指紋は綺麗に拭っておけば、犯人は全ての指紋を綺麗に拭いていったと警察が考える、と思っただのかもしれない。だが、犯人は自分である、と指紋を一つ残す事にしたんだと思います」全ては自分が自殺した後に判明すれば良いのだ。動機以外は全て。

「じゃ、エアコンの設定温度が低かったのは？」

「死亡推定時刻を惑わす為ではなく、腐敗を防ぐ為、と私は考えています」

「じゃあ、凶器が出て来ないのは？」

愁はデスクの下で組んでいる腕に嵌めた、安物の腕時計にちらりと視線を落とした。「いずれ出てくると思っています。あの家の何処かあるいは時間が来れば発覚する様な場所に隠してある、と私は考えています。凶器は犯人と被害者を結ぶ、確実な物証ですからね」家全体の家宅捜査はまだしていない。令状が取れていないのと、辻豊が話せない状態の為、調べられていないのだ。

「ふーん、犯人は自分だ、って言いたい訳ね」井上は何処か納得出来ない表情を浮かべる。「で、動機は？」

「人類初の殺人事件と言われている事件を御存知ですか？」

井上はブンブンと首を振った。彼女の後ろで、高い位置で結いあげた赤い髪が揺れる。「知らない。切り裂きジャック？」

「カインね」解剖報告を読んでいた池上が顔を上げずに、淡々とした口調で言った。「カインとアベル」

井上は両手で頬杖を付き、目をぐるりと回した。「ああ、アダムとイブの息子達ね」

マッドはコーヒをほんの少し啜った。舌がピリツと熱さにやけた。「そう。最初の人間のアダムとイブとの息子であるカインとアベルは神に捧げ物をし、アベルだけが神に称賛された。それに怒ったカインがアベルを殺害。これが人類初の殺人事件って言われているんだよね」

「兄カインが裕也で弟アベルが純也。なら、神は父親って訳？」

「兄弟間のコンプレックスを、カインとアベルに例えてカインコンプレックスと呼びます。裕也は純也に嫉妬していたんでしょうね」

井上は眉をひそめた。「やだ。それが動機な訳？」

愁は穏やかな微笑を浮かべた。「父親の豊は純也の事を『馬鹿な奴程可愛い』と、村木美恵は『2人で将棋をしたり、株の話や夜遅くまでしていた』と言っていました。無論、それだけではないと思

います。彼等は長い年月、様々な事を比較されたりしたのでしょうから」

「『塵は積もれば山となる』日本には彼の心情に当てはまる諺が存在するよね」マッドは小さく肩をすくめる。「山となって爆発しちゃった訳だ」

「裕也の人生は決まっていた、辻病院を継ぐ医者。でも純也は教師になった、それは自ら望んで？それとも医者にはなれなかったのかしら？どちらにしる、彼には選択肢があつた訳ね」池上は解剖報告書を閉じ、デスクの上に置いた。変わりにコーヒーカップを両手で包み、再び口を開く。「純也は努力をしなかつた。でも、兄は永遠の努力を強いられた。」

「ねえ、でも、それは関係ないんでしょ？裕也は親父さんに認められたかつたって事だし」井上は砂糖たつぷり、ミルクたつぷりの白いコーヒーを口にした。甘く、疲れた脳を癒してくれる気がした。

「いえ、恐らく全てが関係していると思います。努力をし続けている人間が認められず、努力をしない人間が認められる、そして弟は自由を謳歌している、それが一生であれば殺人の動機としても成り立つのではないのでしょうか？」そもそも動機等、殆ど無くても殺人を犯す人間は山の様にいるのだから。それは何も連続殺人犯や大量殺人犯に見られる傾向とも言えない。振られた、刺し殺す。躡の為だ、殴り殺す。むかつく、大勢で殴り蹴飛ばし殺す。

井上は自分と瓜二つな妹を思い出した。顔は双子と間違えられる程似ているが、髪の色は違う。妹はオレンジだ。両親は娘達から見ても風変わりな人達だが、妹と自分を比較したりはしなかつた。だが、比較されながら育ったら、憎しみが芽生えるだろうか、両親に妹に。「何で親父さんじゃないの？」

「何故でしょうね」愁はふうと溜め息を落とし、デスクの上に置いた煙草とライターをスーツのポケットの中に入れた。「ですが、父親に復讐するしたらそれは成功だったと言えるでしょう。息子2人が自分よりも先に死に、1人は加害者、1人は被害者ですから」

「それもそうだけどもさ」

「凶器も恐らく父親が所有していた日本刀だと思えます」大事にしている物で、大事な人を殺害。全てを父親が知る事はあるのだろうか。恐らく、警察は辻裕也を送検出来るが、動機が父親の心に触れる事はない様に愁は思う。裕也も純也もこの世にはいない。警察が調べた上で推測した動機を父親が心底否定すれば、そこで終わりだ。裁判がある訳ではない。

「カインが欲しかったのは神の称賛」マッドは悲しげな笑みを浮かべた。

愁はすつと立ち上がった。「では、私はこれで」にこやかな笑みを浮かべ、椅子の背もたれに掛けた黒いコートを手に取った。

「あれ？今日はお泊りしないの？」井上がにんまりと笑い、愁を見上げる。

「今日は予定があるので、お先に失礼します」愁は井上と池上に軽く頭を下げると、部屋を出て行った。愁の足音がした後に、バタンツとドアが閉まった。

「予定ねえ？」井上はマッドをちらつと見た。「何の予定だか知ってるんでしょ？マッド」

「きつと警視庁の床が嫌で、今日はフカフカのベットの所で寝る事にしたんじゃないかな」マッドはにこやかに微笑み、コーヒーを啜った。

*

高層ビルの最上階、普段なら絶対に入らないレストラン。腰の高さから天井まで、一面がガラス張り。そこからは東京の夜景が一望出来る。店内にはカッブル達がグラスと手を重ね、夜景と相手に酔っていた。他にはビジネスマン風の男性が数名、食事を楽しみながら仕事をしていた。

愁はすらつとした黒いスーツ姿の男に、ガラス張りの前のテーブル席に案内された。真っ白なテーブルクロスが掛ったテーブルに、座り心地の良い椅子。テーブルの上にはバラの絵柄が描かれた灰皿が一つと、赤いバラが差してある一輪さしの花瓶。

胸ポケットから煙草とライターを取り出して、愁は軽い溜め息を付く。本来ならこんな場所で、時間を過ごしてはいたくない。男物と女物の香水が入り混じり、アルコールと煙草の匂いがそれに負けじとレストランの中を漂っている。それをうち消す様に煙草を一本取り出し、口に咥え、火を点けた。

アメリカから持ってきた中で一番高いスーツ、一本だけ持っている有名ブランドのネクタイと靴、数回しか着た事のないコートはすらつとした男が持つて行った。初めてスーツを着た新入社員の様にやけに着心地が悪い、やけに居心地が悪い。

東京の夜景に目を奪われる事はないが、ただ何処に視線を置いて良いのか分からず、愁は窓の外をぼんやりと見ていた。紫煙を煙らせながら、ただじつと。

二本目の煙草を灰皿で揉み消したところで、店内が小さくざわつき、待ち人が来た事が直ぐに分かった。愁はざわめきを追い掛けるように、視線をゆっくりと待ち人に向けた。

愁を案内した男を後ろに従えて、冷子は小さく手を振る。パーティー帰りなのが一目で分かる、ブルーがかった黒いワンピースのドレス、肩が大きく開き、歩く度に太ももの半分が見えてしまいそうなスリットが入っている。冷子の耳でトパースのビースが揺れ、胸元にも同じデザインのネックレスが光っていた。彼女がテーブル席の間を歩くと、両脇の男性がちらつと視線を送った。

その視線の理由が彼女自身にあるのか、それともライターにあるのか、愁には分からなかった。愁は立ち上がり、頭を下げる代わりに手を差し出した。

冷子はその手を取って、にこやかに微笑む。「ありがとう」

「いいえ」愁は穏やかな微笑を浮かべる。冷子の手は驚く程冷たかった。

すらつとした男が椅子を引き、冷子は愁の手を取ったまま、椅子に腰を下ろした。「ありがとう」2人に向かってではなく、愁に向かって微笑む。

男が小さく頭を下げ、2人の元から去っていく。

愁は椅子に座り、ぐっと身を乗り出した。「連れて来ましたか？」囁く様な声で言う。

「勿論よ」彼女も身を乗り出し、妖艶に笑った。

テーブルの上で2人の手が重なる。

「大丈夫なの？」

「何がですか？」

「想い人」

愁は穏やかな笑みを浮かべる。その目に一瞬、哀しみが過った。

「あなたこそ」

冷子は肩をすくめただけだった。

愁はすつと手を引つ込め、スーツのポケットの中に手を突っ込んだ。ポケットの中からカードを取り出し、テーブルの真ん中に置いた。「お望みの最上階です」

「そう」小さなバツクから煙草を取り出して、冷子はカードキーを一瞥する。

私の一か月分の給料のおよそ半分が吹き飛びました、愁は喉まで出かかった言葉を無理やり呑み込む。

2人を案内してきた男がメニューとグラスに入った水を持って、テーブルの前に来た。彼は頭を下げ、グラスを2人の前にそれぞれ置く。彼の視線がカードキーに止まり、直ぐに反れた。男がメニュー

ーを広げ、差し出す。

「任せるわ。彼にはベジタリアンメニューをお願いね」冷子はにこやかに笑い、メニューを軽く押し返した。「それと料理に合うワインもお願い」

「かしこまりました」彼は再び頭を下げ、メニューを持って下がって行った。

煙草に火を点け、溜め息と同時に煙を吐き出し、冷子は窓の外に視線を向けた。見慣れた景色。何時もと相手は違うが、景色は同じだ。否、新しいマンションが増えたかしら。「ここは煙草が吸えるから好きだわ」冷子はそう言うと、にこやかに微笑んだ。

E p i s o d e 3 . . . E N D . . .

Episode 3

- 9 - (後書き)

お読み頂き、本当にありがとうございます。

また、アルファポリス様のランキング、応援して頂き、心より感謝いたします。

泣いて喜んでおります。

Episode 4ですが、

恐らく時間がかかると思いますが、

それではEpisode 4も宜しくお願いいたします。

時演

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4073/>

LINE

2010年12月23日14時25分発行